ト（深さ20cm）がある。２つの大きなピットが複合したものと思われる。堆積土は５層に区別され、切り合いの状況は明らかではない。南側のピットを切ってａピットが後につくられたとすれば、３層と５層は南側ピットからの崩落土と推定できる。ａピットからは、縄文土器11点（口縁３、体部７、底部１）が出土しているが、層位は不明である。連鎖状隆起線をもつものがあり後期初頭のものである。

ｂピットは円形プランで、壁が直に立ち上がるビーカー形の断面形を呈している。底面中央に小ピット(深さ15cm)がある。堆積土の下層はブロック状であるが、上層はレンズ状であり自然堆積による埋没と見られる。遺物は縄文土器の地文のみ体部細片２点で、出土層位は不明である。

⑳ **CE56ピット**（第15図）

堆積土は10層に区分され、上層はレンズ状を成し自然堆積と見られるが、下層はブロック状となり人為的な堆積（投げ捨て等）考えられる。上層の１～３層には小礫を含んでいる。縄文土器体部細片７点出土しているが、磨滅があり時期比定はできない。出土層位は不明である。

㉑ **CE59ピット**（第16図）

このピットはＣＦ56住居跡の北壁かまど及び煙道部の下に検出され、そのため一部削平されていた。楕円形に近いプランで、ビーカー形の断面形を呈している。堆積土は６層に区分され、ほぼレンズ状をなしており自然堆積と見られる。１層、２層に礫が含まれる。出土遺物はない。

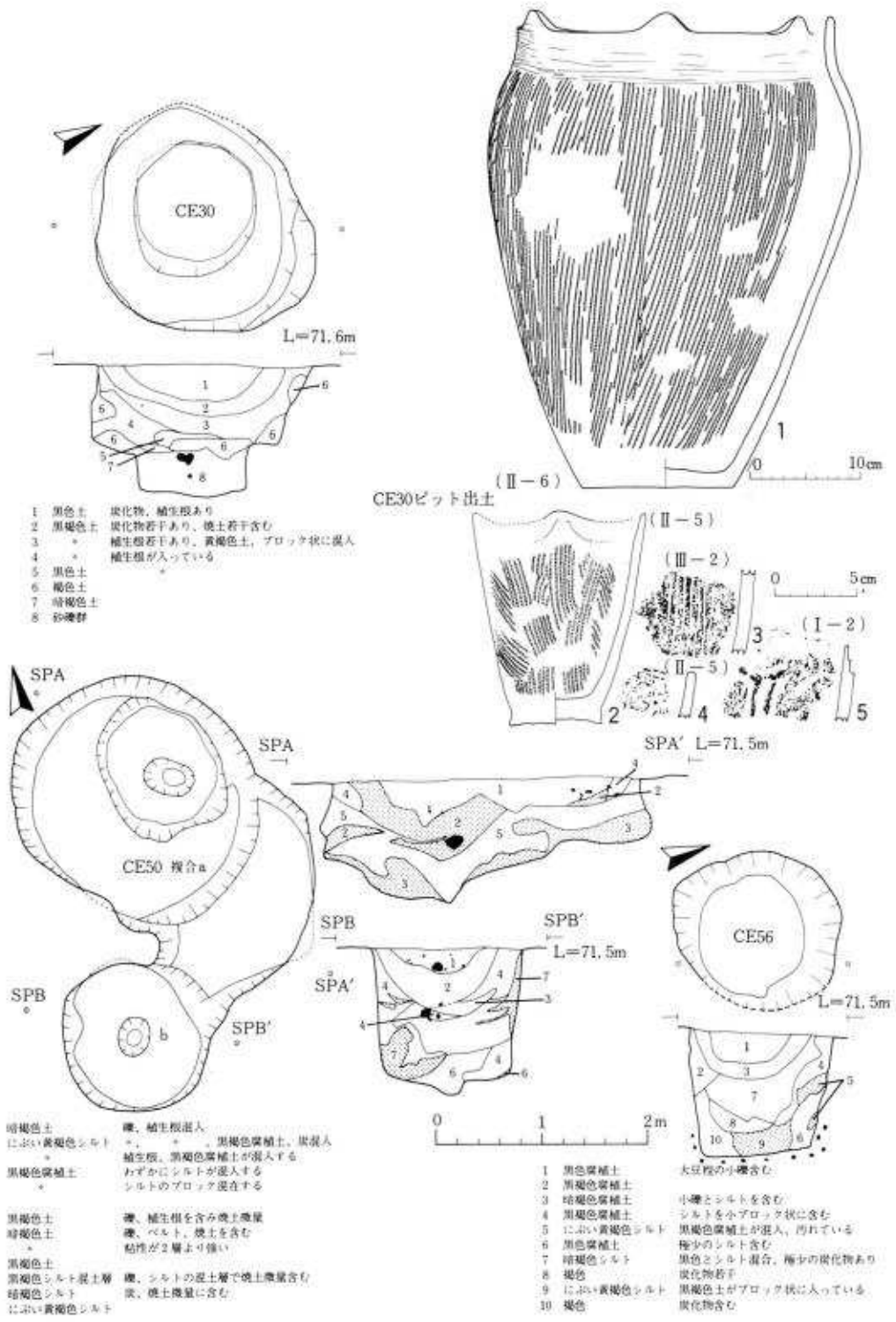
㉒ **CE71ピット**（第16図）

このピットはＣＥ68住居跡の南壁の床下にかかって検出された。堆積土は８層に区分され、レンズ状を成し自然堆積による埋没と見られる。６層は崩落土と考えられ、他の土層全体に黄褐色シルトがブロック状に含まれている。下層には黒色腐植土の堆積がある。上層の１～２層には小～大の礫が含まれている。遺物の出土はない。

㉓ **CE77ピット**（第16図）

このピットはＣＤ77竪穴状の西壁に一部削平された形で検出された。平面図と断面から２つのピットの複合したものと考えられる。深い方のピットをａ、浅い方をｂとするとａピットは開口部径約130㎝程度で深さ85cmのフラスコ状の断面形と推定され、ｂピットは開口部約120㎝程で深さ65cmのフラスコ状の断面形をもつことになろう。そしてａピット埋没後にｂピットがつくられたと推定され、その境は断面図の太線部分となる。堆積土は全体で11層に区分されａピットはレンズ状堆積が見られ自然堆積と考えられるが、ｂピットは乱堆積をなし人為による堆積と見られる。２層、５層、６層は崩落土であろう。上層には小礫が含まれている。

堆積土からすればａ、ｂの２つのピットと考えてきたが、平面形からすれば、開口部200㎝の大きなピットと開口部120㎝の小さなものが複合しているとも見える。そう把えると、堆積土は全体として乱堆積を示し、人為的な埋め戻しと考えられる。遺物の出土はない。



第15図　大型ピット平断面図(1/60)

㉔ **CF03ピット**（第16図）（図版７）

堆積土は７層に区分され、崩落土と考えられる黄褐色土をはさみながらレンズ状に自然堆積したと見られる。上層には礫が含まれている。下層には黒色腐植土の水平堆積がある。遺物は縄文土器の体部細片12点であり、いずれも磨滅しており時期比定はできない。出土層位は不明である。

㉕ **CF18ピット**（第16図）

３つのピットが複合している。図のようにａ、ｂ、ｃとすればａはｃを切ってつくられているが、ｂとの切り合いは明確でない。ａピットは開口部径 120 cm、底径 130 cm、深さ90cmの規模でフラスコ状の断面形を呈している。堆積土は７層に区分され、レンズ状に堆積しており自然に埋没したと見られる。ａピットからの出土遺物は縄文土器41点（口縁３、体部38）で、磨滅が見られるが沈線と磨消縄文、円形刺突文等が施文され後期初頭のものである。ｂピットからは、地文のみの体部細片１点、Ｃピットからは磨滅した体部細片２点である。出土層位は各ピットとも不明である。

㉖ **CF21ピット**（第16図）

ＣＦ24住居跡の北壁煙道部先端部に検出された。堆積土は８層に区分される。上層はレンズ状であるが、中下層はブロック状を成し、概ね人為的に埋め戻されたと見られる。遺物は縄文土器体部細片24点、土師器甕片２点（口縁１、体部１）が出土している。網目状撚糸文、沈線文などがら後期初頭のものと思われる。煙道部による攪乱があり、土師片はそのまぎれ込みであろう。遺物の出土層位は不明である。

㉗ **CF24ピット**（第16図）

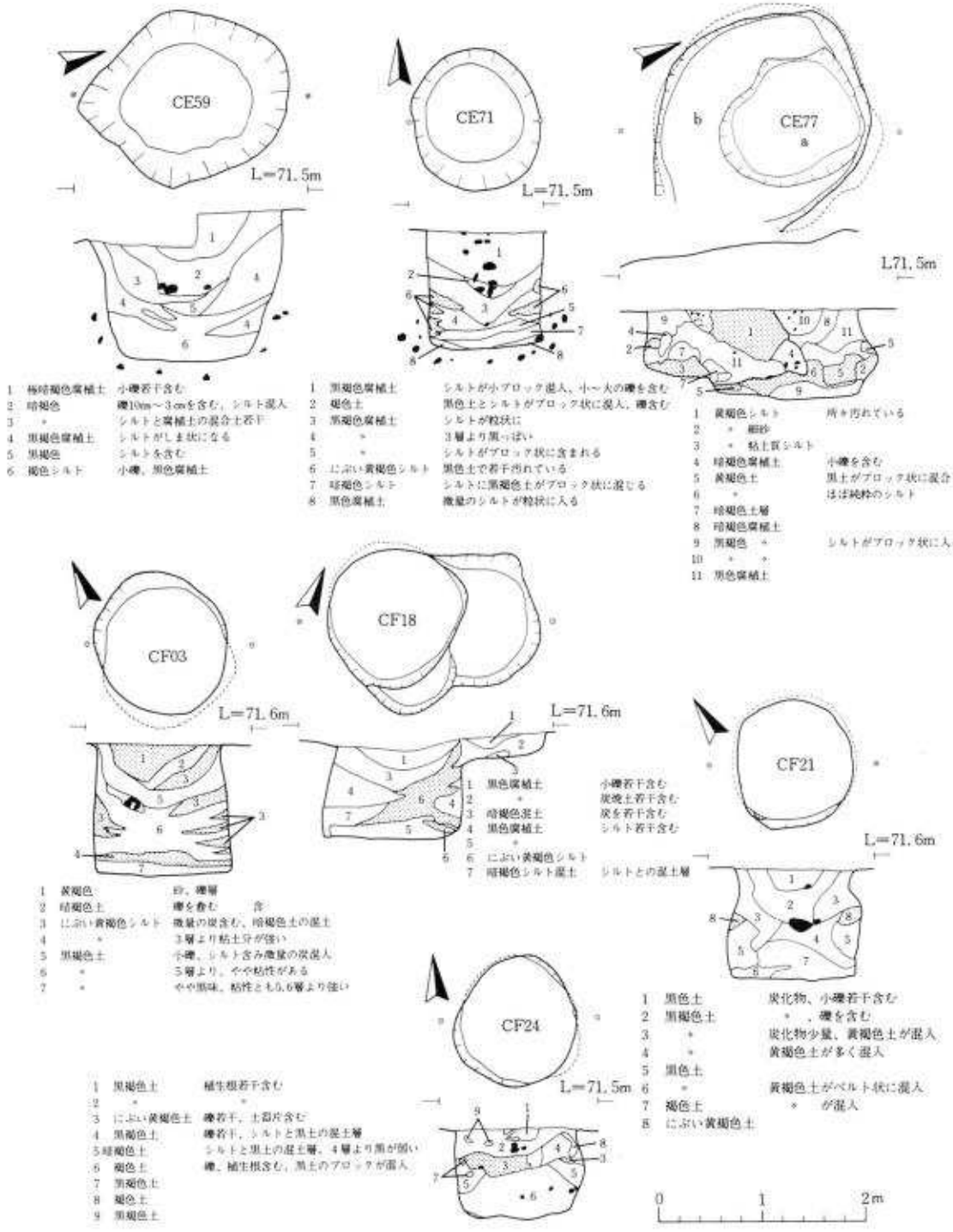
このピットはＣＦ24住居跡の北西床下から検出された。不整な円形プランで壁にややふくらみをもつ。堆積土は10層に区分され、ブロック状を成していることから、人為的な埋め戻しと見られる。上層～下層まで礫が含まれている。遺物は縄文土器体部細片２点出土している。出土層位は３層である。

㉘ **CF30ピット**（第17図）

堆積土は６層に区分され、上層はレンズ状であり自然堆積と見られるが、下層はブロック状を成し、人為的な埋め戻し、又は急激な崩落が考えられる。全体に黄褐色土と植生根の混入がある。遺物の出土はない。

㉙ **CF71ピット**（第17図）

開口部が 200 cmとかなり大きい。堆積土は10層に区分され、上層はレンズ状に下層はブロック状を成し、人為的な埋め戻し後自然堆積によって埋没したと見られる。全体に黄褐色シルトが混入し、６層は崩落土であろう。遺物の出土はない。



第16図　大型ピット平断面図(1/60)

㉚ **CF74ピット**（第17図）

堆積土は８層に区分され、下層は水平堆積が見られるが、概ねブロック状の堆積となっており、人為的な埋没と考えられる。全体に小礫が含まれる。遺物の出土はない。

㉛ **CG03複合ピット**（第17図）

３つのピットが複合しており、北側からａ、ｂ、ｃとする。ａピットは、円形プランでビーカー状の断面形を呈し、底部に一部掘り込みがある。開口部径 190 ㎝、底径 140 ㎝、深さ95㎝である。堆積土は７層に区分され、レンズ状の整然とした堆積を示し、自然に埋没したものである。ｂピットの切り合いは明らかでない。ｂピットも不整な円形プランと考えられ深さ70㎝である。ｃピットもほぼ同様の平面プランで、深さ 125 ㎝である。ｂとｃピットの堆積土は11層に区分され、流れ込みか人為による埋め戻しも考えられる。ｂとｃの切り合いは、４層と５層がｂピットからｃピットに流れこんだ状態であることからみて、ｃピットが後からつくられたと考えられると同時に、両ピットとも連なって開口していて、埋没したものとも推定できる。出土遺物はａピットから縄文土器の体部16点であるが層位は不明である。１点だけに隆起線の貼付文が見られ中期の大木8b式期のものと思われる。

㉜ **CG06複合ピット**（第18図）

この２つのピットは南北に連なって検出された。ａピットは楕円形プランを持ち、中央にピット状の浅い掘り込みを有する断面形を呈している。開口部 300 × 250 ㎝とかなり大きく深さ95㎝、中央のピットの規模は開口部 160 × 130 ㎝、深さ20㎝である。堆積土はレンズ状を示し、自然堆積と見られる。遺物は上図のものなど縄文土器32点（口縁２、体部26、底部４）である。隆起線文の渦巻文や平行沈線文等から大木8b式と認められる破片が多い。出土層位は不明である。ｂピットの堆積土は８層に区分され、全体に地山の黄褐色土が混じり、２層以下の堆積状況からほぼ人為堆積と見られる。黄褐色土の混入が著しい。５層の黒色土は湿気がある。遺物の出土はない。

㉝ **CG21ピット**（第18図）

このピットはＣＦ24住居跡の東壁外側に接して検出された。堆積土は10層に区分され、レンズ状であることから自然堆積と見られる。黒褐色土が主体となっており、全体に礫を含む。出土遺物は縄文土器体部９点いずれも地文のみであるが１点だけ網目状撚糸文が含まれる。時期は明確にできない。出土層位は１層と６層からである。

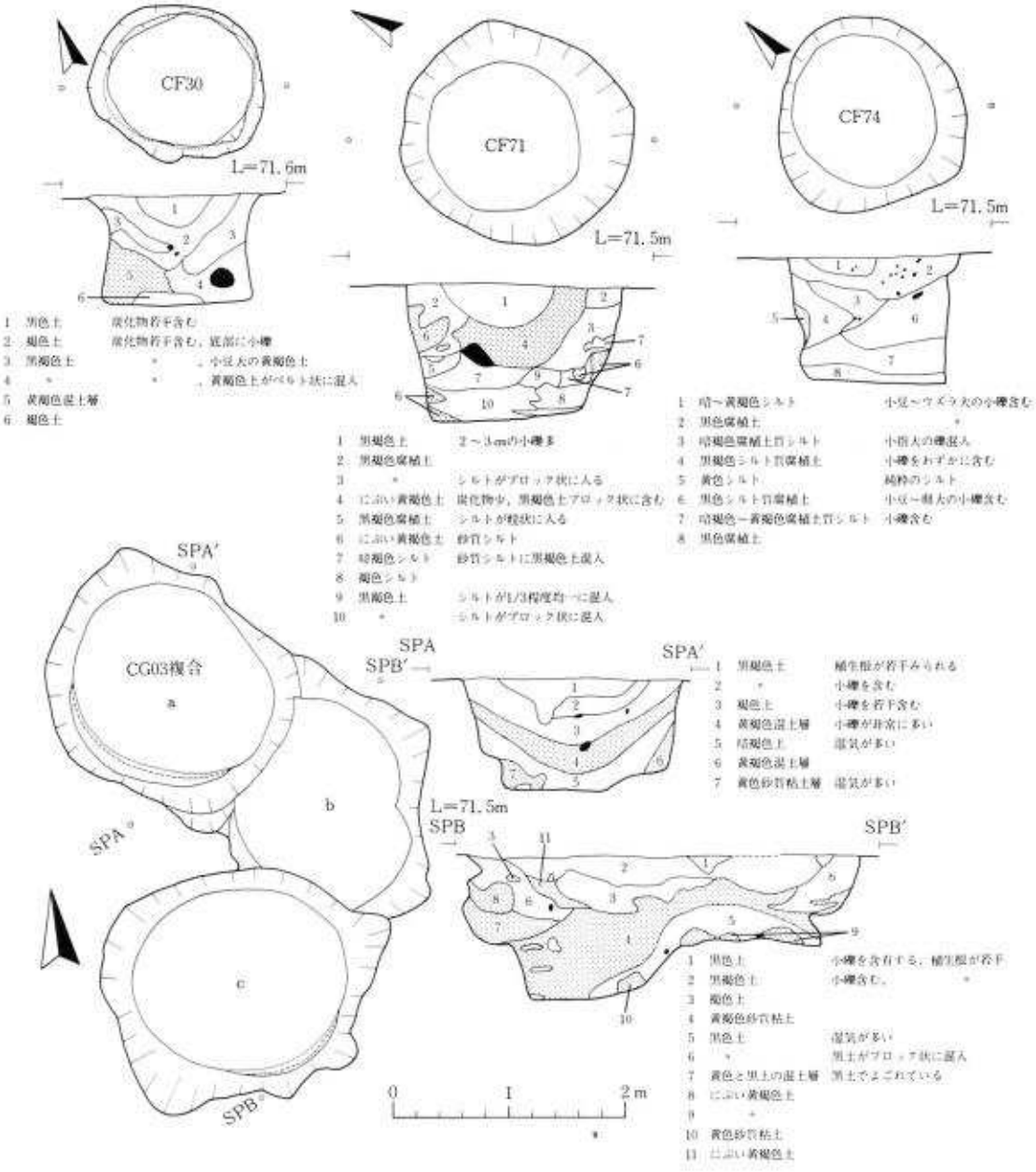
㉞ **CG24ピット**（第18図）

堆積土は５層に区分され、レンズ状となっており自然堆積と見られる。黒褐色が主体で、下層には礫を含んでいる。出土遺物は縄文土器10点（口縁５、体部４、底部１）でいずれも小破片であるが、隆起線の渦巻文や平行沈線文などから、中期の大木8b式のものと思われる。出土

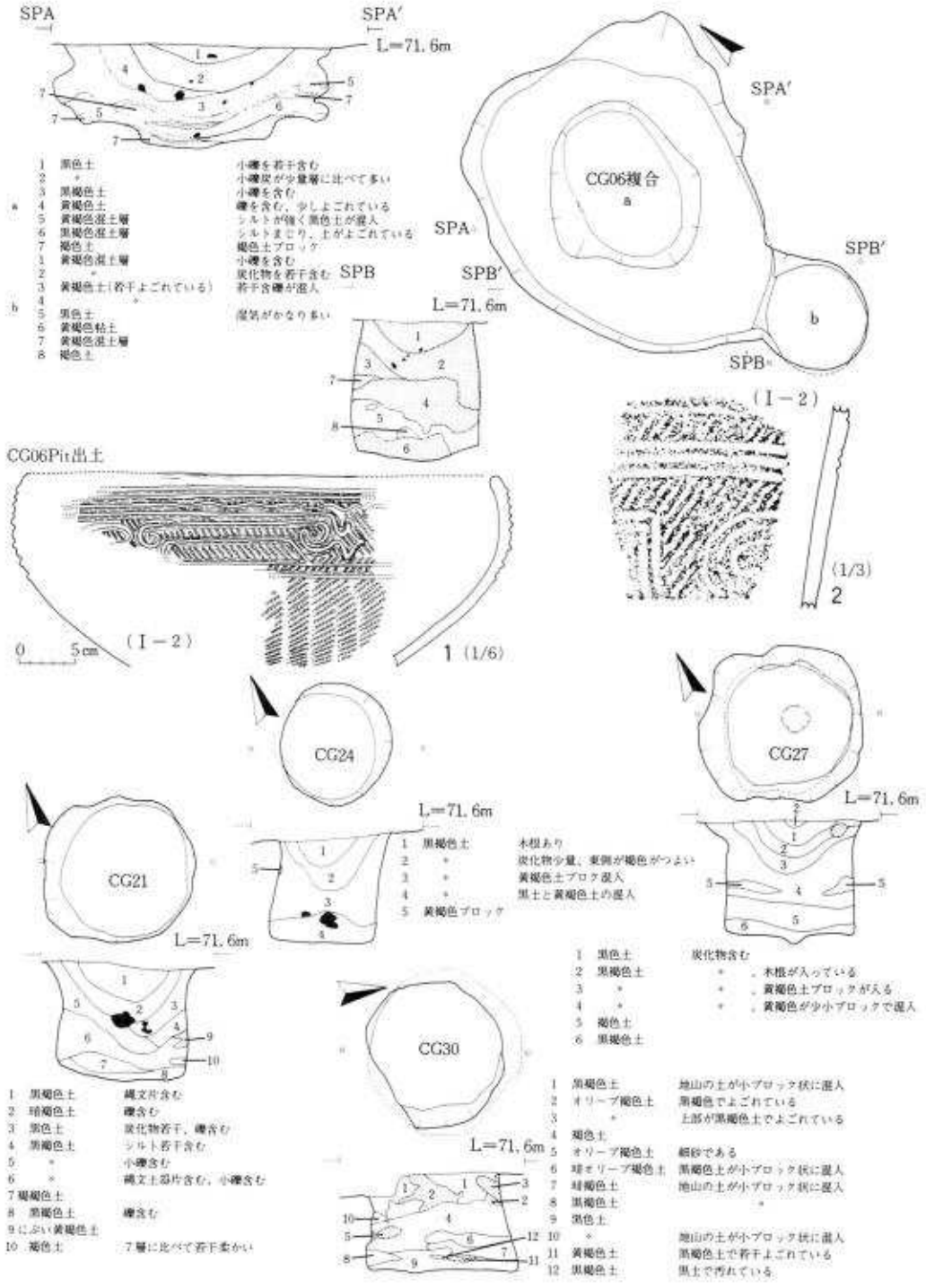
層位は不明である。

㉟ CG27ピット（第18図）

底面にピット状の小さい凹みを持つ。凹みの深さは10cm程度と浅い。



第17図　大型ピット平断面図（1 /60）



第18図　大型ピット平断面図(1/60)

下層に水平堆積の層を含み、レンズ状となっており、自然堆積とみられる。植生根と黄褐色土が混入し、上層に炭化物を含む。遺物は縄文土器14点（口縁１、体部13）で、無文の浅鉢や連鎖状隆起線をもつ破片などから、後期初頭と思われる。出土層位は不明である。

㊱ **CG30ピット**（第18図）

このピットはCH30住居跡の北壁に切られた形で検出された。堆積土は12層に区分され、下層に黒色土の堆積をもつが、概ねブロック状を成し人為的な埋め戻しが考えられる。下層に黒色腐植土の堆積があり全体に黄褐色土の混入が見られる。遺物の出土はない。

㊲ **CG74ピット**（第19図）

不整な円形プランで、深さ 160 cm、断面その他については不明である。

㊳ **CG77No.1ピット**（第19図）

円形プランで深さ 110 cm、断面その他については不明である。

㊴ **CG77No.2ピット**（第19図）

不整な円形プランで深さ 110 cm、断面その他については不明である。

㊵ **CH03ピット**（第19図）

堆積土は10層に区分され、上層はややレンズ状を呈しているが概ね水平状を成しており、自然堆積と見られる。中層と下層に黒色土の水平堆積があり、２回程の長期使用期間が考えられる。平面形が隅丸方形に近いことなど、他のピットとの相違点がある。上層には小礫が含まれている。遺物の出土はない。

㊶ **CH06ピット**（第19図）

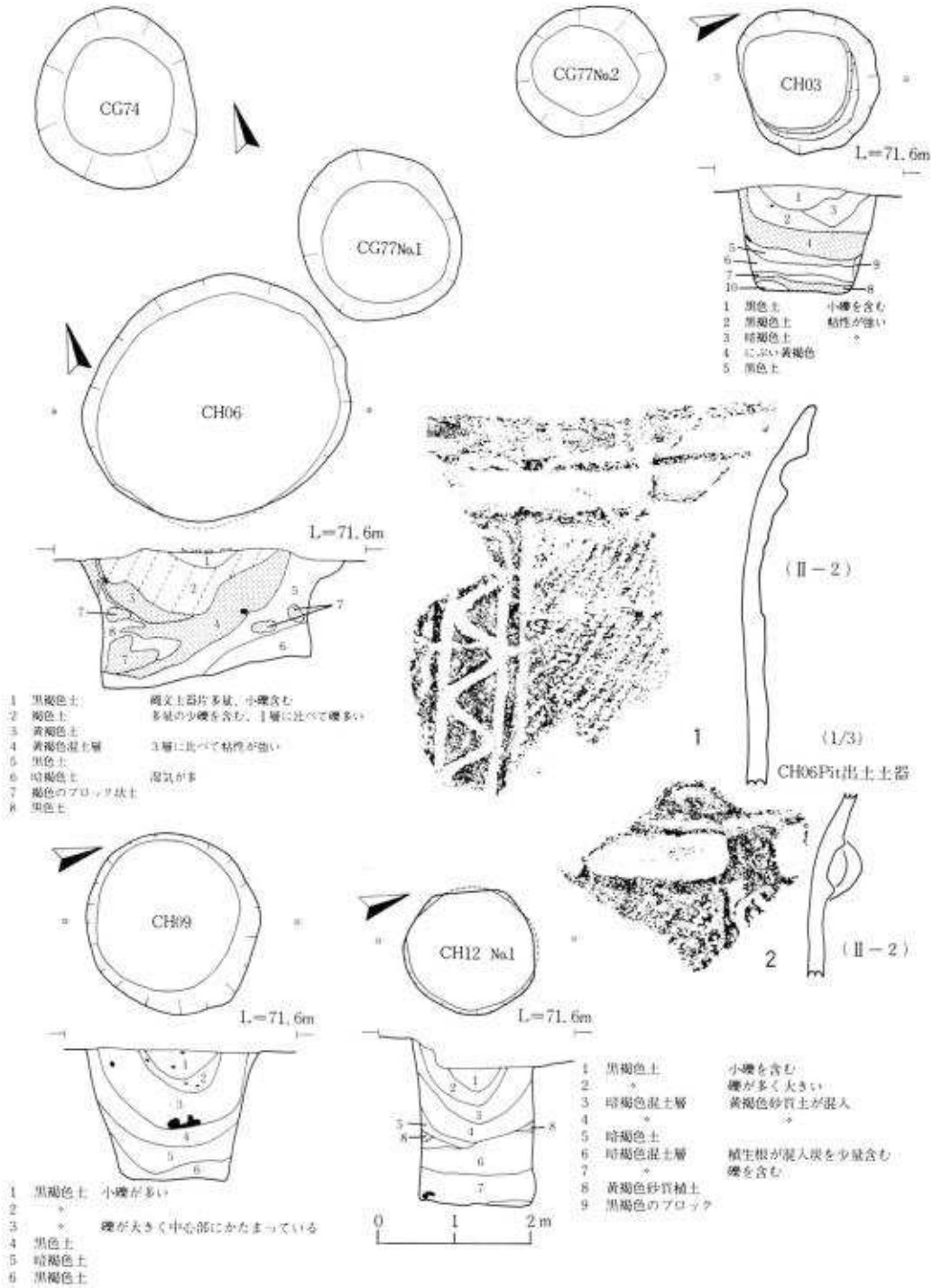
他のピットに比較して開口部径がかなり大きい。堆積土は８層に区分され、レンズ状や流れ込みの状況であり、ほぼ自然堆積したと見られる。上層の１、２層には非常に礫が多く、又土器片が上面に多数混入している。縄文土器は同一個体のものの1/4程残存のものが２組と、破片72点である。拓影図の土器は隆起線や沈線文、橋状把手等から中期の大木８式に属すると思われる。他の破片では縦の撚糸文の地文が目立つ。いずれも磨滅が著しい。出土層位は１層の上面である。

㊷ **CH09ピット**（第19図）

堆積土は６層に区分され、整然としたレンズ状を成しており徐々に自然堆積と見られる。上層には小礫が多く、３層下部に礫が多い。黄褐色土の混入はほとんどない。遺物の出土はない。

㊸ **CH12No.1ピット**（第19図）

このピットはCG12住居跡の南壁に切られた状態で検出された。堆積土は９層に区分され、整然としたレンズ状をなしており自然堆積と見られる。ほとんど暗褐色土である。上、下層に礫を含んでいる。遺物は縄文土器24点（体部23、底部１）でいずれも磨滅が著しい。磨消縄文



第19図　大型ピット平断面図(1/60)

や網目状撚糸文など見られ、後期初頭のものと思われる。出土層位は不明である。

㊹ CH12No.2ピット（第20図）

堆積土は5層に区分され、レンズ状を成しており自然堆積と見られる。底部の南西部に炭のかたまりが存在した。上層には炭や焼土、がふくまれ、3層、5層は黄褐色混土層で礫や遺物が多い。遺物は縄文土器65点（復元可能3、体部60、底部2）と土師器甕体部6点である。底面の5層から地文のみの大型深鉢（図2）が横倒しの状態で検出された他、無文の浅鉢(図1）や鰭状隆起線をもつ小型鉢（図3）が3層から、他の破片とともに出土した。破片に磨消縄文が見られることなどから、後期初頭に位置づけられる。

㊺ CH15ピット（第20図）

上部に崩落部分をもち堆積土は9層に区分され、下層部堆積後、中・上層部が多量に、短時間に入ったと見られる様相を呈している。中・上層には礫、炭、焼土を含み、土器も多く一時に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は縄文土器163点（口縁5、体部145、底部13）で同一個体（1/5残）1組と無文の浅鉢(1/3残）等が含まれている。隆起線文や磨消縄文、地文の縦の撚糸文や網目状文などの施文が多く後期初頭のものがほとんどであるが、2点大木8b式（中期）の破片が混入している。

㊻ CH18No.1ピット（第20図）

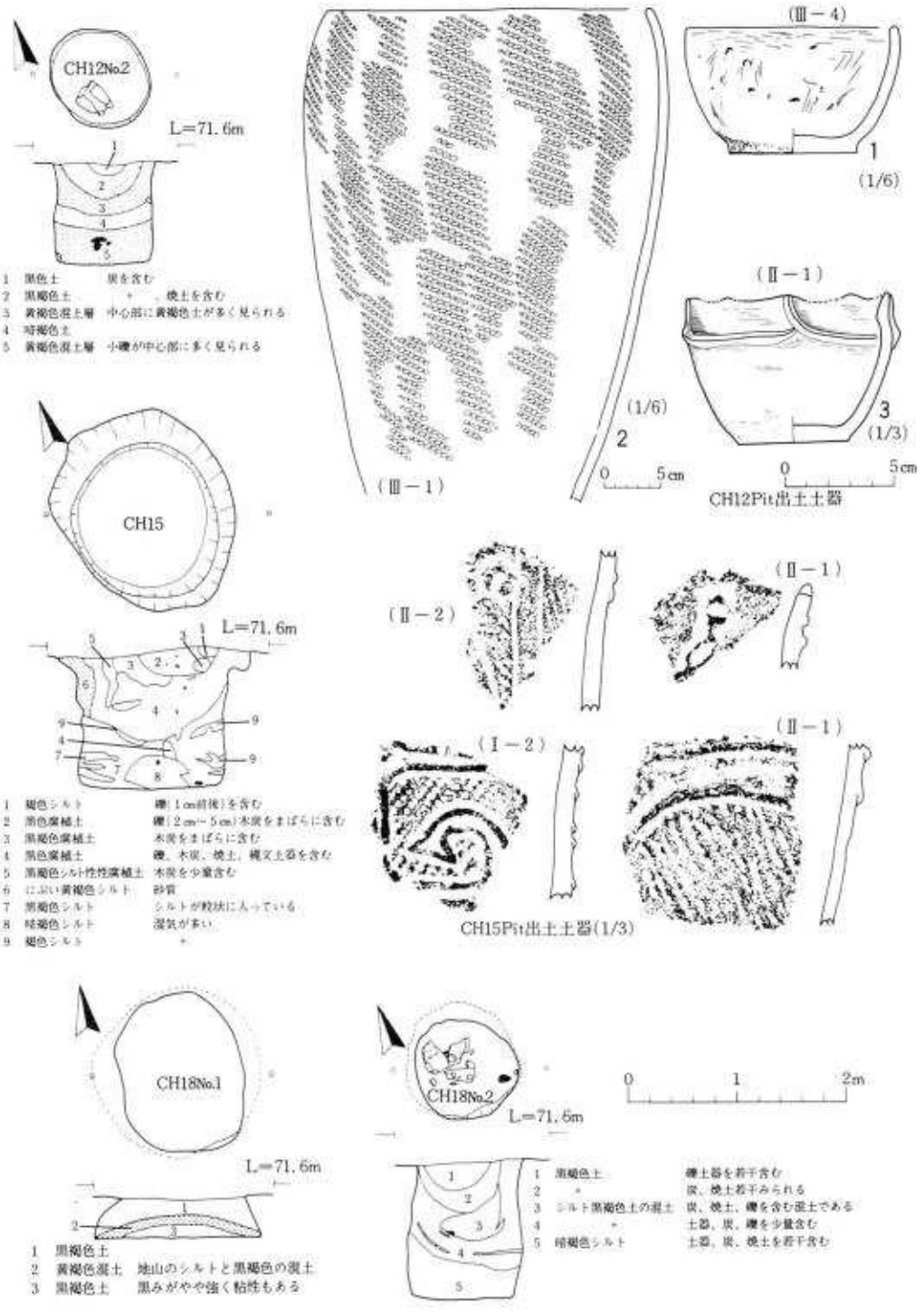
深さが40cmと比較的浅いピットである。上部が削平されたようにも見られるが、周囲の検出面高からそれはなかったと考えられる。堆積土は3層に区分され、逆レンズ状に中央部が盛りあがった様相を呈している。下層自体は整然としており、せばまった開口部から中央に自然堆積していった過程を物語ると思われる。遺物は縄文土器の地文のみ体部片23点であるが、出土層位は不明である。

㊼ CH18No.2ピット（第20図）

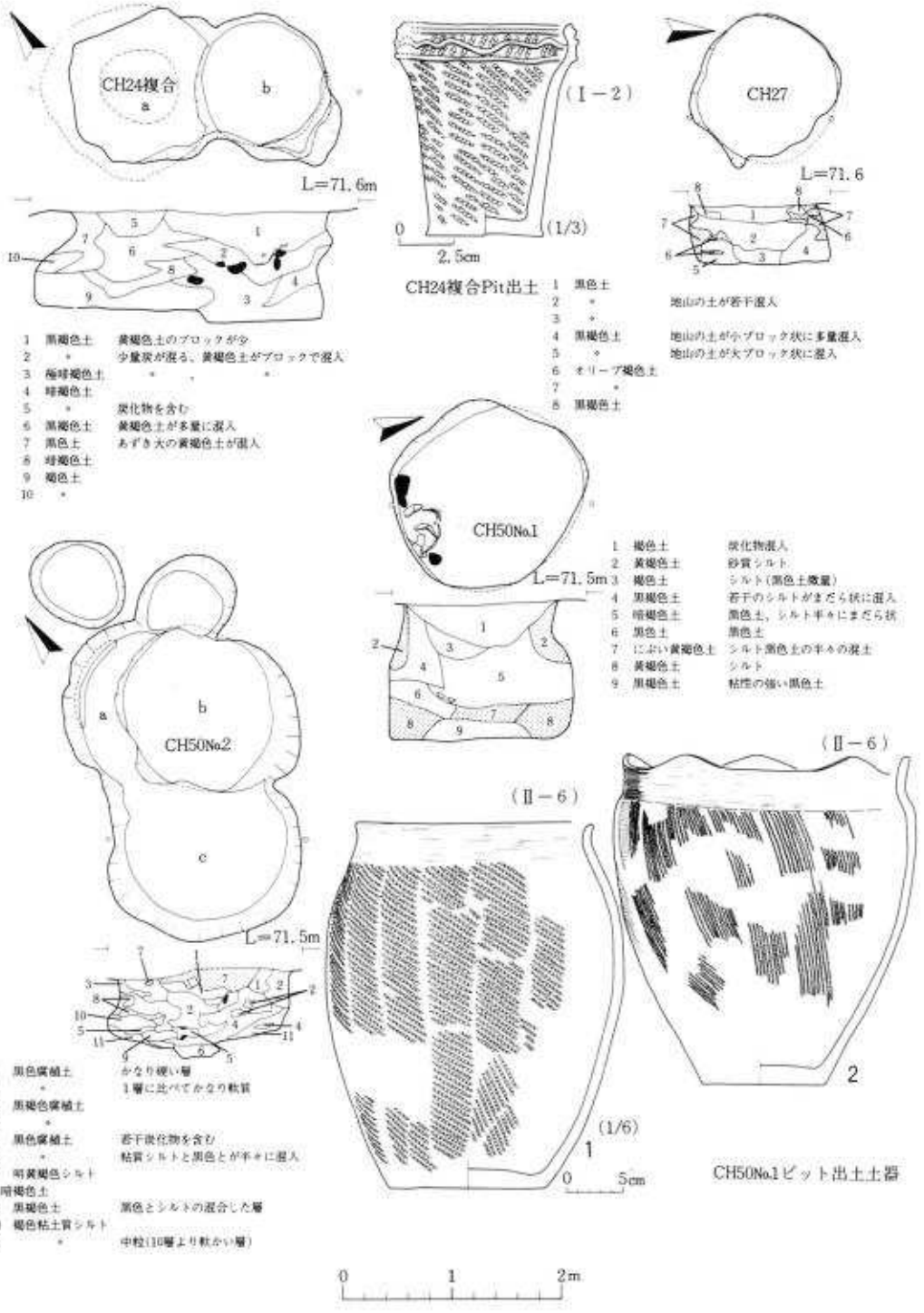
堆積土は5層に区分され、下層堆積後中層が多量に入り、上層が徐々に埋没した様相と見られる。上層から下層まで土器、炭、焼土を含み、特に底面には、同一個体の2組の大型深鉢(ともに1/2程度残存し底部欠損）が横倒しで出土している。出土遺物はこの大型深鉢2個体の他に縄文土器の体部14点であるがいずれも地文のみである。大型深鉢が口縁内湾ぎみにすぼまる後期の粗製土器の器形に類似することから、後期初頭に属するものと推定される。

㊽ CH24複合ピット（第21図）

2つのピットが複合した形であり、西側をa、東側をbとする。aとbともに不整円形プランで壁がくびれるフラスコ状の断面形を呈している。aピットは開口部径130cm、底径155cm、深さ90cm、bピットは開口部110cm、深さ100cmである。堆積土は10層に区分され、aピットはブロック状、bピットはほぼレンズ状にそれぞれ堆積している。



第20図　大型ピット平断面図(1/60)



第21図　大型ピット平断面図(1 /60)

aとbの切り合いは必ずしも明確ではないが、6層、8層、9層のあり方から、bピットの後にaピットがつくられたと考えられる。遺物は縄文土器17点(うち復元可能1、同一個体1/4残存1、口縁2、体部2)である。主にbピットの1層中からで施文の特徴が判別できるのは図の小型深鉢(器高9.7cm)や平行沈線の口縁部片2点だけでともに中期大木8b式のものである。

㊾ CH27ピット(21図)

このピットはCH30住居跡の東壁床下から検出された。不整な隅丸方形近似の平面プランで、深さ55cmと比較的浅い。堆積土は8層に区分され、ブロック状の様相を呈し人為的な埋め戻しによると見られる。黒褐色土が主体である。全体に黄褐色土が細かく混入している。遺物の出土はない。

㊿ CH50No.1ピット(第21図)

堆積土は9層に区分され、ブロック状に乱堆積の様相を呈し、比較的短時間の埋没と見られ、人為的な埋め戻しが考えられる。7・8層は壁の崩落土であろう。遺物は、縄文土器2個体(21図)のほぼ完成品の中型深鉢が出土している。ともに口縁部ミガキ調整の無文帯をもち体部は地文のみ(単節斜縄文と撚糸文)の深鉢である。器形から後期初頭に比定されるものであろう。いずれも最下層の底面上から倒れた形で出土した。

(51) CH50No.2複合ピット(第21図)

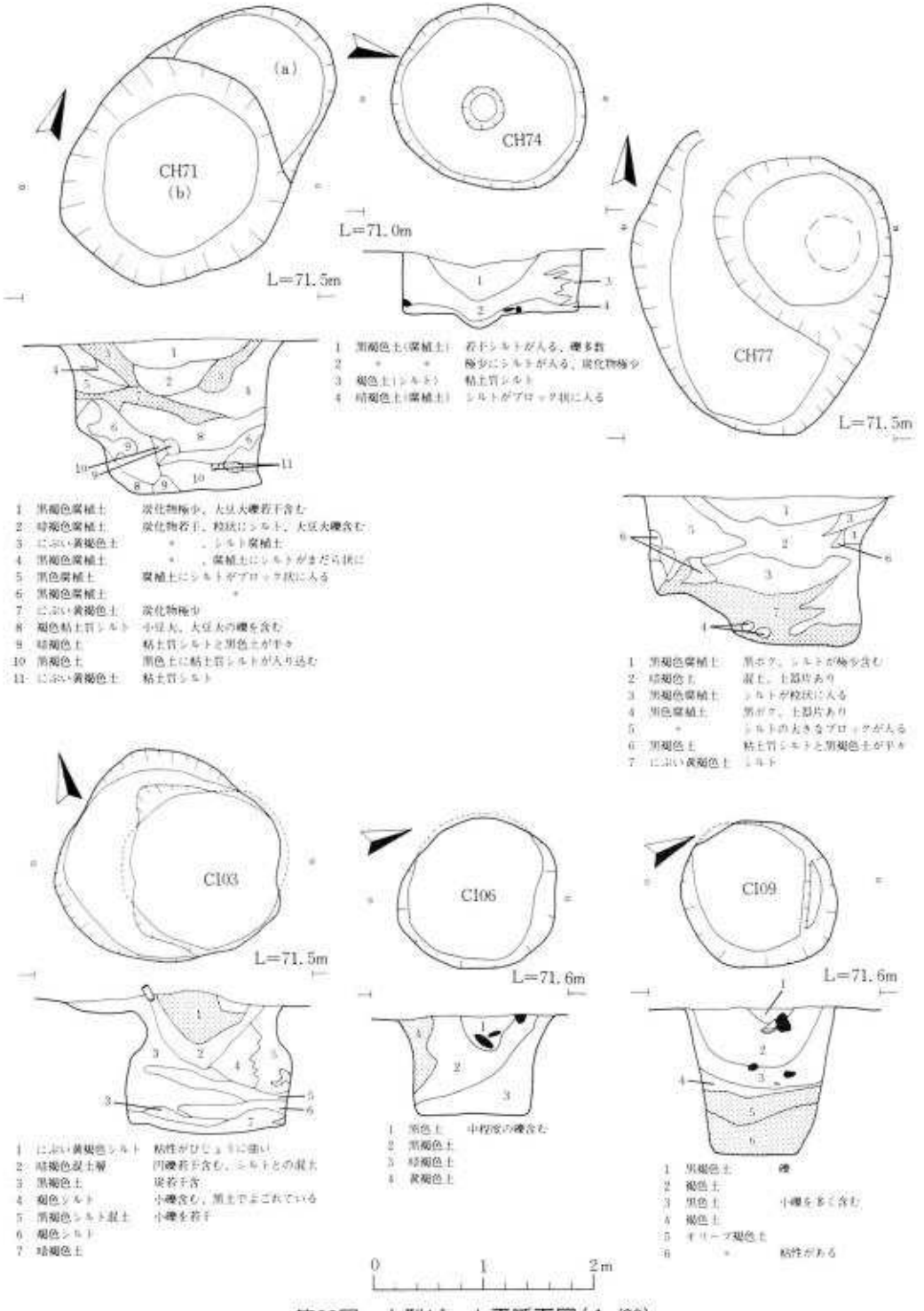
このピットは3つの大きなピットの複合と見られる。図のように北からa、b、cとするがその切り合い関係は不明である。a、b、cピットはともに、ほぼ円形プランであったと推定され、開口部径120cm前後を測る。深さはaとcピットで80cm、bピットは120cmである。堆積土はcピットのみ記録し、a、bピットは不明である。cピットの堆積土は11層に区分され乱堆積しており人為堆積と見られる。底面に径40cm、深さ10cmの小ピットが検出されている。遺物はbピットより縄文土器体部5点で、いずれも地文のみである。出土層位は不明である。

(52) CH71ピット(第22図)

このピットはCH74住居跡の北壁に接して、一部削平された形で検出された。2つのピットが複合しており、北からa、bとする。a、bピットの先後関係は不明である。aピットは推定径130cm、深さ約50cm、bピットは不整の円形プランで、鉢状の断面形を呈し、開口部径200cm、底径140cm、深さ135cmである。堆積土は11層に区分され、上層はレンズ状であるが、中、下層部はブロック状を呈し、人為的な埋め戻しも考えられる。全体に地山のシルトの混入が見られる。出土遺物はない。

(53) CH74ピット(第22図)

CH74住居跡の西側床下に検出されたため、上半部が削平されており、深さは55cmであるが



第22図　大型ピット平断面図(1/60)

実際は100㎝程あったろうと推定できる。中央には小ピット状の深さ10㎝の凹みがある。堆積土は4層に区分され、レンズ状を成し自然堆積と見られる。遺物の出土はない。

㊹ CH77ピット（第22図）

CH74住居跡の東壁に切られた形で検出された。2つのピットの複合とも考えられるが断面からは明確でない。不整な楕円形プランで開口部280×230㎝、内部のピット状掘り込み部分の開口部径は160㎝であり、深さは135㎝である。堆積土は7層に区分され、流れ込み状を成しており自然堆積と見られる。2、4層に土器片が含まれている。出土した縄文土器は紛失しており詳細は不明である。

㊺ CI03ピット（第22図）

開口部の南西側に浅いが、円形に低くなった部分がある。ピット上部に関係した何らかの掘り込みか、又は崩落部かと考えられる。ほぼ平坦であり前者の見方がより妥当であろう。堆積土は7層に区分され、上層はレンズ状となり、中、下層は流れ込み状の堆積であり、ほぼ自然堆積と見られる。全体にシルト、小礫、炭の混入がある。遺物の出土はない。

㊻ CI06ピット（第22図）

堆積土は4層に区分され、流れ込みの状況を示すことからほぼ自然堆積と見られるが、人為的な可能性もある。上層に礫が含まれる。遺物は縄文土器の体部38点あるが、装飾施文は見られず、撚糸文や網目状の撚糸文の地文のみのものがほとんどである。後期初頭のものと思われる。出土層位は不明である。

㊼ CI09ピット（第22図）

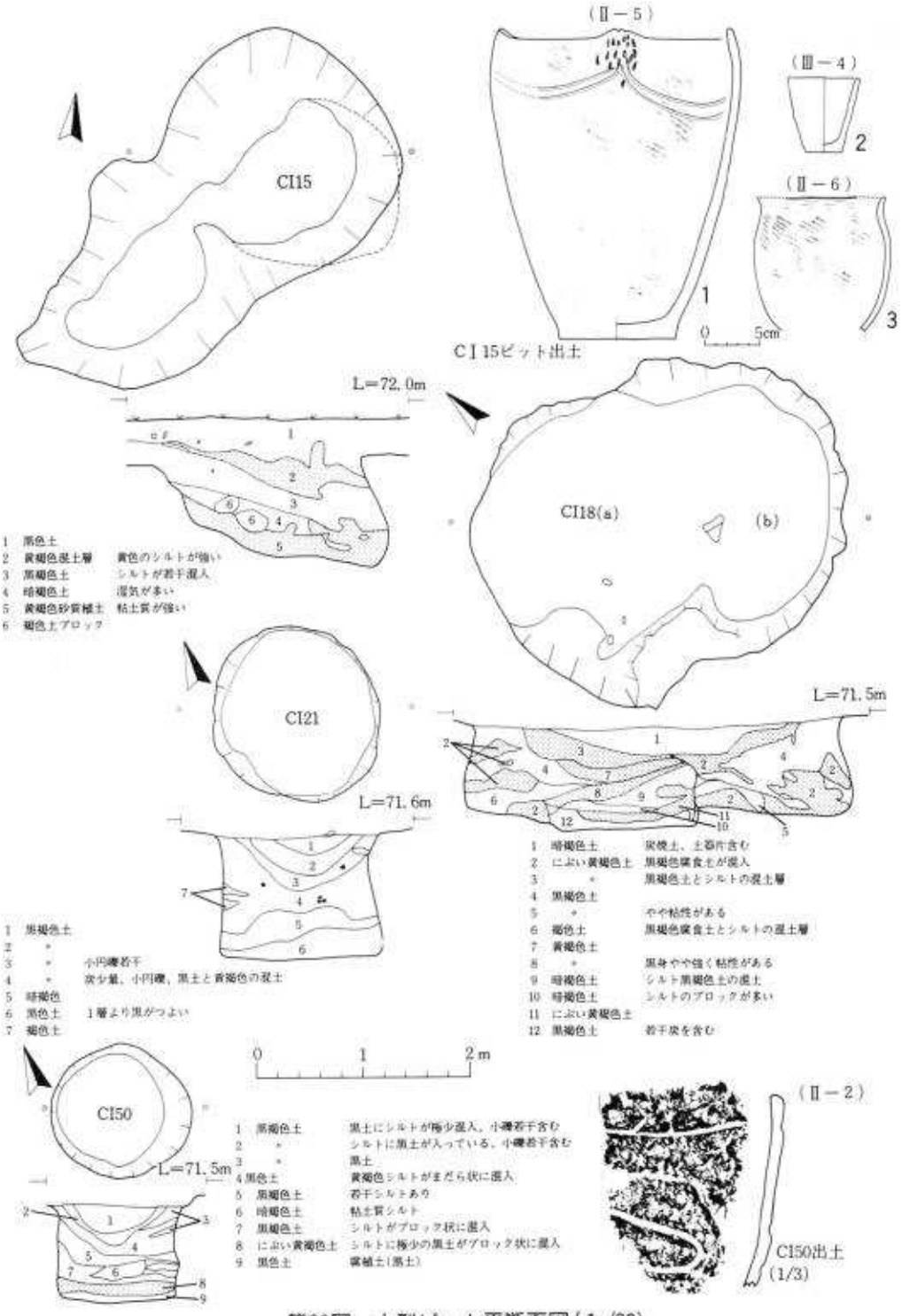
堆積土は6層に区分され、レンズ状に整然としており自然堆積と見られる。上、中層に礫が多く土器片も含む。下層に黄褐色土が厚く堆積している。遺物は縄文土器4点（体部3、底部1）で、地文には網目状撚糸文が使われている。後期初頭に比定される。

㊽ CI15複合ピット（第23図）

2つのピットが連なっている形を示しているが、その先後関係は明確でない。底面には傾斜がある。ピット長軸は400㎝、最大幅220㎝、最深部100㎝である。堆積土は北半部分の断面によれば6層に区分され、流れ込み等による自然堆積と見られる。出土遺物は縄文土器77点（復元土器3、口縁1、体部70、底部3）と石器1（スクレーパー）である。復元された図の1の深鉢は器高27㎝で沈線や刺突文をもつ。図2は無文の袖珍土器（器高65㎝）である。土器片の地文には無節、単節の斜縄文の他撚糸文や網目状撚糸文など見られ、後期初頭に比定されるものと考えられる。出土層位は、1層及び3層である。

㊾ CI18No.2ピット（第23図）

このピットはCJ18住居跡の北壁に接して検出された。2つのピットの複合したものであろ



第23図　大型ピット平断面図(1/60)

う。西側をａ、東側をｂとすれば、ａピットは開口部径200㎝、ｂピットは開口部径150㎝程と推定され、深さはａピット95㎝、ｂピット85㎝を測る。先後関係は断面では明確にとらえられない。堆積土は12層に区分され、ａピットはレンズ状となっており自然堆積と、又ｂピットは乱堆積状であり人為堆積と見られる。１層は両ピットがほぼ埋没した後堆積したものと考えられる。出土遺物は縄文土器90点（口縁４、体部86）と石器１点（石鏃）で１層からの出土である。土器片の施文から中期の大木8b的な隆起線文や後期初頭的なボタン状貼付文、撚糸文等が混在している。

⑥⓪ CI21ピット（第23図）

堆積土は７層に区分され、下層が山形に堆積後、上層はレンズ状に自然堆積したと見られる。上層には小礫や炭が若干含まれている。下層には黒色腐蝕土の堆積がある。遺物は縄文土器２点（体部１、底部１）であり、１層からの出土である。時期は不明である。

⑥① CI50ピット（第23図）

堆積土は９層に区分され、レンズ状をなしており自然堆積と見られる。全体的にシルトの混入が見られる。また底面には黒色腐植土が水平に堆積している。遺物は拓影図に示した沈線文と磨消縄文を施文する後期初頭の中型深鉢１個体（1/4残存）が出土した。出土層位は不明である。

⑥② CI56複合ピット（第24図）

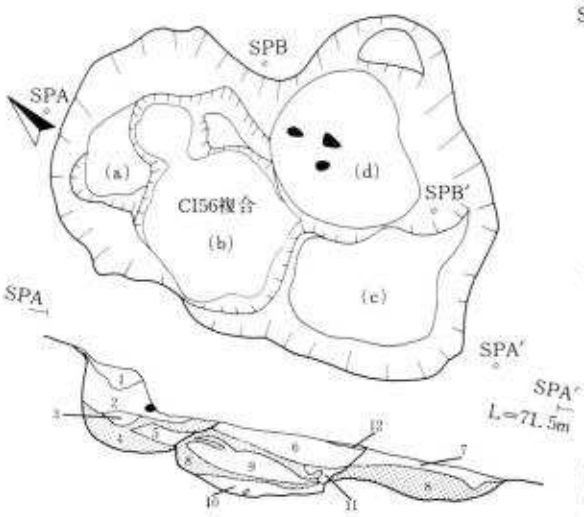
このピットはＣＩ 53住居跡の床面下に検出された。図のようにａ～ｄまで４つのピットの複合したものと考えられる。断面図Ａ－Ａ′からその切り合いの状況は、ｃ→ａへの順次つくられていったと見られるが、ｄピットとの先後関係は不明である。床面構築の際に削平された部分を考慮すればａ～ｃピットは深さ80～100㎝と推定される。ｄピットは床面下より115㎝を測り、もし削平されたとすれば150㎝程の深さとなろう。４つのピットの開口部径は共に130㎝前後と推定される。堆積土は水平状やレンズ状をなしており、いずれも自然に埋没したと思われる。ｄピットの底面には礫が散在する。遺物の出土はない。

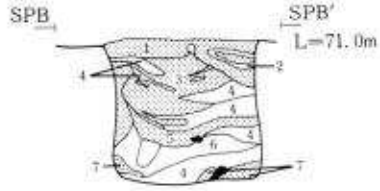
⑥③ CI59ピット（第24図）

大小２つのピットの複合とも考えられ、壁に段差をもつが、断面からは明確に判別できなかった。深いピット部分は壁がややくびれる断面形を呈している。開口部290×250㎝、中段の開口部径150㎝、深さは135㎝である。堆積土は11層に区分され、レンズ状をなし自然堆積と見られる。全体に小礫が含まれている。遺物は縄文土器３点（体部２、底部１）と土師器甕体部１点である。地文のみであり時期は比定できない。出土層位は不明である。

⑥④ CI62No.1ピット（第24図）

堆積土は９層に区分され、ほぼレンズ状をなしており自然堆積と見られる。全体にシルトが



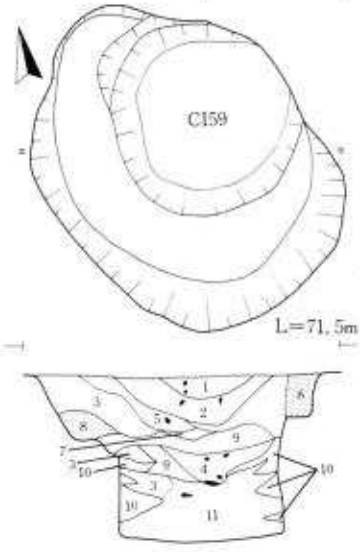


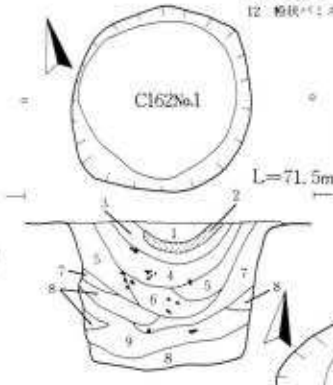
d

1	オリーブ褐色シルト	小円礫若干混入
2	口に黒土のよごれが見られる	地山の土がブロック状に混入 炭化物若干，円礫多数
3	灰黄褐色	炭化物若干，地山の土が混入
4	黒色	
5	オリーブ褐色シルト	黒土で若干よごれている
6	黒褐色土	炭化物若干，地山の土がブロック状に混入
7	オリーブ褐色シルト	
8	〃	黒土で若干よごれている

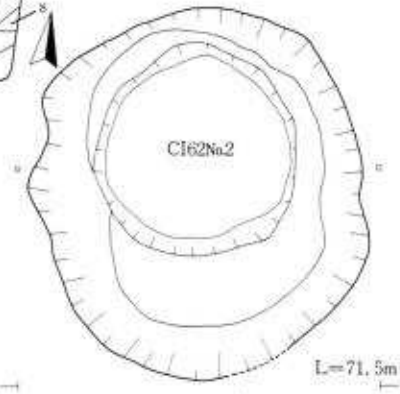
a b c

1	黒褐色土	地山の土が小ブロック状に混入
2	〃	地山の土が若干混入
3	〃	地山の土が混入
4	オリーブ褐色シルト	部分的に黒土で汚れている
5	黒色土	地山の土が若干混入
6	黒褐色土	炭化物若干，小円礫若干混入(1～3cm大)
7	〃	地山の土混入(1～3cm大)
8	オリーブ褐色シルト	黒土で部分的に汚れる
9	黒褐色土	地山の土がブロック状に混入
10	黒色土	王子大の円礫若干混入
11	黒褐色土	地山の土が小ブロック状に混入
12	粒状パミス	



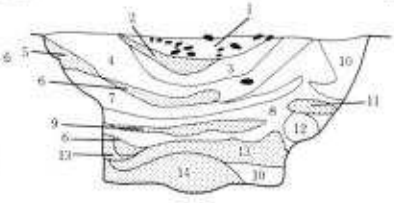


1	黒褐色土	黒土に砂が極少
2	オリーブ褐色土	小礫若干含む，砂質シルト
3	黒褐色土	シルト質黒土
4	暗褐色土	砂質性シルト
5	暗灰黄色土	シルト，黒土の混土
6	黒褐色土	炭化物，小礫若干含む
7	黒色土	小ブロックにシルト入る
8	褐色土	シルト
9	黒色土	小ブロックにシルト入る



1	黒色土	小石含む
2	〃	小石がやや多い，炭化物若干
3	〃	
4	〃	小石多く含む，シルトがブロック状に混入
5	黒褐色土	小石混入，シルトがブロック状に入る
6	〃	小量の炭，シルト小石が少ない
7	〃	シルト，小石を含んでいない
8	にぶい黄褐色土	シルトに黒色土が混入
9	黒褐色土	シルトに黒色土がブロック状に入る
10	褐色シルト	
11	黒褐色土	シルトがブロック状に若干含む

1	黒褐色土	砂礫，シルトと砂土
2	明黄褐色土	シルト
3	褐色土	シルト，黒土の混土
4	黒褐色土	黒土に炭化物混入
5	オリーブ褐色土	砂
6	にぶい黄褐色土	シルト
7	灰黄褐色土	黒土にシルトが若干入る
8	黒色土	黒土
9	オリーブ褐色土	シルトに黒土
10	黒褐色土	黒土にシルト極少
11	オリーブ褐色土	シルト
12	黄灰色土	シルトと黒土
13	オリーブ褐色土	シルト(極少に黒土)
14	〃	シルト



第24図　大型ピット平断面図(1/60)

混入する。遺物の出土はない。

⑮ CI62No.2ピット（第24図）（図版７）

２つのピットの複合とも見られるが、断面からは明確でなく、むしろ堆積土のあり方からすれば、地山のシルトを含む７層、９層、11～14層は崩落土と見て、壁が崩れて開口部が広くなったと思われる。下半部の断面は元のピットの壁を残しているようである。堆積土は14層に区分され、レンズ状をなしており自然堆積と見られる。上層には礫が多く含まれる。出土遺物は縄文土器体部２点である。平行隆起線の渦巻文が施文されており中期の大木8b式のものと思われる。出土層位は不明である。

⑯ CI74ピット（第25図）

このピットはCH74住居跡の西壁に切られた形で検出された。堆積土は７層に区分され、５層、７層のように単一層が厚く堆積していることから、比較的短時間に埋没していったと思われる。上層はレンズ状の堆積部分もある。遺物は縄文土器１点（平行隆起線の渦巻文があり大木8b式）と土師器片８である。出土層位は不明である。

⑰ CJ03No.1ピット（第25図）（図版７）

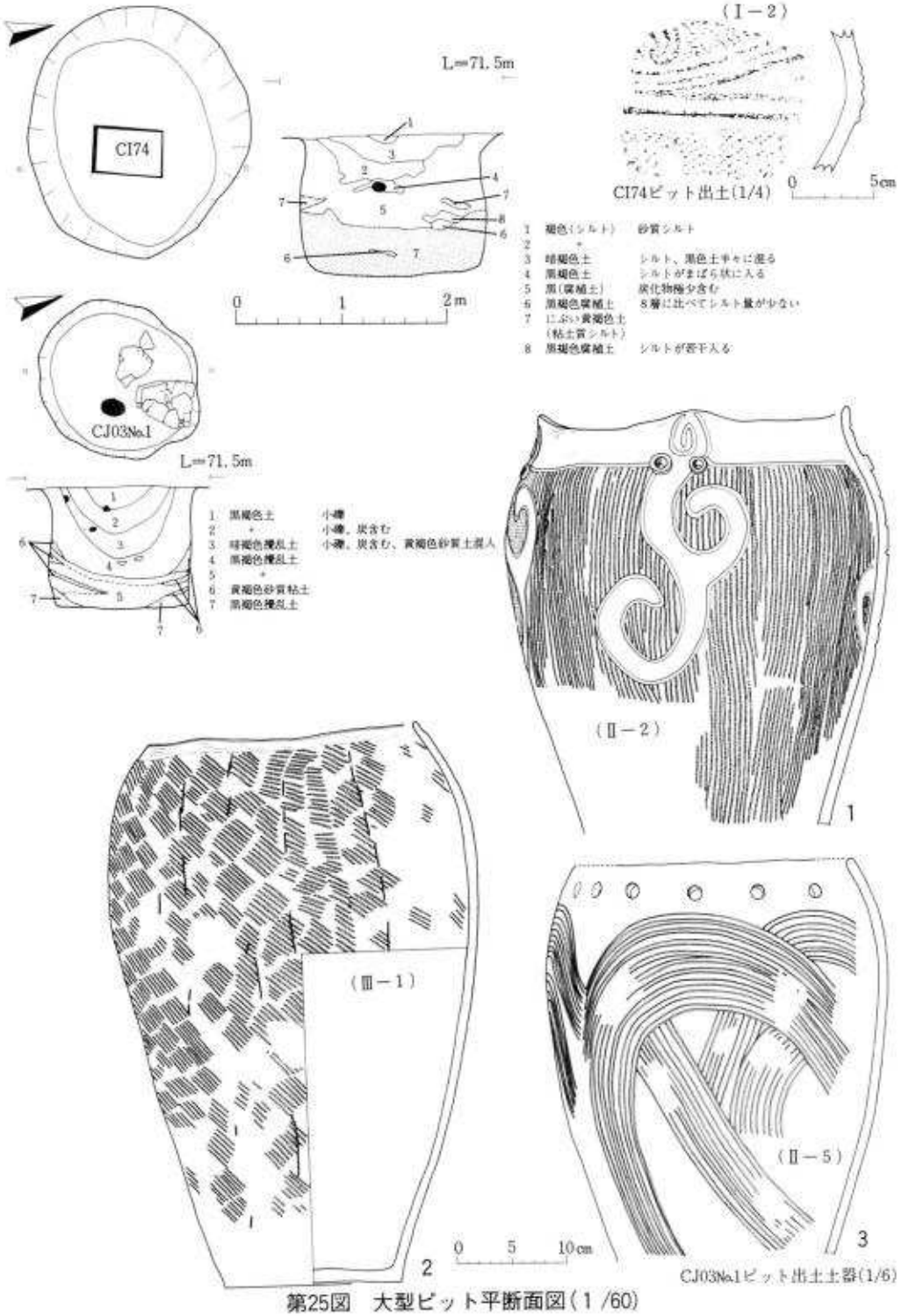
堆積土は７層に区分され、崩落土の小ブロックを含みながら整然とレンズ状を成しており、自然堆積と見られる。上層には小礫、炭を含んでいる。底面に黒色腐植土がある。遺物は底面に横倒しの状態で図中の深鉢型土器２個体（図中２と３）が検出されている。図１は底部欠損している大型深鉢（口径28cm）で、磨消縄文やボタン状貼付文が施文されている。外面に煤が付着している。図２の土器は無文地に櫛歯状沈線によって曲線文を描き出している。口縁に等間隔の小穴（径1.3cm）が穿たれている。口径は約25cmと推定され、全体の４分の１程度の残存である。図３は地文のみの大型深鉢（口径24.5cm、胴部33.5cm、器高51cm）の完形品である。遺物は上部の土器３個体の他に縄文土器体部21点が、４層から出土している。施文の特徴からいずれも後期初頭と思われる。

⑱ CJ03No.2ピット（第26図）

底面中央に径45cm、深さ15cmの小ピットがある。堆積土は上半部はレンズ状をなし、下半部は流れ込みの様相を呈しているがほぼ自然堆積と見られる。７層、８層は壁の崩落土であろう。上層には小礫が含まれている。遺物の出土はない。

⑲ CJ06ピット（第26図）（図版８）

ほぼピーカー状であるが、西～南側にかけて、壁が袋状に抉れた部分をもつ。底面には小ピット状（径25cm、深さ10cm）の凹みが検出された。堆積土は８層に区分され、ほぼレンズ状をなしており自然堆積と見られる。最下層に黒色腐植土がある。遺物は縄文土器２点（１個体の約1/8残存と他の体部片１）である。網目状撚糸文や器形から後期初頭と思われるが、磨滅が著



第25図　大型ピット平断面図(1/60)

しい。出土層位は不明である。

⑩ **CJ09ピット**（第26図）

長方形に近いような楕円形プランを呈しており、他のピットとは多少様相を異にしている。底面には径35cm、深さ20cmの小ピット状の掘り込みがある。堆積土は14層に区分され、上層はレンズ状、下層はブロック状をなしている。全体的に炭化物が多い。出土遺物はない。

⑪ **CJ15ピット**（第26図）

このピットはCJ18住居跡の南東壁に切られて検出された。堆積土については不明であるがやや底部に広がるフラスコ状である。遺物は縄文土器10点（口縁4、体部5、底部1）出土している。磨消縄文やボタン状貼付文が見られ、後期初頭と思われる。

⑫ **CJ18ピット**（第26図）

同じくCJ18住居跡の西南壁に切られて検出された。開口部に深さ50cm程にわたり中段部分をもつが、底部に広がるフラスコ状を呈している。底面中央に径20cm、深さ10cmの小ピットがある。上層から縄文土器体部8点と石器1点（石鏃）出土している。

⑬ **CJ24ピット**（第26図）

比較的浅いフラスコ形を呈している。堆積土は5層に分けられ、レンズ状に整然となっており自然堆積と見られる。すべての層が黒褐色土に黄褐色土が混入した状況である。遺物の出土はない。

⑭ **CJ50No.1ピット**（第26図）

底面中央に径20cm、深さ10cmの小ピットがある。堆積土は19層に区分され、上層はレンズ状となっているが中～下層はブロック状をなしている。遺物は7層より縄文土器片が出土しているが紛失のため不明である。

⑮ **CJ50No.2ピット**（第26図）

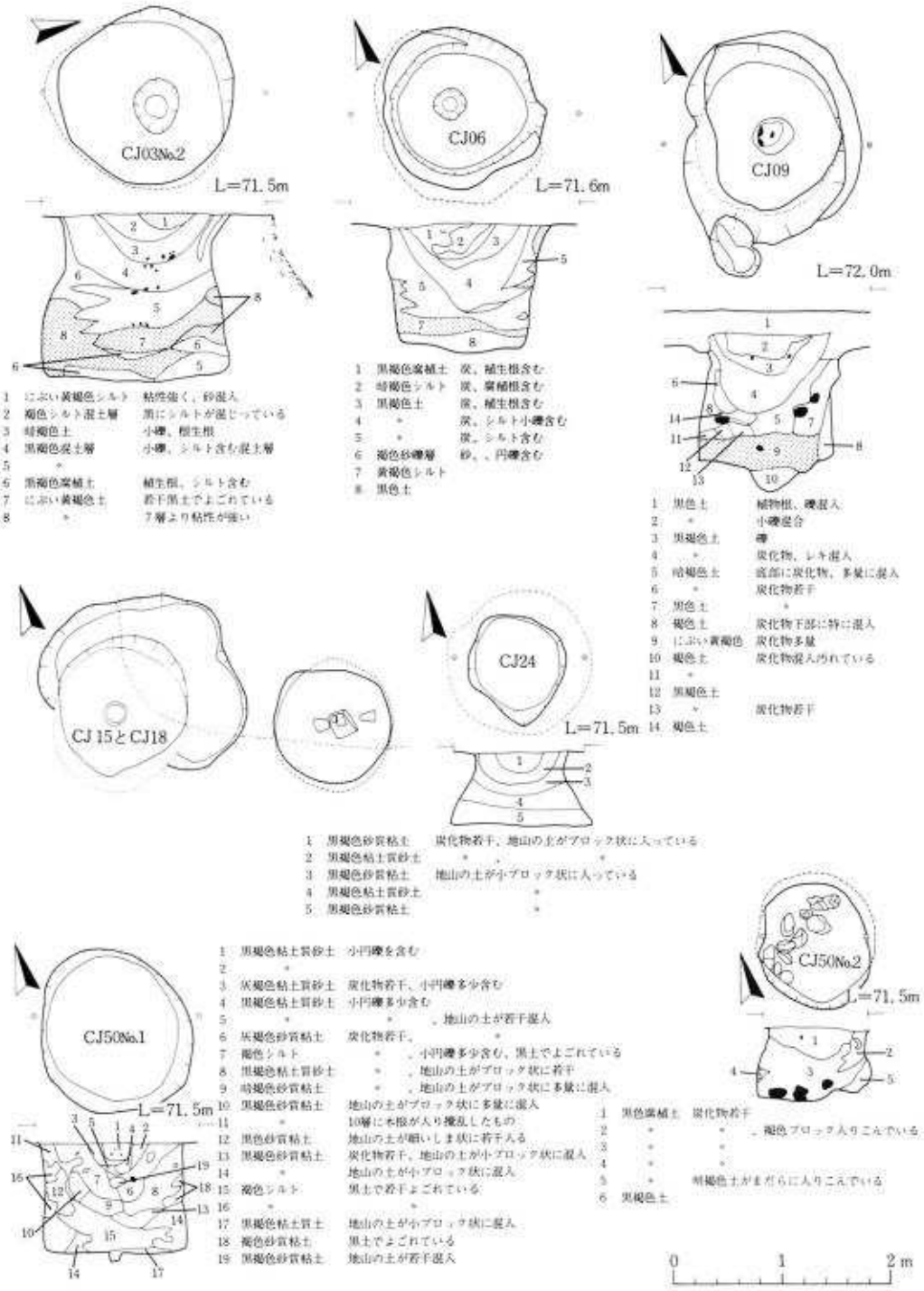
底面にやや凹凸がある。深さ65cmと比較的浅い。堆積土は6層に区分され、ブロック状をなすがほぼ黒色腐植土のみで、単一層に近い。底面には礫が多い。遺物は1層より石器1点出土している。

⑯ **CJ59ピット**（第27図）

堆積土は12層に区分され、ほぼレンズ状をなしており自然堆積と見られるが、上層にブロック状部分もある。12層は一定間隔で入った崩落土であろう。底面北隅に耳栓2点が10cmはなれて一緒に出土した。その他の遺物はない。

⑰ **CJ62ピット**（第27図）（図版8）

開口部がかなり大きく深い。堆積土は11層に区分され、崩落土を混入しほぼレンズ状をなしており自然堆積と見られる。中層部に礫が多い。遺物は2層より縄文土器の中型深鉢1個体（上

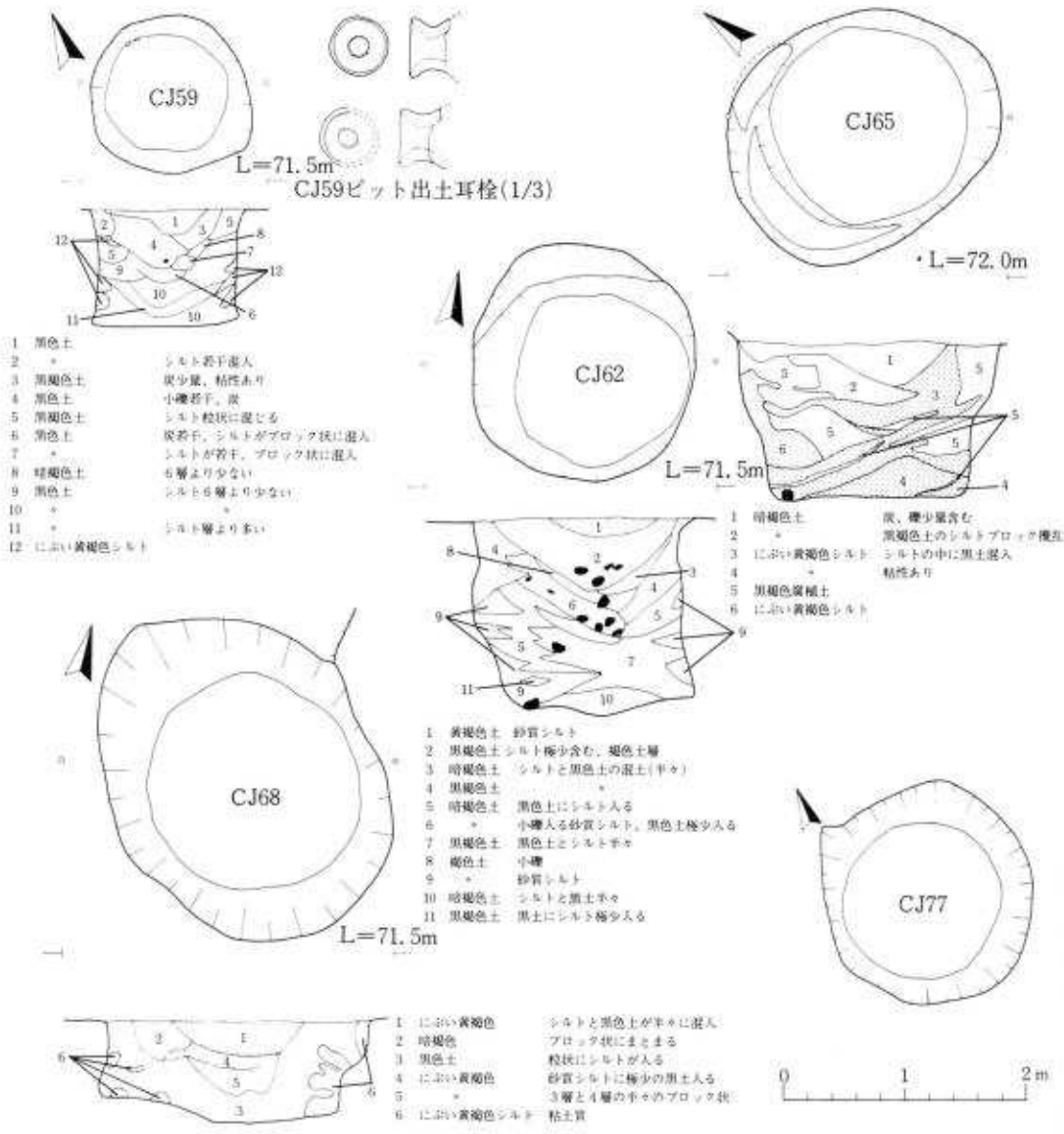


第26図　大型ピット平断面図(1/60)

半欠損し、地文のみ）と体部片１である。時期は不明である。

㉘ CJ65ピット（第27図）

開口部 230 ㎝程でかなり大きいピットである。堆積土は６層に区分され、流れ込み状を示し自然堆積と見られる。地山の黄褐色シルトが多量に混入しており、壁の崩落土と思われる。遺物は縄文土器15点（体部13、底部２）であるが、地文のみで時期比定はできない。出土層位は不明である。



第27図　大型ピット平断面図（1 /60）

⑲ **CJ68ピット**（第27図）

検出までに周囲の地山面が削平されており、実際は図よりも40cm程深かったと推定される。開口部が290cmとかなり大きい。堆積土は6層に区分され、黒褐色土が大部分であり短期間に埋没したと考えられる。出土遺物はない。

⑳ **CJ77ピット**（第27図）

円形プランであるが断面形、堆積土は不明である。出土遺物はない。

㉑ **DA03No.2ピット**（第28図）

堆積土は10層に区分され、レンズ状をなしており自然堆積と見られる。上層には小礫が多く全体に炭化物が散在する。底面に円礫がある。出土遺物はない。

㉒ **DA06ピット**（第28図）

底面中央に径30cm、深さ20cmの小ピットがある。堆積土は10層に区分され、流れ込みや水平状となっており、ほぼ自然堆積と見られる。全体に炭が含まれ、特に底部に多い、遺物の出土はない。

㉓ **DA09ピット**（第28図）

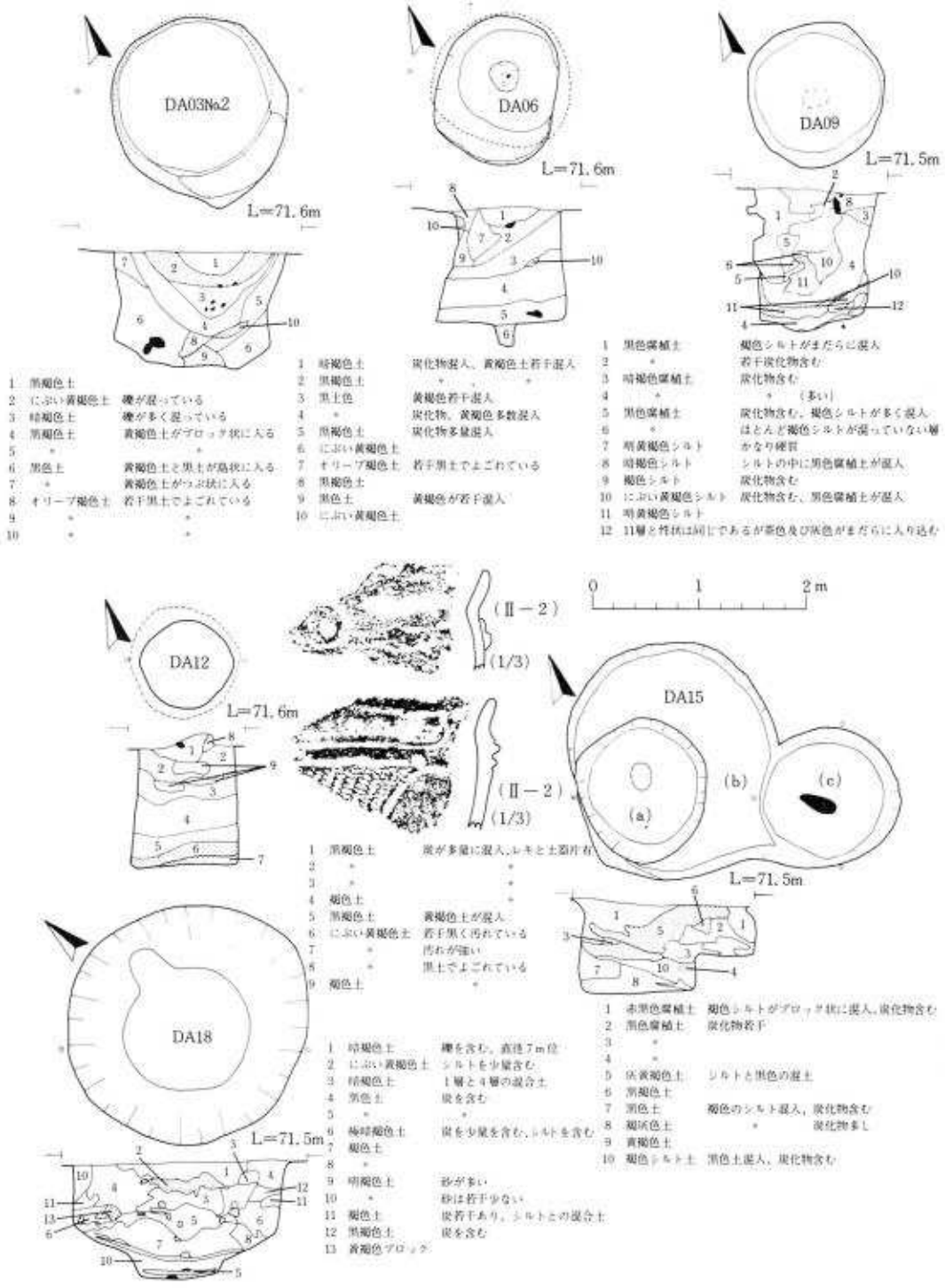
このピットはDB09住居跡の北壁隅に切られた形で検出された。底部中央に径20cm、深さ10cm程の凹みがある。堆積土は13層に区分され、上、中層はブロック状の乱堆積を示し、人為堆積と見られるが、下層部は水平状堆積となっており自然堆積であろう。全体に炭化物が含まれる。遺物の出土はない。

㉔ **DA12ピット**（第28図）

堆積土は9層に区分され、整然とした堆積を示し自然に埋没したと見られるが、9層の入り方から上層部は人為による可能性もある。上面に小礫と土器がかたまって存在し遺物は1層の上面に縄文土器13点（口縁6、体部7）、土師器坏破片4点（口縁2、体部2）が出土し、堆積土中から縄文土器12点（口縁5、体部1）である。堆積土中の破片には連鎖状隆起線や磨消縄文が見られ、後期初頭のものと思われる。

㉕ **DA15複合ピット**（第28図）

3つのピットが複合していると考えられ、図のようにa、b、cとする。aピットとbピットの先後関係は断面からは判別できなかった。規模はaピット開口部径約110cm、深さ90cm、bピット開口部径160cm、深さ45cm、cピットは開口部径125cm、深さ75cmである。3つとも壁にくびれを持つフラスコ形近似の断面形を呈していると思われる。aピットの底面中央に径25cm、深さ10cm程の小ピットがある。a・bピットの堆積土は10層に区分されブロック状や流れ込みを呈しており、人為による堆積と見られる。遺物はa、bピットの堆積土中から体部14点でいずれも磨滅していて、施文の特徴はつかめない。cピットの堆積土中から縄文土器体部



1	黒褐色土	
2	にぶい黄褐色土	礫が混っている
3	暗褐色土	礫が多く混っている
4	黒褐色土	黄褐色土がブロック状に入る
5	〃	〃
6	黒色土	黄褐色土と黒土が島状に入る
7	〃	黄褐色土がつぶ状に入る
8	オリーブ褐色土	若干黒土でよごれている
9	〃	〃
10	〃	〃

1	暗褐色土	炭化物混入、黄褐色土若干混入
2	黒褐色土	〃 〃
3	黒土色	黄褐色若干混入
4	〃	炭化物、黄褐色多数混入
5	黒褐色土	炭化物多量混入
6	にぶい黄褐色土	
7	オリーブ褐色土	若干黒土でよごれている
8	黒褐色土	
9	黒色土	黄褐色が若干混入
10	にぶい黄褐色土	

1	黒色腐植土	褐色シルトがまだらに混入
2	〃	若干炭化物含む
3	暗褐色腐植土	炭化物含む
4	〃	〃 （多い）
5	黒色腐植土	炭化物含む、褐色シルトが多く混入
6	〃	ほとんど褐色シルトが混っていない層
7	明黄褐色シルト	かなり硬質
8	暗褐色シルト	シルトの中に黒色腐植土が混入
9	褐色シルト	炭化物含む
10	にぶい黄褐色シルト	炭化物含む、黒色腐植土が混入
11	明黄褐色シルト	
12	11層と性状は同じであるが茶色及び灰色がまだらに入り込む	

1	黒褐色土	炭が多量に混入、レキと土器片有
2	〃	〃
3	〃	〃
4	褐色土	〃
5	黒褐色土	黄褐色土が混入
6	にぶい黄褐色土	若干黒く汚れている
7	〃	汚れが強い
8	〃	黒土でよごれている
9	褐色土	〃

1	暗褐色土	礫を含む、直径7m位
2	にぶい黄褐色土	シルトを少量含む
3	暗褐色土	1層と4層の混合土
4	黒色土	炭を含む
5	〃	〃
6	極暗褐色土	炭を少量を含む、シルトを含む
7	褐色土	
8	〃	
9	明褐色土	砂が多い
10	〃	砂は若干少ない
11	褐色土	炭若干あり、シルトとの混合土
12	黒褐色土	炭を含む
13	黄褐色ブロック	

1	赤黒色腐植土	褐色シルトがブロック状に混入、炭化物含む
2	黒色腐植土	炭化物若干
3	〃	
4	〃	
5	灰黄褐色土	シルトと黒色の混土
6	黒褐色土	
7	黒色土	褐色のシルト混入、炭化物含む
8	褐灰色土	〃 炭化物多し
9	黄褐色土	
10	褐色シルト土	黒色土混入、炭化物含む

第28図　大型ピット平断面図（1/60）

1点、土師器甕口縁1、体部3点出土している。層位はいずれも不明。

⑧⑥ DA18ピット（第28図）（図版8）

底面に径110cm、深さ20cm程の掘り込みを持ち2重円構造となっている。大小2つのピットの複合とも考えられるが明確でない。堆積土は13層に区分されブロック状をなしており人為堆積によると見られる。下層部は自然堆積であろう。遺物は縄文土器38点（体部35、底部3）で、いずれも磨滅が著しい。網目状の撚糸文の地文が多い。出土層位は不明である。

⑧⑦ DA21 No.1 ピット（第29図）

このピットはDA24住居跡の東壁に切られた形で検出された。不整な楕円形プランで、2つのピットの複合とも考えられる。断面から2つのピットを想定すればaとbとなり、aピットはフラスコ状に、bピットはビーカー状の断面形を呈していたと思われる。その境界である5層のラインは明確でない。規模はaピット開口部の推定径115cm、深さ60cm、bピットは開口部推定140cm、深さ100cmになろう。堆積土は7層に区分され、ブロック状を成していることから、人為堆積と見られる。上層の1層、2層は自然堆積と思われる。遺物は縄文体部細片2点である。出土層位は不明である。

⑧⑧ DA21 No.2 ピット（第29図）

このピットはDA24住居跡の煙道の先端に接する状態で検出されている。深さ50cmと浅い。堆積土は7層に区分され、黒褐色土を主体としてブロック状となっており、人為的埋め戻しと見られる。全体に炭が含まれ、特に下層に多く、焼土も散在する。遺物は縄文土器2点（口縁1、底部1）であるが、地文のみで時期は比定できない。出土層位は不明である。

⑧⑨ DA30ピット（第29図）

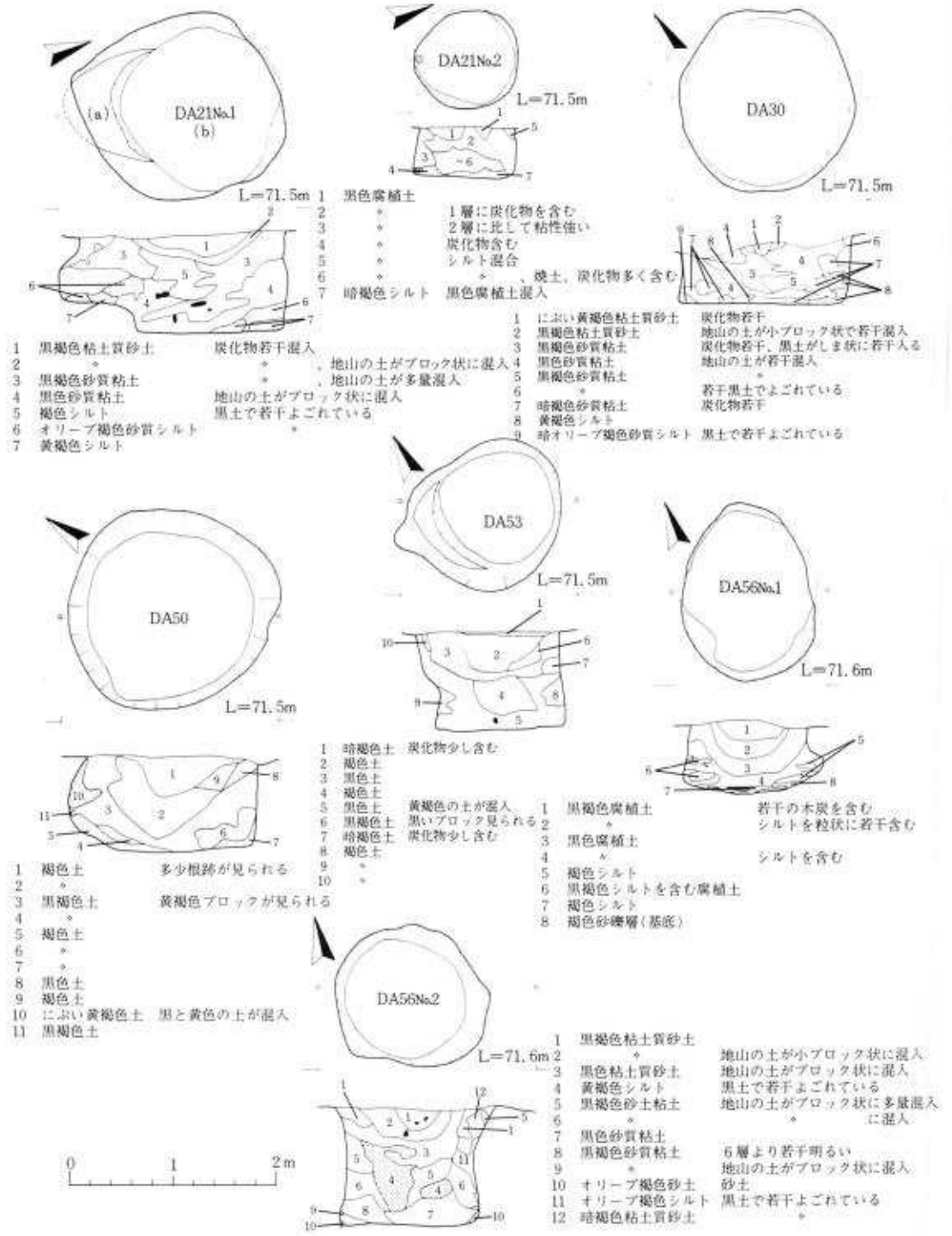
深さは70cmであるが検出までに10cm程削平されたため、実際は80cm以上の深さがあったと推定される。堆積土は9層に区分され、ブロック状となっており人為堆積と見られる。遺物の出土はない。

⑨⓪ DA50ピット（第29図）

このピットはCJ50住居跡の西床面下から検出された。深さは床面によって削平された10cmをプラスして約100cmと推定される。堆積土は11層に区分され、ほぼレンズ状をなしており、自然堆積と見られる。底面には円礫が7個あった。ところどころに黄褐色土のブロック状の混入がある。遺物の出土はない。

⑨① DA53ピット（第29図）

このピットもCJ50住居跡の中央床面下から検出されている。西側に崩落部があり、深さは床面より削平されたと考えられる10cmをプラスして約105cmである。堆積土は10層に区分され、2層、4層の褐色土ブロックを含み、黒褐色土が主体を占める。遺物の出土はない。



第29図　大型ピット平断面図(1/60)

⑫ DA56No.1ピット（第29図）

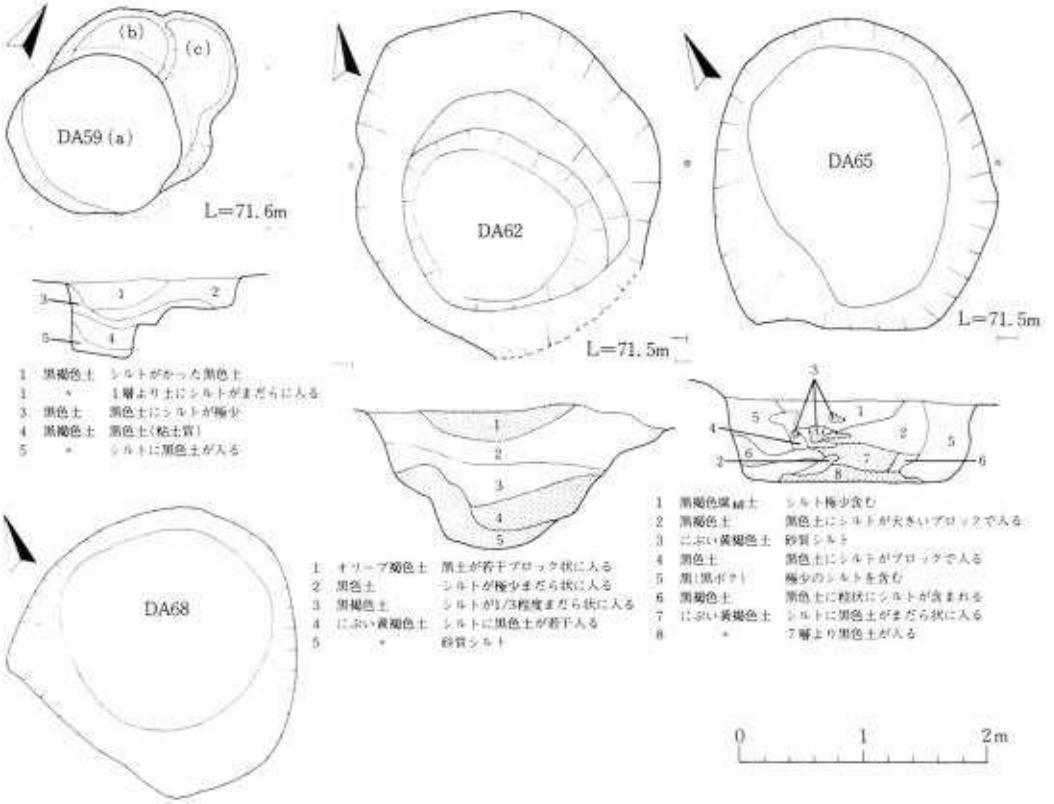
深さ60cmと浅い。堆積土は８層に区分され、レンズ状をなしており自然堆積と見られる。全体にシルトの混入がある。遺物は縄文土器体部５点であるが時期比定はできない。出土層位は不明である。

⑬ DA56No.2ピット（第29図）

堆積土は12層に区分され、上層はレンズ状をなすが、中、下層はブロック状を示し人為堆積と見られる。出土遺物はない。

⑭ DA59複合ピット（第30図）

３つのピットの複合と見られる。図のようにａ、ｂ、ｃとすれば、ａピットは開口部径150cm、深さ120cm程で底部がふくらむフラスコ状の断面を呈しており、ｂピットは開口部径推定80cm、深さ35cm程となる。堆積土については明確さを欠くがほぼ自然堆積の様相である。遺物は縄文土器２点（口縁１、体部１）と須恵器甕体部１点である。細片のため時期比定はできない。



第30図　大型ピット平断面図（1/60）

⑮ **DA62ピット**（第30図）

このピットはDA62住居跡の西壁に一部削られた形で検出された。鍋底状の底部を有する。堆積土は5層に区分され、水平状やレンズ状となっており自然堆積と見られる。全体にシルトの混入がある。遺物の出土はない。

⑯ **DA65ピット**（第30図）

DA65住居跡の北壁に切られて検出された。開口部250cm程でかなり大きい。堆積土は8層に区分され、ブロック状を呈し人為堆積と見られる。遺物の出土はない。

⑰ **DA68ピット**（第30図）

不整な円形プランで深さ80cmを測る。断面形、堆積土や遺物については不明である。

⑱ **DB03No.1ピット**（第31図）

このピットはCJ50住居跡の西南隅壁に切られた形で検出された。段を有し2重円構造である。底面中央に径30cm、深さ10cm程の小ピットがある。大小2つのピットの複合の可能性もある。堆積土は12層に区分され、レンズ状をなしており自然堆積と見られる。全体にシルトが混入する。遺物の出土はない。

⑲ **DB03No.2複合ピット**（第31図）

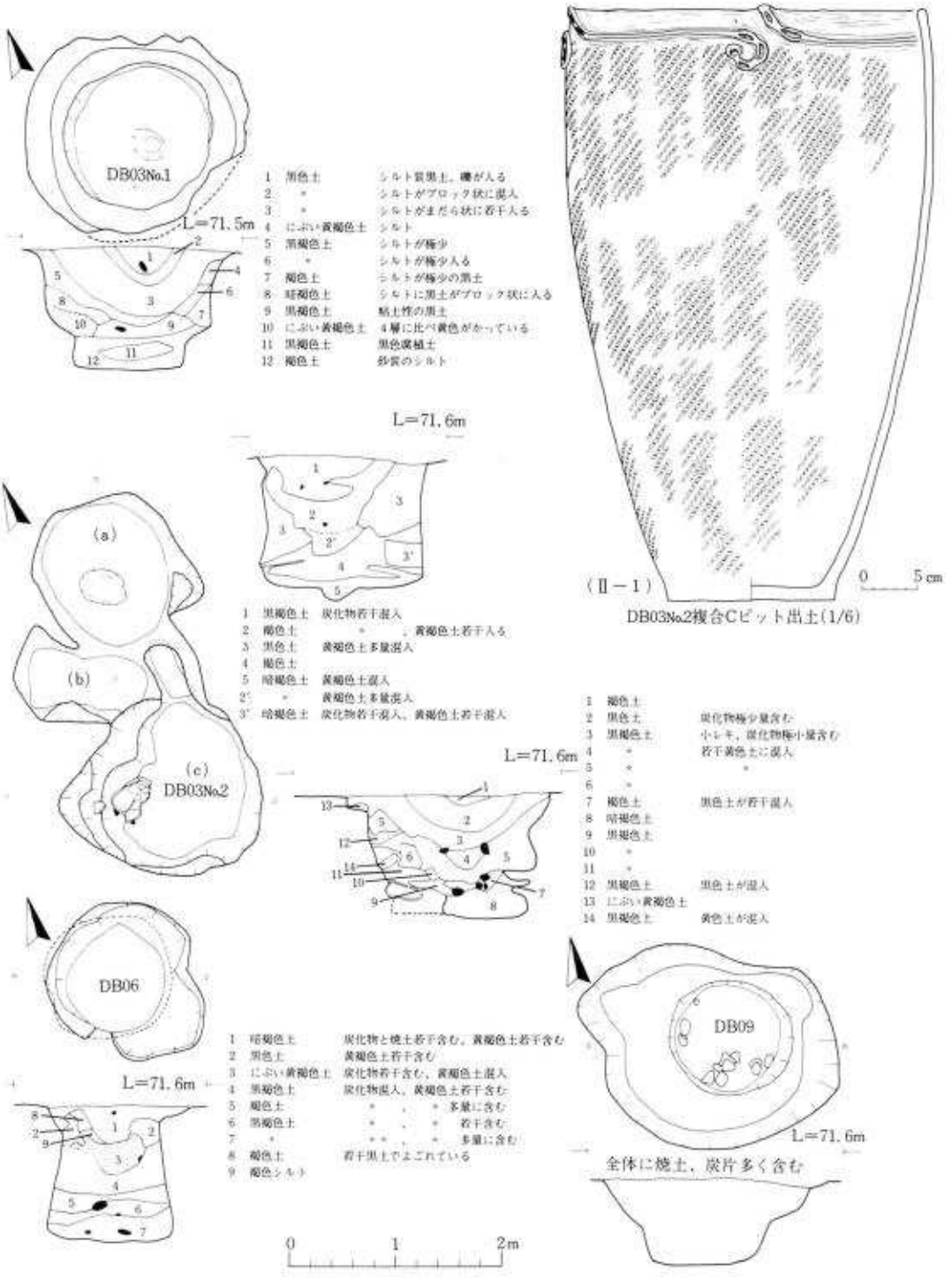
3つのピットの複合したものであり、北側からa、b、cピットとする。先後関係は不明である。aピットはほぼ円形プランを持ち、開口部径150cm、ビーカー形で断面形を呈している。底面中央に径40cm、深さ15cm程の小ピットがある。堆積土は5層に区分され、上層はレンズ状、中、下層はブロック状を呈している。bピットは長楕円形プランで開口部130×70、深さ80cm、堆積土については不明である。cピットは不整な円形プランで、開口部170cm、深さ115cm、ほぼビーカー状の断面形を呈している。堆積土は14層に区分され、レンズ状を示し自然堆積と思われる。遺物はaピットに縄文土器12点（口縁2、体部10）、出土層位は不明である。cピットでは底部西壁際に図の大型深鉢が横倒しの状態で出土した。口径38cm、器高53cmの大型で、口縁部に一部連鎖状をなす隆起線文による渦巻文が施文され、後期初頭のものと思われる。完形ではなく3分の1程欠損している。この他体部片1点である。

⑳ **DB06ピット**（第31図）

堆積土は9層に区分され、ほとんど水平状となっており自然堆積と見られる。全体的に炭化物や黄褐色シルトの混入がある。遺物は1層より縄文土器体部2点、その他層位は不明だが縄文片38点（口縁5、体部15、底部18）、石器の剥片2点出土している。磨消縄文やボタン状貼付文などの施文があり後期初頭のものと思われる。

㉑ **DB09ピット**（第31図）

DE09住居跡の床面下から検出された。崩落のため正確なプランや堆積土については観察で



第31図　大型ピット平断面図(1/60)

きなかった。壁に段を持っている。床面による削平を考慮すれば深さは100cm程となろう。堆積土は全体に焼土、炭を多く含み、底部に円礫がかなりみられる。遺物は縄文土器同一個体の4分の1程の体部破片が出土している。時期は不明である。

⑫ DB12複合ピット（第32図）

2つのピットが複合しており、a、bとする。aピットは不整な円形プランでビーカー状のピットが大きく崩れたような断面形を呈している。底面に径50cm、深さ10cm程の小ピットがある。堆積土は13層に区分され、レンズ状や流れ込み状を呈し、ほぼ自然堆積と見られる。遺物は縄文土器14点（口縁3、体部5、底部6）で、磨滅はあるが磨消縄文や連鎖状隆起線の施文が見られ、後期初頭のものである。出土層位は不明である。bピットは不整な円形プランで、ビーカー状の断面形を呈し、開口部220×190、深さ115cm、底面中央に径40cm、深さ5cm程の浅い小ピットがある。堆積土は10層に区分され、ほぼ自然堆積と見られる。遺物は縄文土器体部細片19点で時期比定はできない。a、b両ピットとも底面中央には礫が集まって検出されている。

⑬ DB15ピット（第32図）

円形プランであり、深さ80cmを測る。断面形、堆積土については不明である。

⑭ DB18ピット（第32図）

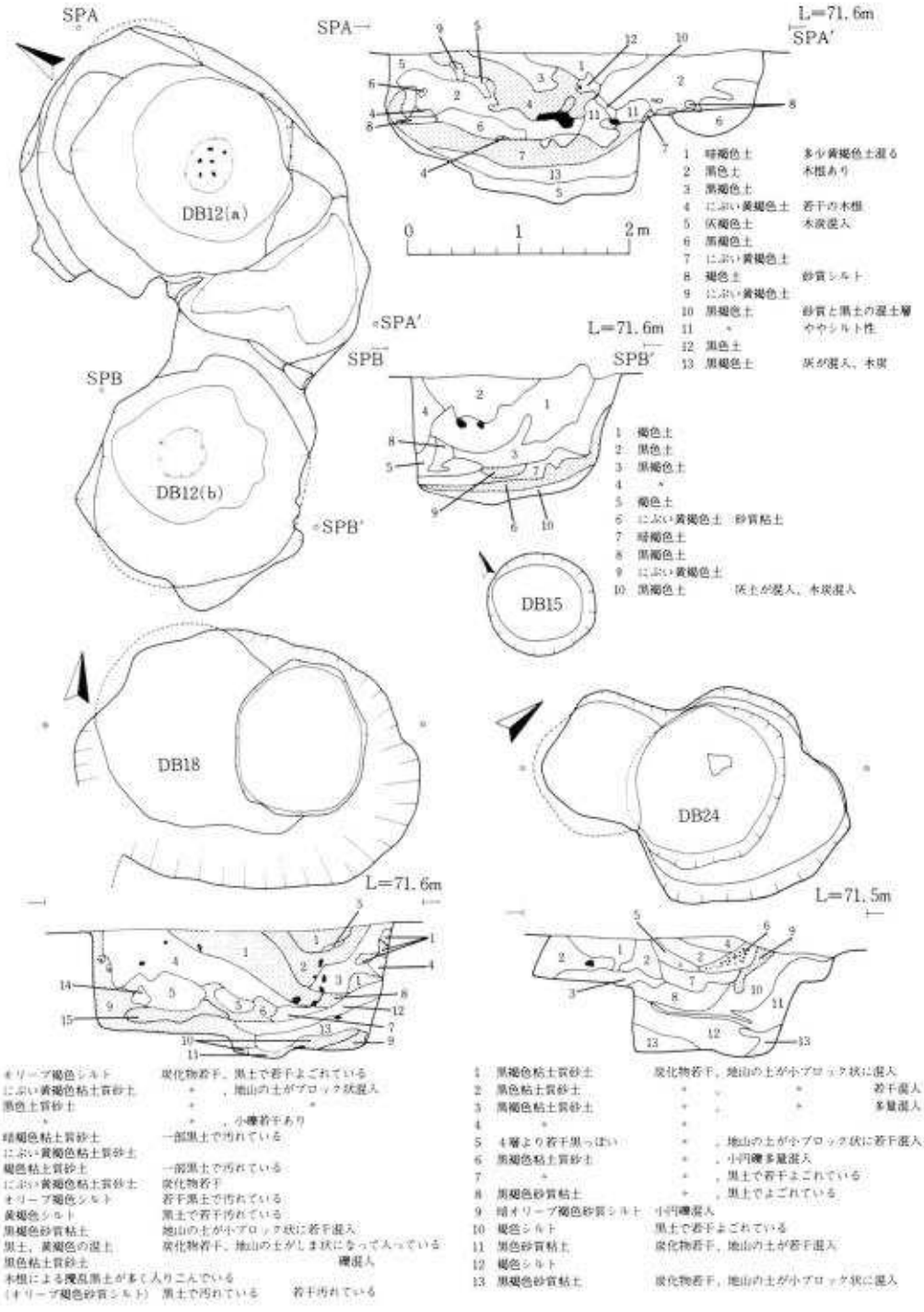
2つのピットの複合とも考えられる規模であるが断面形からは明確でない。楕円形プランであり、深さの最深部115cmである。一段低い底面の掘り込みの径は110×130cm、深さ115cmである。堆積土は15層に区分され、レンズ状をなしており自然堆積と見られる。遺物は縄文土器6点（口縁1、底部5）で磨滅が著しい。磨消縄文、連鎖状隆起線が見られ後期初頭のものである。出土層位は不明である。

⑮ DB24複合ピット（第32図）

このピットはDA24住居跡の西南壁に切られた形で検出された。2つのピットの複合と見られ、図のようにa、bとする。断面図からaピットの後にbピットがつくられたと考えられる。aピットはビーカー形の断面形を呈し、開口部径約170cm、深さ150cmである。bピットは底部に広がるフラスコ形の断面を呈し、開口部径約90cm、底径120cm、深さ40cmである。堆積土はa、bあわせて13層に区分され、aピットはレンズ状をなしており自然堆積と見られ、bピットはブロック状である。全体に地山のシルトが混入し、6層、9層には礫が多い。遺物は同一個体と思われる（1/5残存）が底面から（12層）出土し、6層からも数点あった。網目状撚糸文の地文をもち口縁部無文であることから後期初頭のものであろう。

⑯ DB27ピット（第33図）

堆積土は12層に区分され、乱堆積の様相を呈しほぼ人為堆積と思われる。全体的に炭が含ま



第32図　大型ピット平断面図(1/60)

れている。黄褐色土（4層）が多量である。出土遺物はない。

⑯ **DB50ピット**（第33図）

規模が比較的小さい。堆積土は6層に区分され、レンズ状をなしており自然堆積と見られる。全体的にシルトの混入がある。遺物の出土はない。

⑱ **DB53ピット**（第33図）

このピットはCJ50住居跡の床面下から検出された。深さ100cmであるが床面の削平を考慮すれば、実際は120cm程になろう。堆積土は7層に区分され、上層はレンズ状をなし自然堆積と見られるが、中、下層はブロック状となっている。遺物の出土はない。

⑲ **DB59ピット**（第33図）

堆積土は11層に区分され、レンズ状に流れ込みがあり自然堆積と見られる。11層は崩落土であろう。全体的にシルトの混入がある。遺物は縄文土器4点（体部3、底部1）、石器2点（石錐1、石核1）土師器坏片4点である。細片であり時期は不明である。層位は不明。

⑩ **DB65No.1ピット**（第33図）

このピットはDA62住居跡の床面下から検出された。開口部220cmとかなり大きく、深さ80cmであるが床面の削平を考慮すれば、実際は深さ120cmと推定される。堆積土は6層に区分され、ブロック土をもつが水平状となっており自然堆積と見られる。遺物の出土はない。

⑪ **DB65No.2ピット**（第33図）

DA62住居跡の東壁に切られた形で検出された。ほぼ円形のプランで、西側にふくらみをもちフラスコ状近似の断面形を呈している。開口部径210cm、深さ120cmである。堆積土については図面作成できなかったため不明である。出土遺物はない。

⑫ **DC06複合ピット**（第34図）

2つの円形ピットが溝状ピットによって連なっている形態を示している。a、cピットを結ぶbピットは、ほぼ平坦であり、上幅45cm、下幅15cm、深さ90cmの溝状となっている。切り合いは明確でない。aピットはほぼ円形プランで、ビーカー状の断面形を呈し、開口部150cm、深さ115cmである。堆積土は11層に区分され、ブロック状を示しほぼ人為堆積と見られる。遺物は8層に縄文土器片出土したが、紛失のため詳細は不明である。cピットはフラスコ形近似の断面形を呈し、開口部径160cm、深さ135cmである。堆積土は9層に区分され上部レンズ状、下半ブロック状を成している。出土遺物はない。

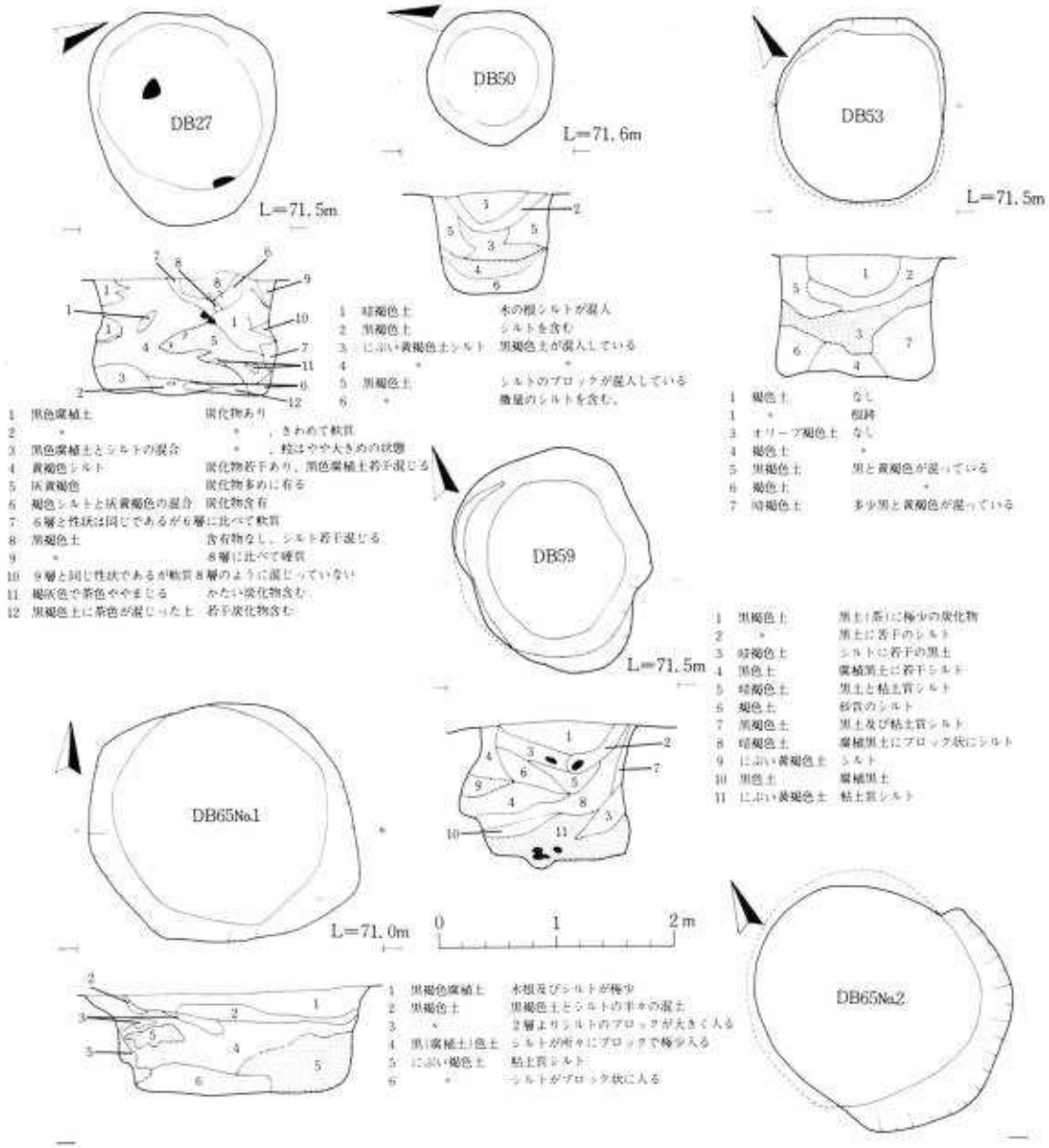
⑬ **DC09ピット**（第34図）

このピットはDB09住居跡の西南壁に切られた形で検出された。二重円構造をもち、複合の可能性もある。ピット状の掘り込み（径130cm、深さ15cm）がある。堆積土は9層に分かれ、上層はレンズ状を成しているが下層はブロック状となっている。5層、6層は崩落土であろう。

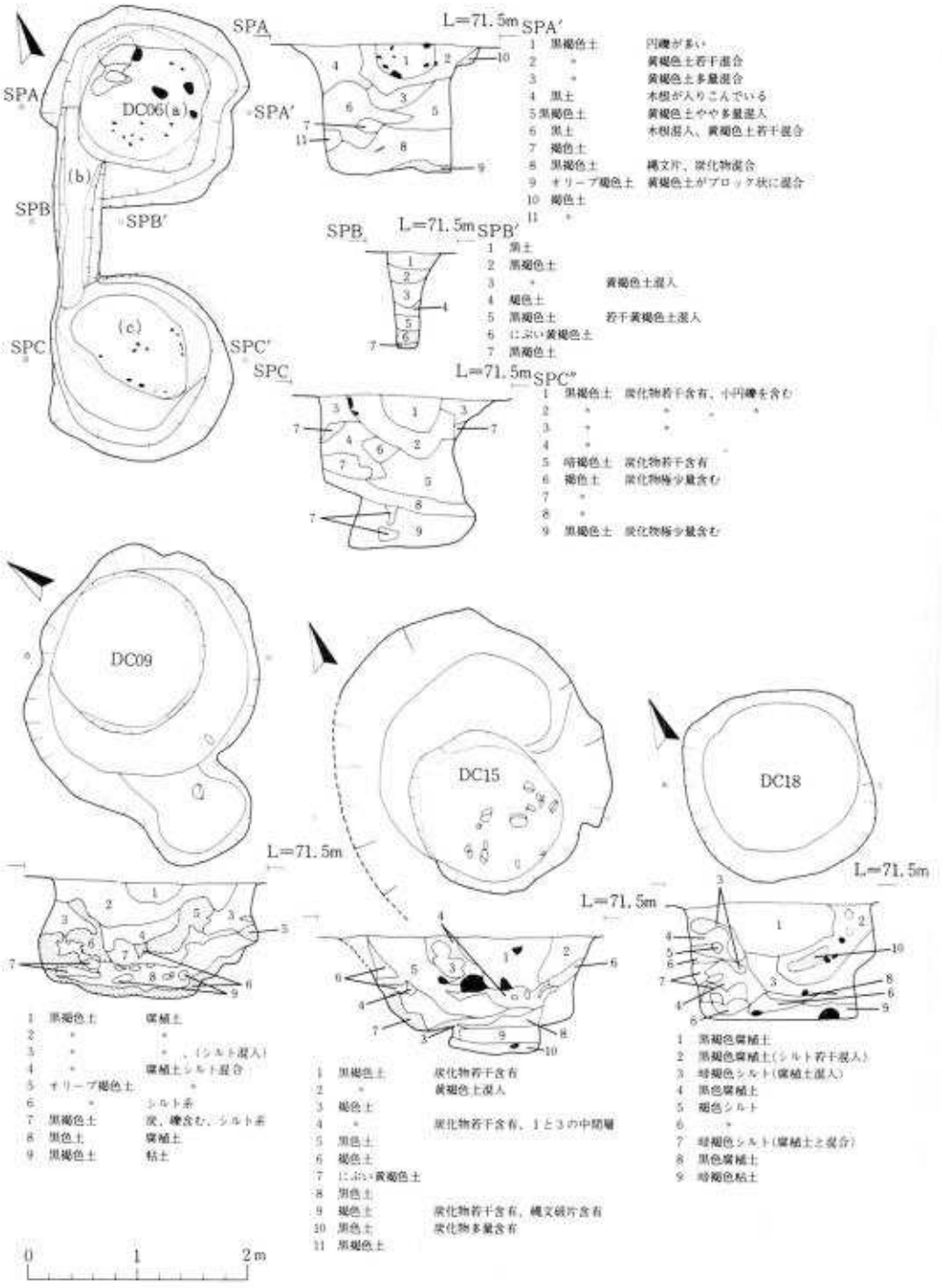
遺物は縄文土器９点であるが、細片のため時期比定はできない。

⑭ DC15ピット（第34図）

DD15住居跡の北壁に切られた形で検出された。開口部がかなり大きく、底面には径90cm、深さ20cmの掘り込みがある。大小２つのピットの複合とも考えられるが、堆積土からは、はっきりしない。堆積土は11層に区分され、底面のピット状を除きブロック状をなしており、人為



第33図　大型ピット平断面図（1/60）



第34図　大型ピット平断面図(1/60)

堆積と見られる。下層には炭化物や土器片が多い。遺物は縄文土器15点（口縁３、体部11、底部１）と石器の剥片６点である。土器の施文には磨消縄文のある後期的な破片が多く、中には中期大木8b式のものも１点混入する。出土層は９層である。

⑮ **DC18ピット**（第34図）

堆積土は10層に区分され、下層はブロック状、上層も単一層が厚く堆積しており、人為的な埋め戻しと考えられる。下層にシルトの混入がみられる。遺物は縄文土器体部７点で、いずれも磨滅が著しく、時期比定はできない。出土層位は不明である。

⑯ **DC21複合ピット**（第35図）

２つのピットが溝状ピットで連なっている。北からａ、ｂ、ｃとする。切り合いはｂとｃはSPC～C′の断面からbの方が後になるらしい。ａピットは三葉形の不整形な円形プランで、複合の可能性がある。広いビーカー状の断面を呈し、中央に径130㎝、深さ30㎝のピット状の掘り込みとさらに径30㎝、深さ10㎝の小ピットがその底部にある。最深部までの深さは95㎝である。堆積土は、SPA′、SbB～B′の断面図から、水平堆積を示し自然堆積と見られる。ｄピットは溝状を呈し、上場最大径100㎝、下場65㎝、深さ60㎝である。堆積土は水平堆積をなしており自然堆積と見られる。ｃピットは円形プランで、底部に広がるフラスコ状の断面形を呈し、開口部径120㎝、深さ100㎝である。堆積土はほぼレンズ状となり自然堆積と見られる。それぞれのピットに出土した遺物はない。

⑰ **DC24ピット**（第35図）

堆積土は８層に区分され、上層はレンズ状をなしているが、下半はブロック状となっている。底面に円礫が多い。遺物は縄文土器体部細片１点、太い隆線の施文があり中期中葉と思われる。出土層位は不明である。

⑱ **DC27ピット**（第35図）

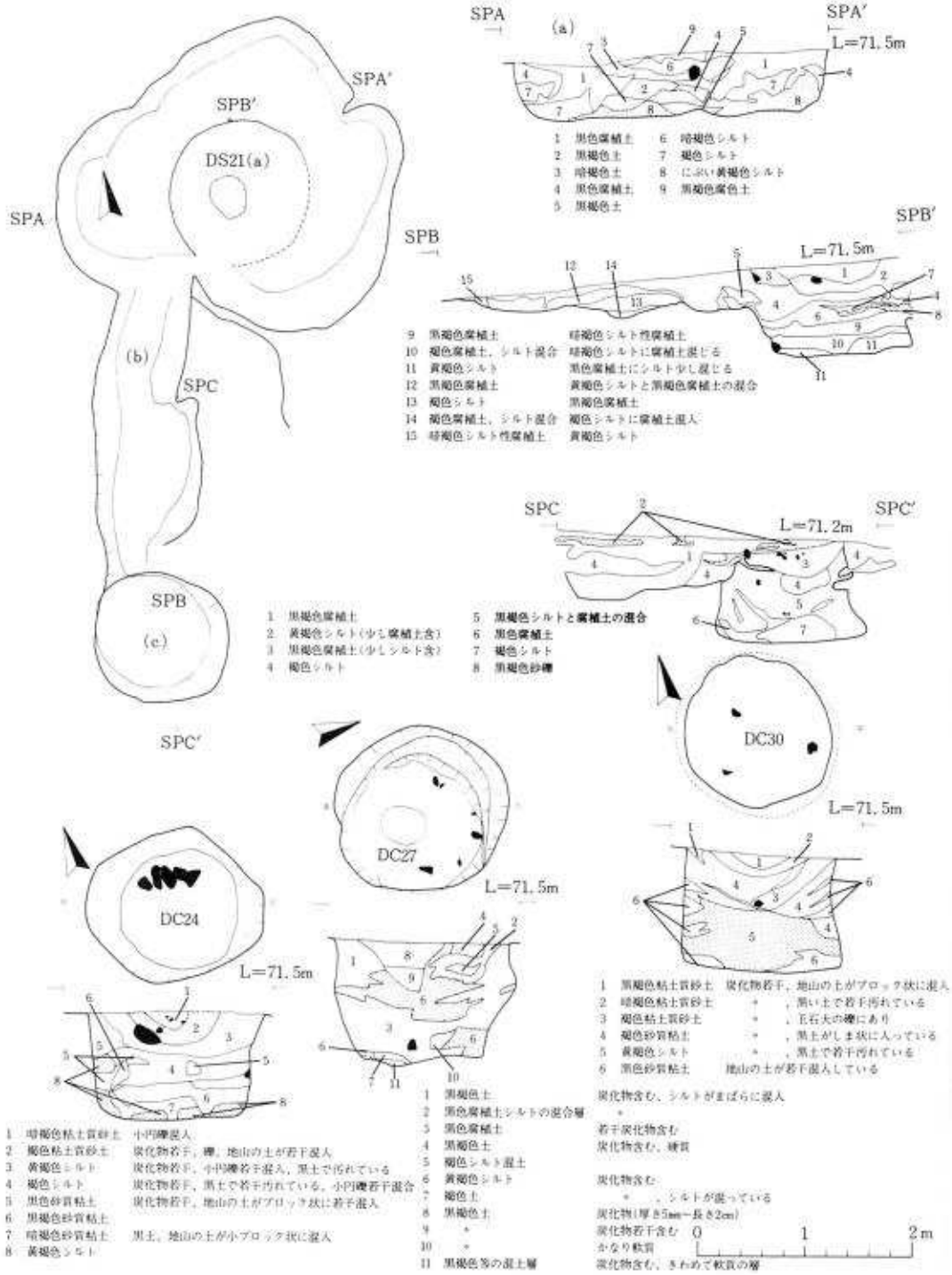
底面に径40㎝、深さ10㎝程の浅い凹みがある。堆積土は11層に区分され、黒褐色土が厚く堆積し、黄褐色土も混入する。人為堆積と見られる。全体に炭が混入している。遺物の出土はない。

⑲ **DC30ピット**（第35図）

堆積土は６層に区分され、下層は黄褐色土が多量に落ち込むがほぼレンズ状となっており自然堆積と見られる。全体に炭化物を含む。遺物は縄文土器片１点出土しているが紛失のため詳細は不明である。

⑳ **DC50ピット**（第36図）

堆積土は３層に区分され、黄褐色土の大きなブロックと黒褐色土の様相から人為的な埋め戻しと考えられる。遺物は縄文土器体部14点、いずれも地文のみで磨滅があり時期は比定できな



第35図　大型ピット平断面図(1/60)

い。出土層位は不明である。

⑫① **DC56ピット**（第36）

堆積土は6層に区分され、下層にブロック土をもち、中層は暗褐色土が多量に入っており人為的な堆積と見られる。遺物の出土はない。

⑫② **DC59ピット**（第36図）

堆積土は5層に区分され、下層部が堆積後、上層が自然堆積したものと見られる。シルトとの混土が大部分を占める。遺物の出土はない。

⑫③ **DD03No.1ピット**（第37図）

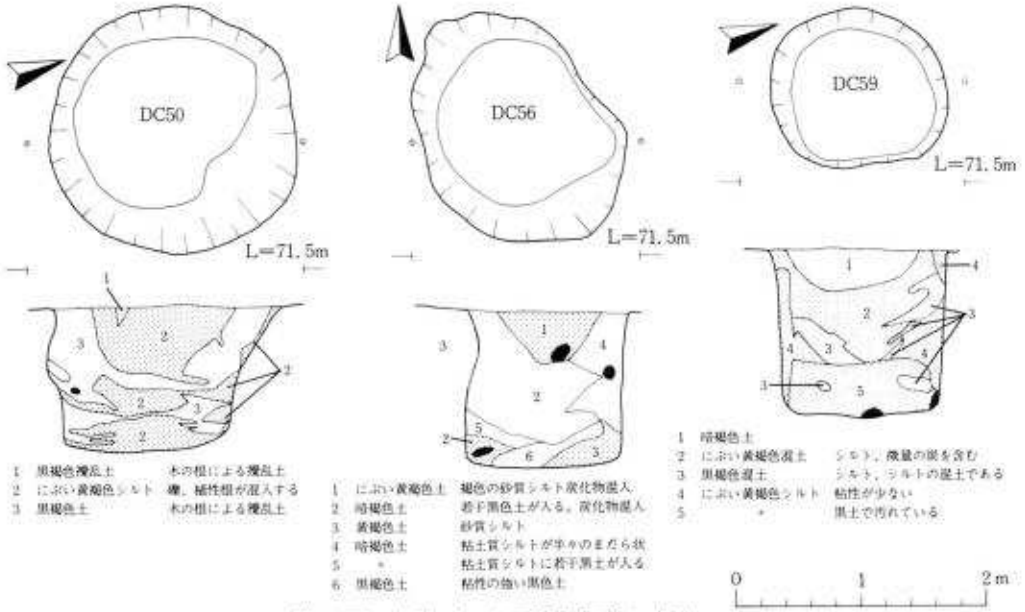
隅丸な長方形のプランで、壁にくびれを持つ細長い断面形を呈している。壁に凹凸があり、底部に広がりを示す部分もある。堆積土は5層に区分され、レンズ状を成しており自然堆積と見られる。遺物の出土はない。

⑫④ **DD03No.2ピット**（第37図）

壁の崩落が著しいため北側のプランが一部不明となっているが、ほぼ円形プランと推定される。堆積土は11層に区分され、下層がブロック状に堆積後、上層はレンズ状に自然堆積したと見られる。全体に礫と炭化物が含まれる。5～10層は壁の崩落土であろう。遺物の出土はない。

⑫⑤ **DD12ピット**（第37図）

このピットはDC12住居跡とDD15住居跡の接する中央にかかって検出された。堆積土は10層に区分され、下層に黄褐色土の大きなブロックが堆積後、中、上層はレンズ状に自然堆積し

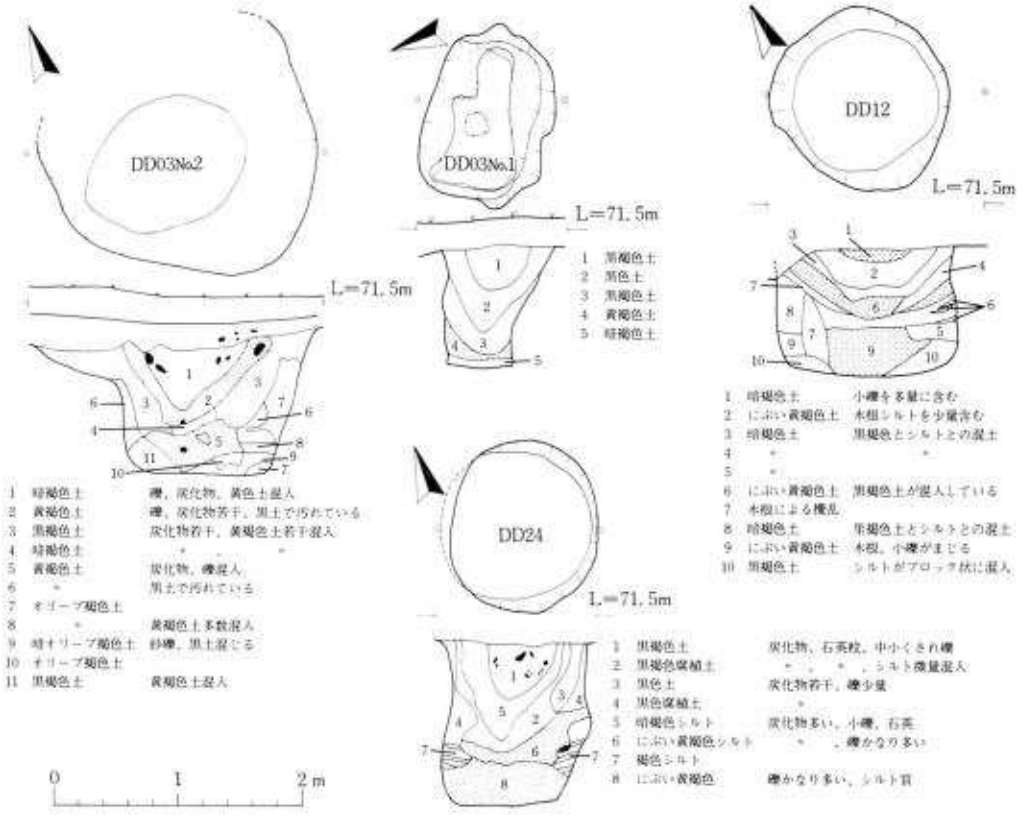


第36図　大型ピット平断面図（1/60）

たと見られる。上層に小礫が多い。遺物は縄文土器底部1個体である。縦の撚糸文の地文だけで、おそらく後期初頭のものと思われる。出土層位は不明である。

⑫⑨ DD18複合ピット（第38図）

3つのピットが連なっているが、その先後関係については、断面から明確にはできなかった。図のようにａ、ｂ、ｃピットとする。ａピットは円形のプランでビーカー形の断面形を呈し、開口部径約200㎝、深さ90㎝である。堆積土はＳＰＡ′～Ａ′によると9層に区分され、自然堆積と見られる。ｂピットは円形プランで、底部にやや広がるフラスコ状の断面形を呈し、開口部径180㎝、深さ80㎝である。堆積土はＳＰＣ～Ｃ′の断面図によると7層に区分され、レンズ状をなし自然堆積と見られ全体に礫を含んでいる。ｃピットも円形プランで、断面ビーカー状を呈している。開口部径130㎝、深さ70㎝である。堆積土はＳＰＣ～Ｃ′によるとレンズ状をなしており自然堆積と見られる。遺物はＳＰｂ～ｂ′のセクションベルト中から縄文体部4点出土している。地文には縦の撚糸文が施文されている。層位は不明である。



第37図　大型ピット平断面図

⑰ **DD24ピット**（第37図）

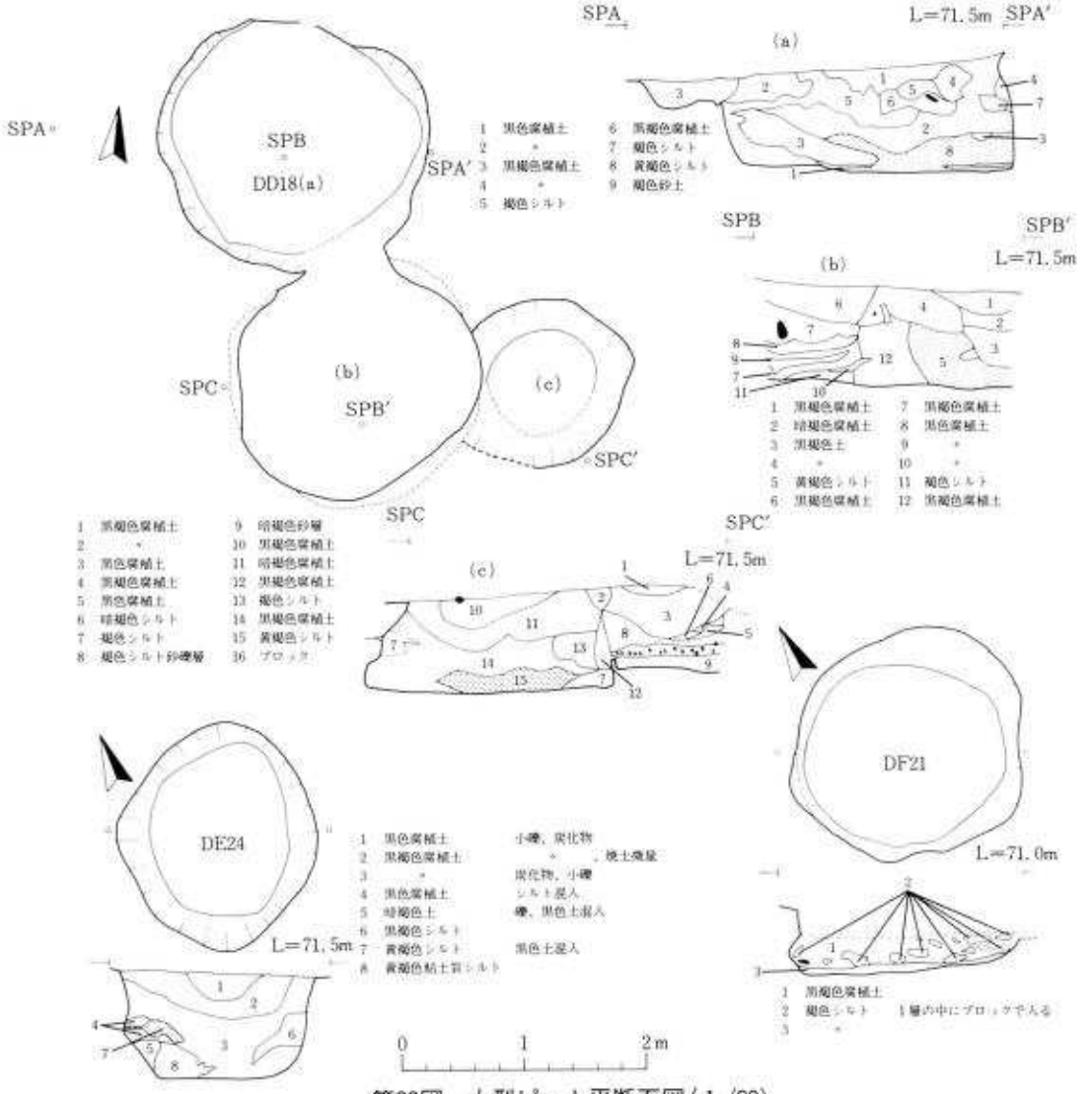
堆積土は８層に区分され、下層部が堆積後上層がレンズ状に自然堆積していったものと見られる。全体に炭化物、礫が含まれている。遺物の出土はない。

⑱ **DE24ピット**（第38図）

堆積土は８層に区分され、黒褐色層が厚く堆積しているが上層はレンズ状を成している。全体に炭化物、小礫が含まれる。遺物の出土はない。

⑲ **DF21ピット**（第38図）

検出までかなり削平されており、実際の深さは110cm程あったと推定される。堆積土は３層



第38図　大型ピット平断面図（1/60）

に区分される。遺物の出土はない。

……大型ピット一覧表……

これまで述べてきた大型ピットの平面形、断面形、規模、堆積状況、含有物、遺物の一覧表である。断面や堆積土の類型は後述の考察部分に詳述している。含有物の欄は、上とか上下、全と記されているのは堆積土中のそれぞれ上層、上層と下層、全体に含まれていることをあらわしており、◎は多い、○は含まれる、△は少量含まれる、×は含まれないということである。

番号	ピット名	平面形	断面	開口部径	底径	深さ	堆積	含有物				遺物	出土層位
								礫	小礫	炭	焼土		
				cm	cm	cm							
①	CA21 No.1	円	A	210×185	150×130	140	a_1	中下◎	上○ 全○	×	×	縄文(3)(後期初)	不
②	CA24	不 整	D	150×110	120	85	a_1	×	全○	上中○	上中○	縄文21(後期初)	上
③	CB06	円	E	170	155	125	a_1	中◎ 上中○	全◎ 上中○	×	×	縄文8(不)	不
④	CB15	円	B	140	125	100	a_1			×	×	縄文29(後期初)、土製品1	不
⑤	CC09	円	B	160×135	130×120	120	a_2	×	上下◎	上△	×	な し	—
⑥	CC15	不 円	B	130×120	105×100	75	a_1	×	上△	×	×	縄文20(後期初)	不
⑦	CC21	不 整	—	200×190	—	120	—	—	—	—	—	——	—
⑧	CC50	不 円	E	140	135	155	a_2	×	上△	中○	×	な し	—
⑨	CD06	円	B	190	150	135	a_2	×	上△	上△	×	小型土器1(後期初)	上
⑩	CD09	不 円	—	170×150	—	135	—	—	—	—	—	——	—
⑪	CD12	不 円	—	180×160	—	105	—	—	—	—	—	——	—
⑫	CD18	楕 円	A	165×140	110×105	150	d_1	×	全○ 上○	上△ 中○	×	縄文7(中～後)	上
⑬	CD53	円	B	160×140	110×105	100	a_2	×			×	縄文7(後期初)	上
⑭	CE06複合	不 楕	—	460×350	—	120	—	—	—	—	—	縄文70(万～後)、土師器3	不
⑮	CE09	円	—	135	—	100	—	—	—	—	—	——	—
⑯	CE15	円	C	145	115	95	a_1	下◎	上△	×	×	縄文9(不)	不
⑰	CE18	不 円	C	150×140	120	120	a_2	×	上中△	×	×	縄文5、小型土器1(不)	不
⑱	CE30	不 円	L	200	175	80	a_1	下○	下○	上△	上△	縄文52、復元個体2(中～後)	不
⑲	CE50複合 a	円	L	235×230	200×195	(90) 110	c_1	上○	×	上○	×	縄文11(後期初)	不
	〃 b	—	—	—	—	60	c_1	—	—	—	—	——	—
	〃 c	円	B	140	125	120	a_2	×	全△ 上○	全△ 中下△	全△	縄文2(不)	不
⑳	CE56	円	A	160×150	110×100	120	d_1	×			×	縄文7(不)	不
㉑	CE59	不 楕	B	200×170	130×105	145	a_2	×	上下○	中△	×	な し	—
㉒	CE71	円	C	140×125	110	110	a_1	上○	×	×	×	な し	—
㉓	CE77	不 円	L	210×200	220	(65) 85	d_2	×	上中×	×	×	な し	—
㉔	CF03	円	H	125	135	125	b_1	上○	×	上△	×	縄文12(不)	不
㉕	CF18複合 a	円	H	120	135	90	b_1	×	上△	上△	上△	縄文41(後期初)、土師器2	不
㉖	CF21	円	E	110	125	105	d_1	上△	上△	上△	×	縄文24(後期初)、土師器2	不

第4表

番号	ピット名	平面形	断面	開口部径	底径	深さ	堆積	含有物				遺物	出土層位
								礫	小礫	炭	焼土		
				cm	cm	cm							
27	CF24	不円	B	130×125	105	85	d_1	全△	×	×	×	縄文2(不)	中
28	CF30	円	D	150×130	130	90	a_2	×	全△	全△	×	な し	—
29	CF71	円	A	200	130	115	d_1	×	上◎	上△	×	な し	—
30	CF74	円	C	165×160	130×120	105	d_1	×	全○	×	×	な し	—
31	CG03複合 a	不円	L	190	140	(80) 95	a_1	×	中◎	×	×	縄文16(うち1点中期)	不
	〃 b	—	—	——	——	70	c_1	×	上△	×	×	な し	—
	〃 c	不楕	L	230×200	200	(75) 125	c_1	×	上△	×	×	な し	—
32	CG06複合 a	不楕	L	300×250	270×220	(65) 95	a_1	上○	上○	上△	×	縄文32(中期)	不
	〃 b	円	H	100	115	125	c_2	×	上△	上△	×	な し	—
33	CG21	円	D	135	120	105	a_1	全○	×	上△	×	縄文7(不)	上下
34	CG24	円	C	105	100	95	a_1	下△	×	上△	×	縄文10(中期)	不
35	CG27	近方形	C	150×140	120	105	a_2	×	×	上○	×	縄文14(後期初)	不
36	CG30	不円	H	130×120	140	90	d_2	×	×	×	×	な し	—
37	CG74	不円	—	165×145	105	160	—	—	—	—	—	——	—
38	CG77 No. 1		—	150	120	110	—	—	—	—	—	——	—
39	CG77 No. 2	不円	—	130×115	105× 85	110	—	—	—	—	—	——	—
40	CH03	近方形	A	130	90	90	b	×	上○	×	×	な し	—
41	CH06	楕円	D	245×205	220×200	105	c_1	×	上◎	×	×	縄文多数、復元個体2含(中～後期)	上
42	CH09	円	A	160	100	120	a_2	中○	上◎	×	×	な し	—
43	CH12 No. 1	円	C	120	105	150	a_2	下○	上○	下△	×	縄文24(後期初)	不
44	CH12 No. 2	円	E	90	90	90	a_1	×	下○	上下○	上○	縄文65復元個体4含(後期初)	全
45	CH15	不楕	C	190×150	135	120	e_1	上中○	×	上中○	上中○	縄文163(中～後期)	上中
46	CH18 No. 1	不楕	G	145×115	155	40	a_1	×	×	×	×	縄文23	不
47	CH18 No. 2	不円	E	100	105	125	e_1	全△	×	全△	全△	縄文16復元個体2含(後期初)	全
48	CH24複合 a	不円	J	(130)	160	90	d_1	×	×	上○	×	な し	—
	〃 b	不円	D	110	110	100	a_1	上中○	×	上中○	×	縄文17(中期)	上
49	CH27	近方形	G	140×125	120	55	d_1	×	×	×	×	な し	—
50	CH50 No. 1	不円	E	170×160	175×150	120	d_1	×	×	上○	×	縄文復元個体2(後期初)	下
51	CH50 No. 2 複合 a	(円)	—	(170)	——	80	—	—	—	—	—	縄文5(不)	不
	〃 b	(円)	—	(170)	——	120	—	—	—	—	—		不
	〃 c	円	C	170	155	80	d_2	×	×	中△	×	な し	—
52	CH71複合 a	(円)	—	(130)	——	50	—	—	—	—	—	——	—
	〃 b	円	C	200	140	135	d_1	×	上△	上△	×	な し	—
53	CH74	円	—	(175×165)	160	(100) 55	—	(中下) ◎	×	(中下) △	×	な し	—
54	CH77	不楕	L	280×230	185	135	c_1	×	×	×	×	縄文1(不)	上
55	CI03	円	J	130	145	115	c_2	×	全○	全○	×	な し	—
56	CI06	不円	B	140×135	105	90	c_1	上○	×	×	×	縄文38(後期初?)	不
57	CI09	円	A	135	80	130	a_1	上中◎	上中◎	×	×	縄文4(後期初)	上中
58	CI15	不楕	他	400×220	——	100	c_1	×	×	×	×	石器1、縄文77復元個体3含(後期初)	上中

第5表

番号	ピット名	平面形	断面	開口部径	底径	深さ	堆積	含有物				遺物	出土層位
								礫	小礫	炭	焼土		
59	CJ 18 No.2 複合 a	(円)	(L)	(200)	——	95	(c_1)	×	×	上下△	上○	〉縄文90，石錘1（中～後）	上
	〃 b	(楕円)	(D)	(250×150)	——	85	(e_1)	×	×	上下△	上○		
60	CJ 21	円	D	160×155	155	110	a_1	×	上中△	中△	×	縄文2（不）	上
61	CJ 50	円	C	125	110	90	a_1	×	上△	×	×	縄文1個体 1/4（後期初）	不
62	CJ 56 複合 a	—	—	——	——	(80)	—	—	—	—	—	——	—
	〃 b	—	—	——	——	(100)	—	—	—	—	—	——	—
	〃 c	—	—	——	——	(70)	—	—	—	—	—	——	—
	〃 d	不 楕	D	135×115	125	(150) 115	c_2	上下△	×	中△	×	な し	—
63	CJ 59	楕	L	290×250	145	135	a_1	×	全△	全△	×	縄文3（不），土師器1	不
64	CJ 62 No.1	円	B	150	130	120	a_1	×	上中△	中△	×	な し	—
65	CJ 62 No.2	楕 円	L	300×270	150	125	a_2	上◎	×	上○	×	縄文2（中期）	不
66	CJ 74	楕 円	E	235×210	190×150	130	e_1	×	×	中△	×	縄文1（中期），土師器8	不
67	CJ 03 No.1	円	C	150	130	110	a_1	×	上○	上○	×	縄文21復元個体3含（後期初）	中下
68	CJ 03 No.2	円	E	160	170	150	a_1	×	上中○	×	×	な し	—
69	CJ 06	不 円	B	150	115	105	a_1	中○	×	全○	×	縄文2（後期初？）	不
70	CJ 09	不 楕	H	190×150	125	110	a_1	上中○	×	全◎	×	な し	—
71	CJ 15	円	—	105	——	110	—	—	—	—	—	縄文10（後期初）	不
72	CJ 18	不 円	—	180×150	——	100	—	—	—	—	—	縄文8（不），石錘1	不
73	CJ 24	不 円	I	90	130	65	a_1	×	×	上△	×	な し	—
74	CJ 50 No.1	円	C	140	130	100	d_1	×	上○	上中△	×	縄文1（不）	上
75	CJ 50 No.2	不 楕	E	110× 95	105	65	d_2	下◎	×	全△	×	石錘1	上
76	CJ 59	円	D	120	120	95	a_1	×	上中○	上中△	×	耳栓2	下
77	CJ 62	円	C	180	155	155	a_1	中◎	×	×	×	縄文底部1個体（不）	上
78	CJ 65	楕 円	A	230×190	160	125	c_1	上△	×	上△	×	縄文15（不）	不
79	CJ 68	楕 円	C	290×220	180×170	85	e_1	×	×	×	×	な し	—
80	CJ 77	円	—	180	——	145	—	—	—	—	—	——	—
81	DA 03 No.2	円	D	165	145	105	a_1	下○	上◎	全○	×	な し	—
82	DA 06	不 楕	H	140×110	130	105	c_1	×	×	下◎	×	な し	—
83	DA 09	円	E	130	100	125	d_2	×	×	全○	×	な し	—
84	DA 12	円	H	85	100	110	b	×	×	上◎	上△	縄文25（後期初），土師器4	上
85	DA 15 複合 a	円	L	160	(110) 160	(45) 90	(B) C_1	×	×	全○	×	縄文14（不）	不
	〃 b	円	—	125	——	75	—	—	—	—	—	縄文1（不），土師器4	不
86	DA 18	円	L	225	190	(110) 80	d_1	上○	×	上中○	×	縄文38（後期初？）	不
87	DA 21 No.1 複合 a	(円)	(J) L	(115)	(150)	60	(d_2)	×	×	上△	×	〉縄文2（不）	不
	〃 b	(円)	(C)	(140)	(140)	100	(e_2)	×	×	上△	×		
88	DA 21 No.2	円	F	100	100	50	d_1	×	×	全◎	下○	縄文2（不）	下
89	DA 30	(円)	—	(170)	160	80	(d_1)	×	×	全△	×	な し	—
90	DA 50	円	F	190	180	100	a_1	下○	×	×	×	な し	—
91	DA 53	不 円	D	150×145	125	105	e_1	×	×	上△	×	な し	—

第6表

番号	ピット名	平面形	断面	開口部径	底径	深さ	堆積	含有物				遺物	出土層位
								礫	小礫	炭	焼土		
				cm	cm	cm							
92	DA56 No.1	楕円	J	170×125	155×135	60	a_1	×	×	上△	×	縄文5(不)	不
93	DA56 No.2	不円	D	145	135	115	d_1	×	上△	×	×	な し	—
94	DA59複合a	円	—	(150)	——	120	—	—	—	—	—	縄文2(不)、浪形器1	不
95	DA62	不円	K	275×250	130×115	110	a_3	×	×	×	×	な し	—
96	DA65	楕円	—	250×220	165	(75)	—	—	—	—	—	——	—
97	DA68	不円	—	230×220	170×160	80	—	—	—	—	—	——	—
98	DB03 No.1	不円	L	200×180	105	115	a_3	×	上△	×	×	な し	—
99	DB03 No.2 複合a	円	C	150	150	120	d_1	×	×	上中△	×	縄文12(不)	不
	〃 b	楕円	—	——	——	80	—	—	—	—	—	——	—
	〃 c	円	C	170	120	115	a_3	中○	上△	上△	×	縄文1個体(後期初)	下
100	DB06	円	H	130	120	125	b	×	×	全○	上△	縄文42(後期初)、剥片2	上
101	DB09	不楕	K	220×185	105×100	100	e_1	下△	×	全○	全○	縄文1個体1/4(不)	不
102	DB12複合a	不円	L	250	150	130	c_3	×	下◎	上下○	×	縄文14(後期初)	不
	〃 b	不円	B	220×190	150	115	c_3	×	下◎	下○	×	縄文19(不)	不
103	DB15	円	—	90	——	75	—	—	—	—	—	——	—
104	DB18	楕円	L	365×230	245×170	(115) 105	a_4	×	上△	上中△	×	縄文6(後期初)	不
105	DB24複合a	(円)	B	170	125	100	c_2	×	上△	全△	×	縄文1個体他数点(後期初)	上下
	〃 b	(円)	C	90	120	40	d_3	×	×	全△	×	——	—
106	DB27	不円	E	180×160	150	95	d_3	×	×	全△	×	な し	—
107	DB50	円	B	110	75	80	a_1	×	×	×	×	な し	—
108	DB53	近方形	D	155×140	135	100	a_3	×	×	×	×	な し	—
109	DB59	不楕	E	190×145	120	110	a_2	×	×	上△	×	縄文4(不)、石匙1、土師器4	不
110	DB65 No.1	円	—	225×220	——	(120) 80	—	—	—	—	—	な し	—
111	DB65 No.2	円	—	210	——	120	—	—	—	—	—	——	—
112	DC06複合a	不円	C	150	110	115	d_3	×	上◎	上中△	×	——	—
	〃 b	—	—	——	——	90	—	—	—	—	—	——	—
	〃 c	不円	D	160	110	135	d_3	×	上○	全△	×	な し	—
113	DC09	円	L	200	(150)	100	d_1	×	×	上中○	×	縄文9(不)	不
114	DC15	不円	L	250	150	105	d_3	全○	×	下◎	×	縄文15(中～後期)	下
115	DC18	円	C	170	140	100	e_1	下○	上△	×	×	縄文7(不)	不
116	DC21複合a	不円	L	300×270	——	95	—	上△	×	上△	×	な し	—
	〃 b	—	—	——	——	60	—	—	—	—	—	——	—
	〃 c	円	—	120	140	100	—	×	×	×	×	な し	—
117	DC24	不楕	B	165×140	135	100	a_3	下○	上中△	上中△	×	縄文1(不)	不
118	DC27	円	A	160×150	125	115	d_2	下○	×	全○	×	な し	—
119	DC30	円	D	135	150	105	a_3	中△	×	全△	×	縄文1(不)	上
120	DC50	円	A	195	150	115	e_1	全△	×	×	×	縄文14(不)	不
121	DC56	不楕	C	205×145	140×120	130	e_1	×	×	上中△	×	な し	—
122	DC59	不円	B	140	125	130	a_3	×	×	上△	×	な し	—

第7表

番号	ピット名	平面形	断面	開口部径	底径	深さ	堆積	含有物				遺物	出土層位
								礫	小礫	炭	焼土		
㉑	DD03 No.1	不整	—	130× 95	——	90	a_1	× 全○	×	中△ 全○	×	なし	—
㉒	DD03 No.2	(円)	A	(220×220)	115	120	a_1		×		×	なし	—
㉓	DD12	円	C	140	140	110	a_2	×	上◎ 全○	×	×	縄文底部1(不)	不
㉔	DD18複合a	円	C	(200)	200	90	c_2	×		全○	×	——	—
	〃 b	円	C	(180)	200	80	c_1	×	全○	×	×	縄文4(不)	不
	〃 c	円	—	130	——	70	—	—	—	—	—	——	—
㉕	DD24	円	E	120	100	130	a_1	全○	×	全○	×	なし	—
㉖	DE24	楕円	B	185×160	110	85	e_1	×	全○	全○	上△	なし	—
㉗	DF21	円	—	170	——	(110)	—	—	—	—	—	——	—

第8表

(4)その他のピット類（第39図）

平面形や断面形、深さ等規模において貯蔵状ピット類とは異なっている小ピットや溝状ピットをまとめた。個々のピットの性格は不明である。構築時期も不明なものが多い。

① **BJ21ピット**　円形プランで断面ビーカー状を呈している。規模は開口部径45cm、深さ40cmである。堆積土は6層に区分され、自然堆積と見られる。黒褐色土が大部分で上層に若干炭化物を含む。遺物の出土はなかった。

② **CA21 No.2 ピット**　不整な円形プランで、底部にやや広がりをもつフラスコ状近似の断面形を呈している。開口部80×75cm、深さ30cmである。堆積土は3層に区分され、黄褐色土が黒褐色土にブロック状に入っており、人為堆積かと思われる。どの層にも焼土が含まれている。遺物は底面から縄文土器口縁部1点出土しているが、地文のみで時期は不明である。

③ **CA21 No.3 ピット**　隅丸方形に近いプランで、断面は浅いビーカー状を呈している。開口部50×45cm、深さ17cmである。堆積土は黒褐色土1層だけである。遺物はない。

④ **CB18ピット**　不整な円形プランで、浅いバケツ状の断面を呈している。堆積土は2層に区分され、黒褐色土の中にやや色のうすい黒褐色土がブロック状に入っている。遺物の出土はない。

⑤ **CG18 No.1 と No.2 ピット**　この2つの小ピットは50cmだけ離れて、近接して検出した。どちらもほぼ円形のプランで、断面皿状に浅いピットである。ともに開口部径65cm、深さは10cmである。堆積土は黒色土であるがNo.1ピットには黄褐色土が混じっている。遺物の出土はない。

⑥ **CG53ピット**　長楕円形プランで小ピットが2つ並んだような断面形を呈している。開口部150×70cm、深さ30cm、最深部40cmである。堆積土はレンズ状をなし自然堆積と見られる。下層は黒褐色土とシルトとの混土である。出土した遺物はない。

⑦ **CH30ピット**　円形プランで浅いビーカー状の断面形を呈している。開口部径65cm、深さ

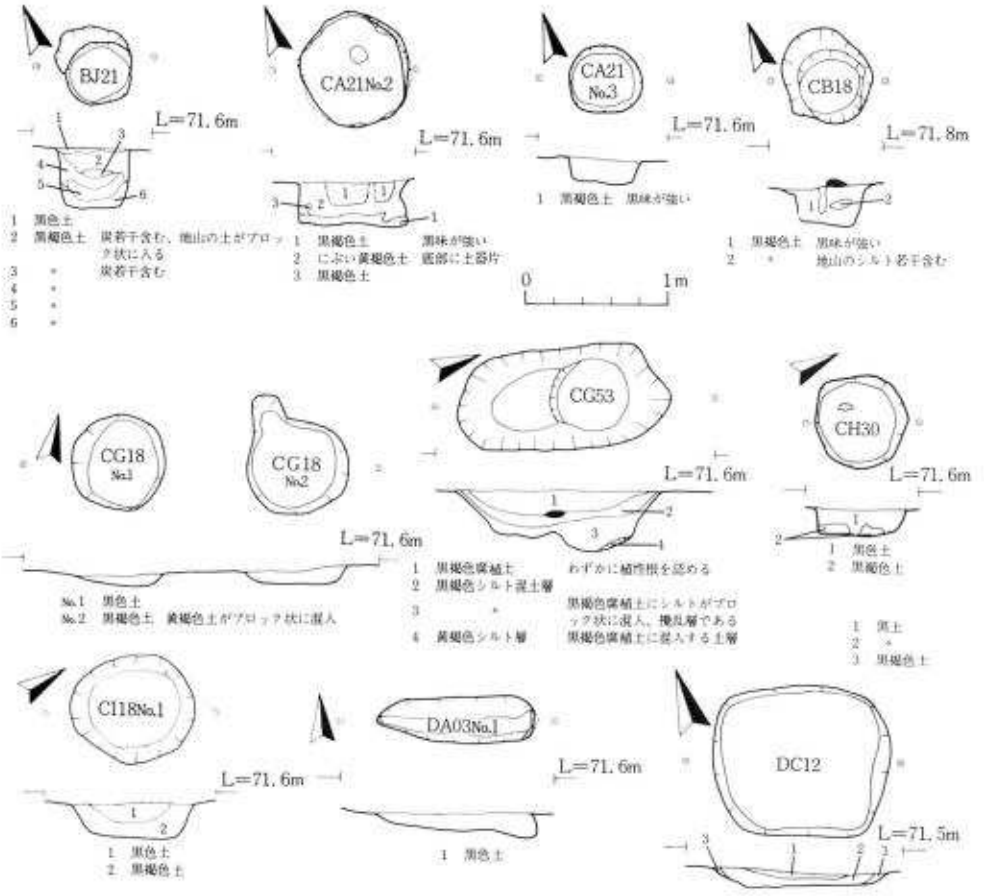
20cmである。堆積土は2層に区分され、黒色と黒褐色土である。出土遺物はない。

⑧ **CI18No.1ピット**　楕円形プランで浅いバケツ状の断面形を呈している。開口部90×75cm、深さ25cmである。堆積土は2層に区分され、レンズ状をなしており自然堆積と見られる。遺物の出土はない。

⑨ **DA03ピット**　長楕円プランで、底面斜めに落ち込む断面形を呈し、開口部110×35cm、最深部18cmである。堆積土は黒褐色土の単一層である。出土遺物はない。

⑩ **DC12ピット**　隅丸方形プランで、浅い皿状の断面形を呈している。開口部120×105cm、深さはわずか10cmである。堆積土は3層に区分され、レンズ状をなしており自然堆積と見られる。遺物の出土はない。

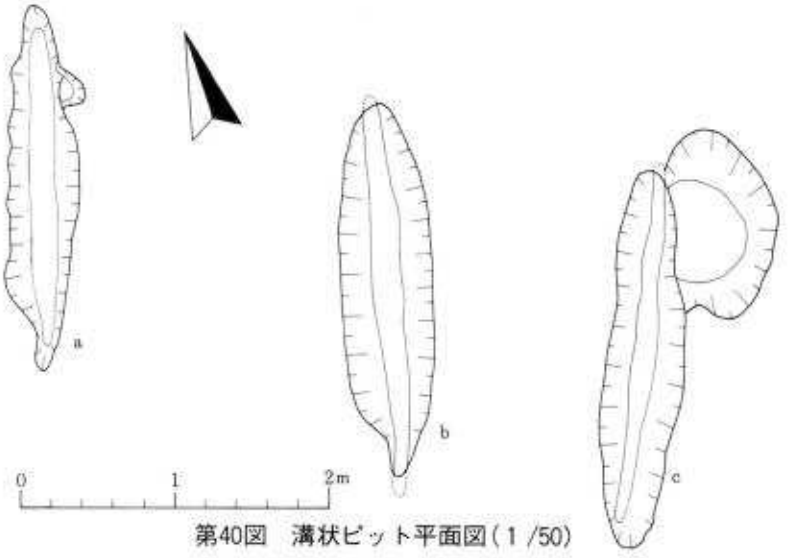
以上図示された小ピット類の他に既述の大形ピットに近接したものや、図面化されないものが数基数えられる。それらについては詳細が不明なので説明をはぶいた。



第39図　その他のピット類(1/50)

⑪**溝状ピットａ～ｃ**（第40図）

ＢＦ56住居跡の北東３ｍ地点にａ～ｃと３基並んで検出された。ａピットは開口部235×45cm、ｂピットは開口部250×60cm、深さ90cm、ｃピットは開口部245×50cm、深さ70cmのそれぞれ規模をもつ。ｃピットの北壁には幅70cm、深さ25cm程の崩落部と見られる部分がある。断面図作成できなかったため、堆積土については不明である。出土遺物はなく、又、性格づけにつながる痕跡は見い出せなかったが、３基並列して存在したことは注目される。他遺跡の分析によれば陥し穴説が有力である。



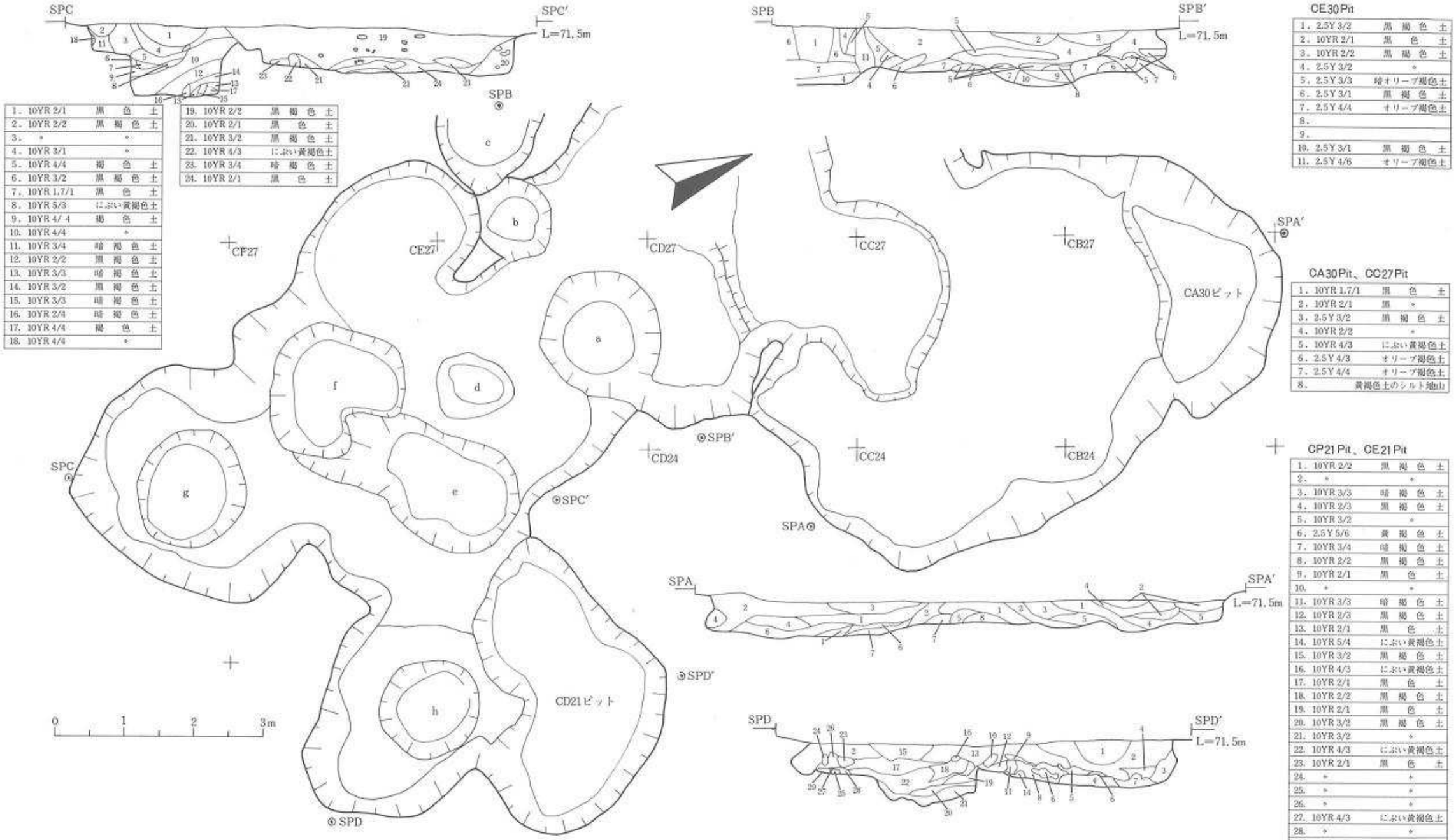
第40図　溝状ピット平面図（１/50）

(5)落ち込み遺構（第41図～第49図）

大型ピットを含む不整形な落ち込みが、Ｃ区西側とＢ～Ｃ区の東側にかけて広がっていた。調査時点では住居跡や大ピット等数多く切り合っているものと考えられ、精査したがその明確な把握は困難であった。落ち込みの底面やピット中から縄文土器土製品等が出土したことから、その形成時期は縄文時代であろうと推定される。Ｃ区西側のものを落ち込み遺構Ａとし、Ｂ～Ｃ区東側を落ち込み遺構Ｂとして記述する。

〔落ち込み遺構Ａ〕（第41図）（図版８）

ＣＡグリッド～ＣＦグリッドの西側に連なって検出された。北半部と南部に分けてみると、北半部には貯蔵穴状ピットがなく不整形な落ち込みがとらえられるだけである。断面図ＳＰＡ～ＳＰＡ′の観察からピット又は住居跡等なんらかの遺構の切り合いはないか検討したが明確にはできなかった。堆積土はレンズ状や流れ込みの様相を呈しており、自然に堆没したものと思われる。壁の状況から、約長軸６ｍ程の円形住居跡の存在するスペースはあるが、床面や炉跡、



CE30 Pit		
1.	2.5Y 3/2	黒褐色土
2.	10YR 2/1	黒色土
3.	10YR 2/2	黒褐色土
4.	2.5Y 3/2	〃
5.	2.5Y 3/3	暗オリーブ褐色土
6.	2.5Y 3/1	黒褐色土
7.	2.5Y 4/4	オリーブ褐色土
8.		
9.		
10.	2.5Y 3/1	黒褐色土
11.	2.5Y 4/6	オリーブ褐色土

CA30 Pit、CC27 Pit		
1.	10YR 1.7/1	黒色土
2.	10YR 2/1	黒 〃
3.	2.5Y 3/2	黒褐色土
4.	10YR 2/2	〃
5.	10YR 4/3	にぶい黄褐色土
6.	2.5Y 4/3	オリーブ褐色土
7.	2.5Y 4/4	オリーブ褐色土
8.		黄褐色土のシルト地山

CP21 Pit、CE21 Pit		
1.	10YR 2/2	黒褐色土
2.	〃	〃
3.	10YR 3/3	暗褐色土
4.	10YR 2/3	黒褐色土
5.	10YR 3/2	〃
6.	2.5Y 5/6	黄褐色土
7.	10YR 3/4	暗褐色土
8.	10YR 2/2	黒褐色土
9.	10YR 2/1	黒色土
10.	〃	〃
11.	10YR 3/3	暗褐色土
12.	10YR 2/3	黒褐色土
13.	10YR 2/1	黒色土
14.	10YR 5/4	にぶい黄褐色土
15.	10YR 3/2	黒褐色土
16.	10YR 4/3	にぶい黄褐色土
17.	10YR 2/1	黒色土
18.	10YR 2/2	黒褐色土
19.	10YR 2/1	黒色土
20.	10YR 3/2	黒褐色土
21.	10YR 3/2	〃
22.	10YR 4/3	にぶい黄褐色土
23.	10YR 2/1	黒色土
24.	〃	〃
25.	〃	〃
26.	〃	〃
27.	10YR 4/3	にぶい黄褐色土
28.	〃	〃
29.	10YR 4/2	灰褐色土

1.	10YR 2/1	黒色土
2.	10YR 2/2	黒褐色土
3.	〃	〃
4.	10YR 3/1	黒褐色土
5.	10YR 4/4	褐色土
6.	10YR 3/2	黒褐色土
7.	10YR 1.7/1	黒色土
8.	10YR 5/3	にぶい黄褐色土
9.	10YR 4/4	褐色土
10.	〃	〃
11.	10YR 3/4	暗褐色土
12.	10YR 2/2	黒褐色土
13.	10YR 3/3	暗褐色土
14.	10YR 3/2	黒褐色土
15.	10YR 3/3	暗褐色土
16.	10YR 2/4	暗褐色土
17.	10YR 4/4	褐色土
18.	10YR 4/4	〃

19.	10YR 2/2	黒褐色土
20.	10YR 2/1	黒色土
21.	10YR 3/2	黒褐色土
22.	10YR 4/3	にぶい黄褐色土
23.	10YR 3/4	暗褐色土
24.	10YR 2/1	黒色土

第41図　落ち込み遺構(A)平断面図(1 /60)

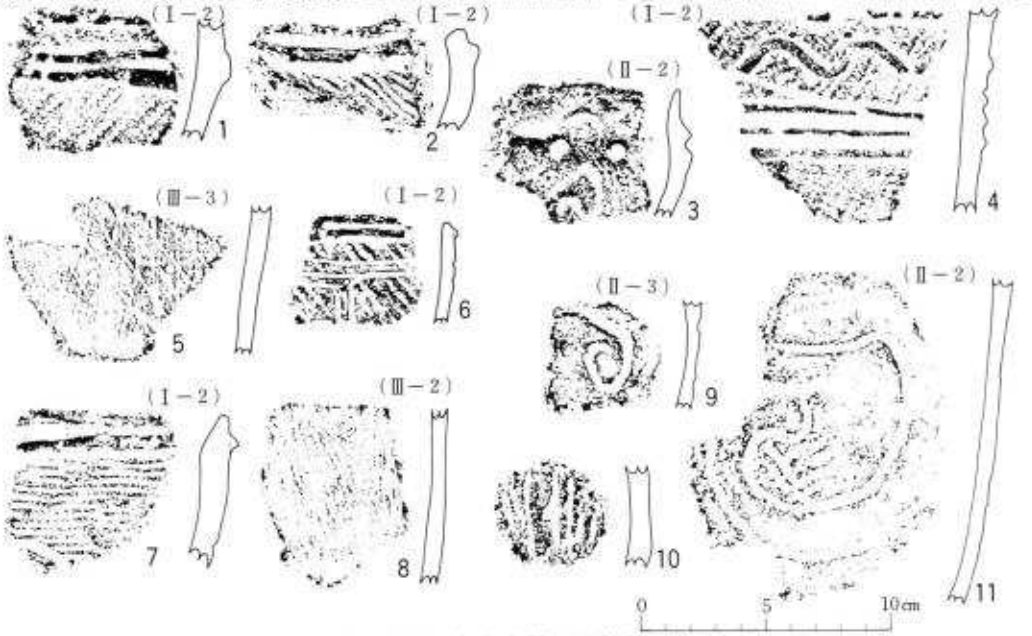
柱穴・炭化物焼土等は全く検出されなかったため、その可能性はうすいと見られる。北半部からの出土遺物は縄文土器56（口縁６、体部48、底部２）である。施文の明確なものはわずかで、中期（大木８式）と後期初頭のものが混在している。

南半部にはａ～ｈのような貯蔵穴状ピットが多く検出されている。断面図を追ってその切り合いを検討した。断面ＳＰＢ～ＳＰＢ′にかかるのはａとｃピットである。ｃピットの掘り込みは、11層を境として明確であるが、ａピットがどのような形で、いつ掘り込まれたかは判別しがたい。２層と４層の境（図中の太線部分）が、あるいはａピットの壁面となる可能性がある。いずれブロック状にシルト層が入っており、堆積の状況も複雑であるが、上層部は自然堆積と見られる。ｃピットの上層には炭化物や土器片が多い。

断面図ＳＰＣ～ＳＰＣ′にかかるのはｅとｇピットである。ｇピットが自然堆積で埋没した後にｅピット側の掘り込みがあったことが４層と19層の境の線（図中太線）で明確である。しかし、このｅピット側の掘り込みが東西に広がって住居跡となっていたものかどうかは不明である。ｄ、ｅ、ｆピットの上部付近にその住居跡があったとすれば長軸５ｍ以内のものと考えられるが、それを示すような柱穴や炉跡等は検出されていない。

断面図ＳＰＤ～ＳＰＤ′にかかるのはｈピットとＣＤ21ピットである。切り合いは明確でなく、堆積土の状況や土性に共通性があり、ほぼ同時期に埋没したと推測される。

南半部からの出土遺物は主にａ～ｈの各ピットに出土している。ｃピットの上層では中期の大木 8b 式の破片を含む縄文土器13（口縁２、体部11）、ｅピット堆積土中から後期初頭の縄文



第42図　落ち込み遺構Ａ出土土器と円盤状土製品(1)

土器153点（口縁9、体部140、底部4）と円盤状土製品（第42図）、gピットからは時期は不明の縄文土器23点（口縁3、体部17、底部3）、hとCD21ピットの埋積土から後期的な縄文土器41点（口縁3、体部37、底部1）それぞれ出土している。落ち込み遺構Aの表採遺物は縄文土器62点、土師器坏、甕の破片42点である。土師器類は遺構の西壁際の外側に多い。

〔落ち込み遺構B〕（第43図）

BGグリット～CIグリットの東側に、南北に広く連なって検出された。範囲確認の際には相当数の住居跡が切り合ったものと見られた。北方ではBD62住居跡とBH56住居跡、西方でCB03住居跡、CF56住居跡、東方のCF62住居跡と、それぞれ隣接又は切り合っているがその先後関係は不明である。

全体の形状はあたかも方形や円形の住居跡が複合して、不定方向に連なり合っているような様相を呈している。その広がりは南北40m、東西に25m、北東部ではさらに延びているらしい。この落ち込み遺構B域内には9箇所の大型ピット（a～i）と北部に配石遺構、CB68地点に焼土が検出された。

第43図の平面プランで見る如く、住居跡等の存在とその切り合い関係をとらえるため、断面図No.1～No.12など23箇所のセクションを入れ精査した。堆積土は大部分黒色腐植土であり下層はシルトと黒色土の混土層となっている。その状況は断面図No.7とNo.9にかかる区域でシルトとの混土が比較的上層まで入り込んでいるが、他の区域は黒色腐植土が厚く、底面近くまで堆積している。不整形に続く壁は住居跡におけるそれに近似して、明瞭な立ち上がりを示しており、浅いところで30cm、深いところでは70cmを測る部分もある。比較的深く落ち込んでいる区域を断面図の位置で示せば、No.5付近、No.11にかかる付近、そしてd～iピットの集まっている付近である。底面の凹凸や土層の変移等検討したが、断面及び平面プランからは住居跡と見られる遺構を確認できなかった。そのためこの落ち込み遺構Bとした区域の堆積土から出土した遺物は、他の表採遺物などとともに分類の項(93p～95p)で後述している。ここでは遺物の出土点数やおよその分布傾向についてふれる。縄文土器170点、土製品3点、石器6点、土師器須恵器類（主としてロクロ使用）397点の出土である。縄文土器は落ち込み遺構内のほぼ全域から出土しているが、特に多いのは北部のBF～BJ区と南半部域である。施文の判明するものには後期初頭に属するものが大部分である。土製品及び石器の出土地点は第43図に示してある。土師器須恵器類は縄文が多い前述の区域とともに、CAB56地点、CAB68地点にも集中して出土している。遺物の出土量からすればB区にかかる北部区域とd～iピットのある南半部区域になんらかの遺構の存在が考えられるが推定にとどまる。墓壙状ピットの切り合いと考える意見もあった。

以上のように不確定要素が多く、遺構として認め難いが、性格不明のものとしてとりあげた。

なお形成時期について縄文土器と土師器、須恵器類が混在していたことから、確定はできない。ただ大型のピットが遺構内の区域にあるため、記述の都合上、縄文時代の遺構に含めたものである。次に落ち込み遺構B区域内に検出された遺構につい記述する。

① **大型ピット**（第43図　a～iピット）

aピットはCB59グリットに検出された。落ち込み遺構の床面下で検出されたため、その上部は削平されており、断面や堆積土については不明であるが、底径は170×160cmの円形である。また深さは床面から50cmであり、推定される実際の深さは110cmぐらいと見られる。出土遺物は大型深鉢の底部のみ1個体分（地文、単節斜縄文）だが、時期は不明である。

bピットは断面図No.6にかかって検出され、aピットの西方130cmの地点にある。開口部径170cmの円形プランで、断面フラスコ状を呈し、深さは120cmである。底面には深さ15cm程の掘り込みがある。堆積土は8層に区分され、レンズ状をなしており自然堆積と見られる。シルトと黒色土の混土が主であり、上層には小礫が多い。落ち込み遺構の堆積土（1層、2層）を掘り込んで構築しており、落ち込み遺構より新しいピットと考えられる。出土遺物はない。

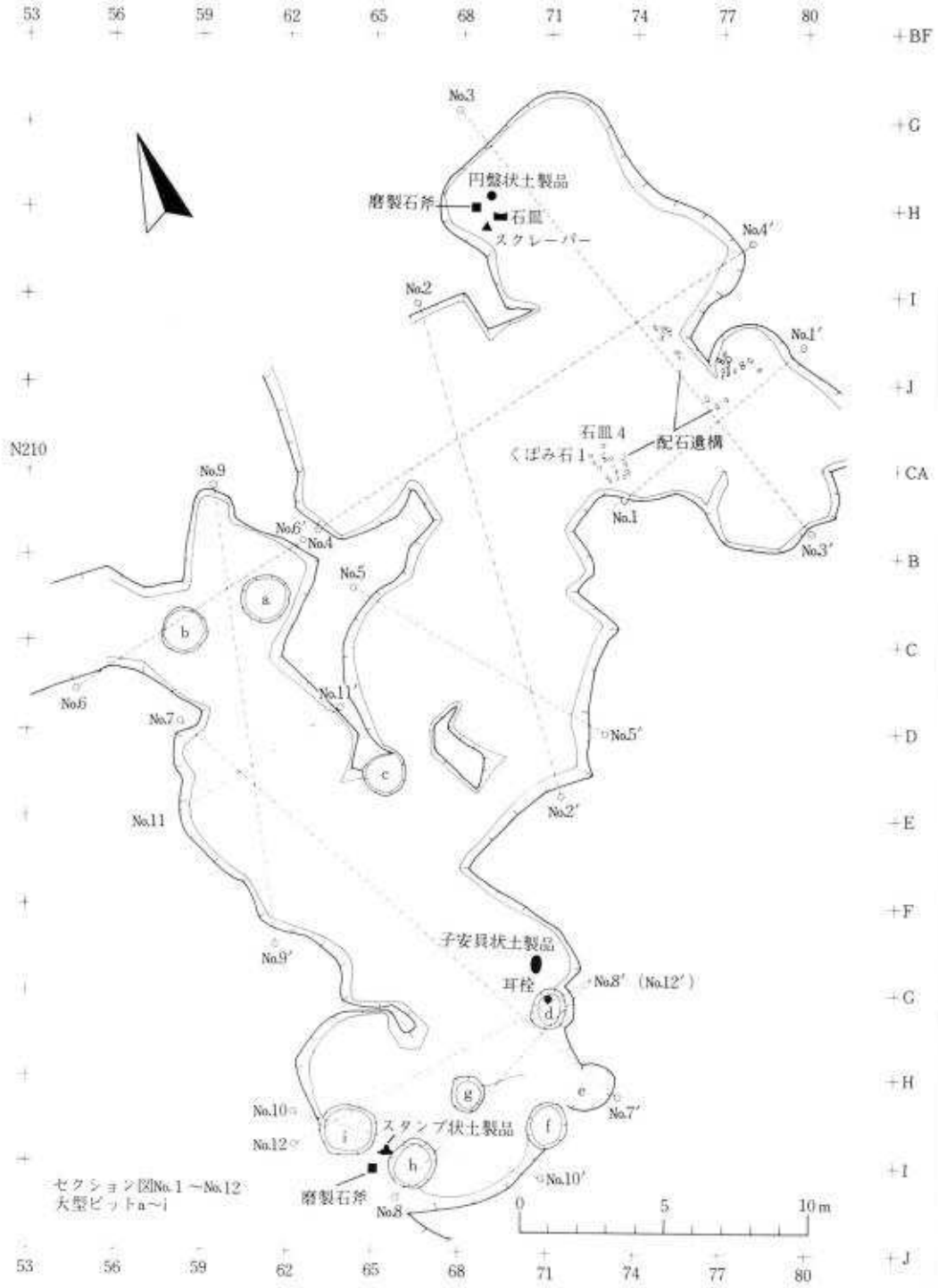
cピットはCD62～65グリットに検出された。開口部径約140cmの円形プランで深さ120cmである。堆積土や断面形については不明である。落ち込み遺構の上層から掘り込まれており、それよりは新しいと考えられる。出土遺物はない。

dピットはCG68グリットに検出されている。落ち込み遺構の床面下から検出されたため、ピットの上部形態は不明であるが、底部160×120cm、深さは床面から50cm程であり、落ち込み遺構に切られたものとすれば、その深さは100cm前後のピットであったろうと推定される。断面図No.8とNo.12には、dピットの断面は堆積土があらわれないことから、dピットは落ち込み遺構より古いものと考えられる。このピットの底面北側隅から耳栓が1個出土した。

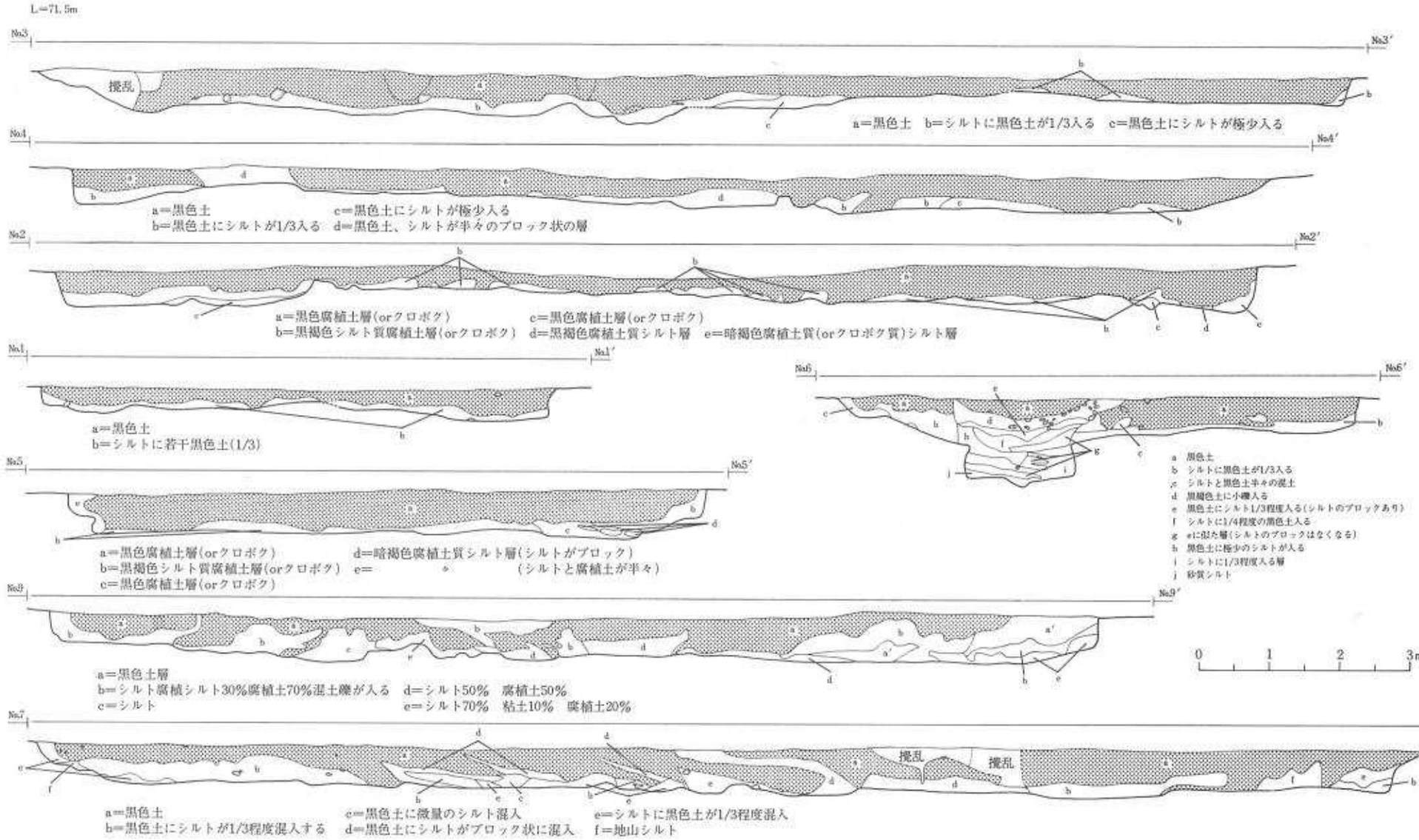
eピットはdピットの南2mのところに検出された。一部削平を受けているが南壁の様子からはほぼ円形プランで、開口部径推定160cmで、深さは60cm程である。断面図No.7のA′側にeピットの断面がかかっているが明瞭ではない。落ち込み遺構を掘り込んで構築されたと考えられる。底面から縦の撚糸文を地文とする大型深鉢（第49図）が横倒しの状態で検出された。口径35.9cm、器高47cm、底径154cmで非常に磨滅がひどい。時期は後期初頭の組整土器と思われる。

fピットはeピットに隣接して検出された。開口部160×140cm、深さは100cm程であるが断面形や堆積土については不明である。南壁の状況から、eピットと同様に落ち込み遺構部分を掘り込んで構築されていると考えられる。出土遺物はない。

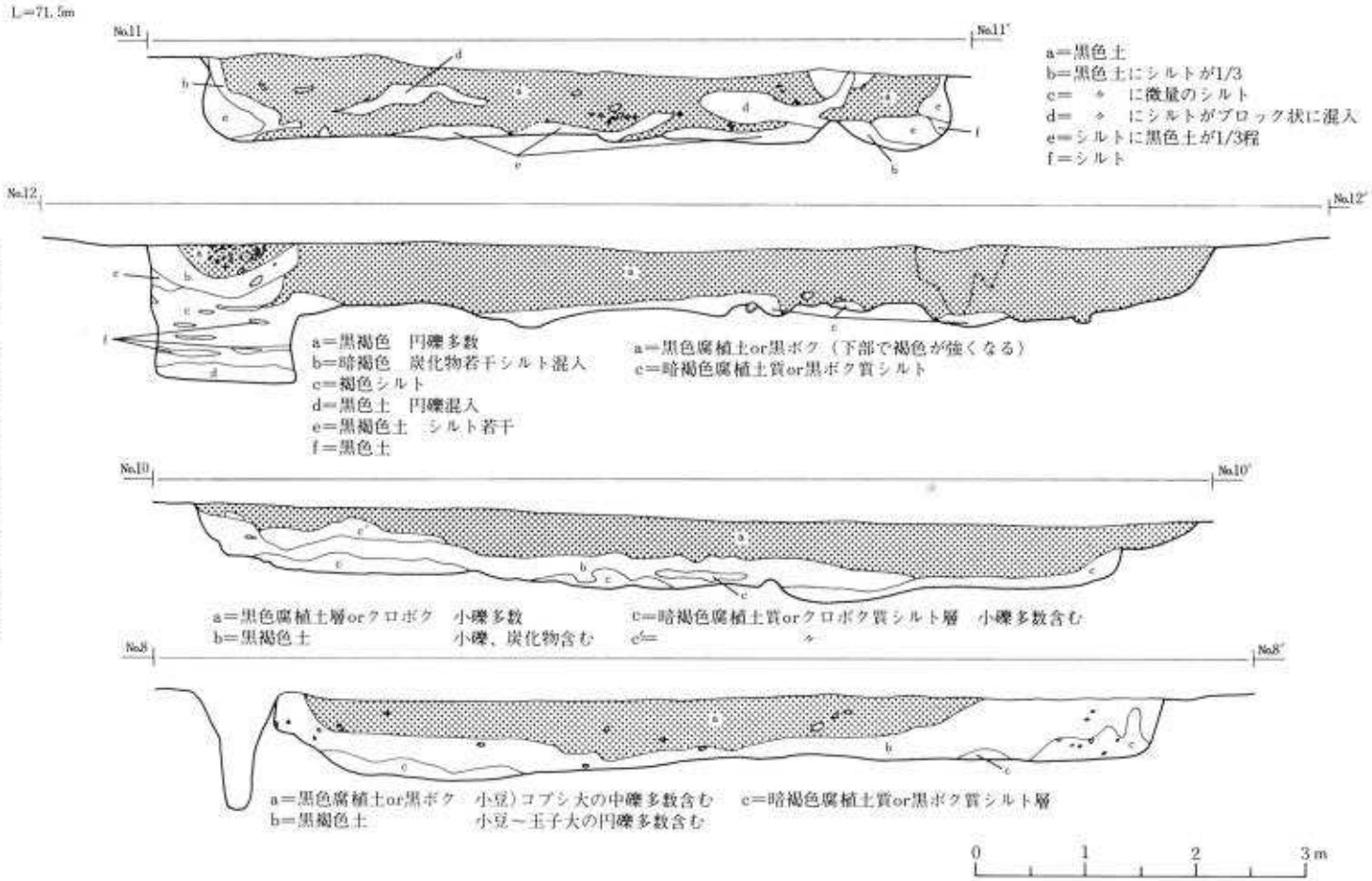
gピットは、fピットの西方2mのところ（CH65グリット）に検出された。落ち込み遺構の床面から検出されたため、ピットの上部形態は不明であるが、円形プランと思われ底径約120



第43図　落ち込み遺構(B)平面図



第44図　落ち込み遺構(B)断面図(1/60)



第45図　落ち込み遺構B断面図（1/60）

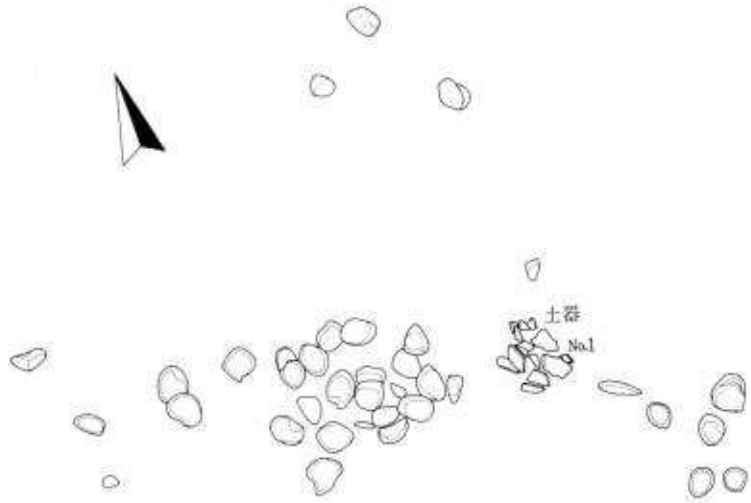
cm、床面からの深さ70cmであることから、実際の深さは130cm程と推定される。断面図No.8に南壁がかかっているが、それにあらわれていないことから、落ち込み遺構よりは古いピットと思われる。堆積土中から復元可能な大型深鉢(第48図①、口径25cm、器高36cm)が出土した。

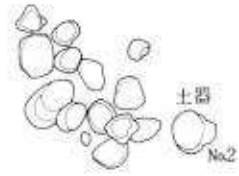
hピットはGピットの南西2mのところに検出された。このピットは上部形態は不明であるが円形プランと思われ、底径約170cm、深さは100cm程である。断面図No.8に見られるごとく、当初は溝状の断面形を呈していると思われたが、精査の結果図のようなプランが判明したものである。よって落ち込み遺構より前に構築されていたものと見られる。遺物の出土はない。

iピットは、hピットの西隣に検出された。開口部190×170cm、深さ125cmである。底部に広がるフラスコ状近似を呈していたらしい。断面図No.12に北側の一部がかかっており、それによると、落ち込み遺構を掘り込んで構築され、埋没はほぼ自然堆積によるものと思われる。上層には円礫が多い。遺物の出土はない。

② **配石遺構**（第46図・第47図）

落ち込み遺構B内の北東部に2箇所検出された。B1 74地点では8～20cmの円礫が北西に長く連なっており、ほぼ3箇所に円礫の集まる部分をもっている。集まっている部分の配列には定形的な、意図的なものは感じられなく、中心となるような石も存在していない。配石部分の表面の石を除くとさらに下にも扁平な石が置かれてあった。その下部には掘り込みなどは認められなかった。図中の土器No.1（49図の13）は破片が不規則にまとまって出土した。地文は単節





第46図　落ち込み遺構(B)内の配石遺構

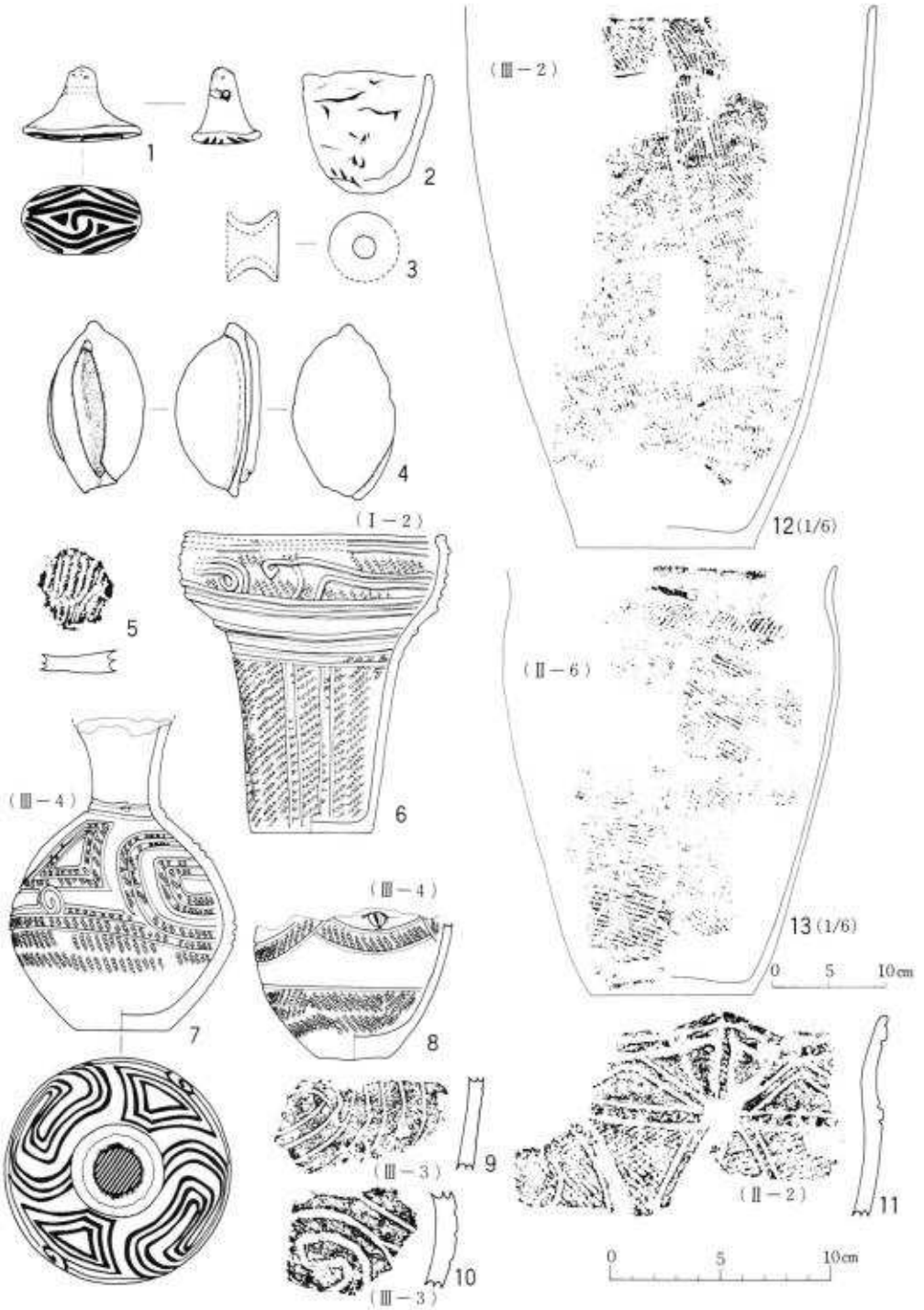
斜縄文で口縁部に無文帯をもつ。口縁ややすぼまって開く器形で、口径29cm、器高37cmの大型。施文から後期初頭のものと思われる。土器No.2は、単節斜縄文のみの大型深鉢の底部片である。その南のBJ 71地点の配石遺構（第47図）は前述のBI 74地点の配石遺構と比べて大きめの礫が多く集まっている。石の配列にはやはり意図性は認められないが、石皿が4点とくぼみ石が伴出している点注目される。その他の石器類は出土していない。

これら2箇所の配石遺構付近からは、合わせて縄文土器42点（口縁1、体部39、底部2）出土しているが、大部分小破片であり時期的に比定できるのは、前述の土器No.1のみである。

○焼土遺構　CC68グリット付近に検出されたが、その広がりや出土状況の詳細については不明である。ただ落ち込み遺構床面より25cm程高いレベルを示した。

第47図　落ち込み遺構B内配石遺構

第48図　落ち込み遺構B出土土器（1/3と1/6）



第49図　落ち込み遺構B出土遺物（1／3と1／6）

(6)出土遺物について

縄文時代のものと思われ遺物は土器約3000点、土製品８点、石器71点である。遺構で出土したものはその項でふれた点もあるが、全体的な分類、特徴についてまとめた。

〈縄文土器〉

土器は縄文時代中期初頭から後期中葉頃まで出土している。その中では中期の大木８式と後期前半が最も多い。発見された遺構はこの２つの時期にかかわるものが大部分と見られる。ピットにおける土器の分布傾向は既述のように明確ではないし、全体的にも中、後期混在の様相を示している。調査区全域からみるとＡ区及び自然提防上のＨ区～Ｋ区で縄文土器はほとんど見られず、合わせて10点ほどである。特に多いのはＢ区南～Ｃ区であり、Ｄ区は比較的少ない。時期的な分布の編在性は、後期の土器は全域に、中期（大木８式）のものはＣＡ12住居跡付近に多く、また中期初頭（大木7a式）の土器はＣＦ56住居跡付近にだけ集中していた。また破片の出土状況から、口縁部、体部破片に比較し底部の量が非常に少ない。全体的に磨滅がある。

次に土器編年上から分類された土器群の形態について述べる。分類は遺構出土の土器及び遺構外（第50図～52図）の土器合わせて行なった。（分類毎のまとまりは写真図版９～14を参照）

第Ⅰ群土器……縄文中期の土器群である。

Ⅰ群１類＝中期前半の大木7a、7b式と思われるものである。出土量は15点と少ない。第50図1～６は大木7a式である。すべて破片であるがほとんど口縁外反、外傾する中型の深鉢と思われる。施文には沈線による平行線文、鋸歯状文、連弧文、スリット状文を多用し、きざみを有する太い隆起線をもつものなどがある。また交互刺突文をもつもの（第50図３）も見られる。大木7b式は第50図７や８である。図７は扇状把手に沈線文を施したものであり、図８は口縁に平行に３本の撚糸圧痕文が施されている。

これら１類は比較的焼成の硬いものが多い。県内では清水貝塚(注1)、天神ヶ丘遺跡(注2)、大館遺跡(注3)、鳩岡崎遺跡(注4)などで類似の出土が見られている。

Ⅰ群２類＝中期中葉の大木8a～8b式と思われるものである。ＣＡ12住居跡や他の遺構から復元個体も含め出土量が比較的多い。器形には口縁内湾するキャリパー形深鉢、口縁外反した中型深鉢、口縁強く内湾屈曲した浅鉢などがある。大木8a式的なものはＣＨ24ピット出土や第50図９～17などあるが、ほとんどは大木8b式の古い方の土器群と見られる。施文には口縁部文様帯を隆起線による渦巻文や小波状文、帯状文等で区画し表現するもの（第10図５や第49図６、第18図１）、太い隆帯をめぐらすもの（第50図22、25、第51図29、31）、頸部から体部にかけて平行沈線文による横帯や曲線文、懸垂文を施すもの（第10図１や４）などがある。ＣＡ12住居跡で出土した土器は同一時期における土器組成として認められるものである。２類に伴うと思わ

れる地文のみのものは第10図３やキャリパー形を呈したもの等が考えられる。２類土器は県内の多くの遺跡で出土している。

第Ⅱ群土器[注5]……後期初頭～中葉の土器群である。

Ⅱ群１類＝後期初頭と思われるものである。中期終末の大木10式の要素を残している。鰭状となる隆起線や連鎖状隆起線がある。第20図３や第31図上が器形の判明する例である。焼成は軟弱である。CH12ピットにおいて出土した土器が共伴すると見れば１類に伴う土器は地文のみの口縁内湾ぎみにすぼまる深鉢や無文の浅鉢などがあげられる。後期初頭の門前式[注6]、宮Ⅰa式[注7]、などに併行するものであろう。

Ⅱ群２類＝後期前半と思われるものである。器形のうかがえるものは第48図２、第25図１、第48図２などがある。口縁ややすぼまる深鉢であり中～大型のものが多い。施文は沈線による曲線文（渦巻文、鉤状、楕円文）で区画し、その内部を磨消している。沈線区画のかわりになで調整した隆起線によるものもある（第14図１）。共通するメルクマールはボタン状の貼付文（中央に丸い刺突が加えられる）が文様の節目につけられ、沈線による渦巻や連続Ｓ字文、鎖状に懸垂する装飾文をつけるものが多い。また口縁部にゆるやかな４又は６箇所の小突起を持ち大波状口縁を成すものが一般的である。隆帯区画の第14図１もある。地文には斜縄文の他に縦の撚糸文も比較的多用されている。焼成は比較的硬質である。これら２類土器に共伴する粗整土器はCJ03No.1ピットでの２個体が考えられる。

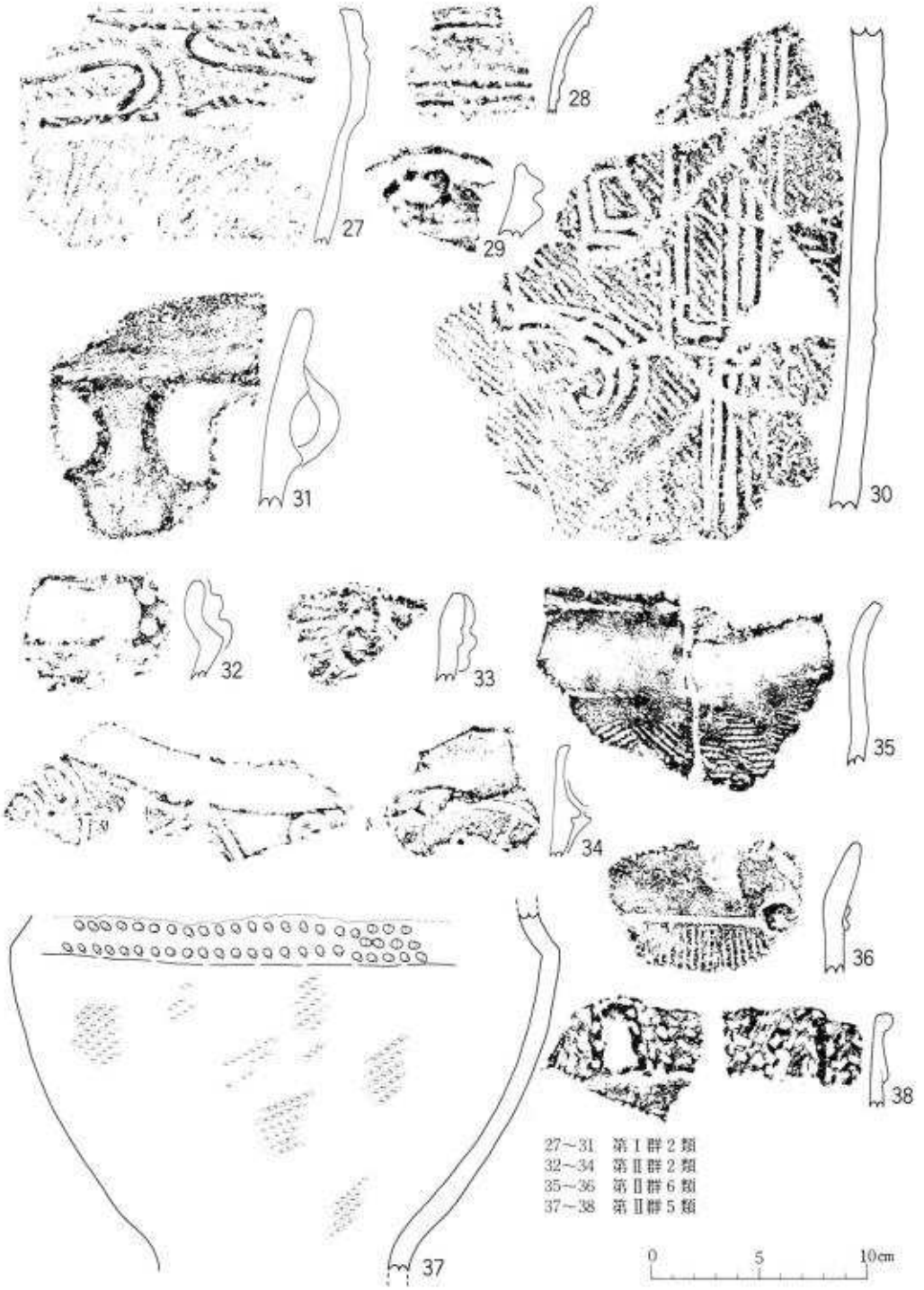
最も出土量が多く関東では称名寺式、堀之内Ⅰ式併行とされているものに類似し、東北では宮戸Ⅰb式、南境式神窪式などに比定される。県内においては門前貝塚Ⅱ群、堂の前貝塚[注8]、貝鳥貝塚Ⅱ群[注9]、人天遺跡Ⅲ群[注10]、卯遠坂遺跡[注11]大明神遺跡[注12]などである。

Ⅱ群３類＝後期前半と思われるものである。沈線文の曲線文を主とするもので、器形の判明するのは第13図１の土器だけである。破片数は少ないが小型のものが多いらしい。平行沈線によって渦巻文や弧状文などが描かれている。焼成は軟弱である。関東では堀之内Ⅱ式、東北では大湯式（十腰内Ⅰa式）などに類似、県内では前述の各遺跡で出土している。

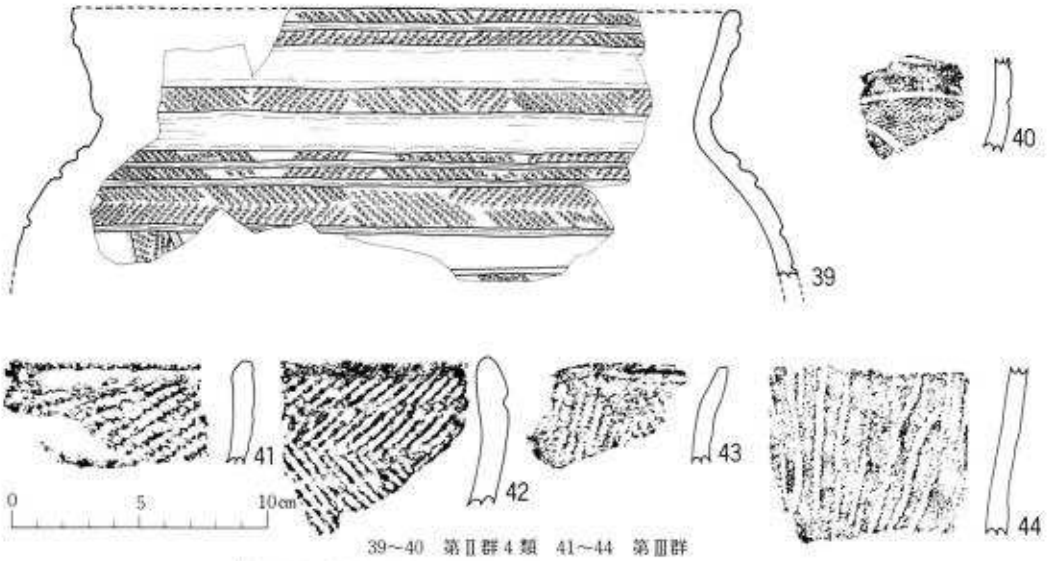
Ⅱ群４類＝後期中葉と思われるものである。平行沈線文を横帯状に又は弧状などにめぐらし、間をおいて磨消して無文帯部分をつくっているものである。細かい斜縄文や羽状縄文を地文としている。第49図７や８、第52図39などがこれにあたる。判明する器形は口縁外反し胴部に張りをもつ甕型の深鉢、小型壺形の精整土器などが見られる。焼成は硬質で薄手である。第49図８はこぶ状の貼付文があり、最も新しい時期のものであろう。関東における加曽利Ｂ式、東北の宮戸Ⅱ式、十腰内Ⅰb式等に比定され、県内でも既述の諸遺跡で出土している。

Ⅱ群５類＝後期前半の土器に共伴すると思われる特徴的な土器を一括した。第25図３は無文地に櫛歯状の平行沈線を体部一面にめぐらした大型の深鉢で、口縁には等間隔に穿孔を施してい

第50図　縄文時代の遺構以外から出土した土器



第51図　縄文時代の遺構以外から出土した土器



39～40　第Ⅱ群4類　41～44　第Ⅲ群

第52図　縄文時代の遺構以外から出土した土器（1／3）

る。第23図1は平行沈線のつなぎ目に刺突文を施している。また第51図37は口縁部無文帯に2列～3列の刺突列点文が施されている。第15図2は撚糸文を地文として沈線をゆるやかな弧状に1本だけめぐらしたもの、第51図38は口縁に厚く、広い隆帯を貼り付け、その上に刺突列点文を施し、朱塗りの土器である。口縁内側に細かい斜縄文が施されていることからⅡ群4類に共伴すると考えられる。出土地点は不明である。

Ⅱ群6類＝後期前半の土器に共伴すると思われるものである。口縁部無文で頸部、体部は地文のみの深鉢形土器である。口縁ややすぼまり、口唇部でわずかに外反ぎみとなる器形が多く、大型～小型まである。第15図上、第21図1と2。第23図3、第49図12や13などが見られ、小突起をもちゆるやかな大波状口縁となるものがある。また無文帯と地文部との境に一本の沈線をひくもの（第51図36）や撚糸圧痕文をもつ（第51図35）などもある。地文には斜縄文、縦の撚糸文が大部分と見られる。器形、施文からみて1～3類に共伴すると考えられる。

第Ⅲ群土器……地文のみ又は無文の土器群である。

Ⅲ群1類＝単節の斜縄文のみの深鉢型である。口縁外反ぎみやキャリパー形近似の破片はⅠ群土器に共伴すると考えられるし、口縁やや内湾ぎみにすぼまる大型深鉢（第20図や第25図2）はCH12No.2ピットやCJ03No.1ピットの出土状況から、Ⅱ群土器に共伴するものであろう。

Ⅲ群2類＝縦の撚糸文のみのものである。破片のみで器形の判明するものはないが2群土器に撚糸文の地文が多く見られることから、これらに共伴すると考えられる。

Ⅲ群3類＝網目状撚糸文のみのものである。中～大型と見られるものが多い。器形が判明するのは第48図1で、やはり後期前半の土器に共伴すると考えられる。

Ⅲ群4類＝無文の土器である。浅鉢や小型の袖診土器がある。これらは共伴するピットの状況からいずれも2群土器と同時期と思われる。

(注1) 清水貝塚　大船渡市清水貝塚発掘調査概報　昭和51年3月
(注2) 天神ヶ丘遺跡　稗貫郡大迫町　昭和49年3月　大迫町教委
(注3) 大館町遺跡　盛岡市　昭和53年3月　岩手大学考古学協会
(注4) 鳩岡崎遺跡　東北縦貫道関連遺跡発掘調査　昭和48～50年実施　報告書57年3月
(注5) 樺山遺跡、大館遺跡、北館遺跡、西田遺跡、梅ノ木遺跡などで大量に検出されている。
(注6) 門前貝塚　郷土資料館報告　盛岡市公民館（昭和35年）
(注7) 宮戸貝塚　陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土土器について　―後藤勝彦―
(注8) 神窪式　日本の考古学Ⅱ　縄文文化の発展と地域性―東北　―林　謙作―　昭和53年
(注9) 堂の前貝塚　陸前高田市教育委員会　昭和47年
(注10) 貝鳥貝塚　花泉町教育委員会　昭和47年
(注11) 八天遺跡　北上市教育委員会　昭和53年3月
(注12) 卯遠坂遺跡　岩手県文化財調査調告第31集（東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ）昭和54年3月
(注13) 大明神遺跡　岩手県文化財調査調告第52集（東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ）昭和55年3月

〈土製品〉

円盤状土製品は2点、それぞれ落ち込み遺構Aのeピットと落ち込み遺構Bの北端部からの出土である。単節の斜縄文が施文された土器片を使用してつくられたと考えられる。

スタンプ状土製品は落ち込み遺構Bの南端部（CH65地点）からのもので第49図（図版14の85）に示したように、三叉文的な文様がていねいに陰刻されている。つまみ部分に径2～3㎜の穿孔がなされ、高さ3.5cm、下底部は長軸5.5cm、短軸3.2cmの長楕円形を呈しており、焼成も硬質である。

耳栓状土製品は3点、それにCB15ピット出土のもの1点も含めた。耳栓が2個出土したCJ59ピットのものは、どちらも一部欠損しているが外径25㎜、中心孔8㎜、とほぼ同じ規格を持っており、近接して出土した意味は、少なくとも同時に使用されたものと考えて良いだろう。落ち込み遺構B内のdピット出土のものは、外径30㎜と少し大きめのものである。

子安貝状土製品が落ち込み遺構B内のdピットの北側1m程のところに検出された。子安貝は南方産の貝であり、それの模造品があるということは大きな意味をもつものであろう。第49図4に示したごとく、最大長7.8cm、最大幅4.4cmで非常に精巧につくられている。この形状から、生殖力、呪術的目的のため、又、貨幣として使用された例が古来からあったらしい。

その他にやはり、種類は不明だが、貝に似せた土製品（図版14の89）が1点BH56住居跡の埋土から出土している（高さ3cm、下底部3.5×3.0cm）。

〈石器〉　第53図～第56図　（図版15～16）

縄文時代のものと思われる石器について、その形態から12類に分類した。

1類　石鏃３点　（第53図１～２・４）

いずれも入念な剥離調整を両面から施している。図１は基部が内湾しており、基部の両先端と尖頭部が欠けているらしい。図２は基部が平らな無茎鏃であり、鋭利な尖頭部形を呈している。図４は有茎鏃である。

2類　尖頭器（石槍）２点　（第53図３と５）

先端部がとがっており、石鏃よりは大きいものとした。基部は平らで無茎である。図５は基部にも刃部様に剥離加工を施しており、スクレーパーとしても把えられるものがある。

3類　石匙３点　（第53図６～８）

つまみの付いたスクレーパー又はナイフ形のものである。図６はつまみ部及び刃部調整は明確ではないが形態から石匙とした。図７は横形のもので、両縁辺は両面加工、下辺は片面加工である。つまみが小さい。図８は縦形のもので縁辺のほとんどは片面加工であるが基部に近いところは両面加工となっている。

4類　スクレーパー類（掻器、削器）12点　（第53図９～12、第54図13～20）

縁辺の一部に刃部加工、もしくは刃部様の鋭利な側辺を有しているものを一括している。ほとんどが片面加工である。形態上から見れば図９～14は台形型、図15～17は尖頭部をもつ型、図18～20は貝殻型などに分けることができよう。いずれ定形的なものでない側辺使用の剥片石器である。

5類　石篦と称される類２点　（第54図21と22）

スクレーパーの中で両面加工を施した篦型のものである。図21は下端部に入念な剥離加工を施している。図22は上半部折損しているかに見える。

6類　打製石斧１点　（第54図23）

斧型近似の打製石器である。１側辺と先端部は両辺加工を施している。石材は流紋岩である。

7類　磨製石斧４点　（第55図24～27）

研磨によって全体が整形された定角式磨製石斧だけである。側辺や刃部は入念に研磨され光沢をもつ部分がある。断面はいずれも隅丸長方形となっており、両刃である。図24、27は半ばで折損している。

8類　粗製打製石器２点　（第55図28と29）

図28は荒い剥離面をもつが鋭さはなくたたき石等に使用されたものと思われる。図29は、石鍬と呼ばれる形であり土掘り等の用途であろう。

9類　磨石５点　（第55図30～34）

円形を呈し一部に擦痕を有するものである。石皿とセットで使われたものと見られる。他のものに比較し図33、34は極端に小さい。

10類　くぼみ石２点　（第56図）

図35は凹みが浅く磨石的でもある。図36は表裏両面を使用している。

11類　石錘２点　（第56図37・38）

楕円形の長辺部の中央を打ち欠いて形を造っている。

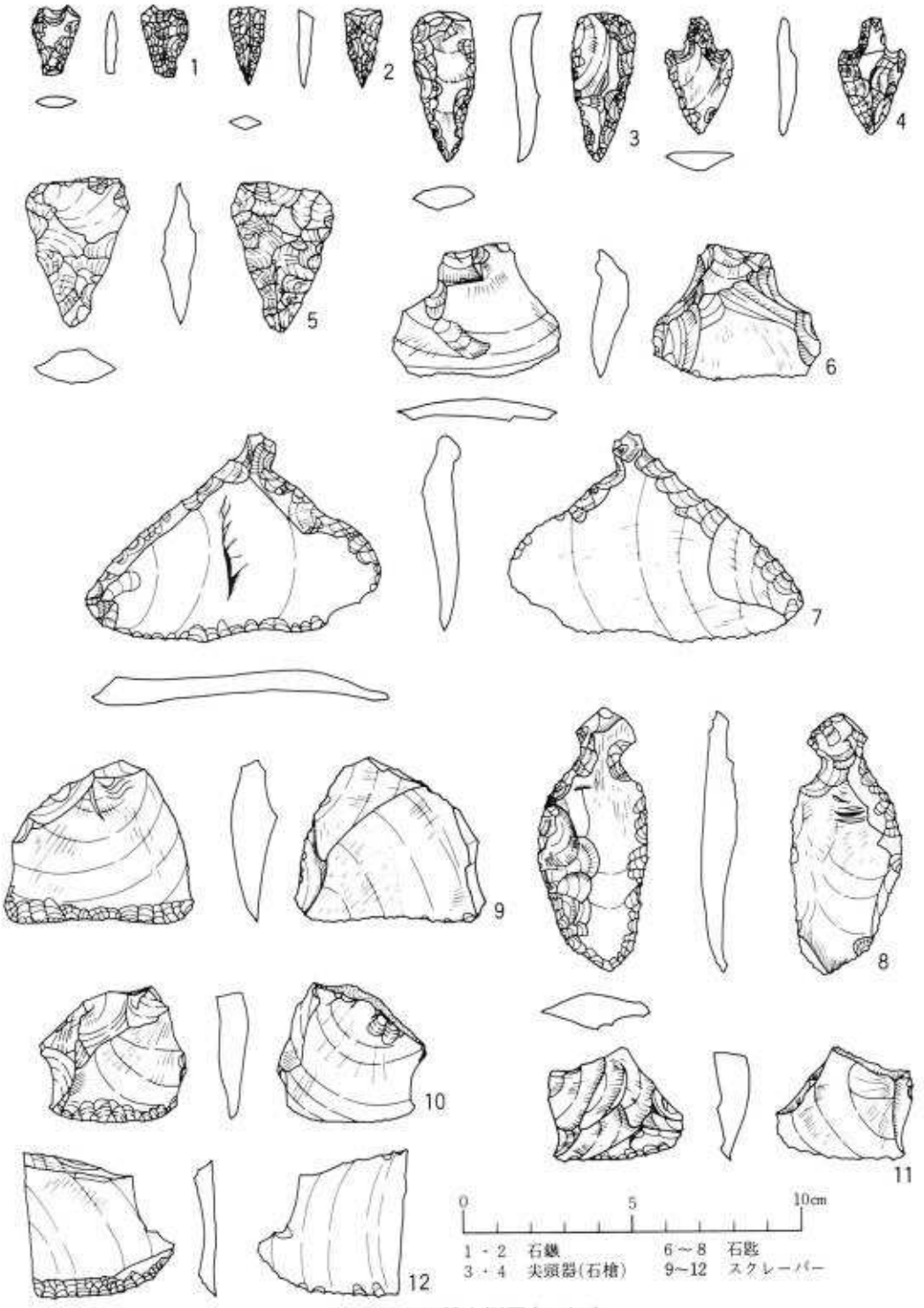
12類　石皿８点　（第56図39～41）

断面及び平面形が角ばっているものと、長楕円形に丸みをもつものがある。図示以外の破片も５点ある。図41には底面に円形の脚が４個付いていたらしい。

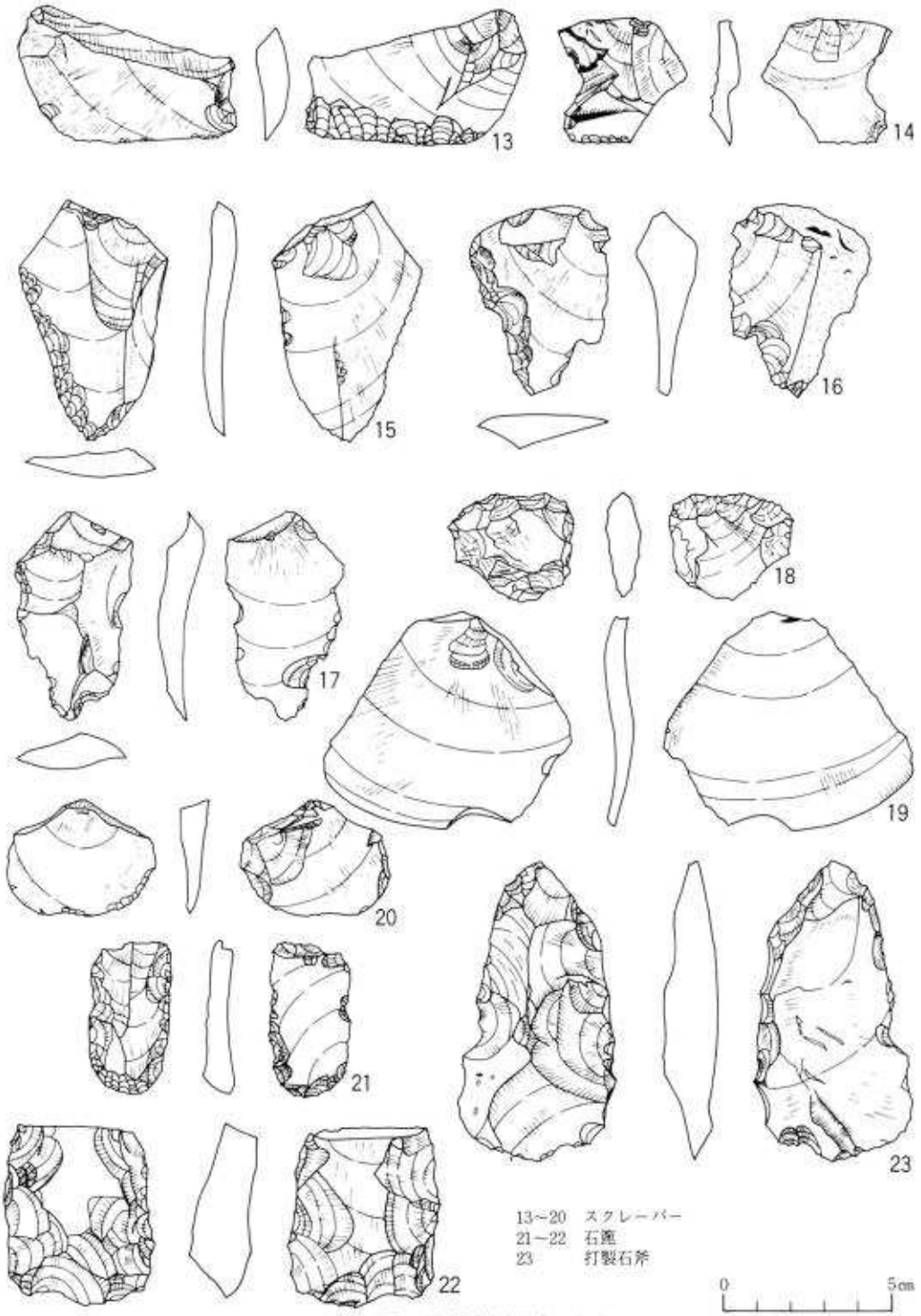
その他、明瞭な使用痕、加工痕の認められない剥片、石核など27点出土している。

図面番号	分類・名称	出土地点	最大長 (cm)	最大巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材とその産地	
1	石　鏃	CJ18住西南Pit a層	2.1	1.4	0.3	0.7	黒曜石	奥羽山地
2	〃	E21 N183粗掘出土	2.1	1.1	0.4	0.7	硬質泥岩	〃
3	石頭器(石槍)	CH30 Q_2	3.9	1.9	0.9	5.4	凝灰質珪質泥岩	〃
4	石　鏃	HG68	3.4	2.0	0.6	2.4	硬質泥岩	〃
5	尖頭器(石槍)	CI 18 Pit No.2	4.2	3.1	1.0	8.2	松脂岩	〃　(土盛)
6	石　匙	CF 56住全遺物	3.8	4.7	0.9	17.1	硬質泥岩	〃
7	〃	DA 62住 Q_2埋	6.0	8.7	0.8	38.1	松脂岩	〃　(土盛)
8	〃	DA 24住	7.6	3.0	1.1	21.5	硬質泥岩	〃
9	スクレーパー(縦・横型)	BG 65住③	4.8	5.1	1.3	32.7	凝灰質珪質泥岩	〃
10	〃	不明	3.9	4.3	1.0	12.0	珪質泥岩	〃
11	〃	DA 62住 Q_2埋	3.2	3.9	0.9	13.2	石質細粒凝灰岩	〃
12	〃	CI 15 Pit	4.3	4.2	0.5	9.2	凝灰質珪質泥岩	〃
13	〃	CC 15 Pit	6.7	3.7	1.1	26.1	〃	〃
14	〃	DA 62住 Q_2埋	3.7	3.6	0.6	8.5	〃	〃
15	〃	CJ 18 Q_2	7.0	4.4	1.0	24.9	珪質泥岩	〃
16	〃	CD 03住　カマド周辺	5.4	4.2	1.8	24.2	細粒凝灰質泥岩	〃
17	〃	CH 74住 Q_2埋土	6.2	3.5	1.1	19.2	〃	〃
18	〃	DC 51－1層	3.0	3.5	1.0	12.4	鉄石英	〃
19	〃	不明	3.5	4.3	0.8	9.4	凝灰質珪質泥岩	〃
20	〃	CH 74住 Q_2埋土	6.4	7.3	0.8	37.4	硬質泥岩	〃
21	石　錐	DA 12 Pit 表面	4.5	2.4	0.9	20.2	流紋岩	〃
22	〃	DB 59 Pit	5.1	4.2	1.8	44.5	粘板岩ホルンフェルス	夏油川か北上山地
23	打製石斧	KA 18	8.8	4.5	1.8	65.6	流紋岩	奥羽山地
24	磨製石斧	CJ 18住 Q_2	7.3	5.2	2.7	190.6	濃緑色粗粒凝灰岩	〃
25	〃	落ち込み遺構B	12.1	4.9	2.7	235.4	粘板岩ホルンフェルス	夏油川か北上山地
26	〃	BH 56住 Q_2埋土	9.7	3.9	1.2	80.0	蛇紋岩	北上山地
27	〃	BG 65住③	6.7	4.2	2.2	105.5	斑糲石安山岩	奥羽山地
28	粗製打製石器	CF 56住全遺物	14.5	5.3	1.5	150.1	粘板岩	北上山地
29	〃 (石錘)	DA 24住 Q_2	11.0	6.8	1.1	99.0	緑泥石片岩	〃
30	磨　石	KA 06床面	8.3	7.3	5.9	515.0	石英安山岩	奥羽山地
31	〃	CF 56住	10.0	8.8	5.6	698.0	花コウ閃緑岩	和賀仙人付近
32	〃	KA 18住 Q_2 床面	8.9	9.1	8.4	1020.0	濃緑色凝灰岩	奥羽山地
33	〃	CG 12住埋土	2.8	3.1	2.3	23.1	流紋岩質砂質凝灰岩	〃
34	〃	〃	3.8	4.0	3.1	56.3	〃	〃
35	凹み石	KA 18 Q_2床面	13.7	10.6	2.6	562.0	斑糲石安山岩	〃
36	〃	落ち込み遺構B内	9.8	7.8	4.1	366.3	石英安山岩	〃
37	石　錘	BG 65住	8.8	5.6	2.6	145.0	斑糲石安山岩	〃
38	〃	JE 18表土	6.0	4.3	0.9	75.3	流紋岩	〃
39	石　皿	BG 65住	13.5	9.4	1.8	345.3	石英安山岩	〃
40	〃	落ち込み遺構B内	22.4	9.9	6.6	1841.0	斑糲石安山岩	〃
41	〃	〃	23.0	16.0	4.5(6.5)	2340.0	石英安山岩	〃

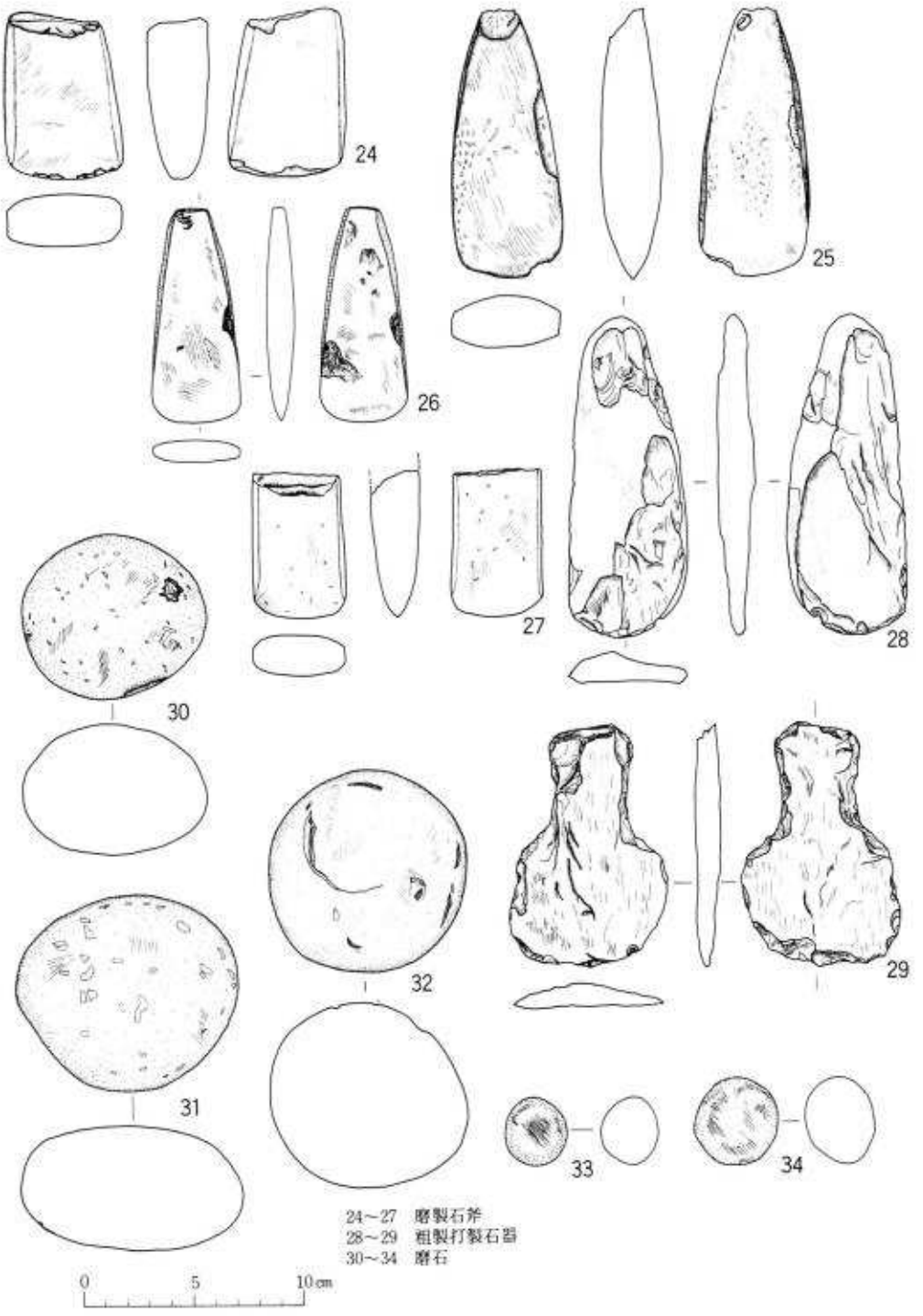
第９表　石器観察表



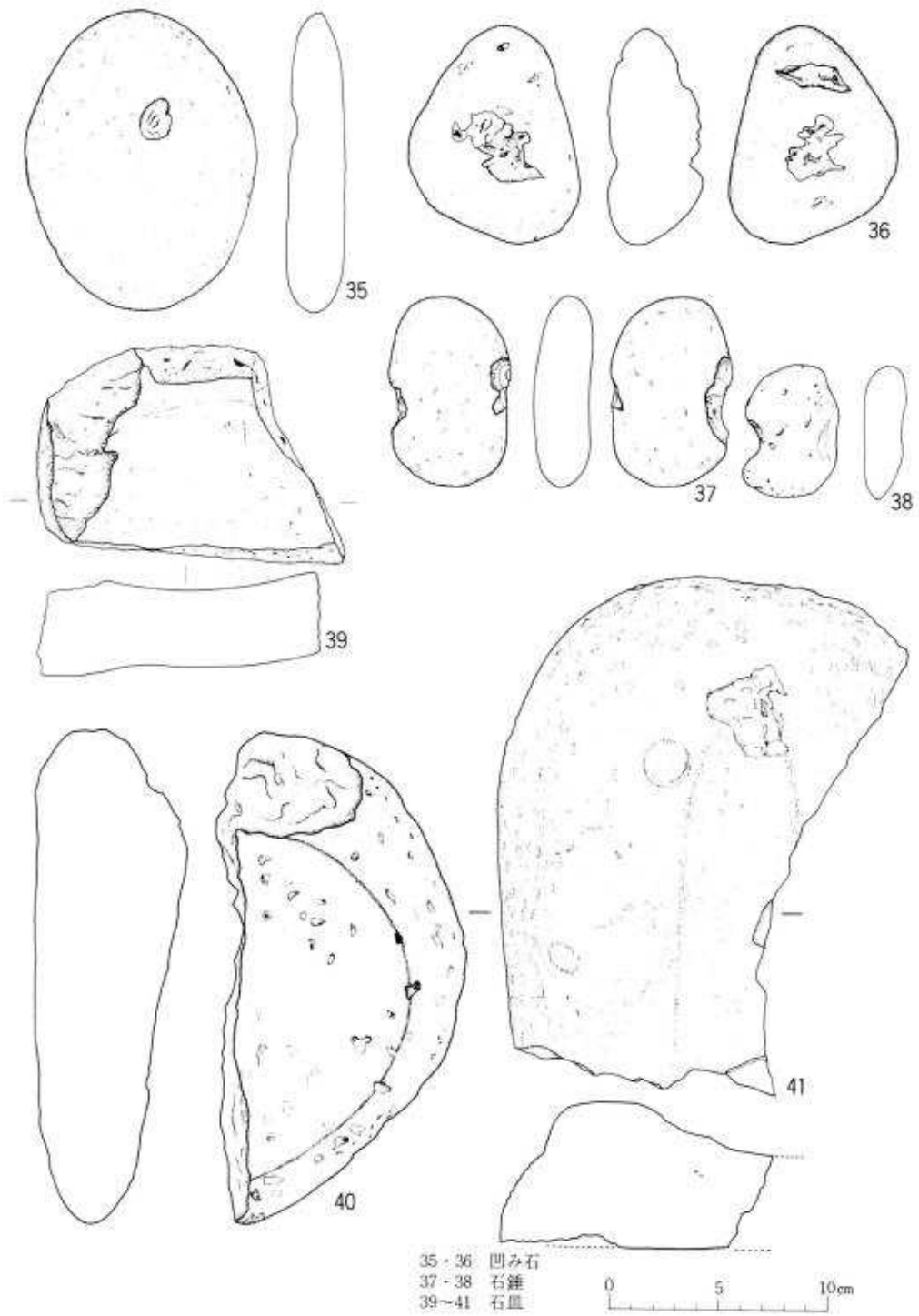
第53図　石器実測図(1/2)



第54図　石器実測図（1／2）



第55図　石器実測図（1／3）



第56図　石器実測図（1／3）

(7)考察――大型ピット(土壙)

調査区の北半地域（低位段丘上）に群集する大型ピットはその数160基余りである。形態からみて、従来からフラスコピットとか袋状ピット、貯蔵穴と称されている土壙に類似したものと把えられる。伴出する遺物のほとんどは縄文土器であり、一括して縄文時代の遺構として取り扱っている。ただ遺物を伴わないものもかなりの数にのぼり、弥生又は歴史時代のものがないとは断定できない。

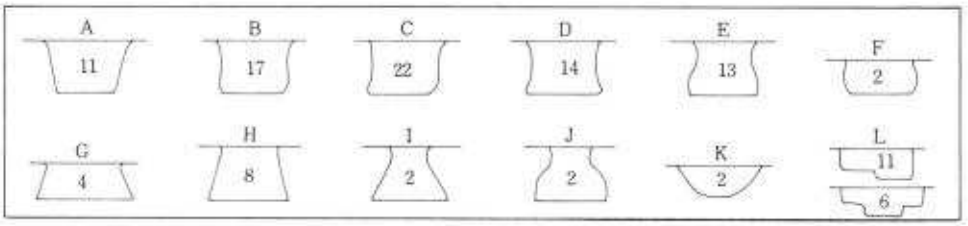
①形態と含有物、遺物

断面形が明確で単独のピットと認定できるものをとりあげ、平面形、断面形、堆積土、含有物の様相から、本遺跡における本来的なピットの形態を求めてみた。

〈平面形〉 検出された開口部の形は、使用時から埋没に至るまでの崩落や検出面までの旧表土分は削平されていることを考え合わせると、必ずしもピット上部の形をそのまま残しているとは言えないが、基本的な掘り込みの形は示しているであろう。その形は円形、楕円形、不整な円形、不整な楕円形、近隅丸方形に分けられたが、複合又は不定形なものを除けば、基本形として円形、楕円形、隅丸方形の３つにまとめられる。平断面の明確なピット95基（第４表～第８表から抽出）の平面形の数を比較すると円形54、不整な円形20、楕円形６、不整な楕円形11、近隅丸方形４という結果である(第10表)。隅丸方形に近いものでほぼ方形プランと認められるのは１基しかない(CH27ピット)。また楕円形も墓壙等に見られるような長楕円形ではなく円形に近い楕円がほとんどである(複合の可能性のあるものは除く)。

また壁や底部の形は開口部に比較して広がるものや狭まるものはあるが、形の上で大きく異なっていない。底面はほぼ平坦であるが、小ピット状の凹みを有するものがある。重複した可能性をもつ複合型（断面Ｌ型…後述）においては、底面は二重円構造となり段差をもつものが多い。これは使用時に単独でその形であったのか、大小２つのピットの重複か、もともと単独のピットが周壁の崩壊でその形になったのか吟味する必要があった。ただその判別は難しく、推定に終わる場合が多かった。その点を除けば本遺跡の大型ピットの開口部、壁、底部は、ほぼ円形が基本であり、中に数は少ないが、小ピット状の凹みをもつものがある。

〈断面形〉 大型ピットの断面形を細分すると第57図のようにＡ～Ｌ型と12種に分けられ、残りはその他として一括した。ピットの壁は凹凸ができており、断面図の作成位置によってはその形は多少変化する場合も考えられ、厳密に分類することには不合理性もある。今までの調査例では、フラスコ型、ビーカー型、鉢型など大きく３～４形態に分類されている理由もそこにあろう。しかし崩落過程や堆積状況などの観察を通して、ピットの本来的な形態をさぐるにはやはり、ある程度の細分も必要と考えて試みた。おおまかに分類すればＡ、Ｂ型はビーカー形に、Ｃ～Ｈ型はフラスコ形近似の、Ｉ、Ｊ型はフラスコ形に、Ｋ型は鍋底形というように大別



第57図　大型ピット断面類型

できる。

A型－口径が底型より比較的大きい鉢形である。底面の壁際が明確なものが多い。

B型－口径と底径がほぼ等しいビーカー形である。底面の壁際が丸みをもつものが多い。

C型－B型とD、E型の中間的なもので、底部にふくらみを一部にもつものである。

D型－底部にやや末広がりとなっているフラスコ形近似のものである。

E型－底部にふくらみをもつフラスコ形近似のものである。

F型－底部にふくらみをもつ浅い袋状ピットである。

G型－壁が直線的に末広がりとなる浅いフラスコ形近似のものである。

H型－壁が直線的に末広がりの深いフラスコ形近似のものである。

I型－頸部をもって底部に末広がりとなるフラスコ形である。

J型－頸部をもって底部にふくらみをもつフラスコ形である。

K型－口径が広く、底部へゆるやかにすぼまる鍋底形のものである。

L型－大小2つのピットが重複したかのように段差をもった複合型のもので、2種ある。

その他、ピットの一部しか断面図をとれなかったものや、ピット上半部が削平されて下半部しか残っていないものや、断面形不明のものがある。

各類型にグルーピングするにあたって考慮した点は、壁の中層部における若干の凹凸は無視することにした。またC型はBとD、E型のどちらに入れるか決めかねるもの、つまり中間形態で個数が多い。形として類似性の高いのはAとB型、DとE型、EとJ型である。

断面形の明確なピットを分類した結果は第57図中の数字で示した。あらわれた断面形は使用時又は廃棄時の形をそのまま残しているものとは言えないが、ここではその類型における個数についてまとめておく。細分のため各個数は少ないが、全体からみて最も多いのはB型とC型であり、次にA型、D型、E型、H型で、少ないのはF、G、I、J、K型となっている。複合型のL型もかなり多い。崩落による断面形の推移については後述するが(→110p)、先に述べたおおまかな大別という見方からするとビーカー形(A＋B)は28、フラスコ形近似（C＋D＋E＋F＋G＋H）は63、フラスコ形（I＋J）は4、鍋底形は2となる。つまり近似した形を含めるとフラスコ状（袋状）を呈するピットは、L型を除いた全体の約70%を占める。

〈**規模**〉　各ピットの計測値は開口部径、底径、深さの３点である。規模を比較する場合、断面形の相違や崩落の有無を考慮すれば、開口部より底部の広さの方がよりふさわしいと考えられ底径と深さを重視した。底部が楕円形で長径と短径があるときは、グラフ化する際にその中間値をとりあげたし、平面図と断面形の底径がくいちがっている場合は断面図の計測値を採用した。深さは検出面からの計測であるが、住居跡等によって削平されていたものはその分加算した値をとった。第58図の１のグラフは、深さと底径の規模の度数分布を見たものである（断面形Ａ～Ｊ型）。開口部径はその数と平均値のみ示した。全体的傾向性は次のような点にまとめられる。

○開口部径は80～ 255cm、底径は75～ 200 cm、深さは40～ 155 cmの範囲内にある。

○濃密な分布を示すのは開口部径 120～170 cm、底径 100～155 、深さ90～130 cmであり、それぞれの平均値は、開口部 145 cm、底径約 130 cm、深さ 110 cmである。

○複合している可能性の高い断面Ｋ型、Ｌ型は図示されていないが、開口部や底径の 200 cmを越すものがかなりあるが、深さはＡ～Ｊ型におけるものと近似している。

次に各断面類型別に規模の大小を比較したものが第58図２～５のグラフである。その傾向性をみてみた。

○断面Ａ型は、全体の平均値に比較して深いものが大部分であり、底径は小さいものが多い。断面型Ｂ型は平均値に比較し、深いもの浅いもの半々であり、底径は小さいものが多い。ただ平均値の規模に近接したものが多い。

○断面Ｃ型は平均値に近接したものがほとんどであるが、大きく離れたものもある。

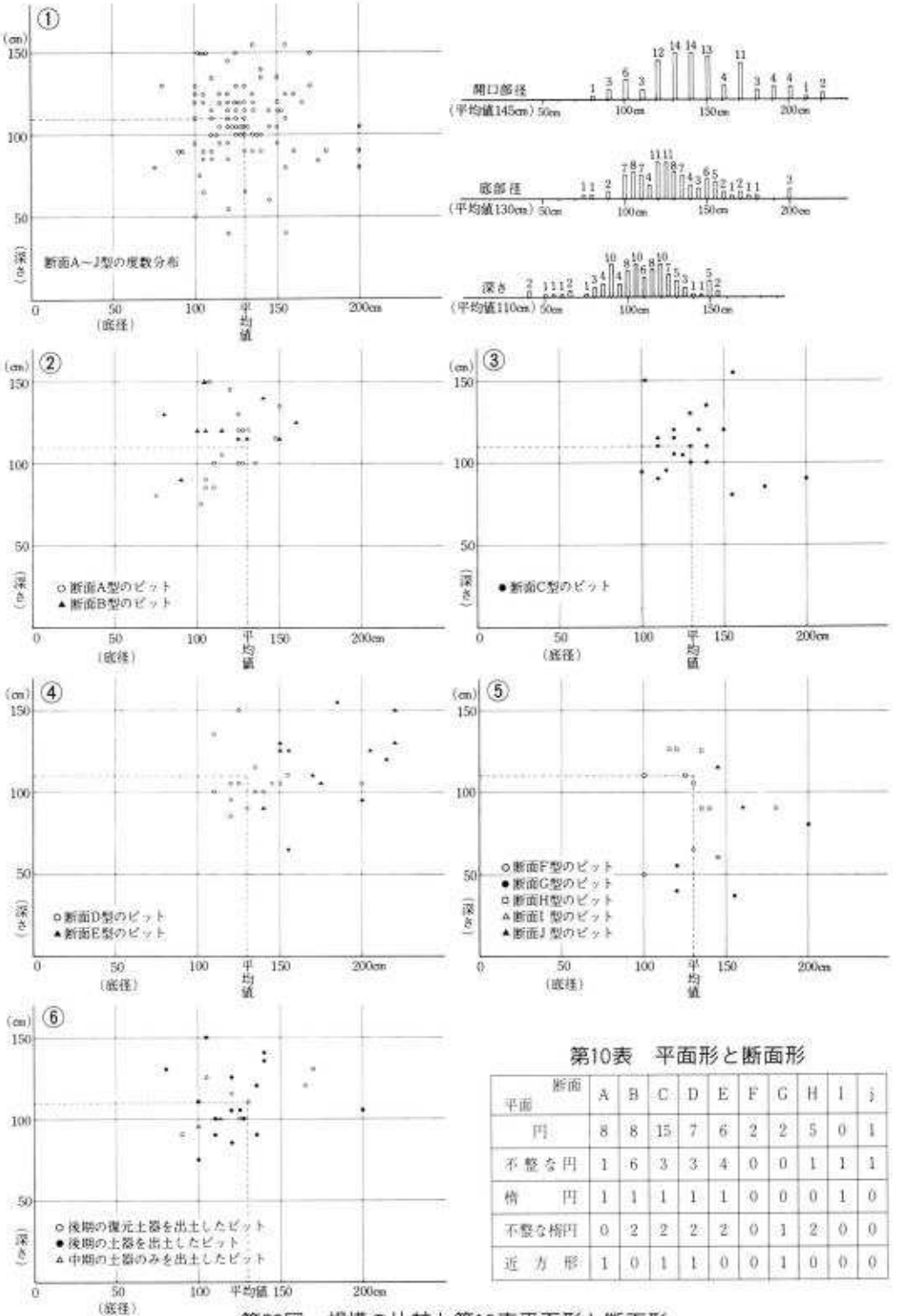
○断面Ｄ型は平均値に比較して、深さは浅いものが多いが近接しており規格性が高い。断面Ｅ型は深さ、底径とも平均値からかけ離れた値を示すものが多く、規格性は低いと見られる。

○断面Ｆ～Ｊ型は該当する数が少なく５のグラフに一括している。断面Ｆ型、Ｇ型、Ｉ型は平均値に比較し、底径は大小あるが、深さは浅い。断面Ｈ型は平均値に近接したものが多く、断面Ｊ型は底径がやや大きめである。

○ビーカー形とフラスコ形として平均値と比較すると、ビーカー形（Ａ、Ｂ型）は深くて、底径がやや小さく、フラスコ形（Ｃ～Ｊ型）は深さと底径のとる値の幅が広く、浅いものがかなりある。

○規模における類似性、相関性をみると、断面Ｂ、Ｃ、Ｈ型にそれの高いのが認められる。

遺物を出土したピットの規模を比較してみたのは第58図６のグラフである。後期初頭とみられる土器を多量に又はセットとして底面や中層部において出土したピットはわずかに６基である（図中○印）。その他は破片数が少ないが、上層出土、他の時期のものを含むもの等のピット



第10表　平面形と断面形

断面 / 平面	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
円	8	8	15	7	6	2	2	5	0	1
不整な円	1	6	3	3	4	0	0	1	1	1
楕　円	1	1	1	1	1	0	0	0	1	0
不整な楕円	0	2	2	2	2	0	1	2	0	0
近 方 形	1	0	1	1	0	0	1	0	0	0

第58図　規模の比較と第10表平面形と断面形

(図中●印)である。また図中の△印のものは中期の破片のみ出土したピットである。

ほぼ後期初頭と見られるピットの深さは90～125 cmに、底径は90～155 cmの範囲内となっているし、後期初頭の土器をともかく含んでいたピットの規模はさらにそのとる値の範囲が大小に広がっている。明確に規定し得る傾向性はとらえられず、全体の平均値や規模の傾向性とほぼ一致すると見られる。中期の土器片を出土したピットについても同様である。

出土した縄文土器の多くは後期初頭、及び中期の土器であり、その両時期にピットの多くが営まれたと考えられるが、その2つの時期差を規模に見い出すことはできなかった。

〈**堆積土**〉　埋没に至る堆積の仕方はそれぞれのピットによって相違を見せている。その要因は自然に流入、崩落堆積した場合、人為的に埋められた場合、両者併用されている場合の3つのあり方が考えられる。そして埋没までの時間的な差異やピットの再利用とか重複など種々の条件によってその様相を異にするものであろう。これらの観察によってピットの用途や使用時形態を知る手がかりを得ることができると思われる。

堆積土は大きく分ければ、黒褐色（黒色）腐植土、暗褐色土、褐色土、地山にあたる黄褐色シルトとなり、それらの混合土もみられる。土層断面にあらわれたこれらの層の重なり方を比較すると、幾種類かの類型化ができそうであった。それが第59図の堆積土層の類型である。類型化の視点は、いわゆるレンズ状をなしているかどうか、水平に近いか、傾きをもち流れ込み的か、ブロック状をなしているかである。これらの状況になる要因は、現在もっている認識からすれば次のような想定を念頭に置いている。

1．何層かにわたって整然としたレンズ状堆積や水平状堆積を示すのは、時間をかけて徐々に進行した結果であり、崩落や流れ込みそして水平化作用の及ぶ自然営力によると思われる。

2．水平層がピットの底部や中層にある程度の厚さであった場合、そこの面での一定の時間的な経過が長かったことを意味する。そこで使用されたか、放置されていて長い時間次の埋没がなされなかったと推定される。

3．傾きをもって流れ込んだようになっているとき、それが概ねレンズ状や水平状をなしている場合は自然的な流れ込みと考えられるが、傾斜の方向が乱雑であったり、量的にどっとかたまっている様相のものは、自然的とか人為的とか限定はできない。時間的な面でいえば、各層間の堆積に至る時間的経過は1の場合より短く、次の4の場合よりは長いと推定される。

4．土層がブロック状やモザイク状を成すときは、各層が比較的短時間に堆積していったことを示している。これは人為的な埋め戻しによるものとみられるが、自然的なものとすればその流入や崩落が次々と起こり、その間に降雨、流水等の削平や水平化作用を受けなか

った結果であろう。また土層一部にブロック状にあらわれているものは崩落土や投げ捨てと見るべきだろう。

5．ピット内に同質の土層が厚く存在するときは、きわめて短時間の堆積を意味し、この場合も人為、自然とどちらかは速断できない。

以上の5点をふまえ、検出された状況をあてはめ次のように堆積土層を類型化した(第59図)。

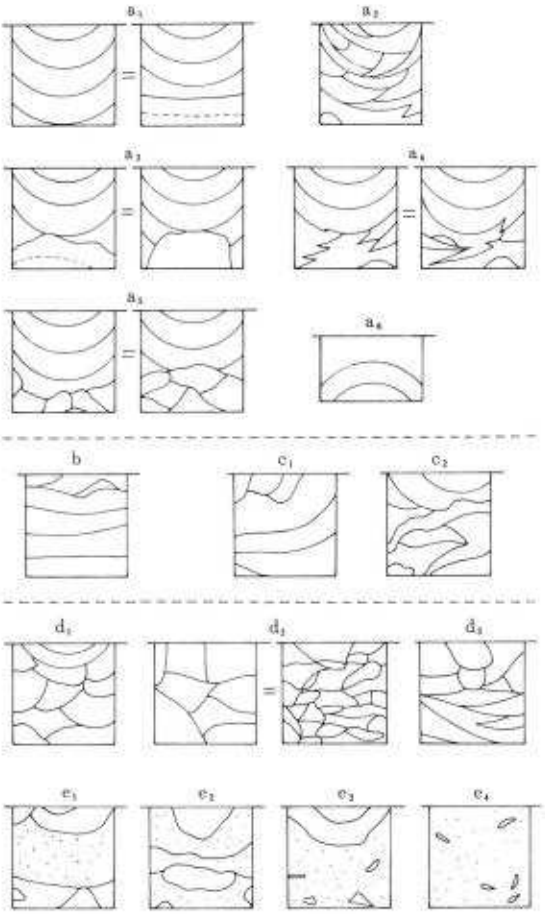
(a型)　レンズ状堆積を主とするタイプ
- a_1＝ほぼ底面までレンズ状を成す。底に水平状堆積や小ブロッ土も見られる。
- a_2＝流れ込みや小ブロックの土層がレンズ状を成して堆積する
- a_3＝下半部に比較的厚い土層が入る。
- a_4＝下半部に流れ込み状の土層が入る。
- a_5＝下半部にブロック状の堆積がある。
- a_6＝逆レンズ状のもの

(b型)　水平堆積が主とするタイプ

(c型)　流れ込んだように堆積するタイプ
- c_1＝層序が単純である。
- c_2＝複雑に入り組むが、レンズ状をなす部分もある。

(d型)　ブロック状堆積を主とするタイプ
- d_1＝ブロック状堆積の上部にレンズ状堆積を一部にもつ。
- d_2＝ブロック状のみである。ブロックが大きいものとモザイク的に細かいものがある。
- d_3＝下部に流れ込み状の堆積がある。

(e型)　単一層が厚く堆積するタイプ
- e_1＝底部に他の土層が堆積している
- e_2＝大きなブロック状の土層が入り込む。
- e_3＝上部にレンズをもつ。
- e_4＝ほとんど一層のみである。



第59図　堆積土の類型

a_1～e型の堆積土層を呈するためには、既述の5点の考え方から、次のような条件や要因を推定できるのである。各類型毎にまとめてみた。

(類型)－(各層堆積までの時間)－(崩落や堆積の場所・量)－(層を形成する要因)

a_1型 － 長い――――――――――ほぼ均等に、徐々に――――崩落、流れ込み（自然）

a_2型 － 長い――――――――――不均等に――――――――――　〃

a_3型 － はじめ短く、後長い――――はじめ多量に、後ほぼ均等に――　〃

a_4型 — はじめは較的短く、後長い —はじめ不均等に、後ほぼ均等に —崩落、流れ込み（自然）

a_5型 — はじめ短く、後長い————はじめ不均等に、後ほぼ均等に — 〃

a_6型 — 長い（a_1より短い）————はじめ中央に、後全体的に——— 〃

b 型 — 長い（各層間にa_1より間がある）——ほぼ均等に————— 〃

c_1型 — a_1～bより短い（長い部分もある）——不均等に——崩落流れ込み、埋め戻し投げ捨て（自然）（人為）

c_2型 — 〃 — 〃 ——— 〃 〃 〃

d_1型 — はじめ短く、終わり長い——不均等に、終わりほぼ均等— 〃 〃

d_2型 — 短い————————不均等に————————— 〃 〃

d_3型 — はじめ長く、後短い————不均等に————————— 〃 〃

e 型 — 短い————————不均等に、多量に —急な埋没（自然による洪水とか）

埋め戻し（人為）

各層の堆積までの時間の長短は、各類型を比較した相対的なものであり、絶対的な時間の尺度ではない。またその中味は、ある層が堆積し次の層が堆積しはじめるまでの時間的経過の長短であり、全体が埋まりきるまでのものではない。ただしほぼ埋まりきるまでに要した時間的長短を比較すれば、b型→a型→c型→d、e型の順で長い→短いが想定されるが、規模との相関や場所、土質的な条件がからんでくるので、一概にはとらえられない。

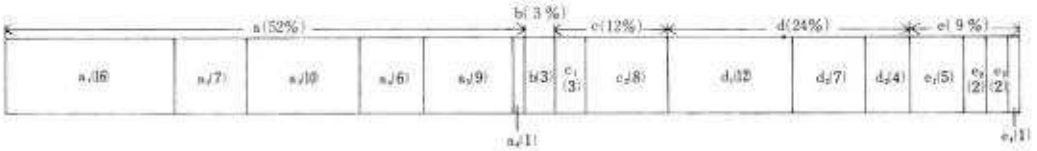
a型の中にブロック状に混入する部分が存在する場合は、自然なブロック状の崩落とともに人為的な投げ込み行為をある程度考えなければならない。

以上のような堆積土類型から、埋没前の大型ピットのあり方を推定すると、a型とb型は空洞のまま放置状態にされていたと考えられ、c型～e型は空洞のまま放置されていたか、又は堆積土が充塡されていた場合が考えられる。またピットの構造的な面から見ると、a型の中においてa_3～a_5型は、ピットの上部が他に比較して崩落しやすい形態をとっていたのではないかと思われるが、b～e型についてはなんとも言えない。

次に大型ピットの各堆積状況を類型に合わせてグルーピングしてみた（第60図、第11表）。どれに分けるか決めかねるものは、相対的に比較しともかく分類した。したがって統計的な数字をめぐる解釈は、一定の傾向性をつかむ方向でとりくんだ。複合の可能性のある断面K、L型を除く、A～J型における全体的な堆積土類型の数は第60図に示した。この結果によって認められる全体的な傾向は次の如くである。

大別からみればa型(52%)、d型(24%)が多く、b、c、e型は少ない。このことは堆積土の考え方から、空洞のまま放置されていたものが、少なくとも半分以上あり、埋め戻された可能性のあるものは少なかったといえる。また急激な自然力（洪水等）を想定したe型も少ない。

細別からみればa_1型やa_3型、a_5型、d_1型が多い。これはきわめて徐々に埋没したものや、は



第60図　堆積土類型毎の個数

じめに崩落があり後は徐々に埋没したもの、上部まである程度埋め戻されていたものの３つのあり方が大勢を占めていたと考えることができる。きわめて少ないa_6型やｂ型、c_1型、e_2～e_3型はそのピットが上記の３つのあり方とは大きく異なった要因で堆積したであろうし、ひいては他の大部分のピットとはちがった用途が個々に検討されなければならないグループと把えられる。

次に堆積土中における黒色（黒褐色）腐植土や地山の土（黄褐色シルト）のあり方は、使用時の床面や埋没過程を知る大きな手がかりになるものである。黒色腐植土が底面にほぼ水平に一定の厚さで存在する場合は、そこにおいて一定期間の活用がなされたことを意味していると考えられる。その堆積が底面に見られるのは25（全体の25%）である。断面類型の中ではＤ型やＨ型に比較的多く見られ、堆積土類型では徐々に自然堆積していった様相を示すａ型やｂ型に多く見られる。

堆積土中における地山の土（黄褐色シルト）の混入の仕方には、ブロック状や粒状に、また大量に入っているなどがある。本遺跡の大型ピットの場合、地山の土を深く掘り込んでいるため、当然ながら黄褐色土を含んでおり、全く見られないものは２例にすぎなかった（CH09ピット、DC06複合ｃピット）。その他のピットは何らかの形で混入している。

その主な要因には壁の自然的な崩落、掘り上げた土の流入と人為的な埋め戻しが考えられる。前者の自然的な要因の場合、堆積土層へのあらわれ方は、量的に多い少ないはあるが、ブロック状に入っているか粒状になって混入しているかであろう。後者の人為的埋め戻しの場合、掘り上げた土をすぐに埋める行為が必要であったとすれば、かなり多量に入っているはずであるし、又ある程度の使用期間があって廃棄された段階で埋め戻されたとすれば、表土的な黒褐色土が多く入る場合も想定はされる。掘り上げて短時間後すぐに埋めた程の多量な黄褐色土の見られるのは20程あるが、堆積土類型の考え方からすればレンズ状を主体としているものは、おそらく自然的な崩落や流れ込みと推定されるので、それらを除いた10のピットは人為的に埋め戻された可能性をもっていると考えられる。CE50複合ａピット、CI 56複合ｄピット、CI 74ピット、CH50No.1ピット、CG06複合ｂピット、CG03複合ｃピット、CG30ピット、CJ 65ピット、DB27ピット、DC50ピットである。断面類型でみるとＡ型２、Ｄ型1、Ｅ型３、Ｈ型２、Ｌ型２となっている。

黄褐色土が自然的な壁の崩落と見られる場合、その量が非常に多いときは、壁の上半部は使用時又は廃棄時の形をほとんどとどめていないほど変わってしまっていることが推定できる。ただしこれらの中には掘り上げた土が開口部周辺にあり、降雨、流水等によって大量に流れ込んできた場合も合わせて考えなければならないものであろう。またピット上層部に黄褐色土がレンズ状に存在する場合は、同様に掘り上げた土の再流入堆積があったと考えて良いと思われる。その例はCF03ピット、DC56ピットなど17例あげることができる。

〈含有物と遺物〉 底面や堆積土中に残されていた礫、炭化物、焼土そして遺物等のあり方はピットの用途を推定する手がかりとなるものである。ピットの底部は砂礫層にまでとどいているものが多く、従って礫が堆積土中にあるのは不自然ではないが、多量に含まれている場合は人為的なものを考えるべきだろう。しかし、そのようなものは見られず、上層～下層にまばらに入りこんでいる場合がほとんどである。ただ礫が底面に比較的まとまって残っているのはDB09、CE15、CJ50No.2などである。意図性をもった礫の存在は認められなかった。

炭化物が多量に含まれているのは、DC15(下)、CJ09(全)、DA09(全)、DA12(上)、DA21No.2(全)の5つのピットである。このうちDA12ピットは上層に、DC15、CJ09は下層に多く、DA09、DA21No.2は全体的に多い。そして炭化物を多く含む部分は共通してブロック状の堆積を示していることから、人為的な行為が想定されるが具体的には不明である。その他炭化粒を少量ずつでも含んでいるピットは全体の70%程あり、断面類型や堆積土類型になんらかの傾向性があるか調べて見たが、きわだった特徴は見られなかった。このことは旧表土層には炭化粒がある程度含有されていた地域であったことを示していると思われる。

焼土が含まれた堆積層を持つピットは12であった。そのほとんどは上層に含まれ、流れ込みもしくは投げ捨てと見られるものであるが、下層に存在したのはDA21No.2ピットである。その量は少なく、ピット中において火を使用したとは見られず、投げ捨てと考えられる。

遺物は既述のようにほとんどが縄文土器である。遺物の出土したピットは複合しているものを含めて約80である。そのうち土師器、須恵器片は9つのピットから出土しているがいずれも縄文片と混入し、個数も少ないがCI74ピットは比較的多い。石器は5つのピットから出土しているが1～2点と個数は少ない。特殊な遺物として耳栓の出土を見たのはCJ59ピットと落ち込み遺構Bのdピットの2つである。堆積土がほぼ自然堆積と見られることから墓壙と認められるものではない。

縄文土器のあり方は、破片が少量のときは埋めたての際のまぎれ込み、流れこみと考えられ、破片が多量にあった場合は人為的な投げ捨てや据え置きが、ほぼ完形品が含まれる場合は人為的な投げ捨て、埋設、据え置き等がそれぞれ考えられる。1～10、又は10～20点ほどの破片数を出土したものが過半数を占めるが、破片数40点以上の特に多いピットは7、復元できる個体

を出土したものは13である。底面にほぼ完形に近い深鉢を出土しているのはCH12No.2ピット、CH18No.2ピット、CH50No.1ピット、CJ03No.1ピット、DB03複合Cピットの5基であるが、これらはすべて横倒しとなったもので、正位又は逆位に埋められた様相はない。置かれていて埋没の段階で倒れたのか、投げ捨てられたかのどちらかであろう。

土器破片を敷きつめるとか、並べた形跡はどのピットにも見られなかった。また土器ばかり大量に入っているというものもない。本遺跡のピットの遺物は自然的な落ち込みと埋め戻しによるまぎれ込み、一時的な投げ捨てによるものであろう。

遺物はピットの設営期を求める手がかりとなる。上層部出土のものは後世の攪乱が及ぶことが考えられ、また少量の破片ではまぎれ込み、流れ込みの可能性があり、結局復元個体を下層にもつものをその土器の時期に使用されたピットと推定した。それが既述の5ピットで土器の形態から後期初頭に位置づけられる。また後期の土器を少しでも含んでいたピットは27、その他は時期比定のできない縄文土器出土であるし、中期土器片は13のピットからである。それらの遺物を出土した80基のピットのうち、断面形の明確なピットについて、規模、断面類型における傾向性は時期別に顕著なあらわれ方はしなかった。数量的な把握ではその限界性を問われるが、出土層位や量から見て、多くのピットは後期初頭につくられたと推定される。

〈断面形とその崩落について〉 ピットの平面形と断面形は使用時又は廃棄時の形態をそのまま残している場合と埋没過程における崩落や崩壊によって元の形をとどめていない場合とが考えられる。前者の場合に廃棄後の埋没がはやかったことであり、人為的な埋め戻しや短時間における大量の流入堆積によってピット内部が堆積土によって充たされた状態にあったことが推定される。とすればそのような堆積土を示すピットが元の形をとどめている可能性が高いと思われる。既述の堆積土類型の考え方から見ると、類型c型、d型、e型を持つものがそれにあたる。

一方埋没過程で崩落があり、元の形をとどめている可能性の低いものは堆積土類型a型、b型をもつものであろうと考えられる。そのために断面形と堆積土類型を対応させてみたのが第11表である。数字はその欄にあたるピットの個数である。

この表から、各断面形に対応する類型を見てみた。細分のため個数は少なくなっているが、全体的な傾向性は次のようになる。

断面形A型、C型、E型、F型は堆積土a、b型とd～e型がほぼ半々の比率となっている。また断面形B型、D型、H型、I型は堆積土a、b型に比べ、d～e型が非常に少ない。またG型やJ型においてはd～e型の方が多い。このことから埋没前の元の形を残している可能性の最も高いのはG型、J型、残していないものはB型、D型、H型、I型、半々ぐらいとみられるのがA型、C型、E型、F型となる。

堆積土 / 断面	a_1型	a_2型	a_3型	a_4型	a_5型	a_6型	b型	c_1型	c_2型	d_1型	d_2型	d_3型	e_1型	e_2型	e_3型	e_4型	計
A型	3	0	0	0	1	0	1	0	1	3	0	1	0	1	0	0	11
B型	3	4	3	0	2	0	0	1	2	0	1	0	0	0	1	0	17
C型	6	0	2	2	1	0	0	0	1	4	2	0	3	0	1	0	22
D型	1	2	2	1	3	0	0	1	1	2	0	0	0	1	0	0	14
E型	1	1	3	1	0	0	0	0	0	3	1	1	2	0	0	0	13
F型	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
G型	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	4
H型	0	0	0	2	1	0	2	1	1	0	0	1	0	0	0	0	8
I型	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
J型	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
K型	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2
L型	2	0	1	2	2	0	0	1	5	1	3	0	0	0	0	0	17

表11表　断面形と堆積土類型の対応

次に崩落土（黄褐色土）の含有量から考えられるのは、堆積土中にその含有量が少ないものは大きな崩落がなかったことに結びつくし、多いものは崩落がはげしかったかもしくは掘り上げた土（地山の土）の再流入堆積が多かったということである。従って堆積土がａ～ｃ型にあっても黄褐色土の混入が少ないものは、元の形から大きくは変わっていない断面形を呈しており、多いものはその逆として見られる。そこで堆積土中における黄褐色土の含有量が多いピットを堆積土ａ～ｃ型の中から抽出すると次のようになる。（　）内は堆積土類型。

断面Ａ型――ＣＨ03(b)、ＣＩ09(a_1)、ＣＪ65(c_2)、ＤＤ03No.2(a_5)

〃　Ｂ型――ＤＢ24複合a(c_2)、ＤＣ24ピット(a_3)、ＤＣ59(a_3)

〃　Ｃ型――ＣＥ18(a_3)、ＣＧ27(a_1)、ＤＤ12(a_4)

〃　Ｄ型――ＣＦ30(a_5)、ＣＩ56複合d(c_2)、ＤＢ53(a_5)、ＤＣ30(a_4)

〃　Ｅ型――ＣＣ50(a_3)、ＣＨ12No.2(a_1)、ＣＪ03No.2(a_4)、ＤＤ24(a_3)、ＤＢ59(a_2)

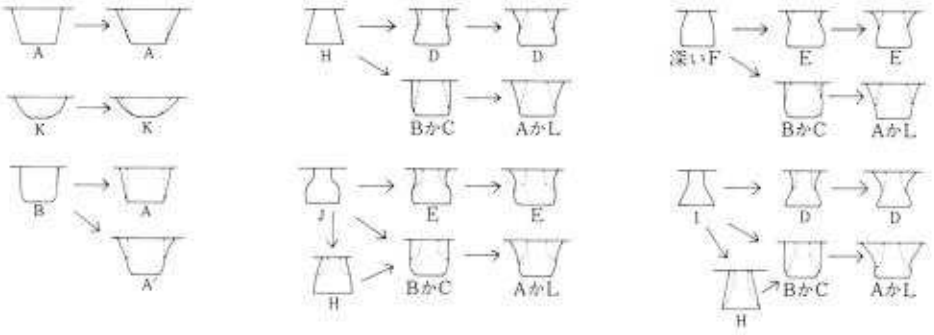
〃　Ｈ型――ＣＧ06複合b(c_2)、ＣＪ09(a_5)

各断面形の堆積土ａ～ｃ型を呈するものから、上記のピットを除いたものは、崩落土が少なかったと見られ、元の形から大きく変形はしていないものととらえる。そのようにして、これまでの結果を表で示すと第12表のようにまとめられる。

堆積土 ＼ 断面形	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
㋐a_1～c_2型(黄褐色土が多い)	4	3	3	4	5	0	0	2	0	0
㋑a_1～c_2型(黄褐色土が少ない)	2	12	9	7	1	1	2	5	2	1
㋒d_1～e型	5	2	10	3	7	1	2	1	0	1

第12表

下図は本来的なピットの形態から想定される崩落(崩壊)後の断面形である。



第61図　断面形の堆移の想定

上記の崩落による断面形の変化を第12表の数量と合わせてその分析をしてみると次のような考え方、本来のピットの形についての示唆を与えてくれると思われる。

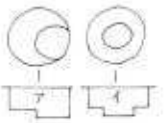
○A型は元の形と見られるのは㋐の5基、変化の少なかった、つまり元々の形がA型やB型であったのは㋑の2基、C型～J型であったのが大きく崩落した結果と見られるのが㋐の4基と推定される。次にB型は、元の形と見られるのは㋒の2基であり、元々の形がC、D、E型と推定されるのが㋑の12基、そして大きく変化した結果、つまりH型やI型やJ型からB型になったと見られるのが㋐の3基というように考えることができる。

○同様にしてC～J型についても検討してゆくと、崩れる前の元の形として推定されてその個数が増加してゆくのは断面D型～J型であり、特にH型、I型、J型は現存する個数よりもかなり増えると思われる。

○このような分析から、埋没前の元々の形がA型やB型であったと推定される個数は、A型の㋑+㋒の7基とB型の㋒2基、合計9基だけとなり、その他は近似したものも含めたフラスコ形となる。検出された断面形を見るとビーカー形(A+B)28、フラスコ形近似(C+D+E+F+G+H+I+J)67、鍋底形は2となっていた(→104p)、つまりフラスコ形近似のものが、L型を除いた全体の70%であった。しかし埋没前の形態を分析してみた結果、ビーカー形9、フラスコ形近似86、鍋底形2となり、フラスコ形近似のものは全体の約90%となる。本遺跡の大型ピットの設営時の断面形はフラスコ形又はそれに近似のものがほとんどであったといえる。

(複合型－断面L型について)　断面形L型としたグループは、2基のピットが重複しているような二重円構造ものとして一括している。重複しているものを除けば、単独でその形であった可能性をもつ。L型の中で重複していないことが明確なものを抽出すると、62図のアにあたるピットはCG03複合a、CH77、DB18、DC09、DC15、図のイにあたるピットはCE30、CG06複合a、DA18、DB03No.1である。また1個の単独のピット(断面A～J型)で

あったものが、崩れて断面Ｌ型を呈していると思われるのがＣＩ62№2とＤＢ12複合ａの２基である。その他は重複していると見られるものである。断面Ｌ型が本来的なピットの形態のひとつとしてあったかどうかは結論づけできないが少なくとも埋没の段階では９基ほどあったと推定できる。底面における比較的大きなピット状の掘り込みがどんな用途や意図をもっていたかは不明である。



第62図

〈底面の小ピットについて〉　底面に小ピット状の凹みを有しているものは20基である。その位置はほとんどが底面のほぼ中央にあたる。径30cm程で深さは15cm前後のものが多く、しかも柱穴様に明確な小ピットは、ＣＪ50№1とＤＡ06ピットの２基に見られるだけで、大部分はゆるく凹んだ形状である。

小ピットを有するものに一定の傾向性があるか、規模、断面形等で調べてみたが特に見い出せなかった。ピット内の水取り穴的な用途は考えられるが、柱穴としては浅いため認めがたい。が、支え棒的なものをたてるためとは見ることができるだろう。

〈大型ピットの分布傾向〉　全体的な密集度から見ればＣＩ区～ＤＣ区にわたる地域に多く集まっている。断面形や規模毎の分布に一定の傾向はなく全域に混在した様相を示している。

後期の土器の出土するピットは比較的西側地域に、中期の土器はＣ区全域にという傾向性はあるが、時期比定できない土器の出土も多く、土器による時期別の編在性は把えられなかった。

②大型ピットの用途・性格

各地で発見されるフラスコ形（袋状）ピットやピーカー形ピットなどの土壙は、種々の説が唱えられているが、近年の資料の増加からほぼ植物質食料、種子や堅果類の貯蔵施設という用途が一般的であったと推定されている。(注1)そして二次的な転用として墓壙や捨て場に利用され、また特殊なものとして「ねぐら」、(注2)「陥し穴」等が考えられている。東日本でフラスコ形ピット類似の小竪穴が前期末～後期初頭の時期で、特に中期に盛行したと認められるという。(注3)

大規模な発掘により県内においても多くのフラスコ形ピットが検出され、そのあり方は上記の推定を裏づけているとともに、地域的な特殊性も示しつつある。県内で大型ピットが多数検出された遺跡としては西田遺跡(注4)（130基）、繁Ⅲ遺跡(注5)（フラスコ50基）、湯沢遺跡(注6)（187基）、天神ヶ丘遺跡(注7)（調査は４基だが東区に確認されたもの160基以上）、長者屋敷遺跡(注8)（245基以上）、川向Ⅲ遺跡(注9)（67基）、鳩岡崎遺跡(注10)（200基以上）などがあげられる。いずれも隣接する住居跡群とともに機能したであろうと推定されている。

本遺跡の場合、検出された住居跡は中期の１棟のみであり、これだけ多くのピットを設営するに足る住居跡群は落ち込み遺構Ｂ内域か、もしくは調査区外の東、西域に求めなければならない。しかしその機能、用途面から住居跡１棟につきどのくらいのピットが必要であったか現

段階では明らかでなく、必ずしも大型ピットの数に比例した住居跡数は求めなくても良いものであろう。出土遺物は中期と後期にわたり重複がある。とすれば同時期に機能していた数はこの何分の一かに減少して把えなければならない。それでもなお同一区域にこれだけ集まって存在していることは用途推定の一つの論拠であろう。

一方大型ピットの分布状況からみれば、既述の遺跡の多くは住居区域内もしくは隣接する形であるが、本遺跡の場合ＣＡ12住居跡以外は住居跡が検出されなかったことにより住居跡区域と30～50m以上の距離をもって作られていたと見ることができる。

次に堆積土の様子から空洞のまま放置され自然に埋没したと考えられるものが多く、また人為的な埋め戻しが主と見られる場合も上部まで充塡されたと思われるものは少ない。これは空洞のまま使用され、また放置されてしまったピットが大部分であったことを意味している。

遺物については、土器を出土したのは約半数で、その多くは破片数20点未満であり、埋納や付設などの意図性のうかがわせるものは非常に少なかった。

また一般的な形態を要約すれば、円形プランを持ち断面やや末広がりのフラスコ形近似の形を呈し、底径 130cm、深さ 110cm程の平均値を示している。

以上の形態とあり方を総合すれば大型ピットの用途は貯蔵穴であると考えるのが妥当であろう。集落に近接したこれらの貯蔵穴が原始共同体の中でどのような規制のものにつくられたのか、自然環境や生業的な側面から今後さらに追求されるべき課題である。

（注１）　昭和56年度考古学協会（埼玉県宇都宮市）で、袋状ピットについて各地域の発表があった。
（注２）　草間俊一「日本原始時代の生活についての一考察」岩手地方史の研究（1969年）
（注３）　堀越正行「小竪穴考」　―史観―
（注４）　岩手県文化財調査報告書第56集（55年）
（注５）　岩手県埋文センター報告書第13集（53年）
（注６）　岩手県埋文センター報告書第２集（52年）
（注７）　天神ヶ丘遺跡調査報告　大迫町教育委員会（49年）
（注８）　岩手県埋文センター報告書第12集と第20集（55年と56年）
（注９）　岩手県埋文センター現地説明会資料
（注10）　岩手県文化財調査報告書第70集（57年）

(8)まとめ

縄文時代の遺構として多数検出された大型ピットは貯蔵穴と考えられる。しかしこれら多くの中に少数ではあるが復元可能な土器や耳栓状土製品を出土したものが見られたし、形態的には複合型（二重円構造）のものや底面に小ピット状の凹みをもつものがある。また円礫を上面や底面にもつものもある。これらについては二次的な転用か機能に付随したものか等の吟味が必要であったが、個々の性格づけには資料も不充分であり不明としてとどめざるを得なかった。

遺物は縄文中期初頭～後期前半にわたる土器が出土し、住居跡やピットの出土状況から土器組成の一端を示す資料が得られた。また特殊なものに子安貝状土製品があげられる。これは落ち込み遺構B内の南半部から検出された。子安貝は別名ハチジョウダカラ貝と呼ばれ、高さ8～9cmぐらいになる腹足類に属する巻貝で種子島付近から熱帯地方にかけて分布する南方産のものである。女性を表象したその形から生殖力、豊熟が連想され、古来から安産、呪術的目的に使用されていたという。フランスのマドレーヌ文化期(旧石器)、エジプト、スキタイ人の古墳、中国の墳墓などから子安貝又はその模造品が出土しており、日本においても岩手県大渡市末崎町細浦貝塚、千葉県市川市柏井町姥山貝塚などから発見され、古くから宝物や安産のお守りとして使用されていたらしい。以上は世界大百科事典(平凡社1971年)の記述の要約である。

これらのことから本遺跡における土製品もその目的、用途は安産又は呪術的なものに使用されたものと推定される。出土した地点の落ち込み遺構Bの南半部はそうすると何らかの埋葬、墳墓、祭祀の場に結びつけられる可能性を示唆しているが、既述のようにその検出状況は必ずしも明確でなかった。

縄文時代に関わる遺構は、旧河道をのぞむ低位段丘の縁辺に存在し、古代の遺構群や後世の宅地等で部分的に攪乱があり、そのため検出状況に不明確な面が少なからずみられた。また地形的には洪水等の自然営力の影響もあったことが推測され得る。それら不明の点も含めて、大型ピットや小ピット類、溝状ピット、竪穴住居跡等の遺跡全体としての規模や性格は、調査区外の東及び西域のこれからの調査によって、その全貌が把握されるべきであろう。

2　弥生時代の遺物

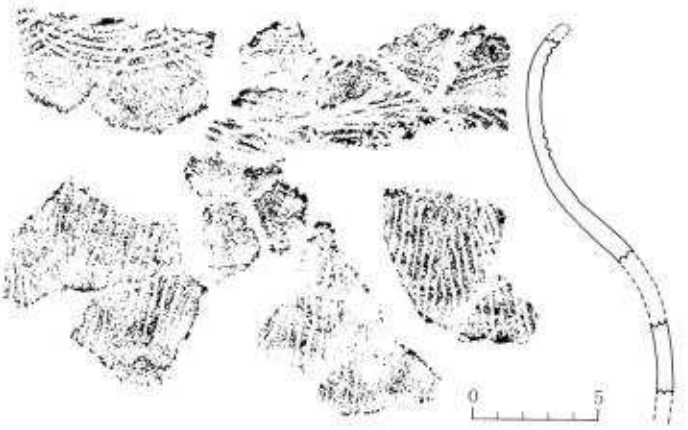
CH74住居跡の埋土中から、下図の１個体のみ出土した。頚部すぼまり壺形の器形と思われるが多数の細片に分かれてしまっており、胴下半部の形は不明である。口径、器高等の計測も不可能であったが器厚は５～６㎜の中型のもので、破片量からみて３分の１程残存している。

施文には口頚部無文地に、角のある細い棒状工具によって平行沈線の連続山形文（又は弧状）をめぐらし、胴部は細い撚糸文を地文としている。にぶい黄褐色の色調を呈し、焼成は軟弱である。口縁部片の一部からみて口唇部には低い小さな山形の突起があったらしい。

沈線文や口縁部の突起、撚糸文などから弥生後期末の天王山式系統(注1)の土器と思われる。類似した土器は紫波町堉館遺跡(注2)で出土している。

弥生時代のものと認められる遺構は検出されなかった。

（注１）「東北南部の弥生式土器編年」中村五郎　東北考古学の諸問題　昭51年
（注２）岩手県文化財調査報告書第52集（昭55年）



第63図　弥生式土器拓影図（１/３）

3．古代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡とその出土遺物

①CH74竪穴住居跡（第64図）

〔遺構の確認〕　段丘の南端近く、C調査区の東端の地山面で検出したものである。この住居跡は完全な形としては最も東に寄った地区で検出されたものである。

〔重複〕　床面下中央よりや・西にCH74ピットが存在し、北壁がCH71ピットを、そして、南西隅ではそれぞれ西、南壁が、南東隅では、南、東壁がC1 71ピット、CH77ピットを切って構築されている。

〔平面形・規模〕　平面形は、隅のや・丸い正方形で、規模は長軸（東西）約4.5m、短軸（南北）約4.4mである。床面積は約19.8㎡である。なお、南、北壁の中点を結ぶ軸線はN－16°－Wとや・西に偏している。

〔堆積土〕　4層観察されたがⅢ層に大別できる。Ⅰ層は黒褐色の腐植土で壁際を除く住居全域に広がり一部を除き床面には達していない。なお、上部には粉状パミス（火山灰）の小ブロックが含まれている。Ⅱ層は黒褐色のシルトで、ほぼ中央の床面に堆積しているもので多量の炭化物を含んでいる。Ⅲ層はやはり同質のシルトで壁際より中央に向って流れ込むような形で堆積しており、多量の焼土、炭化物を含むものである。

〔壁〕　地山をそのま・壁としているもので、南壁を除き比較的鋭い立ち上りを呈している。残存状況は、最も良好な北壁で約30cmを計る。

〔床〕　床面は地山のシルトを掘り下げ、厚さ数cmの貼り床を施しているものであり、平坦で良くしまっている。床面には「コの字」（40×40cm）状を呈する炭化材（ナラ、セン）の他、多量の炭化材が中央附近を中心にして散在していた。（図版17）散在の仕方は放射状というよりはむしろブロック状に点在しているような形で検出されたものである。その他、人頭大の川原石が4個点在していた。

〔柱穴〕　床面上から柱穴とみられるピットは検出されなかった。

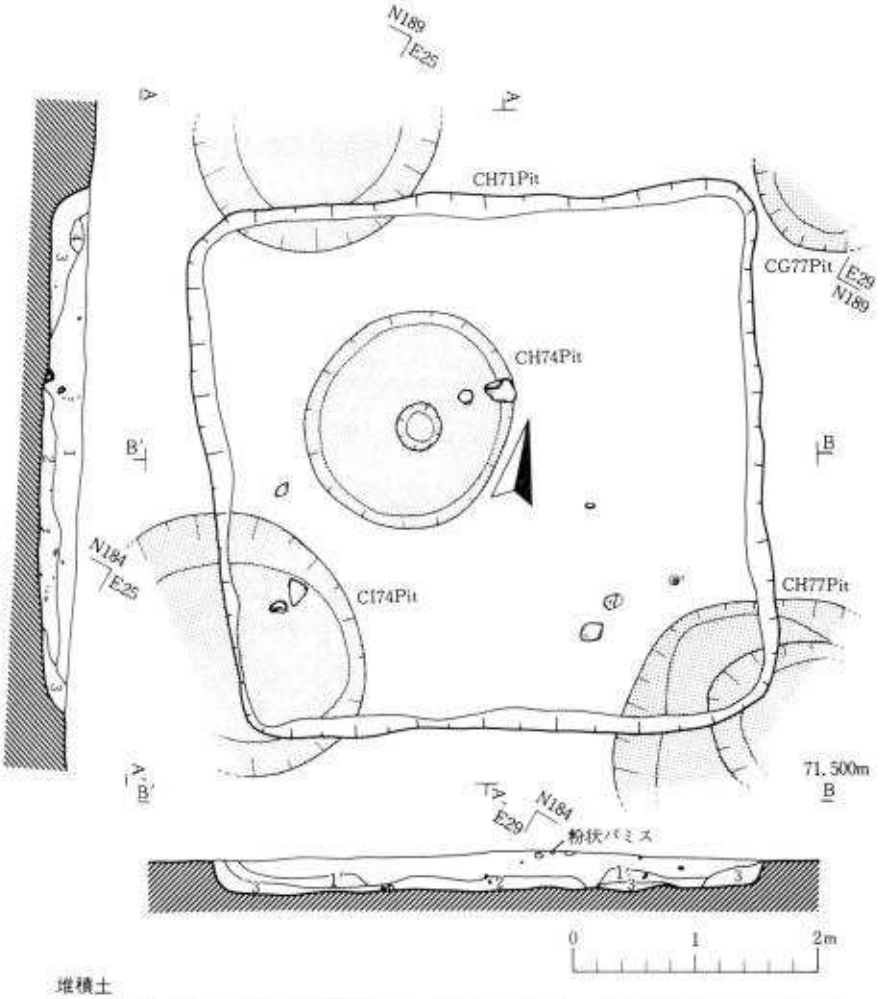
〔カマド〕　カマドと考えられる施設は存在していない。

〔その他の施設〕　周溝、貯蔵穴状ピット等の施設は認められない。

〔年代決定資料〕　住居の構築及び使用等の年代を決定する資料は、床面出土の土師器がある。

土師器　完形品、復元可能なものを含め実測したものは鉢形土器1点　壺（坩）形土器2点である。いずれも製作に際しロクロ未使用のものである。

鉢（第65図1）　底部から口縁部にかけてや・内湾気味に直立しているもので、底部は平底で底縁に張り出しがみられる。器面調整は、口縁部近くは内外面ともにヨコナデ、体部外面は下半がハケメ後ヘラミガキ、他はハケメであり、内面はハケメで底面部分にはケズリとみられ



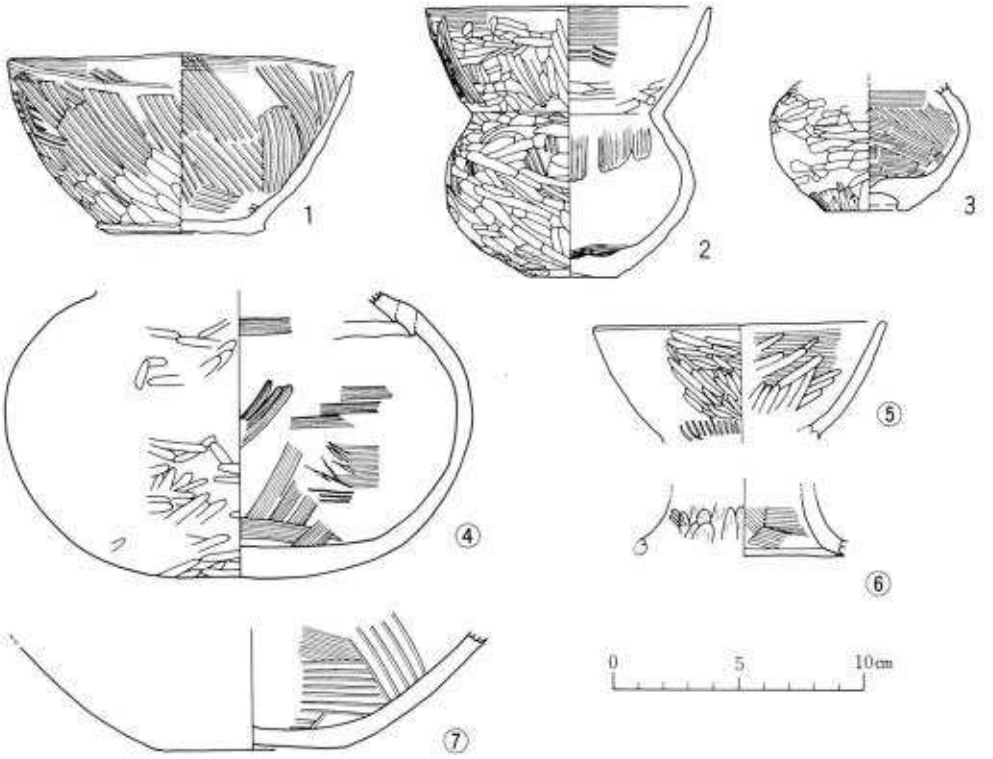
堆積土

大別	層	土　色	土　性	備　考
Ⅰ	1	10YR 2/2黒褐色	腐　植　土	上部に粉状パミス，炭化物多量に含む
	1'	10YR 2/2黒褐色	腐　植　土	炭化物少量含む
Ⅱ	2	10YR 2/2黒褐色	シ　ル　ト	炭化物多量、焼土礫を少量含む
Ⅲ	3	10YR 2/3黒褐色	シ　ル　ト	炭化物、焼土を多量に含む
	4	10YR 3/3黒褐色	シ　ル　ト	

第64図　CH74住竪穴住居跡

る調整痕が認められる。底部外面はヘラケズリされている。胎土、焼成とも不良である。

壺（坩）（第65図２・３）　(2)は、胴部はそろばん球状を呈し、体部高に比べ口縁高の高いや、直立内湾気味の単純口縁を有する坩形土器である。なお、底部中央はや、へコミをもっている。器面調整は、口縁部外面がヨコナデ、ミガキ、内面は一部ハケメがみられるがヨコナデ、ヘラミガキが施されている。又、内面はナデが施されている。底部はヘラケズリである。(3)は、



出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	床面	土師器(鉢)	ヨコナデ後ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後ヨコナデ	ヘラケズリ	7.1	13.7		6.7	
2	床面	土師器(坩)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ ハケメ後ナデ・ナデツケ	ヘラケズリ	10.7	11.4	10.0	3.6	B1
3	床面	土師器(坩)	ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデツケ		(5.1)		7.9	3.3	B
4	堆積土	土師器(壺)	ミガキ	ナデ		(11.4)		(18.6)		
5	住居内Pit(上面)	土師器(高坏)	ミガキ・ハケメ	ヨコナデ・ミガキ		(4.6)	(11.7)			
6	住居内Pit(上面)	土師器(高坏脚部)	ケズリ	ナデ		(2.3)				
7	堆積土	土師器(壺形)	ミガキ	ヨコナデ・ハケメ		(4.8)			7.5	

第65図　CH74竪穴住居跡出土遺物

底部が欠失しているが小形の壺（坩）形土器とみられるもので底部は約0.8cmもの上げ底になっている。器面調整をみると外面は底部近くに下から上へのヘラケズリが認められる他はヘラミガキ、内面は、ヨコナデ、ナデツケである。

〔堆積土出土遺物〕　巻末の第　表（以下別表と略す）の如く堆積土中より土師器、須恵器、弥生土器、縄文土器の破片が出土している。そのうち実測出来たものは4点である。

土師器　いずれも製作に際しロクロ未使用のものである。

壺（坩）（第65図4・7）　(4)は底部が丸底で、体部が楕円形に近い形状を呈するものであ

り又、(7)は底部が平底に近いやはり壺（坩）形土器の一部である。器面調整は、外面７は単位不明(4)はヘラミガキ、内面(4)はナデ、(7)はハケメが施されている。

坏（第65図５・６）　(5)は、高坏の坏部と思われる内湾気味に立ち上る口縁部の破片、(6)は高坏の脚部とみられるもの・破片である。器面調整は、前者は下半にわずかにハケメが認められ他はヘラミガキ、内面はヨコナデ後ヘラミガキ、後者は、外面はヘラケズリ一部ミガキ内面はナデである。

弥生土器、住居南東部を中心に出土したもので、口縁に弧状沈線、山形状沈線が認められるものである。（第63図）又、体部破片は細かい撚糸文の施されているものである。（詳細は弥生の項参照）

その他、縄文土器片は摩滅の著しい体部破片とアンペラ底の底部の破片である。

②DA62竪穴住居跡（第66図）

〔遺構の確認〕　段丘の南端D調査区、ＣＨ74竪穴住居跡の北西約10m の地点の地山面で検出されたものである。

〔重複〕　住居のほぼ中央床面下にＤＢ65ピットが存在し、北側はＤＡ65ピットを東側ではＤＢ65ピットをそれぞれ切って壁が構築されたものである。

〔平面形・規模〕　平面形は方形を呈しており、規模は長軸（南北）約５.１ｍ、短軸（東西）約4.３ｍである。床面積は、約 22.１㎡で、南、北壁の中点を結ぶ軸線はＮ－43°－Ｗである。

〔堆積土〕　２層観察された。１層は暗褐色の腐植質土で住居内全域に堆積しており床面には達していない。２層は黒褐色のシルトで床面上で約６cmの高さでもって全域にわたって堆積している。南北の断面にしか観察できないが２層上には両端に石が存在する幅約30cmの焼土断面が観察され、この層は生活層ということも考えられる。

〔壁〕　地山を壁としているもので東壁が鋭い立ち上りを呈しているのに対して他の壁は比較的緩かな立ち上りである。残存状況は最も良好な東壁で約26cmを計る。

〔床〕　地山をそのまま床としており全般に平坦である。特に貼り床の痕跡は認められない。

〔柱穴〕　床面上から柱穴とみられるピットは検出されていない。

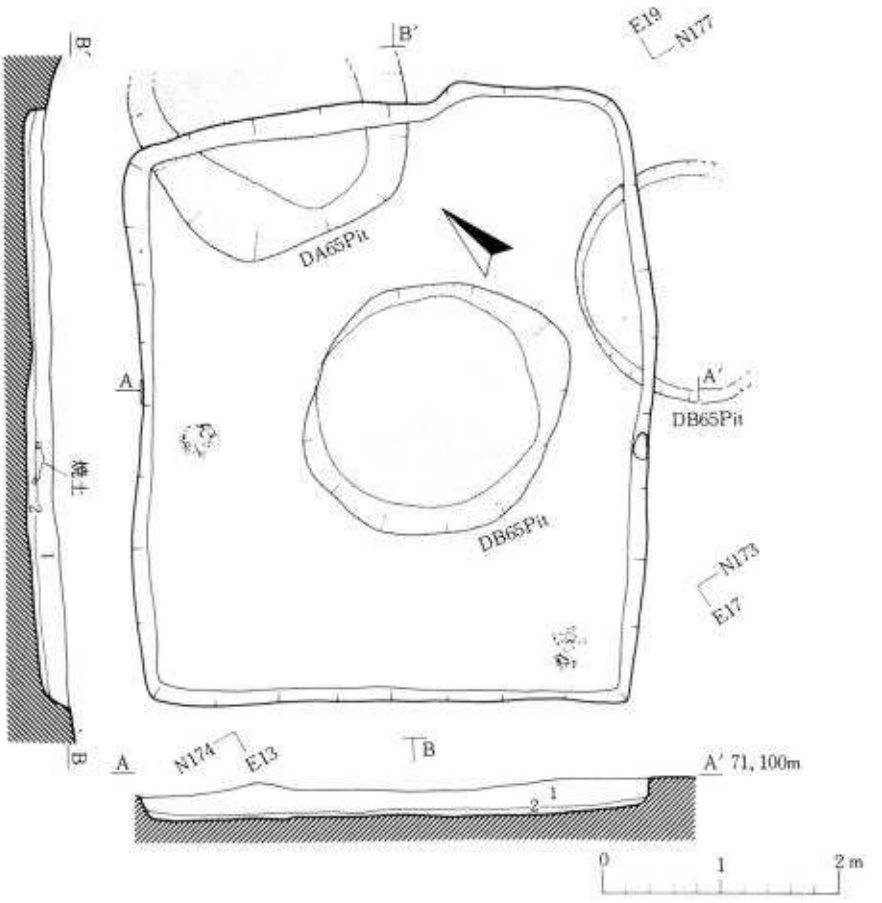
〔カマド〕　カマドと考えられる施設は存在していない。

〔その他の施設〕　認められない。

〔年代決定資料〕　住居の構築及び使用等の年代を決定する資料は、床面より出土の土師器がある。

土師器　完形品、復元可能なものを含め実測したものは鉢形土器１点、高坏１点、甕形（球胴）土器１点である。いずれも製作に際し、ロクロ未使用のものである。

鉢（第67図１）　体部はわずかに内湾気味に立ち上り、口縁部がや・外傾する鉢形である。底部は平底である。器面調整は口縁部は内外面ともにハケメ、ヨコナデ、体部外面はヘラケズ



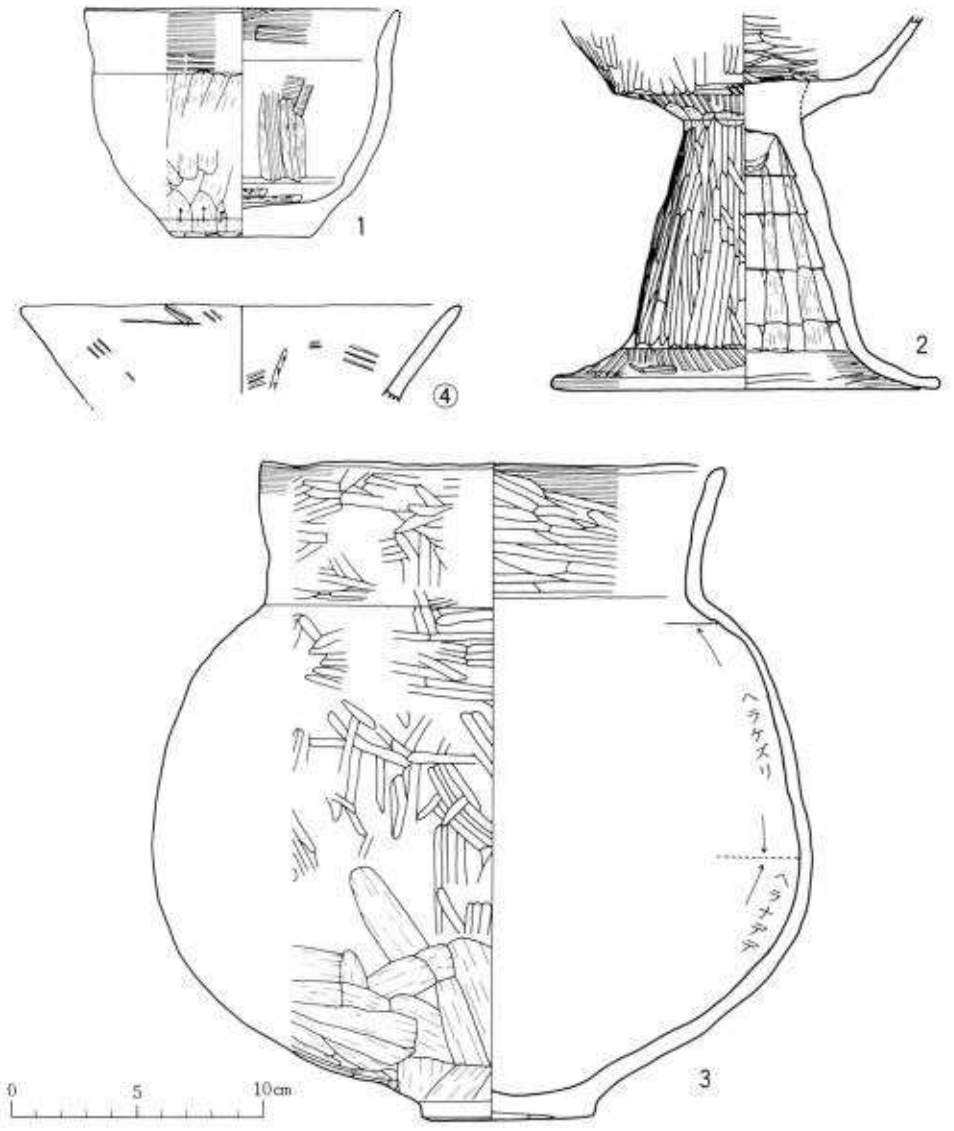
堆積土

層	土　　色	土　性	備　　考
1	10YR　3/2暗褐色	腐　植　土	木根、小礫を含む
2	10YR　2/3黒褐色	シ　ル　ト	炭化物，焼土をわずかに含む

第66図　DA62竪穴住居跡

り、内面はヘラナデ後ヘラケズリである。底部は手持ちヘラケズリがなされている。

高坏（第67図２）　口縁部の上半は欠失しているが坏部と脚部より成る。坏部は、坏部上半と下半の接合部に角がつくものであり、坏部上半は直線的に外傾しているものである。脚部は柱状部と裾部に分けられるが全体的にふくらみをもった逆台形状を呈し、裾部は大きく外反して開くものである。器面調整は、坏部についてみると、上半は内外面ともにハケメ後ヘラミガキが施され、外面下半部には、坏部と脚部を接合した時のヘラケズリがハケメ痕の後にみられる。次に、脚部外面は、ていねいなヘラミガキ、内面には、シボリ目がみられ、裾部外面にはハケメ後部分的なヘラミガキ、縁辺にはヨコナデがみられる。内面はヨコナデである。なお、こ



出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	調整		底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
			外面	内面						
1	床面	土師器(鉢)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラナデ後ヘラケズリ	手持ヘラケズリ	9.1	12.6		5.4	
2	床面	土師器(高坏)	ヘラミガキ	ヘラミガキ(坏) シボリメ(脚部)		(14.8)		(脚部高) 10.7	15.4	A
3	床面	土師器(壺)	ヘラミガキ ヘラミガキ・ヘワケズリ	ヨコナデヘラミガキ ヘラケズリヘラナデ	不明	26.1	18.5	25.2	7.0	A, II a1
4	堆積土	土師器(壺)	ヘラミガキ	ヘラミガキ		(3.5)	(17.6)			

第67図　DA62竪穴住居跡出土遺物

の高坏は、坏部と脚部と別個に製作し、ソケット様に差込み接合したものと思われる。

甕（球胴）（第67図３） 口縁部が直線的に直立しているもので体部の最大径が下半に位置する下ぶくれ状のものである。器面調整は口縁部の内外面は、口唇部近くはヨコナデ、他はヘラミガキ、体部外面は、下半がヘラケズリ、他はヘラミガキ、内面の上半はヘラケズリ下半はヘラナデである。底部は、中央部がや・へこみを有しているもので、調整は磨滅のため不明である。

〔堆積土出土遺物〕 別表のごとく堆積土中より多量の土師器片の他少量の須恵器、縄文土器片を出土している。実測したものは土師器１点のみである。（第67図４）は、内外面にハケメ後ミガキのみられる口縁部の破片である。その他、土師器の破片は、ハケメ痕が明瞭なものが若干認められるが、他は摩滅のため技法的には不明なものがあり胎土、焼成、色調等よりみると明かに当住居跡床面出土のものとは異るものである。又縄文土器片は、摩滅が著しく原体の痕がかろうじて判明するものが二、三片存在するのみである。

③ＣＪ50竪穴住居跡（第68図）

〔遺構の確認〕 段丘の南端近く、ＤＡ62竪穴住居跡の西約７ｍの地点、大半がＤ調査区にかかる位置で検出されたものである。

〔重複〕 床面下ほぼ中央には、ＤＡ53、ＤＢ53ピットが南北に接するような形で存在し、又北西隅近くには、床面下より住居外にかけてＤＡ50ピットがあり、西壁がその一部を切って構築されている。これらのピットはいずれも縄文時代に属するとみられるものである。

〔平面形・規模〕 平面形は隅のや・丸い正方形で、規模は長軸(南北)約5.40m、短軸(東西)約5.20mである。床面積は約2.80㎡である。南、北壁の中点を結ぶ軸線はＮ－62°－Ｗである。

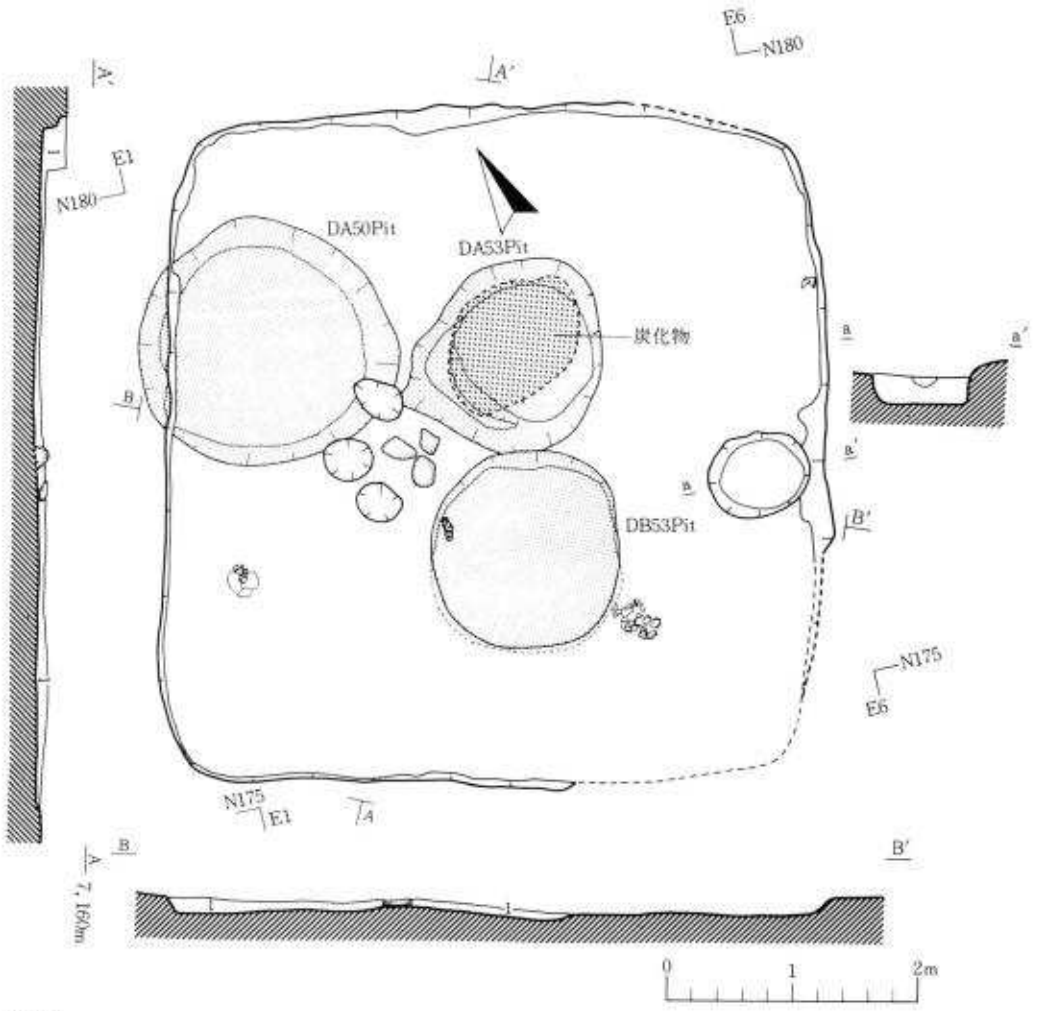
〔堆積土〕 住居内の堆積土は残りが良くなく１層のみであり、一部堆積土が欠失してみられない部分も存在する。黒褐色のシルトで炭化物、焼土を含むものである。

〔壁〕 地山をそのま・壁としているもので、最も残存状況の良好な北壁で約20cmである。他は皿状にわずかに確認されたのみである。又、北壁の一部と南東隅の壁面は削平のため確認されなかった。

〔床〕 地山をそのま・床面としているもので比較的平坦である。床面中央や・西寄りには人頭大の石３個が点在し、そのそばには径約35cm前後、深さ約６cmの皿状のピットが存在した。このピットと３個の川原石の関係は明確ではない。又、この川原石のすぐ北、丁度、ＤＡ53ピットの上面にあたる床面には、径約90×110cmの楕円状に炭化物が特に多く散在していた。その他貼り床等は認められない。

〔柱穴〕 床面上から柱穴とみられるピットは検出されなかった。

〔カマド〕 カマドとみられる施設は存在していない。



堆積土

層	土色	土性	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	シルト	土師器片，炭化物を少量含む

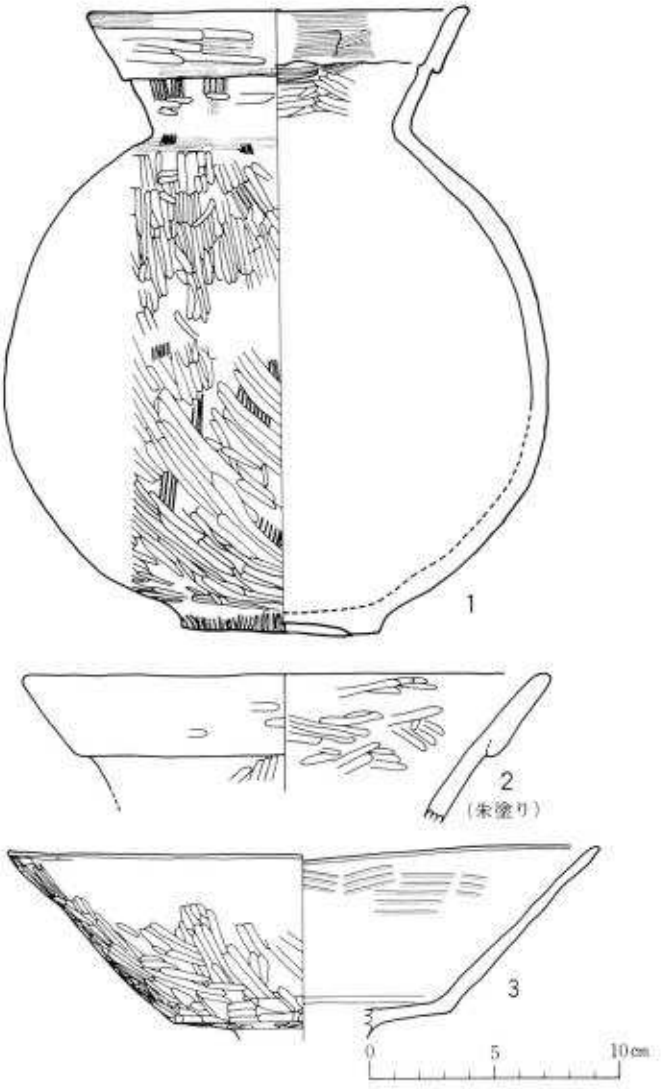
第68図　CJ50竪穴住居跡

〔その他の施設〕　東壁中央附近に壁に接するような形で、径約80cm、深さ約40cmの深鉢状のピットが存在した。堆積土は、主として黒褐色のシルトで、数片の土師器片が出土している。性格的には不明である。

〔年代決定資料〕　住居の構築及び使用の年代を決定する資料は、床面より出土の土師器がある。

土師器　完形品、復元可能なものを含め実測したものは壺２点、高坏の坏部１点である。いずれも製作に際し、ロクロ未使用のものである。

壺（第69図１・２）　口縁部が外傾しているもので、成形の際粘土を貼付して複合口縁をつ



第69図　CJ50竪穴住居跡出土遺物

くり出し、複合部が折り返し状の段になっているもので内面にも段が巡る。体部は最大径が中半よりや、下に位置する球胴である。底部は中央がや、へこみ上底風の底部をつくり出している。下半には特にスス状のもの・附着が認められる。器面調整は、(1)は口縁部から頸部にかけてはハケメ痕が残っているが丁寧なヘラミガキであり、内面上半は胴部の壁に沿ってヨコナデが施され、下半は底部に向って縦方向のハケメが施されているのが観察される。(2)、も同じく複合口縁の壺の口縁部で器形的には(1)よりや・大きいが(1)とほとんど同じものと推定されるものである。器面調整は内外面ともヘラミガキされ、外面に朱が塗られている。

出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	床面	土師器(壺)	ハケメ後・ヘラミガキ	ヨコナデミガキ・ヨコナデ	上げ底風	24.7	15.3	21.6	7.8	A
2	床面	土師器(壺)	ミガキ(朱塗)	ミガキ		(4.9)	(21.2)			A
3	床面	土師器(高坏)	ハケメ後ヘラミガキ	ハケメ後ヘラミガキ(?)朱塗		(6.9)	(23.5)			A

高坏（第69図３）　脚部が欠失しており坏部のみである。坏部上半と下半の接合部に角のつくもので、上半部は直線的に外傾しているものである。器面調整は、外面がハケメ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキが施されたもの・ようであるが単位は不明であり、一部ハケメ痕が認められる。なお、口縁部内面は朱塗りされているものである。

④ＪＧ06竪穴住居跡（第70図－１・２）

〔遺構の確認〕　調査区の最南端地域にあたる自然堤防上のＪ調査区のほぼ中央附近、東西に走る村道脇の地山面でその一部が村道にかかる状態で検出されたものである。

〔重複〕　認められない。

〔平面形・規模〕　平面形は方形である。規模は、長軸（東西）約6.5m、短軸（南北）約5.9mであり、床面積は約38.4㎡である。なお南壁と北壁の中点を結ぶ軸線はＮ－17°－Ｗである。

〔堆積土〕　細かく観察すると４層に分けられるが、Ⅱ層に大別される。Ⅰ層は黒色の腐植土で住居のほぼ全域を覆い、床面には達していない。Ⅱ層は、黒褐色のシルトで主として壁際より中央に向って床面上に薄く堆積しているものである。

〔壁〕　地山をそのまゝ壁としているもので、ほぼ垂直に近い立ち上りを呈している。残存状態は最も良好な西壁で約25cmである。

〔床〕　床面は、ほぼ平坦で良くしまっている。特に貼り床は認められない。

〔柱穴〕　床面上より柱穴と思われるピットが６個検出されている。そのうち、Ｐ₁～Ｐ₄は住居内の対角線上に位置し、径30～40cm、深さは約40cmの規模のものである。又、その南側に位置するＰ₅、Ｐ₆も類似の規模を有するピットである。これらは、配置の状況、規模等から柱穴と考えられるものであり、南側の２個についても途中における建て替え或は拡張等が行われたことを伺わせるものである。

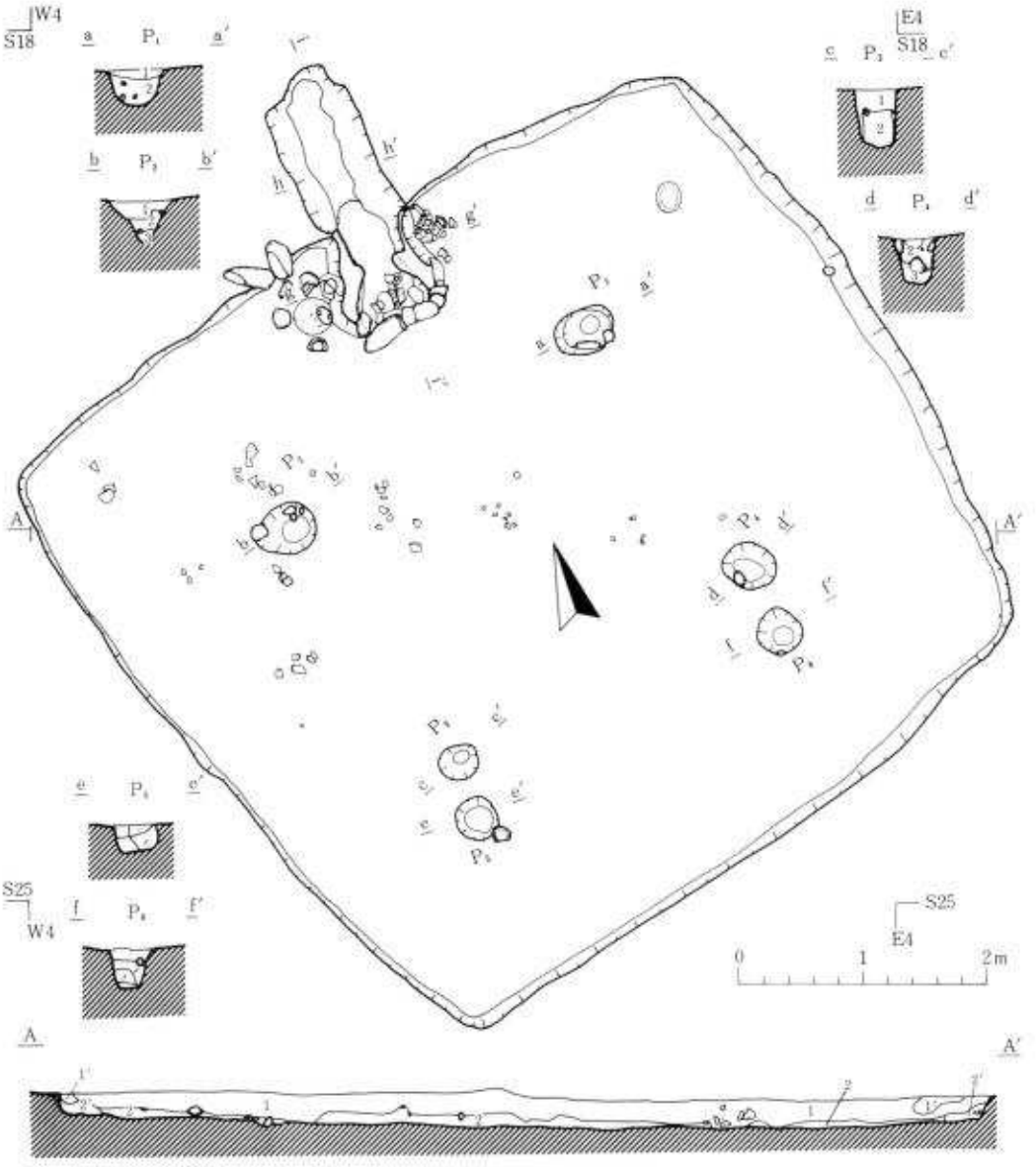
〔カマド〕　北壁のほぼ中央に付設されている。燃焼部は焚口部が「八の字」状に開き奥がせまくなっている。両側壁はシルトで構築され外側は土師器の甕の破片で補強されている。又、焚口の両側には立石（川原石）があり更には、かけ口に使用されたとみられる楕円状の川原石が焚口前に存在した。燃焼部底面からは支脚に使用したと思われる小甕が出土している。（第71図　12）　煙道は、燃焼部より特に段差もなく壁外にトンネル状にのびている。長さは約70cm，径約30cmである。煙出部には特に掘り込みは認められない。カマド方向の軸線はＮ－８°－Ｗである。

〔その他の施設〕　床面上からは柱穴以外に特に施設らしきものは検出されなかった。ただ、床面上に径10～30cmほどの川原石が多数存在した。

〔年代決定資料〕　住居の構築及び使用等の年代を決定する資料は、カマド周辺の床面や燃焼部内より出土した土師器がある。

土師器　完形品、復元可能なものを含めて実測したものは坏３点、高坏脚部２点、甕５点、甑２点がある。いずれもロクロ未使用のものである。

坏（第71図１・２・４）　底部形態はいずれも丸底、あるいは丸底と推定されるもので1Hは口縁部がや・外反気味に立ち上り口脇部でわずかに直立するもので口縁部下端には軽い段を形



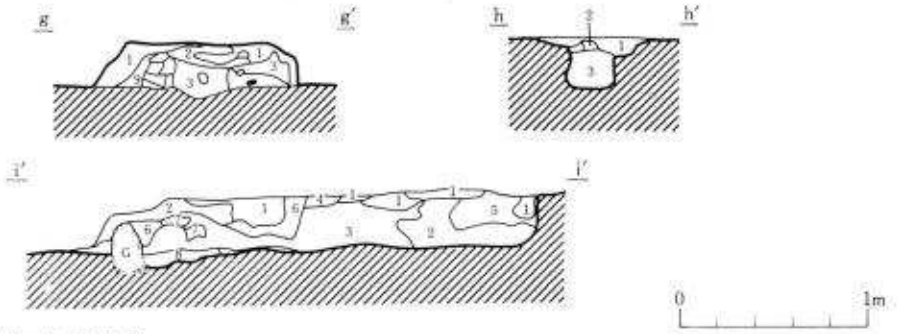
堆積土

大別	層	土	土 色	土 性	備 考
Ⅰ	1	10YR 2/1	黒 色	腐植質土	小礫を多く含む
	1'	10YR 2/2	黒褐色	腐植質土	
Ⅱ	2	7.5YR 2/3	極暗褐色	シルト	小礫，土師器片を含む
	2'	10YR 2/3	黒褐色	シルト	

堆積土(P_1～P_6)

層	土 色	土 性	備 考
1	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト	小礫を若干含む
2	10YR 3/4 暗褐色	シルト	径5cm強の礫が多量に混入
3	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト	2層と類似，黒色土のブロック混入

第70－1図　JG06竪穴住居跡



堆積土(カマド・煙道部)

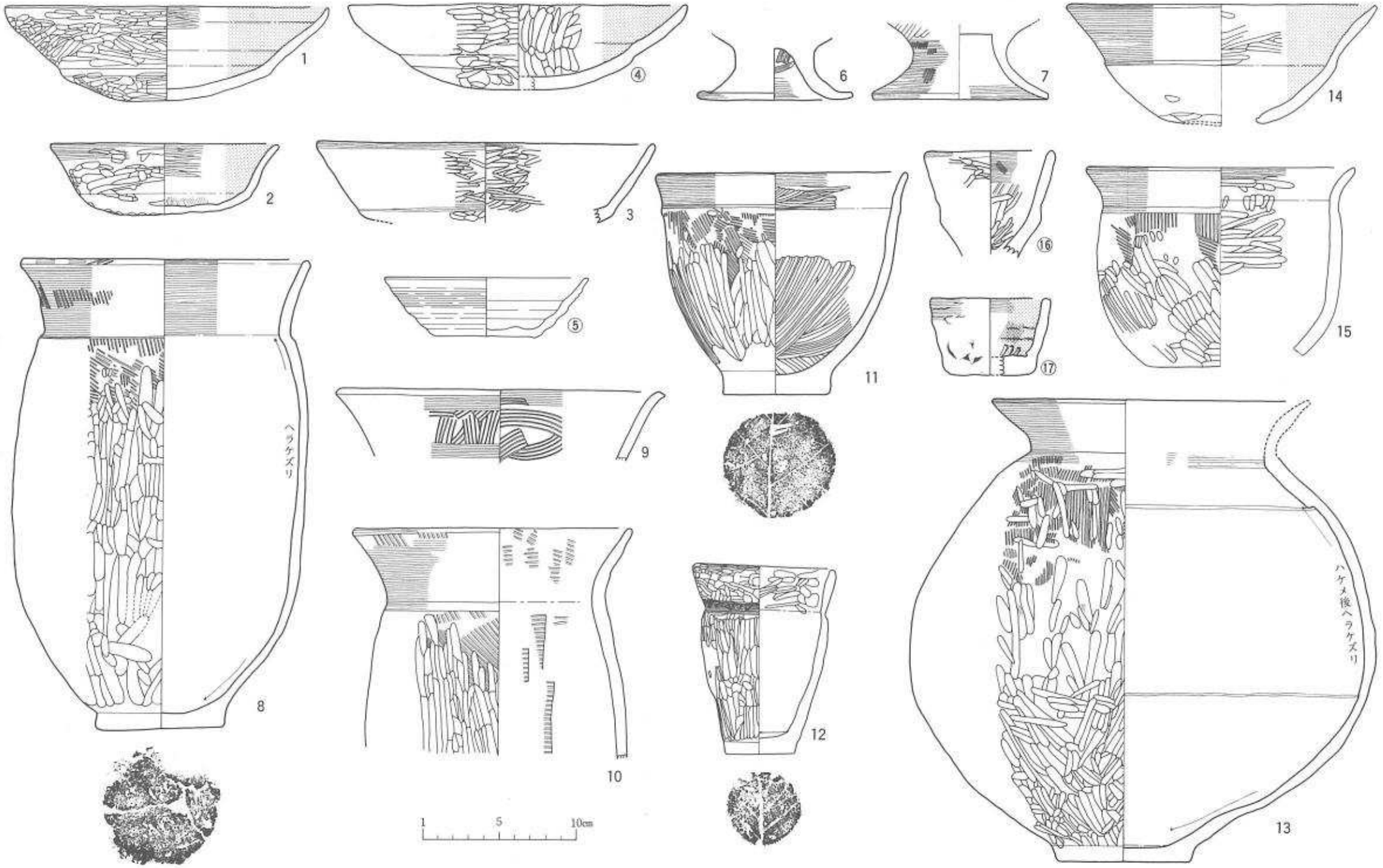
層	土色	土性	備考
1	10YR 2/3 黒褐色	シルト	地山より黒いが類似
2	10YR 2/2 黒褐色	シルト	炭化物を多量に含む
3	5YR 3/1 黒褐色	砂質土	炭化物を若干含む
4	5YR 2/1 黒褐色	クロボク	
5	10YR 2/2 黒褐色	シルト	炭化物を若干含む
6	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト	
7	7.5YR 2/2 黒褐色	シルト	焼土を微量に含む
8	5YR 3/3 暗赤褐色	シルト	焼土、熱で硬くなっている
9	10YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土、ブロック含む、攪乱つよい
10	7.5YR 4/4 褐色	シルト	焼土

第70－2図　JG06竪穴住居跡

成している。又対応する内面にも軽いくびれがみられる。内外面ヘラミガキ、内面は黒色処理されている。(2)は、底部より緩かに外反し口縁部に至るもので段は認められない。口唇部近くはヨコナデ他は内外面ともにヘラミガキがされている。底部は摩滅剝落のため小さな穴が多く存在する。(3)は外傾気味に立ち上る口縁部を有し外面に軽い段が認められる。内外面ともにヘラミガキである。底部は不明。

高坏（第71図6・7）　いずれも裾部が比較的強く外反している器高の底い脚部である。(7)は剝離面を観察すると台状の脚部に坏の底部をのせ底部の粘土を下方へ引出し脚部と接合させその上を調整している。なお、脚部の内側への粘土の充填はみられない。内外面の調整はいずれもヨコナデがみられる。

大甕（第71図8～10・13）　(8～10)は口縁部が外反する長胴或は、それの口縁部で、(8)は肩部に段を有し、胴部は下半で内湾気味にふくらみ中半はそのま・直線的に立ち上り頸部近くでわずかにすぼまりをもつ最大径が口縁部とほぼ同じもので、やや下ぶくれの感じのするものである。又、(10)はやはり下ぶくれのすると思われるもの・上半である。調整技法は口縁部内外面はハケメ後ヨコナデ、胴部外面はハケメ後ヘラケズリ、内面は、ヘラケズリ、ハケメ等がある。(13)は口縁部直下がや・直立して頸部を形成し、上半が外反する口縁部を有し、胴部は球状に膨み最大径が胴部中央や・下にあるもので器形的には壺形土器に近いものといえる。調整技法は、



第71図　JG06竪穴住居跡

出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)	ヘラミガキ	6.2	21.2			A₁
2	床面	土師器(坏)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)	磨滅	4.6	15.0			A₁
3	床面	土師器(坏)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)?		(5.2)	(22.2)			A₁I
4	堆積土	土師器(坏)	ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)		(5.5)	(22.5)			A₁
5	堆積土		ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	3.8	13.6		6.4	
6	床面	土師器(高坏)		ナデ(脚部)		4.0			10.4	
7	床面	土師器(高坏)	ヘラミガキ・ヨコナデ(脚部)	ヘラミガキ(脚部)		(4.3)			11.5	
8	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ・ハケメ後ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラケズリ(上→下)	ヘラケズリ	20.7	18.9	19.2	8.4	A₁Ib1
9	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ	ナデ		(4.5)	21.6			A I
10	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ・ハケメ後ヘラケズリ	ハケメ(部分)・ハケメ		(14.5)	18.4			A₁IIb1
11	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ハケメ後ヘラケズリ	ヨコナデヘラケズリ・ヘラミガキ	木葉痕	14.4	16.6		7.0	A₁Ib1
12	カマド内	土師器(甕)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラケズリ・不明	木葉痕	12.3	9.4		4.6	A₁Ib1
13	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ハケメ後ヘラケズリ	ハケメ後ヨコナデ・ハケメ後ヘラケズリ	ハケメ後ヘラケズリ	22.2	21.9	22.5	8.8	A₁IIa1
14	床面	土師器(甑)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラミガキ		7.8	20.4		5.0	BII
15	床面	土師器(甑)	ヨコナデ・ハケメ後ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラケズリ		13.0	17.7		10.0	BII
16	堆積土	小形土器	ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラミガキ		(7.7)	(8.4)			
17	堆積土	小形土器	ナデ	カキメ?		6.2	(7.9)		(4.6)	

口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はハケメ後ヘラケズリされている。

中甕（第71図11） 肩部に軽い段を有し口縁部が直立気味にわずかに外反し、器高に比べて口径が大きいもので器形的には鉢型土器というものかもしれない。調整技法は口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコナデ後一部ヘラミガキ、胴部外面はハケメ後ヘラケズリ、内面はヘラケズリされている。底部は木葉痕である。

小甕（第71図12） 肩部に段を有し口縁部がわずかに外傾するもので、胴部は底部よりあまり膨みをもたずやゝ直立気味に立ち上るものである。調整技法は口縁部内外面、胴部外面は細かいヘラケズリ胴部内面は磨滅のため技法は不明である。底部は木葉痕が認められる。

甑（第71図14・15） いずれも無底式のものである。14は、丸底で口縁部が外反し、体部と口縁部の境に段を有する深い坏の底部に穴をあけたようなものである。底部は焼成前に穴をあけており甑的に使用されたものと思われる。調整技法は口縁部外面がヨコナデ、内面はヘラミガキ、底部は特に調整はみられない。なお、内黒処理されている。15は、肩部に軽い段を有し、口縁部が外反する器高に比べて口径の大きいものである。調整技法は口縁部内外面はヨコナデ、一部ヘラケズリ、体部内外面はハケメ後ヘラミガキがなされている。焼成後に意図的に底部に穴をあけて、甑として使用したものと思われる。

〔**堆積土出土遺物**〕 別表の如く土師器の破片が出土している。実測したものは、坏2点、

小型土器２点である。

土師器

坏（第71図３） 口縁部が外傾気味の丸底坏である。底部との境に段を有し対応する内面にくびれのあるものである。調整技法は、内外面ともヘラミガキ、内黒処理されたものである。

小型土器（第71図16・17） 16は、口縁部が外傾し体部との境に段を有するもので、一見坏の口縁部の破片の如くであるが底径や器厚等からみて小型土器としたものである。17は、小さいながらも粘土紐を巻き上げ雑にナデているコップ型である。内面は黒色処理されている。調整技法は内外面ともに雑なナデである。

赤焼き土器

坏（第71図５） 製作に際しロクロを使用しており、切り離しは糸切り無調整である。体部は直線的に外傾して口縁部に至る。底部及び体部下半に黒斑が認められるものである。

その他、土師器坏の破片２片を除きいずれも有段、内面にくびれを有する内黒の破片であり、技法は内外面ともにミガキである。甕は、長胴、球胴の破片で大半はハケメ・ミガキのものである。底部は、ケズリ等何等かの調整の行われているもので木葉底は少ない。

⑤ＪＦ15竪穴住居跡（第72図－１・２）

〔**遺構の確認**〕 Ｊ調査区の西側、ＪＧ06竪穴住居跡の北西約４ｍ、ＪＧ27竪穴住居跡の東約６ｍの地点の地山で確認したものである。

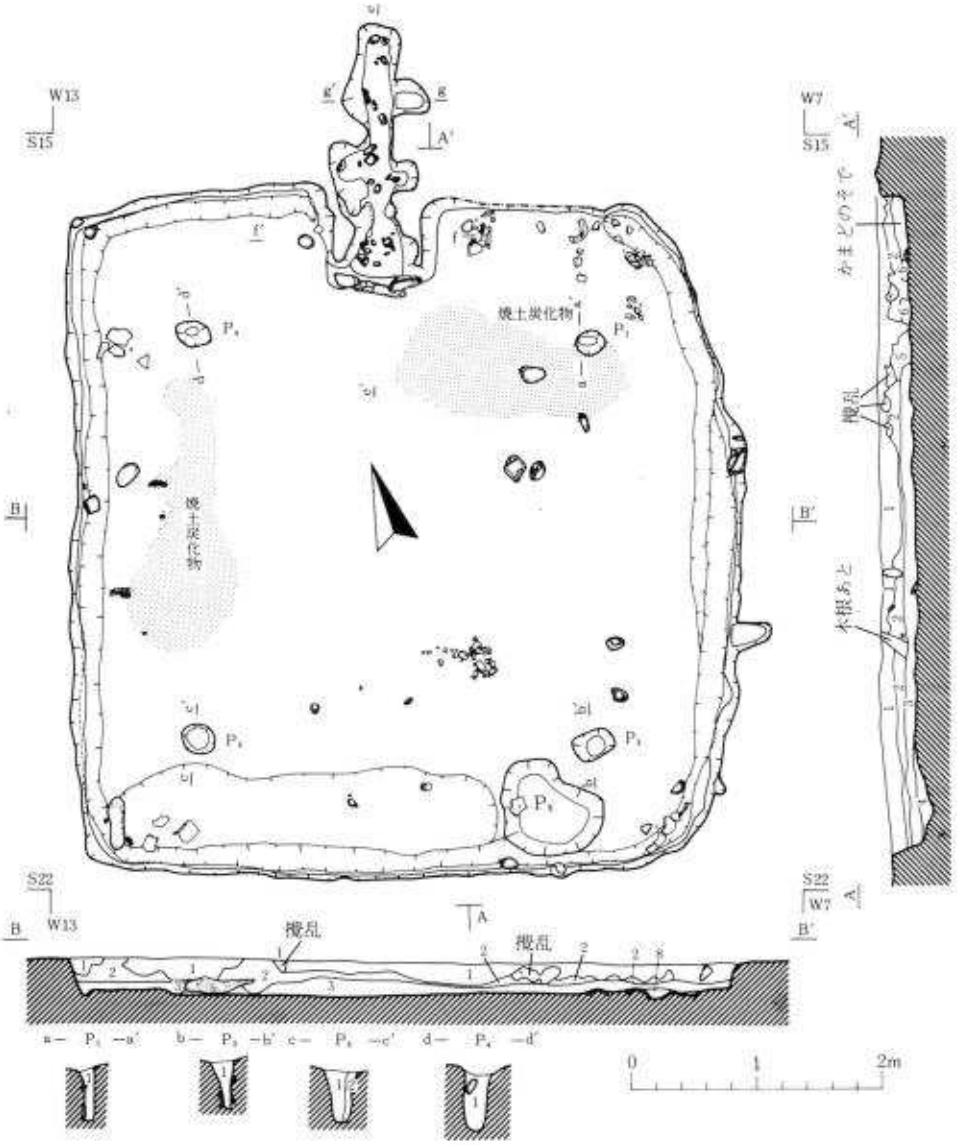
〔**平面形・規模**〕 東側はや・隅丸であるが全体ではほぼ方形といってよい。規模は、長軸（南北）約5.5m、短軸（東西）約5.3mであり、床面積は、約29.2㎡である。なお、南北壁の中点を結ぶ軸線はＮ－15°－Ｗである。

〔**堆積土**〕 細かく観察すると８層に分けられるが、Ⅲ層に大別することができる。Ⅰ層は、黒色の腐植土で、住居内の上面のほぼ全域を覆っているものであり、床面には達していない。Ⅱ層は、黒褐色土でⅠ層の下面に堆積し、やはり床面には達していない。Ⅲ層は、オリーブ褐色土を主とするもので、床面上に薄く堆積している。

〔**壁**〕 地山をそのまま壁としているものである。北壁の東半分は攪乱のため残存状態は良くない。他は、比較的鋭い立ち上りを呈しており、残存状態の最も良好な西壁で約30cmを計る。

〔**床**〕 床面は、黄色土の混じった一度掘り起した黒色土で貼り床を施しているものである。なお、貼り床の下は砂礫層であるがカマド周辺から西にかけて高くなっている。反面、南側は低い。そしてその砂礫層部分が壁に沿って低く掘り込まれており、これは排水のための施設として掘り込まれたことも考えられる。床面には、焼土、炭化物（クリ材）が多く散在し、特に西半に焼土の広がりが著るしい。

〔**柱穴**〕 床面上より５個のピットが検出されたが、住居内の対角線上に位置するP₁～P₄ピッ



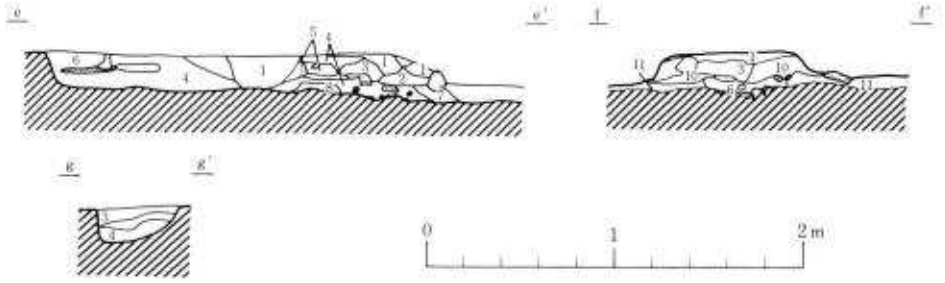
堆積土

大別	層	土色	土性	備考
I	1	10YR 2/1 黒色	腐植質土	草木根を含む
	2	10YR 2/2 黒色	腐植質土	炭化物、焼土を含む
II	3	10YR 2/2 黒褐色	シルト	炭化物を多く含む、小礫まじ
	4	2.5Y 4/6 オリーブ褐色	シルト	黄色砂土、焼土を多く含む
	5	10YR 4/6 褐色	シルト	焼土を含む
III	6	10YR 4/4 褐色	シルト	炭化物、焼土を含む
	7	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト	焼土が多い
	8	10YR 2/1 黒色土	シルト	黄色砂土がブロック状に混じる

堆積土(P_1～P_4)

層	土色	土性	備考
1	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト	炭化物混じる
2	7.5YR 2/2 黒褐色	シルト	黄褐色砂土ブロックで混じる

第72—1図　JF15竪穴住居跡



堆積土(カマド・煙道部)

層	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	植物根若干入っている
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	焼土が若干混じる
3	10YR2/1 黒褐色	シルト	植物根、焼土若干混じる
4	10YR2/1 黒色	シルト	焼土若干混じる
5	2.5Y3/2 黒褐色	砂質土	
6	5YR6/4 にぶい橙色	シルト	焼土
7	7.5YR4/4 褐色	シルト	黄色砂土と黒土が混じる
8	10YR2/2 黒褐色	シルト	炭化物混じる
9	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	焼土若干混じる
10	2.5YR4/4 オリーブ褐色	砂質土	
11	2.5YR4/6 オリーブ褐色	砂質土	黒色土混じる

第72－2図　JF15竪穴住居跡

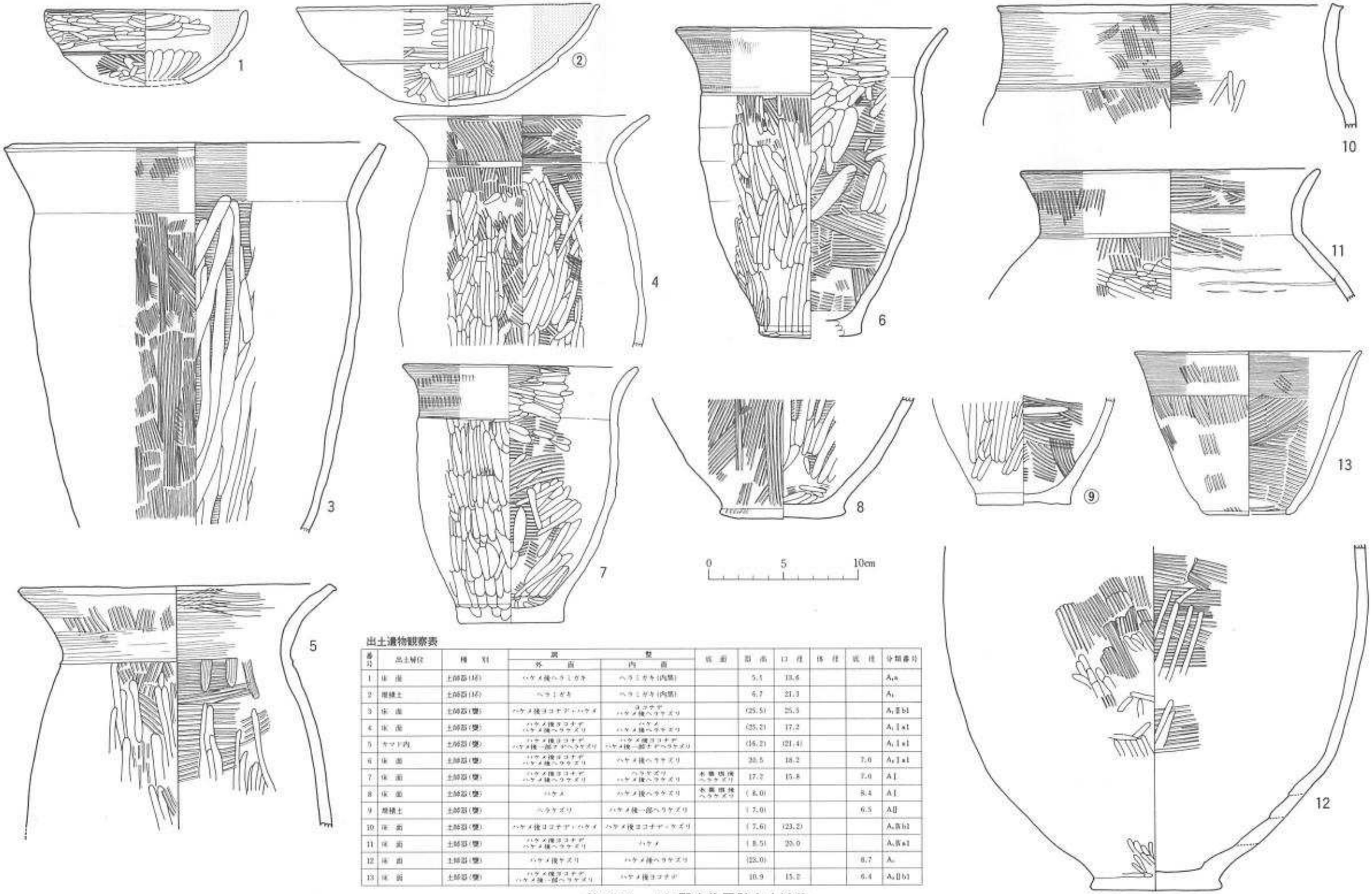
トが、その位置、深さ、配置等からみて柱穴と考えられるものである。規模は、径約23cm、深さ約47cmである。

〔カマド〕　北壁ほぼ中央に付設されている。両側壁はシルトで構築され、カマド焚口部にはカマド構築の際立石や、かけ口の石として使用されたとみられる楕円状の川原石が横倒しになっていた。燃焼部内の両端に支脚に用いたとみられる川原石が遺存し、土師器の破片が散在していた。底面は砂礫層が近いためか小礫が多く認められた。煙道は、周囲が攪乱されていたため遺存状態は不良であるが、燃焼部より特に段差もなく壁外に約1.5mの長さで掘り抜かれており煙出部にはピットは認められない。煙道底面も砂礫層が近いため礫の露出の多いのが目立つ。

〔その他の施設〕　周溝は、カマド東側の北壁沿いを除き、カマドの西側から壁に沿ってまわっている。規模は、幅約20cm、深さは3～6cmであり北側が高く、南にまわるにつれて低くなっている。その他、南壁沿いに径80cm、深さ15cmの皿状のピット（P_1）が存在する。その性格は不明である。

〔年代決定資料〕　住居の構築及び使用の年代等を決定する資料としては、カマド内、カマド東側の床面やその他の床面から出土した土師器がある。

土師器　完形、復元可能なものを含めて実測したものは、坏1点、甕12点でいずれも製作に際しロクロ未使用のものである。



出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	調整		底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
			外面	内面						
1	床面	土師器(坏)	ハケメ後ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)		5.1	13.6			A_1a
2	堆積土	土師器(坏)	ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)		6.7	21.3			A_1
3	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ ハケメ後ヘラケズリ		(25.5)	25.5			A_1Ⅱb1
4	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ ハケメ後ヘラケズリ	ハケメ ハケメ後ヘラケズリ		(25.2)	17.2			A_1Ⅰa1
5	カマド内	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ ハケメ後一部ナデヘラケズリ	ハケメ後ヨコナデ ハケメ後一部ナデヘラケズリ		(16.2)	(21.4)			A_1Ⅰa1
6	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ ハケメ後ヘラケズリ	ハケメ後ヘラケズリ		20.5	18.2		7.0	A_1Ⅰa1
7	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ ハケメ後ヘラケズリ	ヘラケズリ ハケメ後ヘラケズリ	木葉痕後 ヘラケズリ	17.2	15.8		7.0	AⅠ
8	床面	土師器(甕)	ハケメ	ハケメ後ヘラケズリ	木葉痕後 ヘラケズリ	(8.0)			8.4	AⅠ
9	堆積土	土師器(甕)	ヘラケズリ	ハケメ後一部ヘラケズリ		(7.0)			6.5	AⅡ
10	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ・ハケメ	ハケメ後ヨコナデ・ケズリ		(7.6)	(23.2)			A_1Ⅱb1
11	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ ハケメ後ヘラケズリ	ハケメ		(8.5)	20.0			A_1Ⅱa1
12	床面	土師器(甕)	ハケメ後ケズリ	ハケメ後ヘラケズリ		(23.0)			8.7	A_1
13	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ ハケメ後一部ヘラケズリ	ハケメ後ヨコナデ		10.9	15.2		6.4	A_1Ⅱb1

第73図　JF15竪穴住居跡出土遺物

坏（第73図１）　口縁部が内湾する丸底で、体部との境に明瞭な段をもつが対応する内面にくびれは認められない。調整は技法は内外面ともにヘラミガキされ内面は黒色処理されている。

大甕（第73図３～５・８～10・11～12）(3)は最大径が口縁部にあり口縁部が外傾気味の肩部に段のない長胴で下半が欠失しているものである。

調整技法は、口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面はハケメ、内面はハケメ後ヘラケズリである。(4・5)は口縁部が外反し胴部中央よりやや下付近に口縁径とほぼ同じ最大径を有する長胴で肩部に軽い段が巡る。これらも下半が欠失している。

調整技法は、口縁部内外面をみると(4)は、ハケメ、(5)はハケメ後ヨコナデ、胴部内外面はいずれもハケメ後ヘラケズリされている。(10・11)は口縁部が直立外反、外反する球胴形と推定されるものの口縁部である。

調整技法は、口縁部内外面はヨコナデ、胴部には、ハケメ後ヘラケズリが部分的にみられる。(12)は球胴に近いものの胴部である。

中甕（第73図６・７）　いずれも最大径が口縁部にあり、口縁部が外反し肩部に段を有する長胴のものである。器面調整は、口縁部外面はヨコナデ、内面はヘラケズリ、胴部内面はハケメ後ヘラケズリされている。(7)の底部は木葉痕のあるものをヘラケズリしている。

小甕（第73図13）　最大径が口縁部にあり器高が口径より小さいものである。底部より外傾気味に口縁部に開くもので鉢型土器に入れてもよいものかもしれない。なお、底部が欠失して甑として使用したとも考えられるが意図的にこわしたものかどうかは不明である。調整技料は口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はハケメである。

〔堆積土出土遺物〕　別表のごとく堆積土中より多くの土師器片が出土している。実測できたものは坏１点のみである。

土師器

坏（第73図２）　製作に際しロクロ未使用のもので底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上る丸底である。底部との境目には段が巡るが対応する内面のくびれはみられない。調整技法は、内外面ともにヘラミガキ、内面は黒色処理されている。

その他、坏の破片は有段で、内外面がヘラミガキされ、黒色処理されたものである。甕は、長胴、球胴の口縁部の破片の他、内外面、ハケメ、ケズリのみられる胴部破片であるがハケメの線の細いのが目立つ。

⑥ＪＧ27竪穴住居跡（第74図－１・２）

〔遺構の確認〕　Ｊ調査区の西端附近、ＪＦ15竪穴住居跡の南西約６ｍの地点の地山で検出されたものである。

〔重複〕　認められない。

〔平面形・規模〕　全体的には、ほぼ方形に近い形状を呈しているが、北西隅には入江状の円形の張り出し部分があり、南西隅もわずかに張り出しがみられ、北東隅のみが角張っている。規模は一辺がいずれも約５ｍである。床面積は約25㎡である。南北壁の中点を結ぶ軸線は、Ｎ－30°－Ｅである。

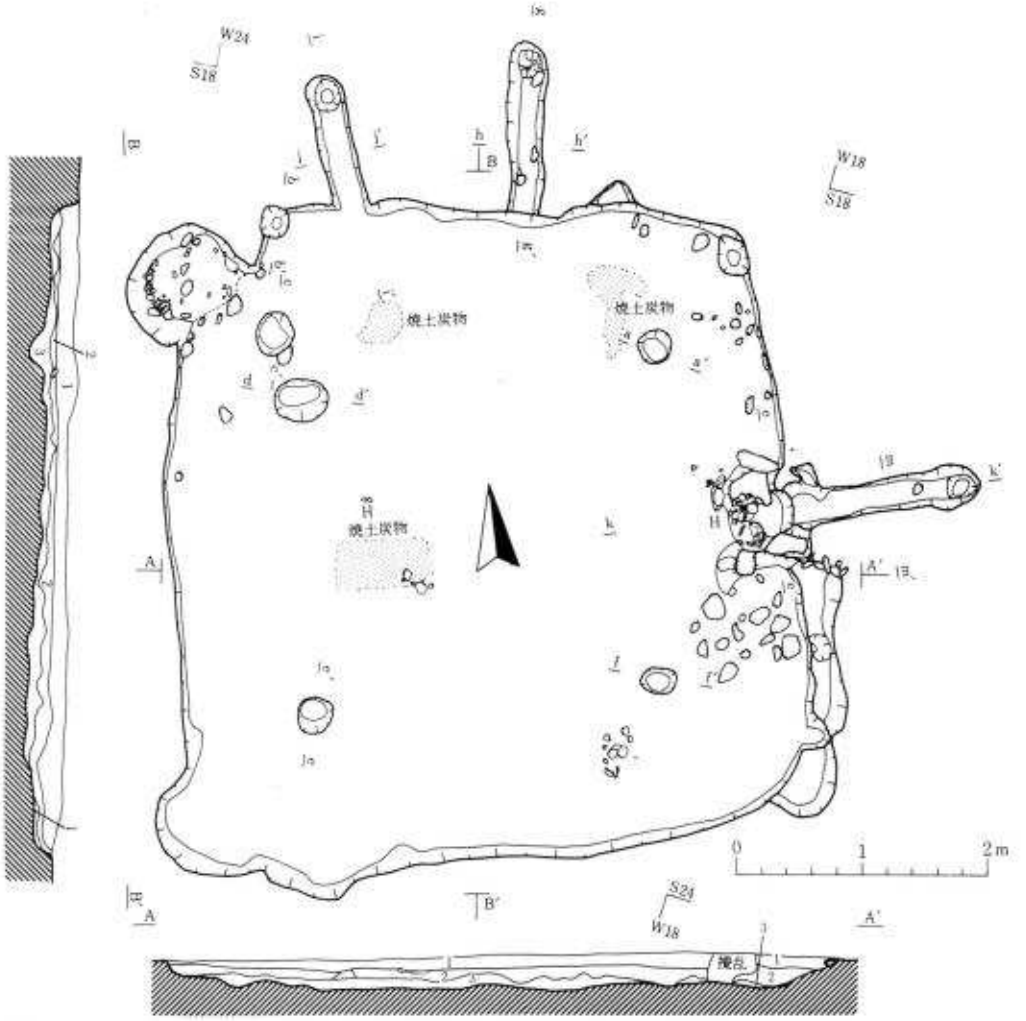
〔堆積土〕　２層に分けることができる。１層は、黒褐色土で住居の全域を覆い床面には達していない。２層は、炭化物、焼土を含み、１層に比べて固くしまって床面に薄く堆積している。図中における３層は、黄褐色土で遺物を含まず、生活面であったと考えられる面である。

〔壁〕　地山をそのまゝ壁としているものである。他の住居と異り北東隅を除く３つのコーナーにそれぞれ張り出しがみられ曲線的である。北壁は比較的鋭い立ち上りを呈しているのに対して他は緩かである。最も残存状態の良好な北壁で20cmである。

〔床〕　床面は、Ｊ区の他の住居跡に比べて凹凸が多い。一旦、掘り起した後固めて床面をつくり出している可能性が強く、簡単な貼り床といえようか。床面上には、炭化物、焼土が比較的広範囲に存在した。

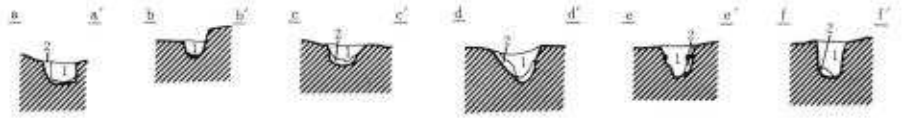
〔柱穴〕　床面上からは７個のピットが検出されたが、住居内の対角線上に存在するP_1～P_4が位置、規模、配置等からそれと考えられるものである。なお、これらのピットの規模は、径約31cm、深さ約30cmである。

〔カマド〕　北壁ほぼ中央およびその西側のコーナー近くに煙道（Ⅰ・Ⅱ）のみが残存し、東壁中央にカマド（Ⅲ）が付設されている。（Ⅰ）の煙道底面は、床面よりやゝ高く、溝状を呈している。長さ約140cmである。又、（Ⅱ）の煙道は床面と同じレベルで壁外にのびており、長さは約120cmである。いずれも煙出部にわずかな落ちこみが認められる。これらについての前後関係は不明であるが、（Ⅰ）が（Ⅱ）より規模として大きいことや、北壁の中央に壁にほぼ直角に北方に延びていること、炭化物、焼土等の量の多いこと等から、（Ⅰ）が主として使用され、（Ⅱ）は短期間ないしは補助的な使用のされ方をしたものと考えることもできる。東壁に存在する（Ⅲ）は、シルトで構築された両側壁が存在し、燃焼部と煙道より成るものである。両側壁は黄褐色のシルトが若干ブロック状に含まれ黒褐色を呈しており、良くしまっている。特に中心部は版築状にたたきしめた形跡が認められる。又、焚き口にはかけ口の石として使用されたとみられる楕円状の大きな川原石が存在し、左側壁の西に近接するピットは、位置的にみてカマド構築の際の立石の存在した場所と考えられる。又、燃焼部内からは、支脚石に使



堆積土

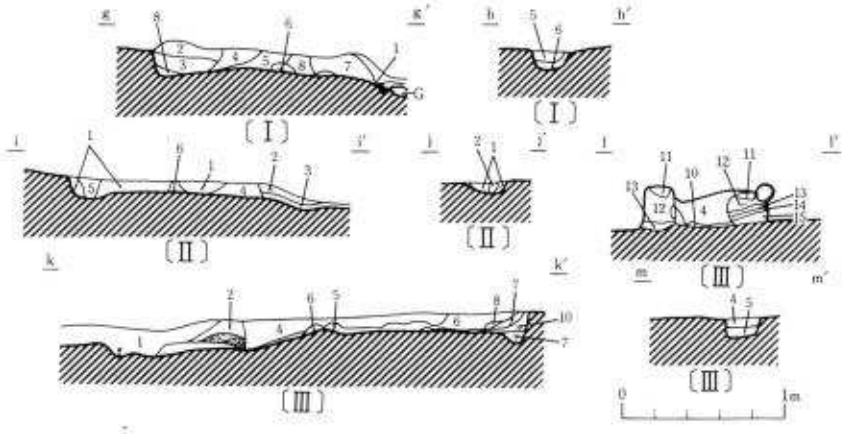
層	土色	土性	備考
1	7.5YR 2/2 黒褐色	腐植質土	草木根、炭化物微量含む
2	7.5YR 3/2 黒褐色	腐植質土	炭化物、焼土、土師器片を含む
3	7.5YR 4/4 褐色	シルト	黄褐色の砂質土の大ブロックを含む



堆積土（P_1～P_4）

層	土色	土性	備考
1	7.5YR 2/1 黒色	シルト	小礫を含む
2	2.5YR 6/8 明黄褐色	シルト	炭化物を微量含む

第74－1図　GJ27竪穴住居跡



堆積土(煙道部〔Ⅰ〕)

層	土色	土性	備考
1	10YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト	黄褐色土小ブロック状に混入
2	10YR 4/4 褐色	シルト	黄褐色土のブロック，土師器片若干
3	7.5YR 2/1 黒色	シルト	焼土・炭化物を含む
4	7.5YR 3/1 黒褐色	シルト	
5	10YR 3/4 暗褐色	シルト	
6	10YR 2/3 黒褐色	シルト	
7	7.5YR 4/4 褐色	シルト	1層の黄褐色土若干混入
8	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト	

堆積土(煙道部〔Ⅱ〕)

層	土色	土性	備考
1	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト	炭化物，焼土，黄色砂をブロック状で含む
2	7.5YR 2/1 黒色	シルト	黄色砂を小ブロック状で含む
3	7.5YR 2/2 黒褐色	シルト	黄色砂が多量にブロック状で含まれる
4	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト	1層と類似，焼土を多量に含む
5	7.5YR 3/1 黒褐色	シルト	炭化物，焼土ブロック状で含む
6	7.5YR 6/8 明黄褐色	砂質土	

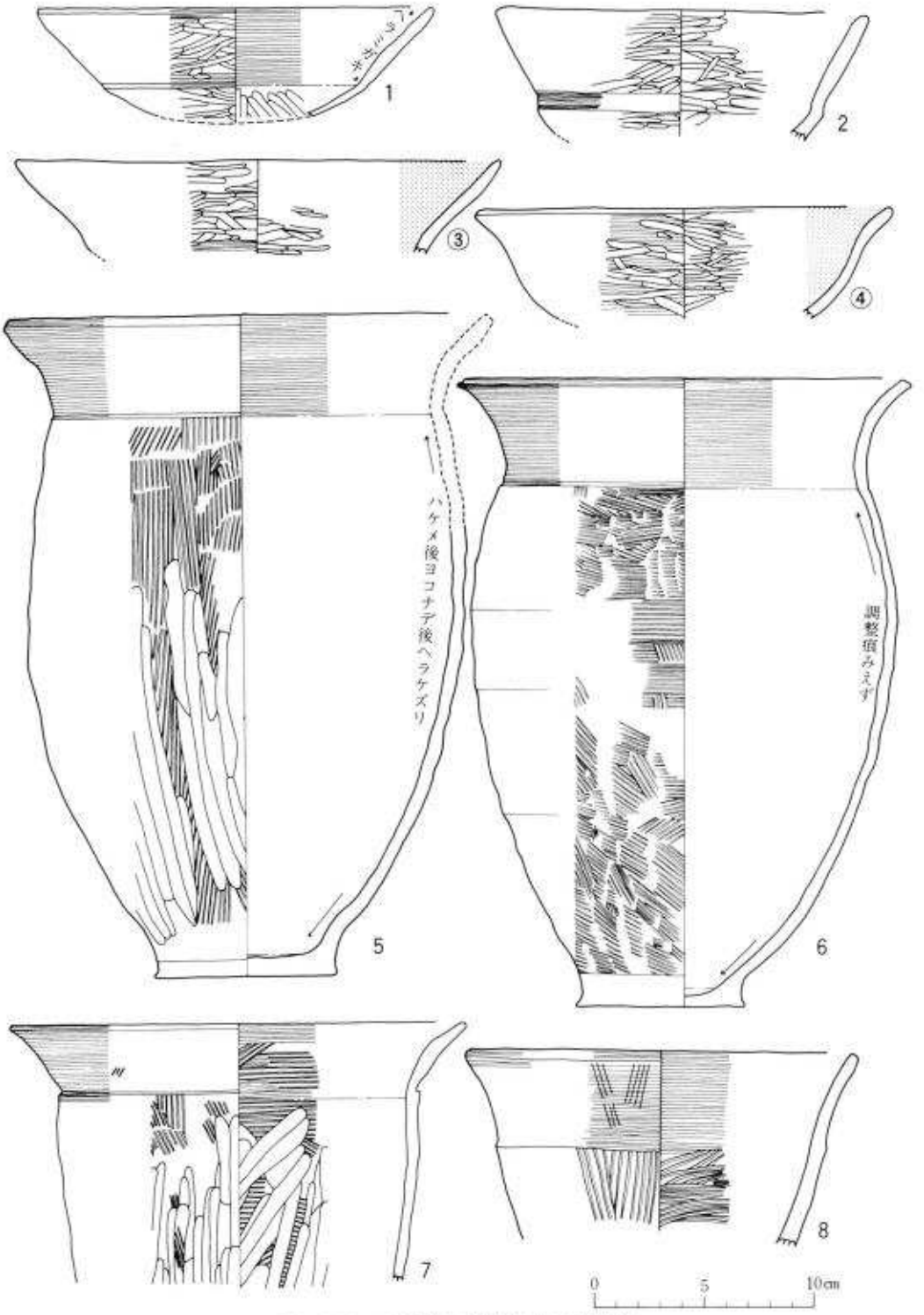
堆積土(カマド・煙道部〔Ⅲ〕)

層	土色	土性	備考
1	7.5YR 2/1 黒褐色	腐植質土	炭化物黄砂土若干含む
2	7.5YR 2/2 黒褐色	シルト	
3	7.5YR 3/2 黒褐色	シルト	
4	7.5YR 2/2 黒褐色	シルト	
5	7.5YR 2/3 極暗褐色	シルト	黄色砂土がブロック状に含む
6	7.5YR 4/4 明黄褐色	シルト	地山に類似
7	10YR 3/2 黒褐色	シルト	黄砂土若干含む
8	10YR 4/6 褐色	シルト	焼土をブロック状に含む
9	10YR 2/1 黒色	腐植質土	
10	10YR 2/3 黒褐色	シルト	5層とほぼ同じ
11	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト	
12	7.5YR 2/2 黒褐色	シルト	黄色砂土小ブロック状で若干含む
13	7.5YR 6/8 明黄褐色	シルト	
14	7.5YR 2/1 黒色	シルト	
15	7.5YR 3/2 黒褐色	シルト	

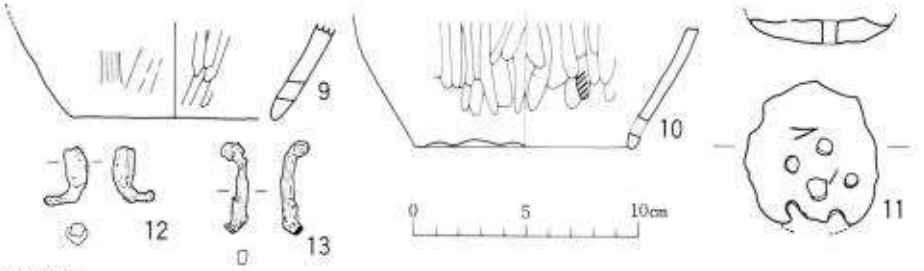
第74－2図　JG27竪穴住居跡

用したと思われる川原石の他2個体の甕が出土している。煙道部は奥壁近くでやや昇り住居外に真直のびている。その長さは160cmであり煙出部には、煙道底面より約10cm低い落ち込みが存在した。

〔その他の施設〕　周溝、貯蔵穴状のピット等は認められない。北西、南西隅の張り出し部分は、特に堀り込みもみられず床面とほぼ同じレベルのものであり北西隅の張り出し部分には川



第75図　JG27竪穴住居跡出土遺物(1)



出土遺物観察表

番号	出土場位	種別	調整 外面	調整 内面	底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	カマド附近	土師器(坏)	ヨコナデ・ミガキ ヘラミガキ	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ	(5.2)	18.0			A_2
2	煙道	土師器(坏)	ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ		(5.7)	(17.0)			$A_2$1
3	堆積土	土師器(坏)	ヘラミガキ	ヘラミガキ(内面)		(4.2)	(20.1)			A_2
4	堆積土	土師器(坏)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ(内面)		(5.0)	(19.0)			A_2
5	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ ハケメヘラケズリ	ヘラケズリ	30.2	22.2		8.3	$A_1$1a1
6	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ	ヘラケズリ	28.3	20.6		7.7	$A_1$1a1
7	煙道 1	土師器(甕)	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ハケメケズリ		(11.7)	20.8			$A_1$1a1
8	カマド 1	土師器(甕)	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ		(8.7)	(18.0)			$A_1$1b1
9	床面上	土師器(甑)	ナデ	ケズリ		(4.5)			9.0	B1
10	カマド 1	土師器(甑)	ヘラケズリ	ハケメ後ヘラケズリ		(5.2)			9.8	B1
11	カマド 1	土師器(甑)			木 化				(6.3)	A
12	床面	鉄製品(釘)	4.5×0.6×0.4							
13	床面	鉄製品(釘)	3.5×0.6×0.6							

第76図　JG27竪穴住居跡出土遺物(2)

原石が多く散在した。性格的には不明といわざるを得ない。

〔**年代決定資料**〕　住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、煙道部やカマド内及び床面より出土した土師器、鉄製品等がある。

土師器　いずれも製作に際しロクロ未使用のものであり、完形品や破片で実測したものは坏2点、甕4点、甑3点である。

坏（第75図1・2）　口縁部が外傾し底部との境界に段を有し対応する内面にくぼれのみられる丸底と推定されるものである。調整技法は内外ともにヘラミガキされ、(1)は、内面が黒色処理されている。(2)は、黒色処理のとんだものと推定される。いずれも破片からの反転復元である。

大甕（第75図5～7）　いずれも肩部に段を有し、口縁部が外反する長胴である。(5・6)は体部の最大径が中半からやや上に位置するふくらみの強い器形に対し、(7)は、体部の最大径が肩部にあり、胴部は直線的である。器面調整は、口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面は(5・7)はハケメ後ヘラケズリ、(6)は外面ハケメ、内面は特に調整痕はみられない。

中甕（第75図8）　下半が欠失しているが口径から類推して中型甕としたものである。肩部に軽い段を有し口縁部は軽く外反するものである。調整技法は口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はナデである。

甕（第76図９～11）　いずれも底部の破片である。(9･10)は無底式で横に細孔のあるもの、(11)は多孔式のものである。調整技法としては、内外面にヘラミガキが施されている。

鉄製品（第76図12・13）　長さ4.5～3.5cmの釘状のものである。その他床面より少量の鉄滓が出土している。

〔**堆積土出土遺物**〕　別表の如く土師器の坏、甕等の破片が出土しているがそのうち実測したものは坏２点である。

土師器　製作に際しいずれもロクロ未使用のものである。

坏（第　図３・４）　口縁部が外傾するもの、内湾気味に立ち上り、口縁部近くでは外反するものとあり、いずれも丸底と推定される。調整技法は内外面ともにヘラミガキ、内面は黒色処理されている。

その他の破片は、坏は１片を除きすべて内黒処理されたもので体部との境界に段が認められないもの・破片である。又、甕は、口縁部が外反気味のものが多い。磨滅した縄文土器片１片が出土している。

⑦ＫＡ06竪穴住居跡（第77図－１・２）

〔**遺構の確認**〕　Ｋ調査区のほぼ中央、東西に走る村道のすぐ南側、ＪＪ24竪穴住居跡の東約４ｍの地山面で検出したものである。

〔**重複**〕　住居の北壁及び南壁の上部が、それぞれ東西に走る溝によって破壊されている。

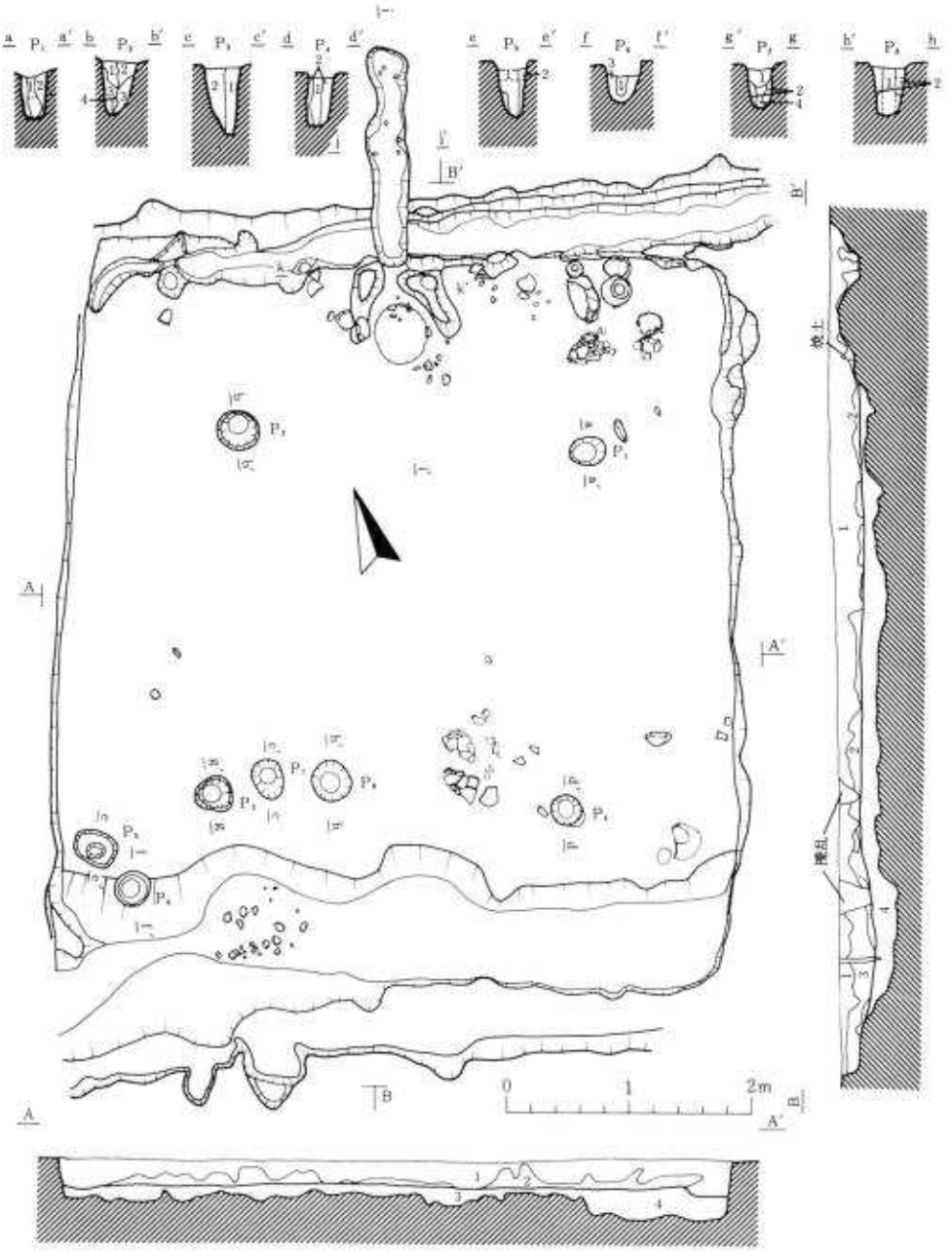
〔**平面形・規模**〕　平面形は南北にやや長い長方形である。規模は長軸（南北）約6.40m、短軸（東西）約5.60mであり、床面積は、約35.7㎡である。南北壁の中点を結ぶ軸線はＮ－20°－Ｅで煙道のそれとほぼ一致する。

〔**堆積土**〕　２層に分けることができる。１層は、暗褐色の粘土質砂層で壁際より住居全体を覆っており、ほとんど底面には達していない。中央附近に粉状パミス（火山灰）の堆積がみられる。２層は、褐色の砂質粘土で、主として床面に堆積し１層より薄い。図中の３層は貼床部分の土層である。

〔**壁**〕　地山をそのまゝ壁としているものであるが既述の如く、南、北壁面は新しい溝によって大半が破壊されているが床面からの立上りによって確認できたものである。最も良好な東壁で約30cmを計る。

〔**床**〕　床面は、黄褐色土のブロックが均一に混じった茶褐色土で平担である。これは、地山を一旦深く掘りおこし埋め戻して貼床を施したものである。その他、床面には炭化材が散在していたのが目立つ。

〔**柱穴**〕　床面上より８個のピットが検出されている。そのうち、住居内の対角線上に位置するP_1～P_4は、その位置、配置、深さ等から柱穴と考えられるものである。これらは、平均径約



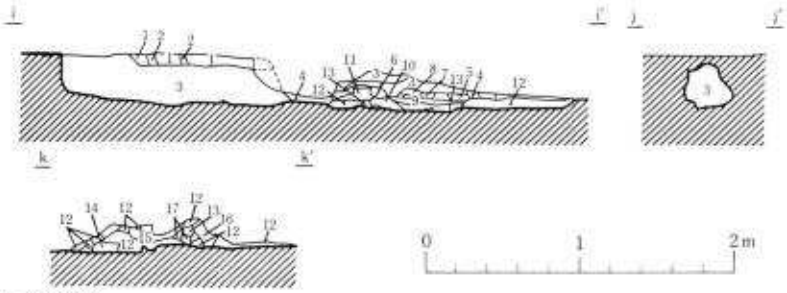
堆積土

層	土色	土性	備考
1	10YR 3/3 暗褐色	粘土質砂土	炭化物微量，土器片 木根含む
2	10YR 4/4 褐色	砂質粘土	炭化物微量，土師器片
3	10YR 2/1 黒色	砂質粘土	漸移層土・縄文，土師器片
4	2.5YR 4/3 オリーブ褐色	砂質粘土	黄褐色砂土がブロック状入る(貼床)

堆積土（P1～P6）

層	土色	土性	備考
1	10YR 2/1 黒色	腐植質土	炭化物・砂を含む
2	7.5YR 3/3 暗褐色	砂質土	黒色土を含む
3	10YR 2/3 黒色	腐植質土	砂質土をブロック状に含む
4	10YR 3/4 黒褐色	腐植質土	1層と類似，炭化物なし

第77－1図　KA06竪穴住居跡



堆積土(カマド・煙道部)

層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	シルト	黄白色粘土がはん点状に混入	10	2.5YR 5/4 黄褐色	粘土質土	カマド本体の崩落土
2	7.5YR 3/3 暗褐色	粘土質土	焼土が若干混入	11	2.5YR 3/1 黒褐色	砂質土	煙道部の崩落土
3	7.5YR 2/1 赤黒色	腐植質土	焼土がはん点状に混入	12	2.5YR 8/6 黄色	シルト	
4	7.5YR 2/1 赤黒色	粘土質土	焼土がはん点状に混入	13	2.5YR 7/2 浅黄色	シルト	
5	10YR 3/3 暗赤褐色	粘土質土	焼土と黒色土の混じったもの	14	7.5YR 3/2 オリーブ黒色	シルト	黄白色粘土が斑点状に入る
6	2.5YR 5/8 明赤褐色	粘土質土	焼土	15	7.5YR 3/1 オリーブ黒色	シルト	焼土、黄白色粘土斑点状に入る
7	7.5YR 2/1 黒色	シルト	焼土と黒色土の混土、炭化物	16	5YR 5/2 灰オリーブ色	シルト	シルトに黄白色粘土の混じったもの
8	2.5YR 4/4 にぶい赤褐色	シルト	焼土と黒色土の混土	17	2.5YR 6/3 にぶい黄色	シルト	シルトに黄白色粘土の混じったもの
9	7.5YR 4/1 褐灰色	シルト	焼土と黒色土の混土				

第77－2図　KA06竪穴住居跡

30.5cm、深さ約47.5cmである。その他、P_7、P_8も位置的には柱穴と関連ありそうであるが明確にはわからない。

〔カマド〕　北壁中央に付設されている。側壁はシルトで構築され、燃焼部と煙道より成る。両側壁の前面には立石として使用したとみられる川原石の他、燃焼部内には支脚として用いられたとみられる川原石が遺存し、土師器片が散在していた。煙道は溝によってその一部が破壊されていたが、特に段差もなく北へトンネル状に約1.8mのびていた。煙出部は特に落ち込みは認められない。カマドの軸方向はN－20°－Eである。

〔その他の施設〕　貯蔵穴状ピット、周溝等は認められない。特に施設というものではないが床面構築の際、カマド周辺、特に前面が他に比べて深く堀り込まれており、排水を考慮したものと推定される。

〔年代決定資料〕　住居の構築及び使用等の年代を決定する資料はカマド内カマド東側の北壁沿いの床面等から出土した土師器、砥石がある。完形、復元可能なものを含めて実測したものは、坏1点、高坏脚部1点、甕6点、壺口縁1点、片口1点、甑1点、砥石2点である。

土師器　いずれも製作に際しロクロ未使用のものである。

坏（第78図1）　口縁部が若干外反気味に外傾する丸底の坏である。底部との境界には軽い段が巡り対応する内面にもくびれのあるものである。器面調整は、内外面ともにヘラミガキされ内面は黒色処理されている。

高坏（第78図4）　脚高に比べて裾部が広く八字に開く脚部である。空洞の脚部内側より粘土を充填し坏底部に押圧して接合した痕がある。器面調整は内外面ともにヘラミガキされ黒色

処理されている。

大甕（第78図５～７・10）　(5)は口縁部が外反し肩部に段が巡り、体部中央附近に口縁径とほぼ同じ最大径をもつ膨みのつよい長胴である。(6)は口縁部がや・外反気味の最大径が口縁部にあり肩部に軽い段を有するもので底部が欠失している。(7)は、最大径が体部中央や・下にあり、口径に比べて器高が極端に高い下膨れの長胴である。(10)は、最大径が中央附近にあり口縁部が外反する球胴の甕と推定されるものである。これらの器面調整は、口縁部内外面はいずれもヨコナデなのに対して体部外面は(5・7・10)はハケメ後ヘラケズリ、(6)はヘラナデ、内面は、(７・10)はハケメ、(5)はハケメ後ヘラケズリが施されている。

中甕（第78図８）　口縁部が外傾し最大径が体部上半にあり上部に張りをもつ長胴である。器面調整は口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はハケメ後ヘラケズリが施されている。底面は中央部が上底状になっている。

小甕（第78図９）　最大径が口縁部にあり、底部よりほぼ直線的に上に開く甕である。器面調整は口唇部近くにヨコナデがみられるが他は、いずれもハケメ後ヘラケズリしたものである。

壺（第79図11）　口縁部が緩く外反後上端が直立する壺の口縁と推定されるものである。器面調整は内外面ともにヨコナデである。

片口土器（第79図12）　口径と器高がほぼ同じで体部は、内湾気味に大きく膨みながら立ち上り、口縁部で更に強く内傾し最大径が体部上半にある膨みの強い器形である。口縁部の一部を両側から内側に圧して突出部（注口部）をつくり出している。器面調整は、口縁部は主にヨコ方向のヘラミガキ、体部はハケメ後タテ方向にヘラミガキがなされ、内面もほぼ同様である。なお、底部はヘラケズリされている。

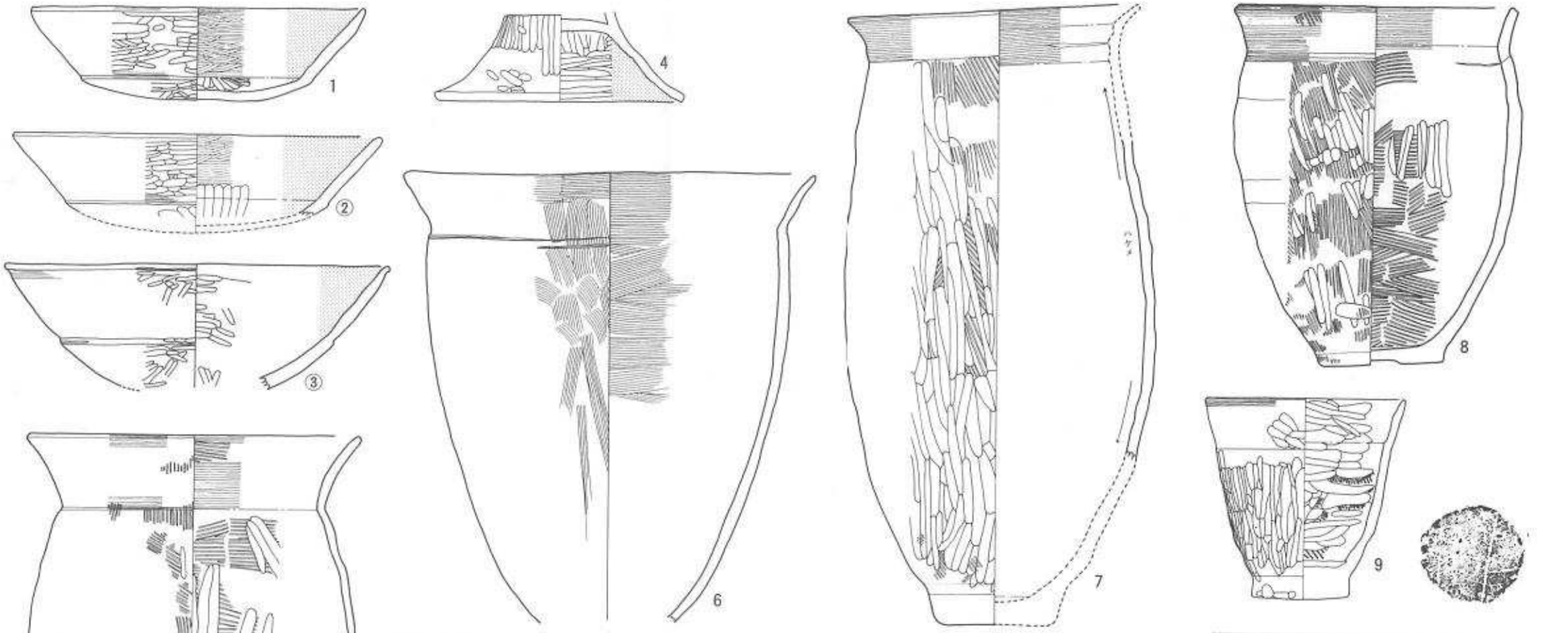
甑（第79図13）　最大径が口縁部にあり、口縁部が外反しているもので底部は丸味をもち口縁部にかけて内湾気味に立ち上る多孔式のものである。なお、孔は径１cm内外のもの七穴をかぞえる。器面調整は、口縁部内外面はハケメ後ヨコナデ、体部外面はハケメ、内面はハケメ後一部ケズリである。しかし底部にはほとんど調整痕がみられない。

砥石（第79図14・15）　(14)は、石材が砂質凝灰岩で中央部分がや・くぼみ、つづみ状のもので４面が使用されている。(15)も同じく砂質凝灰岩で、裾広がりのバチ状で２面が使用されている。

〔堆積土出土遺物〕

坏（第78図２・３）　(2)は口縁部か外傾し底部との境に稜を有するもの、(3)は、底部から内湾気味に外傾するもので底部との境に沈線を有するもので、いずれも丸底と推定されるものである。

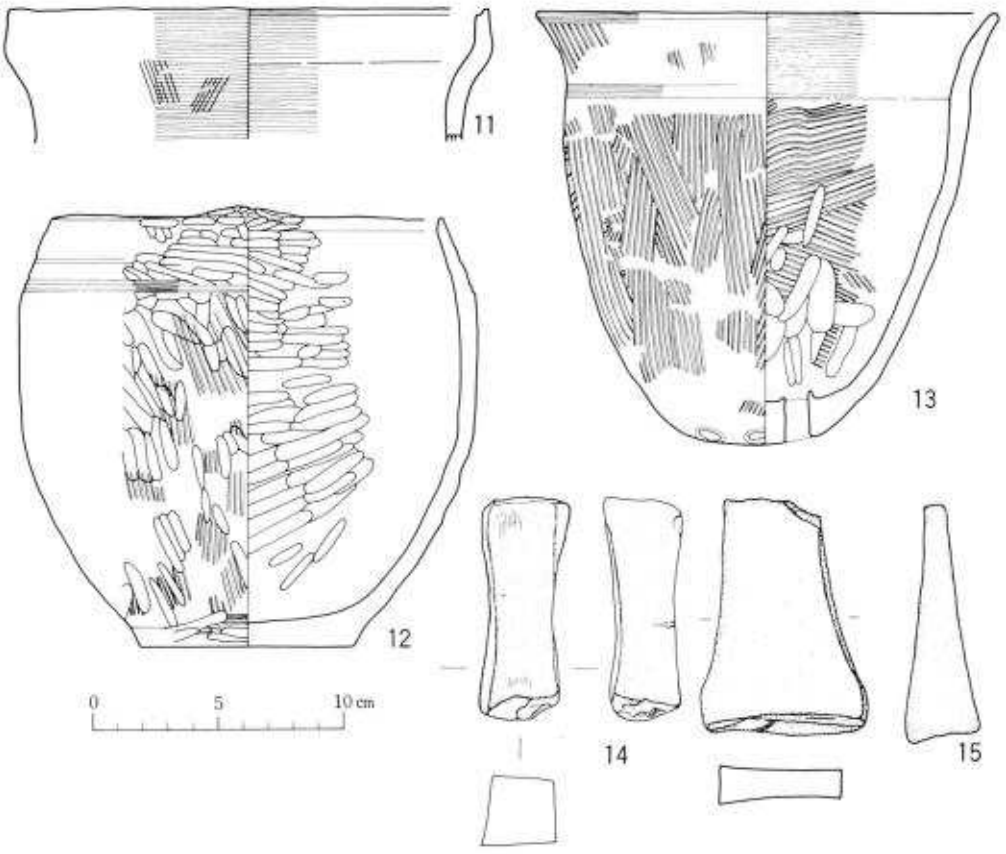
調整技法は、いずれも内外面ともにヘラミガキ、内黒処理され、(2)は外面を朱塗りしているものである。



出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底直	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	床面	土師器(坏)	ヘラミガキ ハケメ後ヘラミガキ	ヘラミガキ ヘラミガキ(内黒)		5.3	19.5			$A_1$1
2	単積土	土師器(坏)	ヨコナデ後ヘラミガキ ヘラミガキ	ヘラミガキ ヘラミガキ(内面)		(5.7)	21.5			A_2
3	Q_1 溝	土師器(坏)	ヨコナデ後ヘラミガキ ヘラミガキ	ヘラミガキ ヘラミガキ(内黒)		(7.0)	(22.4)			A_2
4	床面	土師器(高坏)	ヘラミガキ(脚部)	ヘラミガキ		(5.0)			14.7	
5	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ ハケメ後ヘラケズリ	ハケメ後ヨコナデ ハケメ後ヘラケズリ		22.4	19.5		8.0	A_1Ⅰa1
6	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ナデ		(26.9)	24.0			A_1Ⅰb1
7	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ ハケメ後ヘラミガキ	ヨコナデ・ハケメ	ヘラケズリ	25.6	17.0	18.0	7.2	A_1Ⅱa1
8	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ ハケメ後ヘラケズリ	ヨコナデ ハケメ後ヘラケズリ	ヘラケズリ	21.4	16.5		7.2	A_2Ⅱb1
9	床面	土師器(甕)	ヨコナデ ハケメ後ヘラケズリ	ハケメ後ヘラケズリ	木葉痕	11.7	11.6		5.8	A_2Ⅱb1
10	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ ハケメ後ヘラケズリ	ハケメ後ヨコナデ		(19.4)	16.8	20.4		A_1Ⅳa1
11	カマド内	土師器(壺)	ハケメ後ヨコナデ	ヨコナデ		(5.0)	(19.2)			C
12	床面	土師器(片口)	ヘラケズリ ハケメ後ヘラケズリ	ヘラケズリ		17.0	15.5	18.6	8.6	
13	床面	土師器(鉢)	ハケメ後ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ ハケメ後ヘラケズリ	多孔式	17.2	18.4			A
14	床面	砥石		8.8×2.5×2.6						
15	床面	砥石		9.3×3.8×0.9	パチ形					

第78図　KA06竪穴住居跡出土遺物(1)



第79図　KA06竪穴住居跡出土遺物(2)

⑧ＪＪ24竪穴住居跡（第80図）

〔遺構の確認〕　Ｊ調査区の西側、ＪＧ27、ＪＦ15竪穴住居跡の南、約５ｍ、ＪＧ06竪穴住居跡の西、約10m、ＫＡ06竪穴住居跡の西約４ｍと、これら４棟の中心部に位置する格好で検出されたものである。なお、当初、東西に走る村道をはさんで検出されたために全貌が明かにできず、検出部分の精査後一旦中断し遺跡調査の後半において村道つけ変え後、村道下部分を精査したものである。

〔重複〕　認められない。

〔平面形・規模〕　南壁中心部分がやゝ張り出しているが、全体的には隅丸方形といえる。規模は、長軸（南北）約 12.4 ｍ、短軸（東西）約 10.4 ｍで、床面積は約 126.9 ㎡と本遺跡で検出された竪穴住居跡としては最大の規模を有している。南、北壁の中点を結ぶ軸線は、Ｎ－０°－ＥＷと磁北にほぼ一致する。

〔堆積土〕　４層に分けることができる。１層は、黒褐色の腐植土で、主として、住居内と、

その外方に堆積しており、床面には達していない。2層は、黒色の腐植土で、主として住居内に堆積し、その一部は床面にも達している。3層は、黒褐色土で黄色のシルトが小ブロックで混じっており、主に床面に堆積している。4層は、黒褐色土で、黄色砂土が小ブロック状に入りこんでおり、それは、住居の外から壁際にかいて入りこみ、2層の上層に堆積していることになる。

〔壁〕　地山をそのまゝ壁としているもので、村道下部分を除いては、いずれの壁面もほぼ垂直な立ち上りを呈している。残存状態の最も良好な北壁で約35cmを計る。

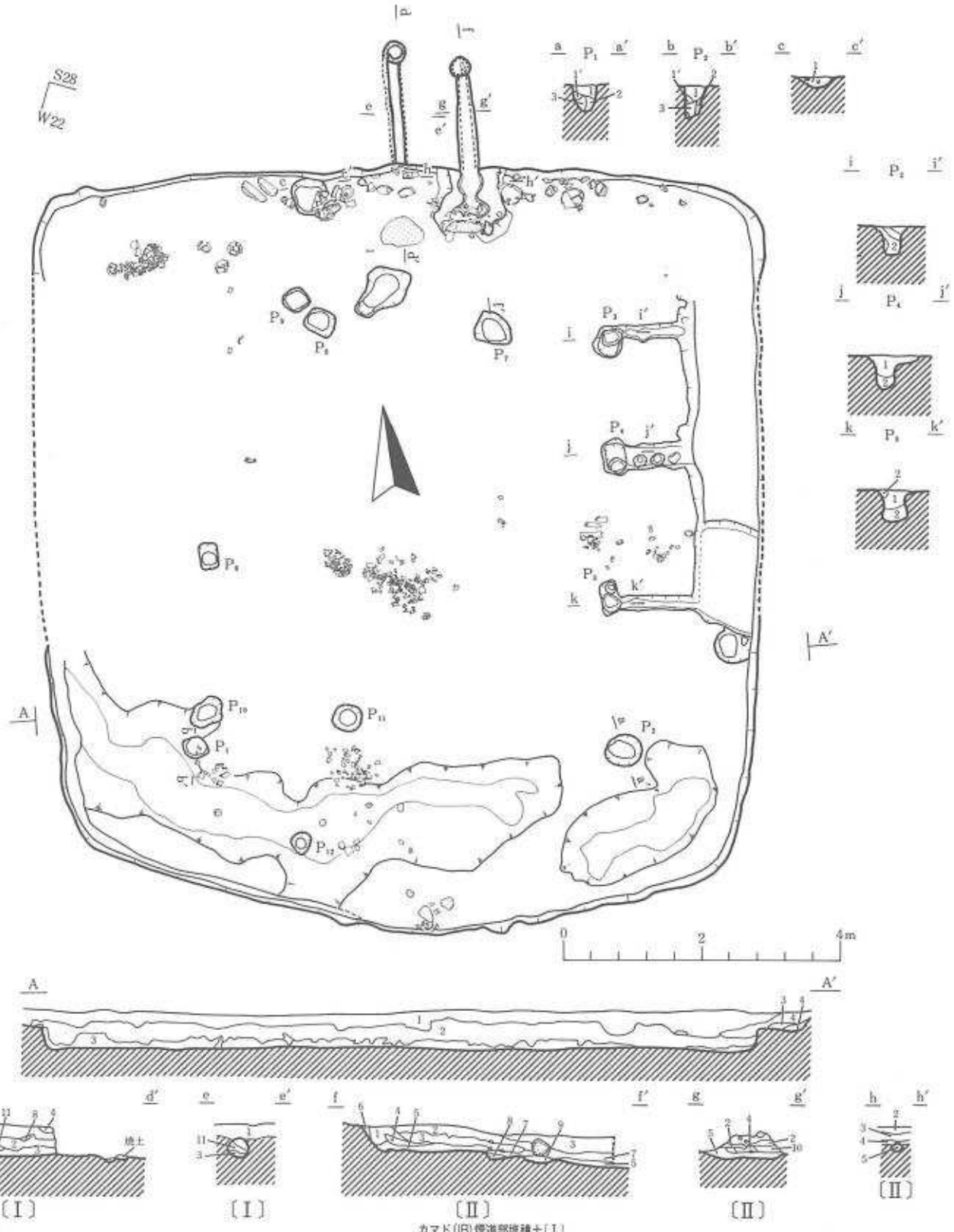
〔床〕　床面は、平担で良くしまっており、KA06竪穴住居跡と同じように貼床された形跡が認められた。特に、南半部分は一旦掘り込んだ後に埋め戻した形跡が明かである。その他に、村道下にあたる東側の床面より西に延びる溝状の張り出しが3本、ほぼ等間隔で検出されている。その先端には円形の柱穴状の（深さ35～48cm）ピットが存在した。

〔柱穴〕　床面上より大小10個のピットが検出されたが、そのうち、住居内の対角線上に位置するP₁、P₂のピットが深さ、位置等からそれに該当するものと考えられる。床面からの深さはいずれも約40cm、径は約30cmである。これに対応する北側の柱穴は明かでない。ただ、溝状の掘り込みの先端のP₃～P₅ピットは、P₂ピットと合わせるとほぼ南北に直線上に並ぶものであり、位置的にみて柱穴或は、それと何等かの関連のあるピットと考えることも可能である。

	P₁	P₂	P₃	P₄	P₅	P₆
径	38cm	50cm	30cm	24cm	32cm	22cm
深　さ	46cm	38cm	36cm	44cm	38cm	40cm

〔カマド〕　北壁中央及び、そのや・東寄りに付設されている。前者は、煙道部のみ残存し両側壁、及び燃焼部は既になく、床面にわずかに焼土の広がりが確認されたものである。煙道は、壁をトンネル状にくりぬいて外方に延びているもので、径約25cm、長さ約180cmの規模である。煙出部には特に落ちこみはみられない。煙道内壁面はスス状のもので固くなっており、かなり長期的に使用されたことを伺わせる。なお、廃棄後は、煙道のくりぬいた壁面を意図的に黄褐色土でふさいだ形跡が認められる。次に、後者のカマドは、燃焼部と煙道部より成り、両側壁はシルトで構築されていたものである。焚き口にはカマド構築の際の立石や、かけ口に使用されたとみられる径約20cm、長さ約50cmの楕円状の川原石が存在した。燃焼部底面には、支脚として使用されたとみられる熱を受けて赤変した三角形状の川原石と土器底部が伏せられて南北に並んだ形で存在した。そして、これらの上からは、大型の甕が2個体焚き口部の方に倒れる形で出土した。カマドの軸方向は、両者ともにN－10°－Wである。

〔その他の施設〕　南壁沿いに溝が認められたが周溝とはなり得ない。その他、柱穴或は、それと関連すると思われるピット以外で、カマドの西側に検出されたP₁₀ピットは、比較的深く土



堆積土

層	土色	土性	備考
1	7.5YR 2/3 黒褐色	耕作土	攪乱が激しい
2	7.5YR 2/1 黒色土	腐植土	土師器片若干含む
3	7.5YR 2/2 黒褐色	シルト	黄褐色土がブロック状に多数混じる
4	7.5YR 3/2 黒褐色	シルト	黄褐色土がブロック状に多数混じる

カマド(新)煙道部堆積土〔Ⅱ〕

層	土色	土性	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	腐植質土	
2	7.5YR 3/3 暗褐色	腐植質土	砂質土、炭化物混じる
3	10 YR 4/4 褐色	砂質土	
4	10 YR 3/4 暗褐色	砂質土	
5	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	炭化物含まれる
6	2.5YR 3/2 黒褐色	砂質土	
7	5 YR 4/6 赤褐色	砂質土	焼土を多く含む
8	10 YR 3/6 暗赤褐色	砂質土	焼土
9	10 YR 5/8 赤色	砂質土	焼土
10	10 YR 4/6 褐色	砂質土	

カマド(旧)煙道部堆積土〔Ⅰ〕

層	土色	土性	備考
1	7.5YR 3/3 暗褐色	腐植土の混土	
2	5 YR 3/2 オリーブ黒	シルト質	土師器細
3	10YR 3/3 暗褐色	シルト質	焼土ブロック状、ススや炭化物混じる
4	7.5YR 3/1 オリーブ黒	シルト	硬くしまっている。
5	7.5YR 3/1 暗赤灰色	砂質土	炭化物、焼土が多い、灰まじる
6	5 YR 2/1 黒褐色	砂質土	炭化物、焼土若干まじる
7	2.5YR 2/2	シルト	焼土ブロック状、ススや炭化物混じる
8	5 YR 3/1 黒褐色	砂質土	焼土ススや炭化物若干混じる
9	7.5YR 3/3 黒褐色	砂質土	
10	2.5YR 3/3 暗オリーブ褐色	砂質土	
11	7.5YR 2/1 赤黒土	砂質土	ススや炭化物が多い

堆積土(P₁~P₄)

層	土色	土性	備考
1	2.5YR 3/2 黒褐色	シルト	炭化物を含む
1′	2.5YR 3/2 黒褐色	シルト	
2	2.5YR 5/4 黄褐色	砂質土	
3	2.5YR 4/2 暗黄灰色	砂質土	炭化物を含む

堆積土(P₅~P₈)

層	土色	土性	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	腐植土	砂質土若干混じる
2	10YR 3/4 暗褐色	シルト	腐植土と砂の混じったもの
3	10YR 2/3 黒褐色	シルト	礫を多く含む

第80図　JJ24竪穴住居跡

師器片が出土しており、貯蔵穴状ピットといわれるものに類以するものと思われるが、他は直接住居と関連するものかどうか不明である。

〔年代決定の資料〕　住居の構築及び使用の年代を決定する資料としては北壁沿いの床面に並ぶような形で出土したものや、カマド内、カマド周辺、そして南側の床面より出土した土師器、砥石等がある。完形、復元可能なものを含めて実測したものは土師器の坏6点、高坏6点、片口1点、甕18点、壺1点、壺(坩形)2点、甑2点、砥石3点、紡錘車1点がある。

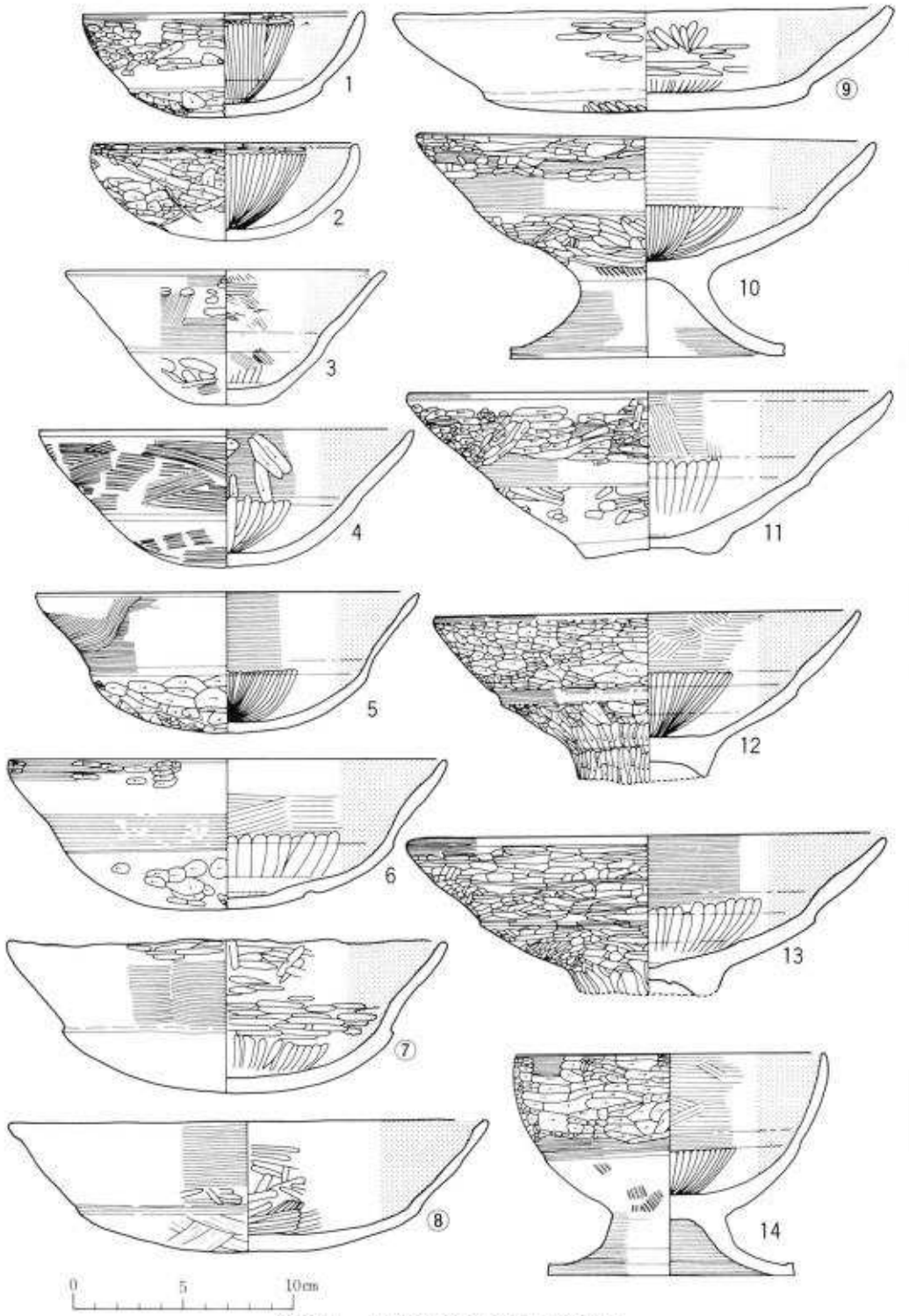
土師器　製作に際していずれもロクロ未使用のものである。

坏（第81図1～6）　(1)・(2)は、口縁部が内湾気味に立ちあがり(1)は底部との境目に段を形成し、(2)は無段のものである。いずれも対応する内面にくびれは認められない。(3)・(4)は口縁部が外傾気味に強く開き、底部との境目に変換点が認められ対応する内面にはくびれの認められるもので口径に比べて器高の深いものである。又、(5)・(6)は、口縁部が外反し底部との境目に段を有し対応する内面にもくびれの認められるものである。以上、いずれも丸底の坏である。調整技法は、外面は、(1)・(2)はヘラミガキ、(3)はヨコナデ、一部ミガキ、(4)は、ハケメ、(5)・(6)はヨコナデ、ミガキ、と変化に富み、内面は、いずれもヘラミガキが主で内黒処理されている。

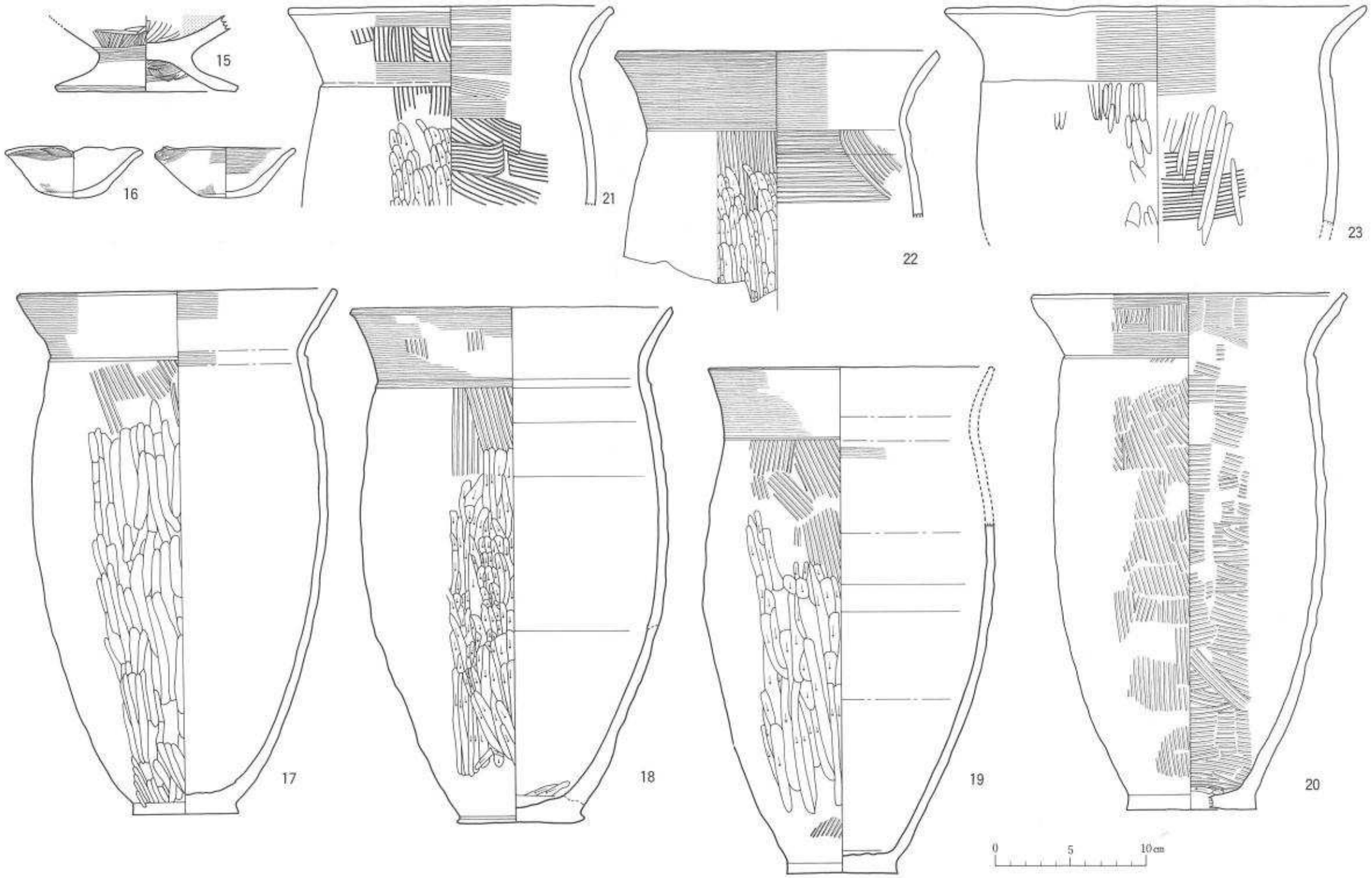
高坏（第81図　10～15）　(10～13)は、坏部が、体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上るもので、外面に段を有し、対応する内面にくびれのみられるものである。いずれも口径に比べて器高の低いものである。そのうち、(10)は脚部が坏部に比べて低く、坏部底面より直接外方にそり気味に開くものである。他は、いずれも脚部を欠失しており、坏部として再利用された形跡のあるものである。(14)は、坏部が内湾気味に立ち上り；外方に段が巡る。カップ状の器高の高い坏部を有する。脚部は、他と同じく外方にそり気味で裾部の開きの強いものである。(15)は、やはり他と同じような脚部である。器高調整は、坏部内外面ともにヘラミガキ、され、内黒処理されている。脚部は、内外面ともにヨコナデで整えられている。

片口土器（第82図16）　底部がやゝ丸味をもち口縁部にかけて外傾気味に立ち上り口縁近くがわずかに外反している小型の坏型の片口である。口縁部の外側を内側に押圧し、片口部分をつくり出している。器面調整はいずれもナデである。

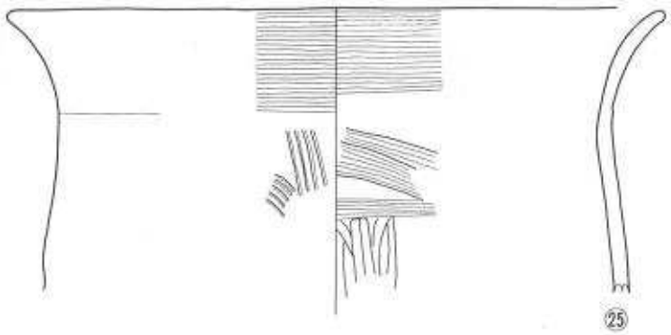
大甕（第82・83図17～24・26～30・32～34）　全体の器形の判明するものは(17～20)及び(32)、(34)である。いずれも口縁部が外傾或は外反するもので(19)は無段、他は肩部に段を有する。体部最大径が頸部のやゝ下位にある長胴である。(21～24)は、口縁～体部にかけてのもので下半が欠失している。いずれも肩部に段の巡るものであり、(24)は、口縁部が外反し、口縁端がわずかに直立するもので他と多少異なる。(26～30)は、底部より内湾気味に立ち上っている体部下半のみのものである。調整技法は、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケメ後、ヘラケズリのものが大半で、ハケメそのまゝのものは少ない。内面は、ハケメのものが大半で他はハケメ後

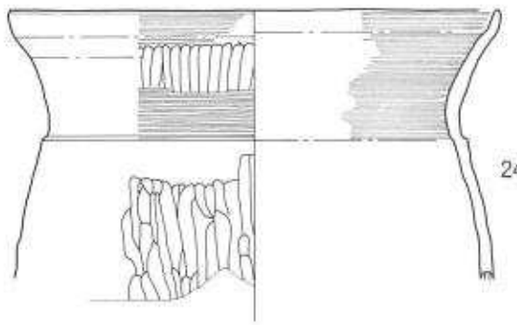


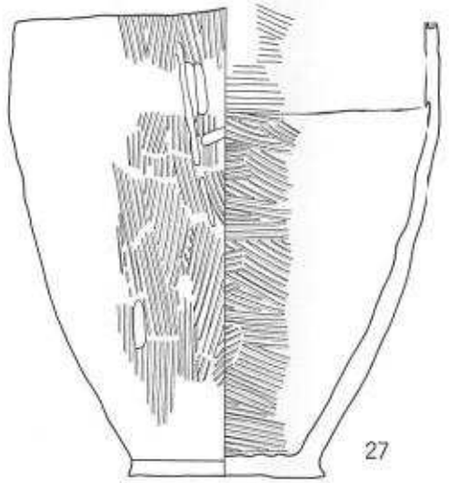
第81図　JJ24竪穴住居跡出土遺物(1)

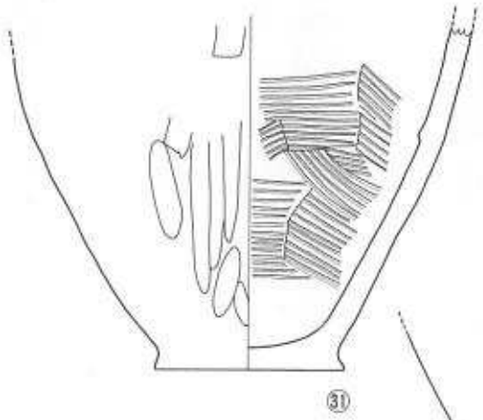


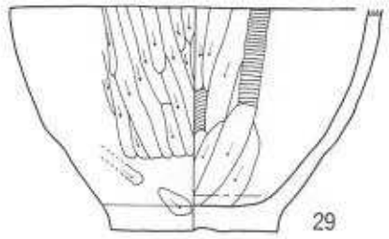
第82図　JJ24竪穴住居跡出土遺物(2)

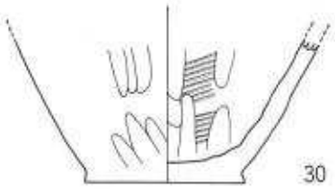


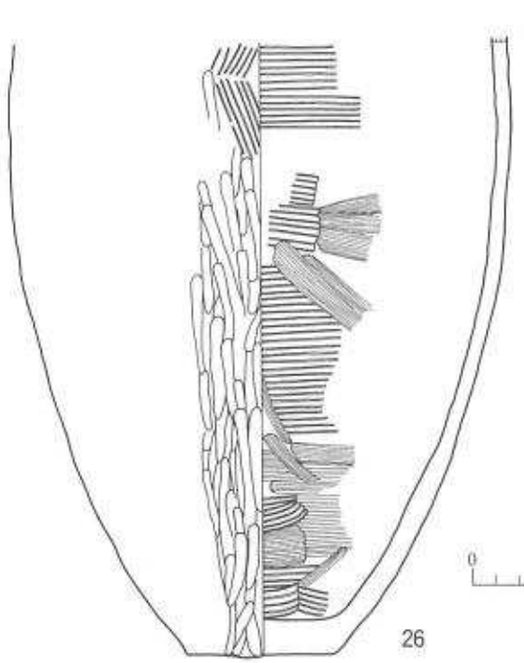


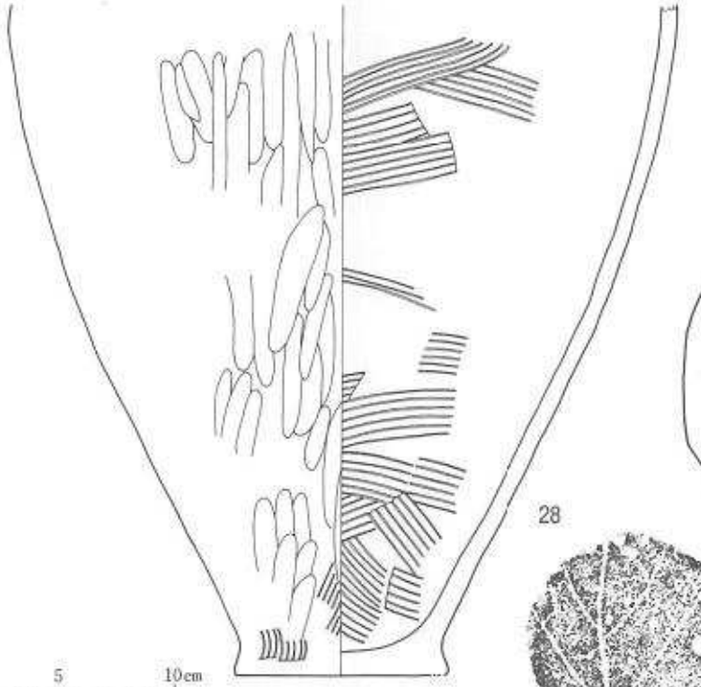


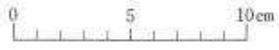


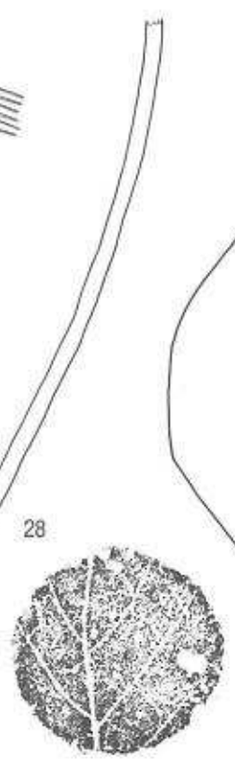


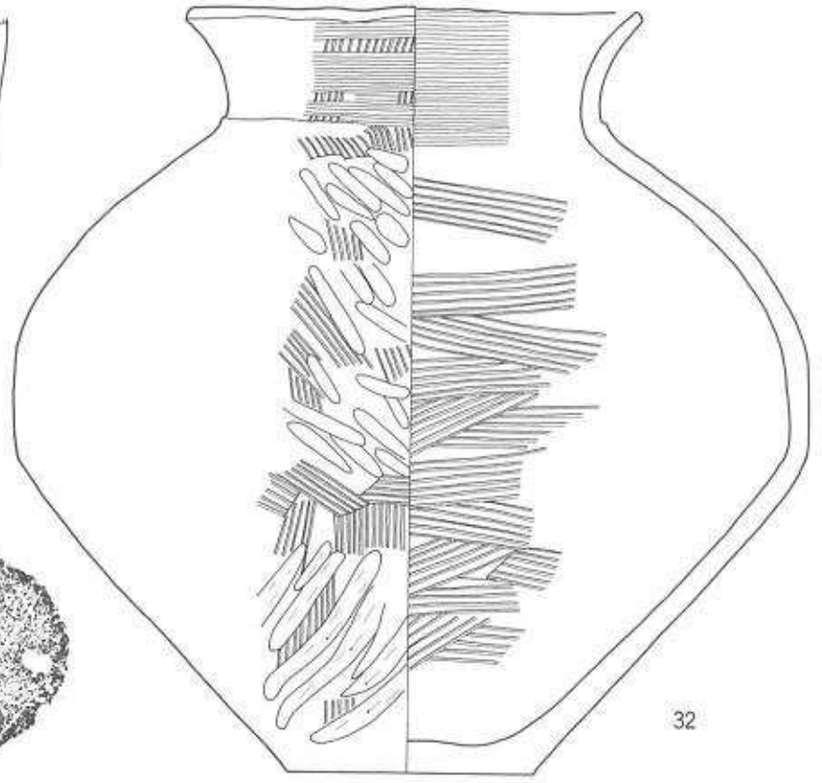




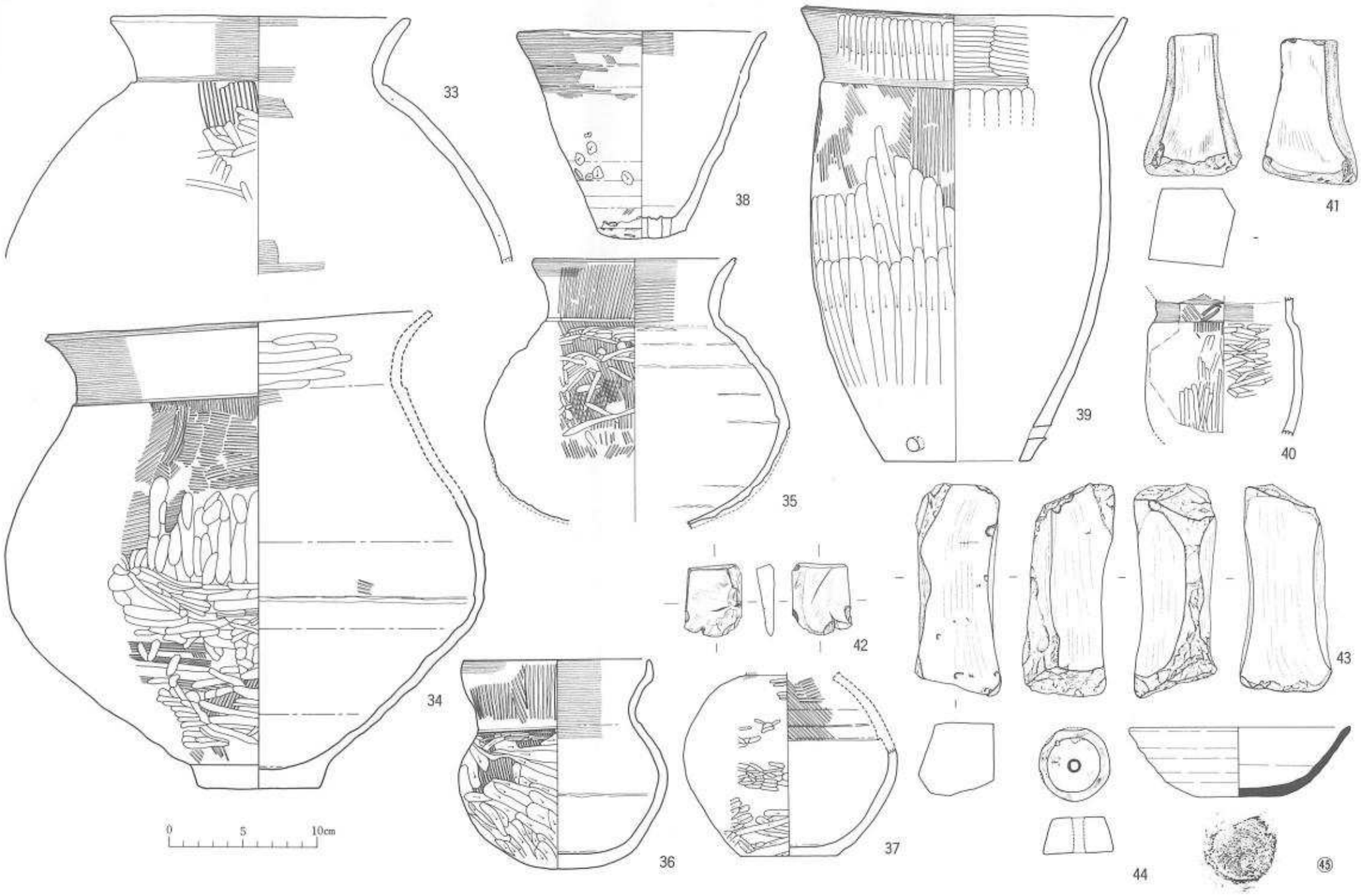








第83図　JJ24竪穴住居跡出土遺物(3)



第84図　JJ24竪穴住居跡出土遺物(4)

出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	調整 外面	調整 内面	底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
1	床面	土師器(坏)	ヨコナデ・ハケメ後ヘラミガキ	ヘラミガキ・ヘラミガキ(内黒)	ヘラケズリ	4.7	12.8			A,a
2	床面	土師器(坏)	ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)	ヘラケズリ	4.5	12.1			A,b
3	ピット内	土師器(坏)	ヨコナデ一部ミガキ	ヘラミガキ(内黒)	ヘラケズリ	6.1	14.5			A,
4	床面	土師器(坏)	ヨコナデ	ヘラミガキ(内黒)	ヘラケズリ	6.3	17.3			A,
5	床面	土師器(坏)	ハケメ・ヨコナデ	ヘラミガキ(内黒)	ヘラケズリ	6.2	17.2			A,1
6	床面	土師器(坏)	ヨコナデ一部ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)	ヘラケズリ	6.8	21.0			A,1
7	堆積土	土師器(坏)	ヨコナデ一部ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)	磨滅	7.0	20.0			A,1
8	堆積土	土師器(坏)	ヨコナデ一部ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)	ヘラケズリ	6.0	(21.5)			A,1
9	堆積土	土師器(坏)	ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)	ヘラミガキ	4.5	22.8			A,2
10	床面	土師器(高坏)	ヨコナデ後ヘラミガキ・ハケメ後ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)		10.0	20.8		12.5(脚)	B
11	床面	土師器(高坏)	ヨコナデ後ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)		(7.4)	22.1			B
12	床面	土師器(高坏)	ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)		(7.6)	19.4			B
13	床面	土師器(高坏)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)		(7.2)	21.8			B
14	床面	土師器(高坏)	ヨコナデ後ヘラミガキ・ヨコナデ	ヘラミガキ(内黒)		10.0	14.1		11.2(脚)	B
15	床面	土師器(高坏)	ハケメ・ヘラミガキ(脚)	ヘラミガキ		(5.0)			12.0(脚)	C I
16	床面	土師器(片口)	ナデ	ナデ		3.4	9.4			
17	カマド内	土師器(甕)	ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ	ヘラケズリ	34.4	21.2		7.0	A,Ib1
18	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ	木葉痕	25.8	21.2		8.4	A,Ib1
19	カマド内	土師器(甕)	ヨコナデ・ハケメヘラケズリ	ヨコナデ一部ハケメ	木葉痕	33.4	18.9		7.3	A,Ib1
20	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	木葉痕	33.9	21.0		(8.6)	A,Ia1
21	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ		(13.0)	21.6			A,Ia1
22	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ痕		(16.5)	21.6			A,Ia1
23	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ一部ヘラケズリ		(14.4)	28.0			A,IIb1
24	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・不明		(11.4)	21.0			A,Ia1
25	堆積土	土師器(甕)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ		(12.0)	(28.0)			A,IIa1
26	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヘラケズリ	ハケメ・ナデ		(25.2)			6.5	A I
27	床面	土師器(甕)	ハケメ一部ケズリ	ハケメ	木葉痕	(19.8)			8.5	A I
28	床面	土師器(甕)	ヘラケズリ	ハケメ	木葉痕	(18.5)			9.0	A I
29	床面	土師器(甕)	ヘラケズリ	ハケメ後ヘラケズリ		(9.5)			7.2	A I
30	床面	土師器(甕)	ヘラケズリ	ハケメ後ヘラケズリ	木葉痕	(6.0)			6.8	A I
31	堆積土	土師器(甕)	ヘラケズリ	ハケメ		(14.4)			8.0	A I
32	床面	土師器(甕)	ハケメ後ヨコナデ・ハケメ後ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ		32.5	19.0	24.0	11.0	A,IIa1
33	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ハケメ後ケズリ	ヨコナデ・ナデ		(16.0)	(20.1)			A,IIa1
34	床面	土師器(甕)	ヨコナデ・ハケメ後ヘラケズリ	ヘラケズリ・ハケメ・ヘラケズリ		31.2	25.0	32.0	8.4	A,IIa1
35	床面	土師器(壺)	ハケメ後ヨコナデ・ハケメ後一部ヘラミガキ	ヨコナデ・ハケメ・ヘラミガキ		(17.5)	13.8	20.5		B II
36	床面	土師器(坩)	ハケメ後ヨコナデ・ハケメ後ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラケズリ		14.0	12.0	14.0		C
37	床面	土師器(坩)	ヘラミガキ・ヘラケズリ	ハケメ・ナデ(未塗)		(12.2)		14.5	6.5	C
38	床面	土師器(甑)	ヨコナデ・若干ヘラケズリ	ヨコナデ	7穴	13.8	16.9		6.0	A
39	床面	土師器(甑)	ヘラケズリ後ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	ヘラケズリ		29.8	22.0		9.8	B I
40	床面	土師器(甕)								A,Ib1
41	床面	砥石		9.4×5.2×5.1	バチ形					
42	床面	砥石		4.7×3.9×1.2						
43	床面	砥石		14.2×5.2×4.9						
44	床面	鈴乗車	ミガキ			2.4				
45	堆積土	須恵器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	4.6	(14.8)		5.0	C,Ib

ヘラケズリのものもある。

(32～34)は、最大径が体部中央にある口縁部が外反する球胴甕である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケメ後一部ヘラケズリ、内面はハケメである。底部は、木葉痕のものが大部分であるが底部周辺がヘラケズリされ中央部にわずかにへこみを有するものもある。

小甕（第84図） 破片なため完全な器形は不明であるが小形の甕と推定される。口縁部に幅1.4cmの文様帯をヨコナデによってつくり出し、斜めの平行沈線と弧状の沈線の組み合せによる文様が施されており、この文様は一定のパターンをもって巡るものと推定される。文様体と胴部の境目には段を有し、体部はや・直線的に底部へと続くものらしい。調整は、細かいハケメ後内外ともに非常に丁寧なヘラミガキが施されている。

壺(坩)（第84図35～37） (35)は口縁部が外反し、体部が楕円状を呈すると推定されるもの、(36)は、口縁部がわずかに外反し口縁部端が直立しており体部が球状を呈しているものである。又、(37)は、体部が球状を呈する坩形土器の体部と推定されるものである。器面調整は、口縁部外面はハケメ、内面はヨコナデ、体部外面はハケメ後ヘラミガキ、ヘラケズリ、内面は(35・36)は、ヘラケズリ、ヘラミガキ、(36)は特に調整痕が認められないが朱塗りの形跡がある。

甑（第84図38・39） (38)は、底部より口縁部まで直線的に外傾する逆三角形状を呈する多孔式のものである。底部には外方より径1cm前後の孔が7個貫通している。又、(39)は、口縁部が外反し、肩部に段を有する。体部最大径が上半にある長胴のもので無底式であるが底部直上の体部面に細孔が穿たれているものである。器面調整は、(38)は、内外面ともにほとんどヨコナデで外面下半にわずかにケズリがみられる。(39)は、口縁部内外面はヨコナデ後ケズリ、体部内外面はハケメ後ケズリである。

砥石（第84図41～43） 石材は(41・43)は斜長石流紋岩、(42)は石質細粒凝灰岩である。(41)は平面形が三味線のバチ形、を呈するもので4面が使用されている。(42)は2面が使用されている砥石状の石片であり、(43)は、中央部分が湾曲するように4面が使用されている短形状の砥石である。

紡錘車（第84図44） 平面形は円形で断面形が台形を呈するもので表面はミガキが施されている。

〔堆積土出土遺物〕 別表の如く堆積土より多量の土師器片と須恵器が2点出土している。これらのうちで実測できたのは、土師器の坏3点、甕2点、須恵器坏1点である。

土師器 いずれも製作に際しロクロ未使用のものである。

坏（第81図7～9） (7)は、口縁部が外反、(8)・(9)は外傾気味のもので、いずれも底部との境界に段を有するものである。(7)・(8)は対応する内面にくびれを有し、丸底なのに対し、(9)はくびれがなく底部が平底風である。調整技法は(7)・(8)は口縁部外面にヨコナデ一部ミガキ、底部はケズリ、内面にミガキ、(9)は内外面ともにミガキである。いずれも黒色処理されている。

大甕（第83図25・3） (25)は、口縁部が外反し肩部に段をもたはいものの上半部、(31)は底部より内湾気味に立ち上る体部下半部である。調整技法は口縁部は内外ともにヨコナデ、体部は(25)は外面がハケメ内面はナデ、ケズリ、(31)は外面ケズリ内面はハケメである。

須恵器

坏（第81図44） 体部は丸味をもって外傾気味に立ち上り口縁部に至るもので、底部は回転糸切り無調整である。

その他、破片は坏についてみるといずれも有段、丸底で内黒処理されたものの破片で、中には朱塗りもみられる。高坏は、脚部で外反気味に開く比較的大型のものである。甕は、口縁部が外反し、頸部に段のめぐるものが多く、調整はハケメ、ハケメのものが多い。

須恵器は、甕の頸部近くの破片が1片のみで内外ともにタタキメであるが外面はタタキメをスリ消している。

⑨BF21竪穴住居跡（第85図－1・2）

〔遺構の確認〕 低位段丘上、B調査区の北西端、BH12竪穴住居跡の北西約3mの地山面で検出したもので、本遺跡中、最も北西に当る位置にあるものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 平面形は、ほぼ方形であり長軸（東西）約6.05m、短軸（南北）約5.95mである。床面積は、約37.0㎡であり、南北壁の中点を結ぶ軸線はN－40°－Wである。

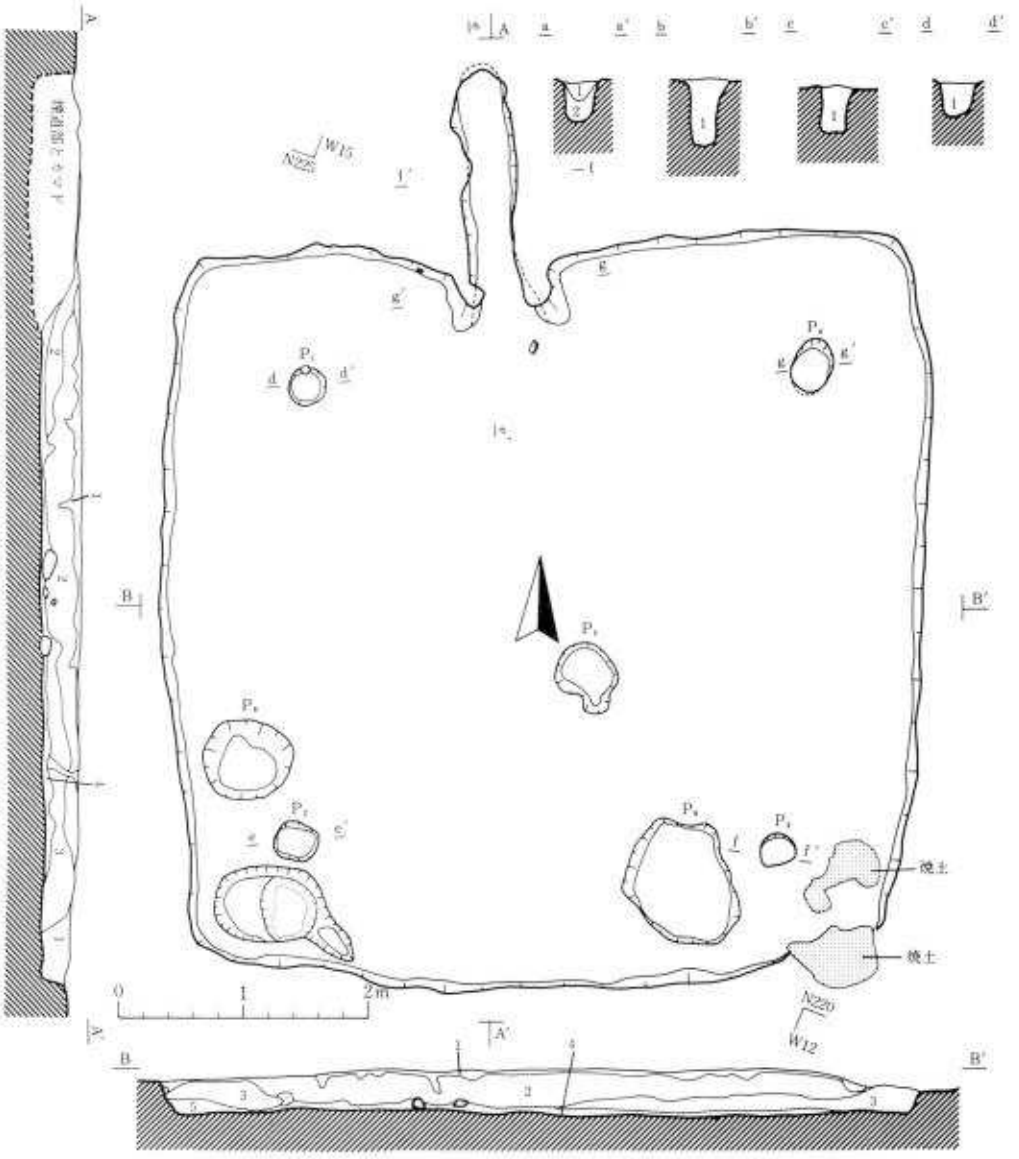
〔堆積土〕 5層に分けることができる。1層は、黒色の腐植土で主に住居内の中央附近の上部に堆積し、床面には達していない。2層は、住居の壁際を除く中央附近に堆積し、ほんの一部は床面にも達している。3・4層は、黒褐色のシルトで主に壁際に堆積し、5層は黒褐色のシルトで薄く床面に堆積している。

〔柱穴〕 床面上より8個のピットが検出されたが、そのうち、住居内の対角線上に位置するP_1～P_4が形状、配置等からそれに該当するものと考えられるものである。径は約30～40cm床面上からの深さは26～56cmである。

〔壁〕 地山をそのま・壁としているものであるが、北壁近くでは砂礫層を、他においてはシルト層を、ほぼ垂直に掘り込み壁としている。壁の残存状態は、最も良好な西壁で約30cm、他は約20cm前後である。

〔床〕 床面は、平坦で固い。床面の南半分は、シルトを一旦10～15cmほど掘り込んで、その上にシルトと黒褐色土を叩きこんで貼床を施しているのが認められた。又、床面の南半部分には、径10～30cmの川原石が一見、半円形状をなす形で検出されている。

〔カマド〕 北壁や・西寄りに付設されていたものである。両側壁はシルトで構築され、焚口部分の底面は焼けて堅くなっていた。煙道は床面とほぼ同じレベルで特に段差もなく壁外へ延



堆積土

層	土色	土性	備考
1	10YR 2/1 黒色	腐植土	
2	10YR 2/2 黒褐色	シルト	炭化物を含む
3	2.5YR 2/1 黒色	腐植土	炭化物、シルトのブロックを含む
4	2.5YR 3/2 黒褐色	シルト	
5	10YR 2/3 黒褐色	シルト	炭化物を含む

堆積土(柱穴)

層	土色	土性	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	シルト質	
2	10YR 3/4 暗褐色	シルト	

第85—1図　BF21竪穴住居跡